
come with tomorrow ~新しい場所へ~

結里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

come with tomorrow 新しい場所へ

【Zコード】

Z2078Z

【作者名】

結里

【あらすじ】

良家の子供たちが主に通う、いわゆるお金持ち学校、私立西龍学園高等学校。

庶民の俺、神崎悠汰かんざきゆうたが馴染めないままも高校生活を送つて、二ヶ月が経つたある日のことだつた。

俺はとんでもないものを目撃した。

それをきっかけに俺の周りは大きく変わつていつたんだ。

* * *

様々な悩みを抱える少年が成長するべく奮闘する物語です。

まるで見えない檻のなかにいるみたいだつた。

最初は狭いものだつた氣がする。しかし徐々に拡大していつた檻。境は見えなくなつたけれど、ただ広いだけで、確實に柵はあると思つていたんだ。

刺々しい有刺鉄線を絡ませて、もしかしたら電流まで流れているかもしねりない。

その内側にあるのは期待という名の重圧感。そしてあらかじめ用意されていた軌道。

やがて。

息ができないほど苦しくなつても、脱け出す、という頭はなかつた。

だつてその場所しか知らなかつたから。

手段も、力も、そして勇気さえも持ち合わせていなかつた。あまりにも子供だつたんだ。

* * *

都内近郊の小高い丘の上にある私立西龍学園高等学校。良家の子女が主に通う、いわゆるお金持ち学校だ。

学食では一流のシェフが作つてしたり、スポーツ施設なみに立派な設備のグラウンドや体育館があつたりする。まだ創立してから十年ほども経つてなく、とにかく全体的に綺麗な建物だ。

しかしこの学生の三割近くには、そんな待遇を夢見たり、制服に憧れたり、そして将来を考え自分もしくは親の希望で、エリートに近づくことを目的に在籍している者がいた。

俺は、この春からここに生徒になつた。といつてもウチは一般家

庭に毛が生えた程度の中流階級だ。そつ、三割の方。

中学までは、多少もてはやされたこともあったが、ここにいると、上には上がることを痛感する。

(どうでもいいけど)

あまりに違うすぎる世界観を見せつけられると、笑うしかない。入学していちばん最初に学んだことだ。

俺は教室から見える空をぼんやりと眺めていた。窓側の後ろから一番目いつもの指定席。

発行源となる太陽はここからでは見えないが、オレンジ色に染まる空と巻雲が瞳に映る。

耳からは流行りのバンドの新曲。適当に iPodに詰め込んで、規則性もない楽曲をランダムに聴いていた。

教室には俺ひとり。

すでに本日の授業はすべて消化されている。クラスメートはとにかく部活やら塾やらで次の工程をこなしているはずだ。

(放課後、誰も教室にいないなんて信じらんねえ…)

ふつう友達とアホなこと喋ったりしないか?今までがノンキすぎたんだろうか。それともこの学校のやつらが忙しそぎるのか…。とにかく俺は馴染めないでいた。入学して2ヶ月も経つのに、気の合ひそうなやつが見つからない。

(俺に問題があるんだろうな)

(ここでは俺が異端だから。

「何を聴いてらっしゃるの?」

イヤホンから流れるハスキーナ女性アーティストの俺は考え方集中していて、このときまで気づかなかつたが、いつの間にか曲が変わっていた 声に混じって、少し高めの声が聴こえた。

「またおまえか…」

視線を向けながら俺は言った。

そこには学級委員長の西龍院玲華^{せいりゆうりょうか}が立っていて、俺の iPodを見ていた。

嬢様だ。

整つた顔立ちで、それを覆う枝毛ひとつない薄い茶色がかつた髪の毛は毛先で巻いている。

いまは、なぜか真剣に「ティスプレイ」に注がれて伏せがちだつたが、ぱつちりとした一重の目。そしてすつと通つた鼻筋。透き通るような白い肌に、ふつくらとした唇。

彼女の美貌は学年、いや学校一だ。

短すぎず長すぎないチェックのスカート。衣替えが終わつたばかりの、龍のシルエットをした校章が左胸にあるカツターシャツと、首元にある紅いリボンをきつちりと着こなしている。

成績も良くて教師の信頼も厚い。

……って隣の席のオギワラが評価してたな。ハギワラだっけ？ 玲華の素性を知つた時は、いまだきいるのかそんなやつ、と田をむいたが……俺には多少やつかない人物だつた。

玲華は思い出したかのように、たまに俺に話しかける。それは決まって俺が一人でいる、この放課後の教室でだつた。

さすがに声と喋り方で顔を見なくともわかるようにならぬほどに。

「またあの話？」

不機嫌丸出しで俺は玲華から iPodを取り返した。とくに驚きもせず彼女は優雅に笑つた。

「ええ。かんざき神崎さま」

玲華は……いや、こここの生徒のだいたいが同級生だらうとなんだらうと様をつけて呼ぶ。

親しくなれば別みたいだが、それはなんだか羨の厳しい上流階級の証みたいに俺には思えた。嬉しがつてかなんなのか、真似するやつも多いからそれはさらに染み渡る。

でも俺は慣れない。

（ムシズ……は言いすぎだな……そつ、寒気が走る。ってやつか）

「神崎さまは学校一の運動神経の持ち主ですもの。ぜひ運動部に入

玲華はこの学校の理事長の娘で、財閥の孫という生糸のお嬢様だ。

つていただきたくて「

「あんなあ…。だから俺はおまえが囁ひ声のもんじゃねえんだよ！なんつかいも言つてるけどー。」

そう玲華はいつもこんなことを囁く。

なにを勘違いしているのか、何でもいいから部活に入れと、けしかけるために教室に戻つて来るのだ。

たぶん教師にでも言われているのかも知れない。いつも孤立して問題児の要素がある俺を、なんとかしたくて責任感のある玲華は引き受けたのだろう。

いい迷惑だ。

「いいえ。テニスのときなど素晴らしかったですものテニス……。体育のときに試合形式でやらされたんだ。

「俺、あんとき負けたはずだけど

「あれは本気ではありませんでしたわ」

「そうでしょう、とにかく玲華は笑う。俺は iPodを鞄に押し込むと、ため息をついて席を立つた。

「もういいよ

そのまま席から離れる。

「また、お逃げになられるんですね？」

後ろから掛けられた声は、責めるでもなく諭すでもない、ただの質問だった。それは逆に意外で、俺は振り向いた。

初めて彼女に言われた言葉。

玲華は澄んだ瞳だった。だけど読めない。

「なんとでも言えば。とにかく俺は…やりたいようやるだけだから

放つておけばいいのに。」

玲華だってなんかの部活に入っていることは聞いてる。それを中断させてまで、俺に構わなくていいから。

俺が教室から出るまで、玲華はもう何も言わなかつた。
(よく言うよな、俺も)

やりたいこともないくせに。

教室を出て角を曲がるとそこに一人の女生徒が立っていた。まつすぐに俺を見つめて…いや睨みつけている。

浅霧世羅。
あさぎり せいら。

玲華ほどの派手さはないが彼女も美人だ。

首のあたりで切り揃えられた黒く艶々しい髪の毛。薄い切れ長の瞳。長身でモデル並みにスタイルが良い。

玲華が陽に例えるなら、世羅は影。

(オギワラが言つには…)

よく喋りよく笑う玲華に比べて世羅は無口だ。

世羅は学級委員の副委員長でもあるから、とつともあるかもしれないが、真逆のふたりは仲がよく、いつも一緒にいることが多いかった。

我がクラスのツートップ。

顔と家で選ばれたとしか思えない。

世羅も由緒ある家のお嬢様だとかいう話だ。

「あいつなら教室にいたぜ」

玲華を探しているのかも知れない、と思つて俺は言つた。すると世羅の表情が変わった。瞳に力がこもる。

あ、と俺は気づいた。

ああー、これが睨まれてる表情か。先ほどまでのはただ目つきが悪かつただけだったのだ。

世羅は何も言わずにまっすぐ長い足をこちらに伸ばした。俺もとくに立ち止まる理由がなくて、世羅に向かって歩を進める。というか出口に。

その間、視線は一度も合わなかつた。そしてすれ違ひざまポシリと世羅は吐き捨てるように呟いた。

「無礼者」

少なからず驚いたが俺は振り返らなかつた。おそらく世羅も、こちらは見ていないと思つたから。

まさかこんな芝居めいた台詞を、校内でしかも同じ年の女子に言われるとは思わなかつた。

(でもまあ…、何でも有りなんだろ? うな。) (ううでは…)

無礼つてなんだろ?!

やつぱり西龍院様とか呼ばないといけないのだろうか。舌噛みそうだ。

(玲華様つてんならちょっと良じかもしれない)

アホなことを考えながら俺は学校を後にした。

* * *

居場所がない……。

家にはあまり居たなくて教室で時間を潰していたのに、そこにも居れなくなると途端に行き場を失う。

ゲーセンもそろそろ飽きたし、立ち読みするために行く古本屋も店主に睨まれるようになつた。金もない。

(やば…、ネタ切れ)

とりあえずぶらぶらと繁華街を歩く。

居場所は自分でつくるものだと何かの本で呼んだことがある。だけどつくり方は載つていなかつた。

だいたい世の中とはそんなもんだ。

見出しに注目して雑誌を買ったとしても、引っ張られるだけ引っ張つた挙げ句、最終的には期待を裏切られる。

(…つて何のハナシだ、そりゃあ)

仕様もない思考回路に嫌気を感じながら、結局俺はいつもの古本屋に来ていた。店主の視線を感じながら構わず物色する。

意外と俺の神経は図太いかもしない。

いつものように少年漫画のカテゴリ。

(あ、続き入つてゐる)

俺は担当の漫画を見つけて手を伸ばすと、隣に別の客がすつと

立つた。多少気が散るが贅沢は言えない。タダ読みだからな。

「よお、ちゃんと飯食ってるか？若者」

一コマ田も読まないうちに隣から声が降ってきた。低いバリトンの男の声。

つい周りを見渡すとこの棚には俺しかいなかつた。
やつぱり俺に言つてるんだよな。

「…………」「…………」

無視だな。

俺は漫画の続きを優先してページをめくつた。

「無視すんなよ。神崎悠汰くん」

はつきり名前を呼ばれて、つい顔を上げた。

三十前後の優男。それが第一印象だった。声や喋り方から、もつとおっさんだと思つたのにどこかミスマッチだ。

そいつは分厚い眼鏡をかけていて、髪は男にしては長めで後ろに束ねている。服装といえばジーンズにTシャツといつ、ラフと言えば聞こえはいいがそつとはお世辞にも言えない、つまりだらしない格好をしていた。

見た目で何者か想定出来ない。

もちろん俺の知り合いにはこんな怪しい奴はない。

「誰あんた。誘拐でもしようつてんの？」

「……。それも良いかもな、ラクそうだ」

ニヤニヤ笑つて男は俺を下から上まで見ながら言つた。男より下に評価されたみたいでムカつく。

俺は漫画を棚に押し込めるとなつたと古本屋から出た。

漫画の続きという誘惑はわずかに心残りだが、不愉快な人物と一緒にいるほど物好きな性格ではない。

「あ、でも違う違う」

後ろから男も追つてきて、あつさり俺の横に並ぶと構わず話の続きをしだした。

「逆なんだよな」

「逆？」

怪しいと思いながらも俺は聞き返してしまっていた。身長は俺より少しだけ高かった。

少しだけなのだ。

なのに脚は間違いなく長くて、俺は振り切ろうと必死に早歩きてるのに難なく男はぴったりとくつついてくる。

会社や学校帰りの人がたくさんいたが、苦にもならないよつでスリムにすり抜けていた。やつぱりムカつく。

「オレ、探偵する久保田修次つてんだ」

「…………ホントにいたんだ。んなもん」

探偵なんて、やっぱりめちゃくちゃ怪しい奴だつたのだ。

「いたんだなあーこれが。……しかも最強に男前で頭のキレる優秀な探偵が！」

「恥ずかしいノリやめろよ」

男の、久保田の顔を見たら[冗談なんてこれっぽっちもない、真剣な表情で言つていた。うげつ。

「そんでさー、今回はおまえを護るのがオレの仕事なワケ

「は？」

「三日前見ていけないモノ見たら？それでおまえの母ちゃんからの依頼。事件解決までおまえの護衛

「俺の足が思わず止まつた。

(三日前)

心当たりは嫌になるほどある。

久保田はうつすら笑んでいた。ほらみる、だから言つただろ？
と言いたそうだった。

「…………」

「だからさ、おまえ大人しく俺に護られるよ

俺は完全に頭にきて、さらに速く歩いた。

「いらねえよ！そんなもん！」

「あらら。反抗期？」

「うつせえ！」

ウルサイ。反抗期と呼べるほど単純なものじゃない。こんな今日会ったような男に解つてたまるか。解られたいとも思わない。

（なんで…あの女…）

気分が悪かつた。いまさら母親面したいわけでもあるまいに。

「つか、なんでついて来るんだよ！」

本気で逃げてゐるのに息切れひとつせず、久保田は横にいた。

「言つたろ？護るためにだつて」

「俺も言つたと思うけど…いらねえつて！」

怒鳴ると想像したより怒りの声色が含まれた。悔しくなつてとうとう俺は走つて逃げた。人混みを利用して意味もなく角を曲がる。悔しかつた。あんな男にすべて負けた気がした。身長や脚の長さだけじやない、心の余裕も俺にはかなわない。

そして未だに親の保護下にいなくてはならない俺自身にも、腹が立つた。

気づいたら久保田はどこにもいなかつた。逃げ切れたとは、不思議にも思えない。久保田が追うのをやめただけだ。

（くそつ…）

俺は完全に居場所をなくして、家に帰らねばならなくなつた。

* * *

三日前 俺は非日常な場面に遭遇した。

中学時代の友人宅に久しぶりに遊びに行つた帰りだつた。ゲームして馬鹿話をたくさんして……雨がかなり降つていたけれど、高校生になつてから初めて心が晴れていたんだ。

なのに……。

まるでその安らぎをぶち壊すように、その場面は日に飛び込んで

いた。いつもは歩かない道のり。夜はかなり更けていた。深夜といつて

もいい。すべてのものが寝静まっているんじゃないかと思った。

住宅街と繁華街の外れを繋ぐ簡素な歩道橋を俺は歩いていた。そして何気なく、本当に何気なく下の道を見たんだ。人通りはそのとぎまつたく無かった。車はたまに通る程度。

そんなとき、人影が二つ見えた。暗かつたし傘もあつたから男か女かも判らない。そいつらは俺から見て左側の歩道を歩いていた。最初は離れていた人影。

俺もそちら側に向かつて歩きながら、なんとなくそこを見ていた。こんな時間にどんなやつだ?と自分を棚に上げて思つっていたかもしない。

後ろを歩いていた影がだんだん手前の影に近づき……重なつた、と思つたらふたつの影は見えなくなつた。あれ?と思つて眺めていると、やがてひとつ影が現れた。あとから思い出すと、こちらは傘を持つてなかつた氣がする。大手を振つて走つて逃げていたから。片方の影がもう一人を路地に引きずり込んだんだ、とゆっくりした頭で導き出したときには俺は走り出していた。ただ事ではない何かを感じ取つてとにかく走つた。

動機がヤバかつた。予感があつた。見てはいけないものがそこにある予感。

怖い、見たくないと思つたのに、走る脚は自分の意志とは切り離されて、ただ倒れたやつに向かつて行つたんだ。

それは男だつた。五十すぎぐらいの。

うつ伏せに倒れていて、背中から赤いものが流れていた。血は雨と混ざり合つて道路をどこまでもつたつていた。

俺は頭が真っ白になつて、そこからの記憶があまりない。気づいたら警察が駆けつけてきて、話を聽かれていたから俺が通報したんだとは思うけど……。

何回もじつこく刑事に同じ質問をされた。

そこで、最近起こつてゐる通り魔事件と同じ殺害方法だったことを知つたんだ。それは深夜の雨の中、無差別に人を殺してゐる事件

だ。どれも背後から正確に心臓をひと突きされている。四件目で俺が初めての田撃者らしい。

そんなこと知るか、と思つた。殺された人には申し訳ないけれど、俺の許容範囲を遥かに超えている。俺は、忘れたことにしたんだ。

* * *

(なのに…護衛だと?)

余計なことを、俺に断りもなく。一言ぐらに文句を言つてやろうと思つたのに、家に帰つても母親は居なかつた。いつものことだ。家政婦の咲田さんがいつものように両親とも今日は帰らないと伝えてきた。四十歳くらいのふくよかな女性だ。

あの日、警察から俺の身柄を受けたのも咲田さんだった。

「なあ、あの人言つた? あの日のこと」

「まあ、お母様のことあの人だなんて…。はい、逐一報告するように言われてますので」

咲田さんは恐縮した表情を見せながらも俺を責めた。自分で責任がとれない、ということか。

黙つてくれと頼んだのだけど…仕方がない。雇つているのは俺じゃなくて親だ。

「あつそ」

「夕食の準備ができてますので好きなときにお召し上がりください」
素つ気なく部屋に帰ろうとした俺に事務的に咲田さんは言つた。

それには適当に答えて2階に上がる。

隣の兄貴の部屋にちらりと目をやつた。

居るか居ないのかいつも分からぬ。だいたいは塾に行つてゐるが、部屋に居たとしても勉強してゐようであまり出てこない。

俺は自分の部屋に入るそのままベッドに寝転がつた。

落ち着かない部屋。

机もベッドも洋服でさえ親が与え、すべて親の趣味で置き場から何もかも決められている。物心ついた頃から俺は何に対しても兄貴に勝てたことが無かつた。そんな俺に、両親は哀れむような蔑むような目でいつも詰つた。

何故出来ないんだ。こんな簡単な問題が。

ダメね悠ちゃん。お兄ちゃんを見習いなさい。

悠汰、惣一そういちの邪魔だけはするな。

いい子にしてなさいよ。あんたは一人で何も出来ないんだから。

飽きるほど聞いた言葉。この中で俺に決定権はなに一つない。

学校も親が選んだ。学のない俺にせめてハクがつくようでもしたかったのか。俺は家のなかでいつしか孤独を感じるようになつた。それでいて、いつも少し離れた場所から見張られている気分。うんざりだ。

だから俺は見切りをつけた。ここはただ衣食住を与えてくれるだけのことだ。

お前にはがっかりだ。

小学校の頃そう言われたきり、父親とはまともに話してない気がする。父親は医師だ。別にでっかい総合病院の院長とかそういうものではなく、ただのひとりの医師。いつも病院にいて帰つてこない。父親は息子一人にも医師になつてほしいようだつた。

兄貴は男子校で進学校の高三だ。おそらく医学部の道へ進むのだろう。

俺はきっと諦められてる。

それでいい。だれも俺に期待をするな。

そして母親は……。

(なんで探偵なんか…………どういうつもりだ)

母親はなにをしているのかはっきり知らない。執筆的なことを以前していたと思うが、そんなに家を開けなければならない仕事ではないはずだ。だから……、知らない。

知らないでいたかつた。

次の日も普通に学校はあるわけで。

俺はサボる理由も見つからなかつたから今日も学校へ行く。
耳には iPod のイヤホン。すりきれるほど
— いじやないんだからこの表現は妥当じやねえよな。でもぴつたり
当てはまるからまあ、いいか 聞いている曲がランダムによつ
て選ばれて、またかかつていた。

(意外と真面目だなー俺)

あの日の次の日も俺は学校へ行つた。本当に神経図太いのかも。

「ごきげんよう」

たまにすれ違う顔見知り… つていうかクラスメートがそんな挨拶
をしてくる。

「朝はおはようでいいじゃんか」

欠伸を噛み殺しながら俺はぼやいた。

「おもしろいひとだね、神崎くん」

誰にも聞こえないように言つたつもりだったのに、気づいたら隣
の席の男子生徒が、上品な、それでいて無垢な笑顔で横にいた。
ええと…。

「萩原」

「萩原ですよーはぎわらー」

オギワラじゃなくてハギワラだつたか。

「悪い。一択だつたんだけど」

「もしかしてまだクラスメートの名前覚えてないの?」

萩原は短めのサラサラのヘアーを揺らして呆れながら俺を見た。
まだ萩原は会話を続けるつもりだと雰囲気で気づいて、仕方なく i

Pod を引き抜いた。

「…………悪い」

別に自ら孤立しようと思つているわけではないが、あまり人の名

前を覚えるのは得意じゃない。

「もう忘れない。ハギな、ハギ」

「まったく…萩でも萩でもいいけどね、名前も覚えてね。拓真だかたくま

ら

どこか怒ったような顔を見せつつも萩原は屈託なく笑つた。

いいやつじやん。

ああ、とかうん、とか答えてそのまま一人で教室に行つた。そういえば、初めはこいつも様をつけて呼んできたことを思い出す。最初に萩原にそう呼ばれたから必死で抵抗したんだった。

「そういえば知ってるかな?」

教室のドアを先に開けて萩原は振り向きながら訊いた。俺より背が低く、見下ろすかたちになつた。

「なにが?」

「今度ある球技大会の希望者を今日のホームルームで決めるらしいよ

「…………それはまた……」

玲華が喜びそうなことだ。俺は球技大会なんてものがあることも知らなかつた。

席につくと視線を感じて前方を見た。俺たちの会話を聞いていたかのように、真ん中の自分の席から玲華が綺麗な笑みを見せていた。

「うわつ 玲華さまの微笑みだあ
なぜか隣の萩原が赤面している。

「心酔しすぎだ、ハギ」

「お、覚えられないからって略さないでよーいいだろつ憧れなんだから

「ふうん」

「神崎くんはいいなあ。笑いかけてもらつて」

「ちょっと待て!その表現はなんだよ。かなりの誤解が含まれてる

「良いじゃないか。あの笑顔を見れるならなんでもー」

だんだん萩原がむきになってきた。鼻息が荒い。

そんなもんかねえ……と俺は頬杖をつく。

萩原はもう他のクラスメート達と挨拶していた。あの人懐こい笑顔で。彼は男女問わず好かれるタイプだな、と容易に分かった。それに比べて俺はまったく社交的とはいえない。

(どこかおかしいのかもしない)

大事なネジを一本か二本どこかに置いてきたのかもしれない。とにかく何もやる気が起きないんだ。

(めんどくせ……)

最近教室について座つていると、こんなことをしていい良いのか、という気分になる。

人が一人、目の前で死んだのに。眼を閉じるといまでも焼きついで離れない、血に染まった死体。こちら向きに倒れていて、見開かれた眼は俺を捕えていた。あのとき、あの男に意識はあつたのだろうか。

例えば俺がもつと早く歩道橋を降りていたら、彼は死なかつたのではないか。俺がもつと早く気づいて声を上げていれば、殺人犯を思い止まらせることが出来たのではないか。

考えてもしようがないことだつていうのはわかってる。
(でもまとまりつく……忘れようと思つのに)

あの眼がそれを許さない。

ぼうとそんな事ばかり考えていると、担任の杉村がいつの間にか教壇について喋つてた。

杉村は二十代後半の若い男の先生だ。女生徒の受けがいい。

俺はチャイムすら気づかなくなつたのか、とわずかながら危機感を覚えた。これは重症かもしれない。

「……ということで、これから球技大会のメンバーを決めるために抽選をしようと思う。西龍院さん

「はい」

玲華が杉村に変わって教壇に立つ。背筋が伸びていて凛、として

いた。

黒板に競技名をずらすら書していく。チョークの字でも達筆だった。本当に彼女は完璧なのだろうか。どこかに欠点はあるのだろうが、少なくともいまの俺には無いように見えた。

書き終わると振り向いて皆に一枚ずつ紙を配った。そしておもむろに白い箱を教壇に置く。

「まずは皆様のご希望の競技を伺いたいと思います。やりたいスポーツを書いて今田中にこの箱に入れてください」

前の席のヤツから紙が回されて、俺も一枚取って後ろに回した。用紙には第一希望から第三希望まで書く欄があつて、一番下には名前欄があつた。

（なんでこんなまわりくどいやり方…）

拳手させれば良いじゃないかと思う。何で黒板にわざわざ書いたんだ。もしかしたら、まわりくどいのが玲華の欠点？

どうでも良いことを考えながら用紙を机に押し込んだ。
「ご希望の多かった競技は、僭越ながらわたくしが厳選なる抽選をさせていただきますわ」

それで良いかしらと、完璧な笑みを浮かべた彼女に、逆らう生徒はいなかつた。

いや、それどころか萩原を筆頭に男も女も、教師である杉村も見惚れている。

（ダメだこいつら…）

情けない。とくに心動かされていないのは、俺と世羅だけだった。一番廊下側の前から一列目の席にいる世羅を何気なく見ていたら、一回眼が合つてぷいっと逸らされた。

（はは…嫌われたもんだな）

前から視線を感じて再びそちらを見ると、玲華がまた悠然と微笑んでいた。

（…………）

俺が一抹の不安を覚えたのは言つまでもない。

* * *

その不安は案外早くかたちになつた。

いつものようにひとりで放課後の教室で時間を潰していると、玲華が入ってきたのだ。

「『きげんよう神崎さま』

「今日もかよ」

俺は隠すことなく深いため息をついた。ある意味予想できることとはいえ、一日続けて襲撃に来られることは今まで無かつたことだつた。

「ふふ。そんなに嫌なお顔なさらないで。今日は別のお話ですの」「別のハナシ?」

少しだけ興味を惹かれた。運動関係以外で話をしたことがない。

「ええ。ここではなんですので、わたくし達の部室に来ていただけませんか?」

「いやだ!」

「ま。はつきりおっしゃるのね」

断られることは想定内だつたらしく、玲華は本当に可笑しそうにクスクス笑つた。いくら睨み付けても、彼女が動じたことは今までに一度もない。それも気にくわない理由のひとつだ。

「俺はひとりで過ごすのが好きなんだ。ほつといてくれ!」

「それは困りますわ」

「知らねえよ。話あんならいこいで話せば

「あら。それでは神崎さまが困つてしまつわ

「は?」

言つている意味が解らなくて、ついまじまじと玲華の顔を見た。

すると玲華の口元の笑みはそのままで、形の良い目だけが細められた。

「四日前のことですの

「一」

俺は絶句した。

* * *

玲華について長々とした廊下を歩く。

俺たちの教室は西の棟にあるのだが、部室は東の棟にあるとのことで、北側までは実験室や音楽室などの移動教室で行くことはあるが、東側はあまり用がない。

だいたい文化部の部室は東の棟にあるらしい。校内は本当に広かつた。

「そういうや何の部活やつてんだ？」

あまり興味はなかつたが、話すことが無くてとりあえず訊いた。
他に問いただしたいことはたくさんあつたが、確かにあの話は誰にも聞かれない場所でしたかつた。

(いや、本当はしたくないんだ)

忘れないのだから。でも、この期に及んで逃げ出すわけにはいかないのも確かだ。

「部活」とは言えないかもりませんわね

「どういうことだ？」

「憩いの部とでも言いましょうか…活動内容はそう、憩いですわ」「わかんねえ。俺は頭を押された。

「つまり、なんにもしてなこつてことか?」

「ふふふ。あまりお気になさうす…。なんでしたら入部してくれださつてもよろしくてよ?」

「いや、いい」

面倒くせやうなのは断るに限る。もう一度玲華はふふっと呑み笑いをした。

「いじですか」

玲華が案内した場所は普通の教室ではなかつた。

左右に向かい合わせになるように、金箔の龍が一匹 龍は匹、
なのか？ 小さいけれど、存在感があつてます田につけた。全
体的には真っ赤で豪華な扉。

中と言えば、あきらかに生徒と「うようぢび」その社長が使ってそ
うなデスクが一つ窓際にあつた。その上にはそれぞれパソコンが置
いてある。その手前にはこれまた大きく、真っ赤なソファ。俺が足
を伸ばして寝れそうだ。床にはふかふかの絨毯。

間違いない。大企業の社長室だ。実際にはそんなとこ入ったこと
ないけど。用がないから。

「趣味わりい

つい悪態をついてしまつたが、玲華は怒ることなくやつぱりクス
クス笑つた。

しかし変わりに奥に世羅がいて、こちらを睨んできた。なにも言
わないが、何となくわかる。

（はいはい、無礼でしたね）

もうどうでもいい。ここまできると驚きを通り越して呆れてくる。
「あれが、理事長のコネか？」

気づいたら、ついまた無礼なことを言つてしまつていた。だけど
それにも玲華は動じることがない。

「神崎さまはこういうの、お嫌いそうですね
「別にいいんじゃない」

俺は関係ないし。

そう思いながら奥に入るともう一人男子生徒がいた。隅っこにあ
てがわれた2人よりは小さめの机に座つている。そちら側にはたく
さんの本棚にびっしり本が埋まつていた。

俺に気づくとそいつは慌てて立ち上がって近寄ってきた。眼鏡を
かけていて年下に見える。でもネクタイの色で同じ年だということ
が判断できた。おそらく童顔だ。

ちょっと地味めの彼は、尻尾があつたら犬みたいに降つてるだろ
うと思えるくらい嬉しそうに言った。

「うわあ、あなたが噂の神崎さまですね。ぼく、隣のクラスの高田秀和^{ひでかず}つて言います！よろしく」

高くてうわずった声を出して、そいつは向の躊躇いもなく右手を差し出してきた。握手しようっていつのか…。

「噂つてなんだよ！」

変わりに俺は秀和の頭を小突いてみた。

「痛つ！ひどこいつ」「

涙ぐんで秀和は額を両手で押さえながら後ずさつた。なんつーか、反応が新鮮…。

「知らぬは本人ばかりか」

その時やや低めの女性の声が聴こえた。ため息混じりに呟いたその声は世羅だつた。

男の秀和より低いんじやないだらうか。いや、秀和は特別かもしないが。だけどチラリと違和感が生まれる。わざと低く、抑えて出しているような声。

（昨日もそういう低かったか）

しかし昨日はたつた一言で、ちゃんと声を聞いたのは初めてかもしれない。

「無礼な振る舞いをする場違いなやつがいる、といつ噂だ」

（ここつ…）

世羅は鼻で嘲笑つて言つてきた。それはまるで挑発しているように見えた。

「くだらねえ。用が無いなら帰る」

女の挑発に乗るほど愚かではないつもりだ。俺は怒鳴りたいほどの、ムカつく気持ちを押し殺して踵を返す。わざわざ来てやつたのに。

「お待ちになつて。世羅もダメよ。まだあの話を聞いてないわ」

間を取り持つたのは玲華だ。あの話、この二人も関わってるのか。

「申し訳ありません神崎さま。一人の無礼はわたくしが謝ります。

だからどうかソファにお掛けになつてくださいませ」

お嬢様に、と/orか女に頭を下げられて俺はビビった。調子が狂う。それと同時に、どこまで完璧なのかと恐ろしくもあった。

「別に、そんなんいらねえけど」

仕方なく俺はソファにどさりと座った。顔がふてくされたようになるのが、自分でも止められない。

悔しいかな、ソファの座り心地が硬すぎず柔らかすぎずで、最高に良かつた。

「ありがとうございます。お茶をお持ちして」

俺に礼を言つて、後半は秀和に言つていた。

お茶とかもあんのか。本当に俺が知つてる部屋とは天と地ほどの差がある。

玲華も向かいのソファに腰を落ち着かせたが、世羅が近づくことはなかつた。ふんっとそっぽを向いている。

(あつちの方が人間っぽいかもな)

また聞かれたらひと騒動起こりそうなことを考えていたら、秀和が紅茶をテーブルにおいた。

「どうも…じゃない、サンキュー…」

一応気にしながら俺は秀和に礼を言つた。少し落ち込み気味だった秀和は、見て分かるほど喜びを表情に表した。やつぱり犬みたいだ。

「で、四日前つて？」

まずは相手の話を聞きたくて俺から切り出した。玲華は無駄ひとつない動作でミルクを紅茶に入れると、優雅に一口飲んで口を開いた。

「ええ。神崎さまが目撃されたあの事件ですわ」

やつぱり、その話か。

俺の動機が速くなつた。

「なんで知つてんの？」

「噂になつてるので、ご存知ではなかつたんですね？」

「え？」

「あの事件はいま世間の誰もが注目しています。とくにこの界隈は被害地ですもの。これだけいろいろなお家の「子息」令嬢がいる学院で、漏れない方がおかしいですわ」

ああそう。

口に出さなかつたが俺は嫌悪感を覚えた。軽く考えすぎていたようだ、と気づかれる。では先ほど秀和が言った噂の中に、このことも含まれていたのか。

「でもぼくは疑つてしませんからね！ 神崎さまのこと」なぜか必死の形相で、ソファの横から秀和が尻尾を振る…ようこ見えた。

「疑われてんのか？ 俺は」

むぎつと秀和のほっぺをつなげてみる。もち肌でよく伸びた。

「いひやつ。ひはいはふ。らはらつらはつふえはふえん

痛つ。違います。だから疑つてしません、と聞こえた。

手を離しながら、構いたくなるタイプだなーとしみじみ思つた。「で？」

玲華に向き直りつつ紅茶を飲む。熱かつた。

「あまり、お噂のことをお聞きになつても驚かれませんのね」

「まあ…注目されんのはイヤだけど、馴染めてない学校でなに言われてもどうでもいいし……」

強がりでもなく本音だった。それよりも気づかなかつた自分に腹が立つ。

もつと周りに目を向けるべきだつた。おもしろおかしく語られてるのかもしれない。

通り魔事件の初めての目撃者が、学校で無礼なやつだつたら、無責任に騒ぎたくなる気持ちも分からぬではない。だけどもし馬鹿にされてんなら、黙つてられない。こつちから特別なにかする気はないけど、言われてんのに気づかないなんともつと情けないじゃないか。

一瞬玲華に哀しみに似た表情が陰つた気がした。しかしすぐに話

に戻つたから、真相は分からなかつた。

「それでは、これもご存知ないかしら」

玲華がティカツプを置く。

「神崎さまが目撃した被害者のことですわ」

「……」

被害者のこと。正直あまり考えないようにしていた。知る
とどんどんリアルさを増す気がして、聞きたくなかった。

考えると、あの眼が浮かぶから。

「……名前、なら刑事に聞いた」

「そう、梶剛志さん。^{かじ つよし} 浅霧家の使用人の方でしたわ」

「えつ？」

ガチャーンとティカツプが音を立てた。

俺の右手が当たつたんだ。みつともなく取り乱してしまつた。

浅霧家つて…世羅の家だ。

(その使用人つて…)

「本当に何も知らないんだな」

世羅が呆れたようにこちらに向かってきた。しゃがみ込んだままでいた秀和の隣に、腕を組みながら立つた。

「そのようなこと言うものではありませんわ」

「玲華はその男を過大評価しそぎだ。彼は結局なにも知らない」

「ちょっと待てよ。つまり何か俺から聞きたいのか？」

俺が目撃者だから？

世羅は見下したように俺を見た。

「玲華はそのつもりだつたようだが、もういい。事件のことはもう忘れないのだろう？」

見透かされてる。

蔑んだ眼は、臆病者と言つていた。それが分かつて俺はカツとなつて立ち上がつた。

「勝手に期待して勝手に見切りつけてんじゃねえよ…」

「怒鳴ればすむと思つていてるのか。やはり下劣だな」

「やはりってなんだよ！すかしてんじゃねえ！」

「ちゅうと……」

玲華が止めよつと立ち上がつたのが眼の端に映る。

その時。

前触れもなく、扉が勢いよく開かれた。

「おお！麗しの僕のハニー！今日も元氣かい？」

そして同時に現れたのは、ふわふわの髪の毛を首の辺りまで伸ばして、アクセサリーをいっぱい着けた男子生徒だつた。ネクタイが青だから2年生だ。瞳も青かつた。不自然な蒼。カラコンだ。顔はへにやへにや笑つてゐる。というか鼻の下が伸びていた。

一瞬俺たちは固まつた。なに、こいつつてのが俺の第一印象。あんまり近づきたくない。

「あ、あやの綾小路さま」

あの完璧だと思われた玲華も一瞬怯んでいた。おぞるべし。

綾小路と呼ばれた男子生徒は、空気の読めないままズカズカと入ってきた。玲華のまえで、ふにゃふにゃした顔から瞬時にきりつとした表情に変わる。

「一日ぶりだね。寂しかったかい？マイハニー。僕は寂しかったよ」「綾小路さま。も申し訳ございませんが只今取り込み中でして…」「ふむ」

綾小路はようやく周りに目がいったようだつた。固まつたままの俺のところでそれが止まる。

「なんだい？この男は。見ない顔だね」

それはこつちが言いたい、とキレかけたが、なんとなく言わない方が良いと思つた。関わりたくない、こういう人種。

「あの、ですから、ね。また今度お話しましょう」

玲華はぐいぐい押しやつて、綾小路を外に出そうとした。

「嬉しいよ玲華。デートの約束だね」

そう言って玲華の両手を握りしめる。

なんというか、綾小路はめげなかつた。ある意味強い！見習いた

くはないが。

玲華の顔は俯いていて髪の毛で見えなかつたが、捕まれた手がふるふると震えている。

(おーおい、大丈夫か?)

玲華も誰も歓迎しないことが分かつたから、なんとかしないといけない気がしてきていた。しかし一歩踏み出そうとしたところで、世羅に肩を押され止められた。

「そうですね。いまはお互い、いろいろとお忙しいようですから! また、今度、時間が合つたときに!」

ひきつりながらも笑顔を保ち、玲華はとうとう綾小路を追い出した。重そうな扉がやはり重い音を立てて閉じる。

室内につかの間、静寂がながれた。玲華は握り拳を作つていれる。

あれ? ってやつとそのとき俺は違和感を覚えた。そして。

「んも―――ちょームカづく―――！」

(あ?)

一瞬我が耳を疑つた。いま発せられた言葉はいつたい.....。

「なにあれえ? すつげ鳥肌! 見てよ世羅!」

玲華が腕をまくりながら世羅に愚痴つていた。世羅はぽんぽんと玲華の頭を優しく叩いた。

「偉い偉い。よくかわしたな」

「ホントにもう、いい加減しつこいのよーあのバカ」

「しかし毎日これでは身がもたんだろ」

「そうよね。なんとか対策練らないと、こいつちが参るわ」

「いつそのことはつきり言つたらどうだ?」

「ダメ! 分かつてるくせに世羅、意地悪よーもうー」

「あのー、玲華さま。とりあえず神崎さまにフォロー入れた方がよろしいのではないか、と...」

秀和が俺を見ながら代弁してくれた。

情けないほどに俺は呆気にとられて、何も言えなかつたのだ。

「あー…。ちつ、あのクソ綾小路のせいだつ」

玲華は髪をかき上げながらぼそぼそ呟いていたが、悲しいこととすべて俺の耳には届いていた。

俺はやつと状況を理解した。やっぱり、完璧な人間などいないといつことだ。

「つまり…それが地か……」

覚悟を決めたようで、玲華は元の位置に戻り座り直し、脚を組んだ。なんか態度も違う。

「そうよ！ 悪い？」

「いや…悪くねえけど」

とりあえず俺も座る。

「別に言いたや言えば…」

「言わねえよ」

「あたしは困らないわよ」

「だから言わないって…」

なんかどつと疲れて俺は紅茶を飲み干した。ぬるくなっていたけど、猫舌だからちょいど良い。

「意外ね」

玲華は指を絡ませ頬杖をつくように身を乗り出してきた。

「どうせ俺は信用されねえタイプだよ」

「そんなことないわよ」

「うそつけ。たつた今まで疑つてただろ」

「そうじやなくて。まだちゃんとあんたのこと知らないからわ」

よく氣の利く秀和が紅茶のおかわりを持ってきた。玲華にも入れ直す。

「だつて、あたしが話しかけてもすぐ逃げてたじやん？」

ふふんと玲華は笑つた。

「逃げてねえだろ」

「逃げてたわよ。いつもめんどくせそうだし」

「ぐつ……」

地を解放させた玲華は容赦がなかつた。

でも変わらないところもあつた。昨日と同じで、その日には責めも何もなかつたのだ。純粹に会話を楽しんでいるだけなのかもしない。

「とりあえず、この本性を知つてるのは学校ではこのメンバーだけよ。だからよろしくね」

「わかつたつて」

（結局バラされたくねえんじゃねえか）

わざわざ念を押すべしに、そななんだろつ。なんだかアホらしくなつた。

「メンバーつて…」
「いつて結局なんなんだ？ 部活？」

「言つたでしょ、憩いの部」

「三人で？」

「そうよ」

素つ氣なく言い張る玲華に秀和が助け船を出した。

「理事長が与えた玲華さまの居場所です」

「ヒテ！ あんたなに余計なこと言つてんの」

秀和は玲華に鼻を摘ままれていた。痛い痛いとわめいていた。やはり秀和は構われキャラか。

へえ、と俺は意外に思つた。玲華でも居場所を欲したりするのだ。

「ああ、そうだ。バカのせいで話それちゃつたわね。事件よ事件」

秀和を解放しながら玲華は言つ。そのとき気づいたが、世羅はもう自分の席に座つてパソコンをいじつっていた。無口だと思われていたが、そうではなさそうであることは分かつた。しかしやはり何を考えているのかは掴めない。

「ああ、でも俺本当になんも知らないんだけど」

「うーん、それは分かるんだけど。ただ、あたしたち犯人探しをしようと思つてゐるよ。それで協力してもらおうと思つて連れてきたんだけど…世羅が暴走しちゃつて」

犯人探し。思いもよらない発想で俺は目を瞠つた。金持ち

の子供の暇潰しか？

「やめとけよ。警察に任せればいいだろ」「俺の言葉は弱々しく発せられた。

動搖してゐ……？ だけど何に対しても動搖なのが自分が自分でも分からぬ。

「その警察がだらしないから！ もうと早く捕まえていれば梶さんは死ななくて良かつたのよ！」

対して玲華の言葉に、田に、力がこもる。やがてその瞳は僅かに潤んで赤くなつた。

「親しかつたのか？」

「あたしんちと世羅んちは昔から仲良くて、よく遊びに行つたりしてたの……梶さんはあたしにも優しかつたわ」

「そうか」

それしか言えなかつた。田の端に世羅がぴくりとこちらを見たのが映つた。だけどとくになにも言つてこない。自分が近い存在だつたるうに、全部玲華に任せてた。

俺を引き込むことに反対だからだらうか。

「関係者が身内にいてね、あなたが警察に言つたことまでは知つてる。……それ以外で、なんでも：どんな些細なことでもいいの。なにか思い出したことがあつたら教えてくれる？」

「わかつた。いまはなにもないけど、思い出したら言つて気づいたらそう、答えていた。

警察で言つたこと以外の情報なんて、なにもない。玲華はほっと息を吐き出した。笑みが戻る。

「ありがと。じゃあここを捜査本部にするわ。いつでも来ていいからね」

あまりに玲華の田が真剣で、俺はそれに押されたんだ。熱い想いで。

でも俺は怖かった。いまも忘れないあの眼。血の臭い。もしも……と考えてしまふ思考。だけど本当に怖いのは別のところにあり

る気がする。

そう思つのは、犯人が捕まれば少しは安心できるはずなのに、本音ではやめてくれ、という気持ちがあつたからだ。そつとしておいてほしいんだ。波風たてずに、屁のよう！」。

ただ、その一番の恐怖の原因がかたちになつていなかつた。もやもやと、だけど確実に重く俺に圧し掛かる。

「大丈夫ですか？顔色悪いですよ」

秀和が顔を覗き込んでいた。

「なんでもない」

俺は秀和の眼鏡を取つて頭に乗せた。

「うわつなにするんですか！？」

秀和は眼鏡を直しながら怒つた。せつかく心配したのに、とぶつぶつ呟いている。

その姿を見て和んでいると、玲華が立ち上がりながら言った。

「あー、そんでさー神崎さまー？」

俺は間延びした口調と呼び方のミスマッチにすりつけそうになつた。

「やめてくんない？それ」

「ああ。神崎さまってやつ？いいじゃない。気持ちよくない？」

「寒氣が走るんだよー呼ばれるたびにー！」

「日本語おかしいわよ」

玲華は机に行き、そして引き出しを開ける音がした。

「日本語？」

「寒氣がする、でいいんじゃない？まー意味は通じるけど」

間違いに俺はちょっと赤面した。寒氣は走らないのか！悪寒は、走るよな…。

「じゃあさ悠ちゃん？悠汰ちゃん？」

とくに面白くもなさそうに玲華は続ける。

「馬鹿にしてんのか！？」

カツとなつて怒鳴りつける俺の目の前に、ぽんと真っ白い箱が置

かれた。それを見て勢いが半減する。サッカーボールくらいの大きさで、上の面にだけポストのような細長い入り口が設けてある覚えのある箱。そう今日の朝一番に見た箱だ。今日一日は教室の後ろに置かれていた。

「悠汰くーん。あたし今日中つて言つたんだけどなー」

腰に手を当てて、中腰になり俺の目の前で玲華は不敵に笑った。

玲華様は口が悪くてもお綺麗でした。

俺は完全に消沈した勢いを、力ない笑いで返す。

「いや、あの…、俺なんでもいいから」

「うわあ、あの神崎さまを完全に押さえつけてるぅ」

少し離れたところで、感動したように目をキラキラさせて秀和が両手を口元にもつていた。

「ヒテてめえ」

俺は玲華から逃れるように秀和に飛びかかった。

「いま言つたのはこの口か」

後ろから動きを抑えて両方の頬をつねる。

「ひやー！やへてー」

「ちょっと逃げんじゃないわよ！」

「だからー！あいたところに入るから、それでいいだろ？」

「それだと厳選なる抽選にならないのよー！」

「勝手に決めたことだろ、変えるよそこだけ」

「とにかく、まだ少し時間あげるから考え方としてよね。一番得意なやつよー！」

玲華はそう言つと箱を机に片した。音を立てて引き出しありをしまう。

「…………」

なんでそんなにこだわるのか、俺にはわからなかつた。まわりくどいやり方も、もしかしたらなにか意味があるのかも知れないと思えた。

「いひやいれす！おうはなひへふはあい！」

抗議の声を秀和が言い、やつと俺はまだ掴んだままだったことに

気づいた。

「あ、悪い」

手を離すと、頬をさすりながら秀和はさつと俺から離れた。

次の日から少し顔をあげて、周りを見渡すようになつた。

そしたら簡単に気づくことができたんだ。確かに稀にではあつたが、俺を見ながらヒソヒソと話してる連中がいる。あれから何日か経つてるから、これでも噂話をするやつは減つたのだろう。

そして視線は常に感じるようになつていた。それは学校だけではなく登下校でもだ。家に帰るまで消えない。

（これは、キツいかも…）

気づかなければ良かつたと、いまさら思つてもすでに遅かつた。一度知つてしまつたら、それは無にはならない。

事件に関することといえば、なにも思い出すことはなかつた。だからあれから玲華の部屋には行つていない。

（…つていうか、あれがすべてだ。思い出すことなんかあるわけがない）

俺の記憶を占めているのは被害者の情報だけで、加害者については遠くから見た影しかないのだ。

なんとなく学校でも居心地が悪くなり、どこに行こうかぶらぶら歩いていると、校門のところで男が待ち構えていた。

「ちょっと時間いいか？」

それはあの日俺から事情を聴いた刑事の一人だつた。事件の日から十日が経つっていた。ニュースや新聞を見ても新しい情報はとくに公開されていない。

「なんの用？」

俺は苛立ちをわざと隠さず訊いた。いまさら話すことなどないのに、わざわざ立つところで話しかけられたのだ。

「聞きたいことがあるんだ。付き合つてくれ、茶でも奢るから」

刑事はボサボサの頭にヨレヨレのスーツを着ていた。見るからに暑苦しい。無精髭が生えていて、実年齢より老けていそうだ。それ

を差し引いても三十代後半くらいか。

断ろうと思つたが、どうせ時間を持て余していたし、ついて行くことにした。決して奢りにつられたわけではない。

後ろから帰宅部の生徒がざわついている。もう少し後に出来ればよかつたのかもしれない。でも、もうじりでもいい。なんでも好きに噂すれば良いんだ。

しばらく黙つて歩いたあと、刑事が一度だけ振り向いて言つた。

「悪かったな」

ええっ。ちよつと反則な謝り方。わかつてやつてるはずなのに。それには答えずに、ただ黙つてついて行くと近くのパーキングに

刑事の車があつた。シルバーのセダン。

「どこ行くんだよ」

「まあいいから乗つてくれ」

「言わないで乗らない」

なぜかヤケになつて俺は立ち止まつた。

「あのな、誘拐しようつてんじやないんだが」

ため息と同時に刑事は呟いた。

誘拐という言葉で、少し前に出会つた怪しい探偵のことを思い出す。そう言えばあいつはどうしてるんだろうか。護衛するとか言いながら、あれから一度も会つていない。

「それとも怖いか？お坊ちゃん」

ふと意識を別のところへ飛ばしているうちに、刑事が近寄つてきてそう言つた。

「誰がお坊ちゃんだ！」

ムカついてさつと俺は助手席に載つた。挑発だつてわかっていたが、ついて行くと決めたのは俺だ。

「結構」

刑事は嬉しそうに笑つて自分も運転席にその身を滑り込ませる。

そして車は発進した。

「どうだ？学校生活は」

おもむろに刑事が訊いてきた。あまりに唐突だったから、俺はつい突っ込んでしまう。

「親戚のおっさんか！」

「ははは。こんな生意気なガキは甥っ子にしたくないな」

「俺だつてイヤだ。こんなだらしない叔父」

いや叔父ではなく伯父になるか、おそらくだが。親父は何歳だつ
け?と、まったくどうでもいいことを考えてしまった。

(じゃなくつて)

「親戚でもなんでも、気になつたから訊いたんだ。君が日常を取り戻せ
ているか知りたくてね」

前をむいたまま刑事は言った。

日常…。それはどこまでのことと言つているのだろう。まったく
支障がないわけではない。油断すると、襲つてくるかのよつに脳裏
に浮かぶあの光景。しかし学校には普通に行つてゐし、『』飯も普通
に食べている。俺は無神経なのだろうか。

「別に普通」

答えてから少し不自然な間が空いたな、と感じた。

「そうか普通か。それなら良かった」

そのとき笑つた刑事の顔は少し若く見えた。やっぱり無精鬚が邪
魔だと思つ。

改めて周囲を見渡して、はたと俺は気づく。この道は。

「気づいたか?」

俺の様子を見て刑事が訊いた。わずかに俺の手が震える。

「なんだよ?どつか茶でも飲みながら話すんじやなかつたのか?」

「その前に現場検証の続きだ」

刑事の目が厳しいものに変わつていて。そう、ここには俺が見たあ
の殺人現場に続く道だつたのだ。

「それならやつただろ!あの日に!」

「続き、と言つただろ?もう一度確認したいことがあるんだ」

(そんな…)

あれから、俺は一度もここに来ていない。来れなかつたのだ。怖くて……。

容赦なく車は現場に近づいていく。住宅街に沿つた道。その割りには広くて、歩道橋があるのだ。いまは交通量が多かつた。
俺が通つた小さい歩道橋が見えてきた。あの日の光景とフラッシュバックする。だけど今日は晴れているし、いまは夕方だ。全然明るい。

(大丈夫。大丈夫だ……まだ…)

自分の鼓動を確かめるかのように、左の拳を左胸に当てる。
車を少し離れた路肩に停車させて、刑事が後方確認しながら降りた。俺もなんとか降りたが、それ以上進めなかつた。足が出ないのだ。

「大丈夫だ。なにも心配する必要はない」

動かない俺に気づいて、刑事は俺の肩を押した。

確かにそうだ。ここにはもう何もない。加害者も被害者の遺体も。マンションの入り口に奥まつた通りがある。その路地だつた。隣の壁もマンションだ。規制テープは無くなつていたが、路地に近づくと、白いチヨークで型どられた線がうつすらと残つている。

そうだ、こういうふうに倒れていた。こちらに向かつて。

「犯人はあつちから来たんだよな?」

刑事が歩いてきた方とは反対側を指差した。

「そう」

「そのときナイフは持つていたか?」

「……わからない。見えなかつたから」

「見えなかつた、ということは犯人は傘を差してた?」

あの日も何度も聞かれた質問。わざわざまた繰り返すことになんの意味があるのか。

「……いや…持つてない」

「持つてなかつた?あの日はわからないと言つたよな?」

静かに……だけど厳しい声で刑事はたたみかけてきた。俺は顔が上

げられなかつた。ただ深く考えなによつに淡々と答えるしか出来なかつた。

息がしこくい。

「あとから考えたら……刺したあと、……逃げるとき持つてなかつたと思つて……」

「どうか。では殺された梶剛志さんにについてだが……君が駆けつけたあと動いたりしたか？」

被害者の名前を言われて、ざくんと鼓動が鳴る。

「わからない。暗くて……」

「ここから見たんだよな？マンションの灯りがついていただろ？..」

「わからんねえよ！ なあ、もういいだろ！」

叫ぶように発した声に、行き交う人々が何事かこちらを見ながら通りすぎて行つた。最悪だ。

「逃げるなー君にしかわからないことなんだぞ！ 梶さんの無念を晴らしてやれ」

鋭く響く声にどくりと心臓が脈打つ。……知りなえよ、と思つた。俺だつて望んで目撃者になつたわけじゃない。

『氣づくと、刑事は逃げ腰になつていて俺の腕を掴んでいた。だから、逃げられない。

「ホントに……わからないんだ……」

苦しい。苦しく漏れる息の間に、なんとか言葉を乗せようと声帯を動かす。意識しないと呼吸が出来なかつた。

「わかった。もういい」

刑事は俺の腕を離し、変わりに肩を掴んで車まで促した。

諦められたんだ。俺の態度が不甲斐なくて、なにも情報を持つてなくて幻滅させた、と感じた。

「なにも気にするな」

だけど刑事はそう言つて俺の頭を軽く叩いた。ガキ扱いしやがつて。

* * *

それから刑事は本当に俺を喫茶店に連れていった。現場からも俺の家からも離れた国道沿いにそれはあった。刑事はアイスコーヒーを頼んだ。

「遠慮せず何でも頼んで良いぞ」

「じゃあこれ」

俺は写真付きの大きめのパフェを指差した。イチゴがどっさり乗つていて、チョコレートが所々絡めてある。下に一千八百円と書いてあった。

「あ、甘いものが好きなんだなー神崎君は」

引きつった笑いを見せながらも刑事はウェイトレスに注文してくれた。

別に特別甘いものが好きというわけではない。ただ冷たいものを口にしたかった。普通のアイスクリームでも良かつたが、まあそれはおまけだ。

「悪かったね今日は。待ち伏せするような真似をして」

「真似じゃなくて待ち伏せだろ」

「悪態つけるほどには元気になつたか」

「…………」

嫌な奴だ、ここつは。さつきから見透かすようなことを言つてくる。

「そう睨むな。ほら来たぞパヘ」

「パヘってなんだよ」

「…………」

やつと刑事を黙らせることに成功した俺は、ウェイトレスからパフェを受け取つて一番上のイチゴから食べた。

「ウマいか? パ・フェ!」

「わざわざ強調しなくてもいいから」

「奢り甲斐の無いガキだな」

「パフェ代にビビるおっさんよりマシ」

「口の減らねえ……まーかわいい口答えだけどな」

刑事は俺の頭をくしゃくしゃと撫でた。強めに。

「あつぶねつ！ 鼻につくだろー！ クリームが！」

「それを狙つたんだけどな」

頬杖をつきながら、刑事はにまにまと笑つた。どっちが口が減らないのか問い合わせたい。

しかし、さつきを見せた厳しさはどこにもなかつた。

「なにか……、なにが聞きたかったんだ？ 結局同じことばっかり聞いて……」

本当は、まだ聞くべきことを秘めている気がした。わざわざ現場まで行つてする質問ではなかつた気がしたから。

「まあな。でも同じことを何度も聞くことも意味があるんだ。実際に今日、別の答えを君はした」

刑事の顔がただのおっさんから、刑事のそれに変化した。^{せいせい}

「しかしあのままあそこにいたら君がもたないとと思ったんだ」

「……」

「だからここで聞く」

こんなところでも俺は大人に守られている。見透かされて擁護されて。どこまで周りに、他人に迷惑をかけて生きなければならぬのだろうか。

そんなの俺は嫌なのに。俺が嫌なんだ。

「…………なに？」

「……まずはこれを見てくれ」

刑事はポケットから、すつと何やらテーブルに置いた。小さな透明の袋の中にひとつ、服のボタンが入っている。

「あ……」

見慣れたものだった。西龍学園のカッターシャツの小さなボタンだ。

「あのあと調べたとき、現場に落ちていたものだ」

「え？ どこに？」

「殺害された場所から一メートル位離れた溝に、入り込んでいた。君のか？」

あの日帰ったあと、気づいたことがあった。上から三つ目のボタンが、引きちぎられたよつこ無くなっていたのだ。ちょうどネクタイに隠れていた部分。

「た、たぶん……」

「多分？ どうやって取れたんだ？」

「わからない」

「わからないはずないだろ？ 君のだと言つなら、原因があつて取れたはずだ」

俺の記憶には空白の時間があった。遺体を発見して警察に通報するまでの。

おそらくそれはただの数分。だけど、俺は1-1-0番にかけた記憶も震んでいてほとんどない。だとしたらそのときしか考えられない。あの道は普段通らないからなおさら……。

「わからんねえ、覚えてないんだ！」

つい、また俺は叫んでいた。刑事は難しい顔をしてじっと俺を見つめていたが、やがてため息を吐いた。

俺に言いようのない不安が襲つ。また、諦められた？

「実はな、これはここだけの話なんだが……」

おもむろに刑事は、ボタンが入つてたポケットとは別の内ポケットから黒光りした手帳を取り出す。あれが噂の警察手帳か、と一瞬思つたがただの黒い手帳だった。開いて中を見ながら続ける。

「今回の事件だが、通り魔に見立てた別の犯行である疑惑が浮上している」

「え？」

声のトーンを落として刑事は続けた。

「解剖の結果、いつものナイフとは違つ凶器が使われたことがわかつた」

なんでそんな大事なことを俺に言つんだ。ただの一介の、目撃者でしかない高校生に。

まさか、と俺はひとつ考えにたどり着いた。

「それで、君は梶剛志という男と面識はあつたのか?」
(やつぱり、そういうことかよ)

刑事のその言葉に、俺はすかさず睨みつけた。

「俺を疑つてんのか?」

「捜査とはあらゆる可能性をみて、ひとつひとつそれを潰していくんだ。そして残つたものを追及していく」

刑事は慣れたように淡々と語る。

「これはそのひとつ可能性にすぎないよ。わかるか?君は疑われたくなかつたら自分の無実を自分で立証しなければならないんだ」
刑事の話し方はまるで、それが大人の世界だと言わされた気がした。

「立証つて…」

「難しく考えなることはない。ただ事実を俺に話してくれればいい事実…。」

最初から嘘なんてなにひとつついてない。

「……面識はなかつた。名前もあの日初めて聞いたから」

それどころか、浅霧家の使用人だといつことも後から知つた。あとは何もわからない。

「芹沢君の家にはよく行くのか?」

芹沢純平。あの日遊んだ俺の中学の時の友人だ。

「あんときが今年初…」

「たまたま平日に行つた友人宅からの帰りに、たまたま田撃したといつことか?」

「そうだよ!」

俺はやつぱり苛々した。なぜあの日で、あの時間帯に帰らなくてはならなかつたのか、と遠回しに訊かれている気分だった。そんなの俺が訊きたい。

刑事は俺が答える度に手帳に書き込みをしていった。

「では犯人だが…傘を差してなかつたと言つたが、レインコートでも着ていたのか？」

「ホントに暗くて遠かつたんだ…わかんねえよ」

「犯人の背丈とかは？例えば梶さんと比べてみて」

「……そこまで、真剣に見てなかつたから」

「他に、犯人について覚えていることはないか？」

「なにも…」

「路地に駆けつけてから…気づいたことは？」

そんな余裕はなかつた。

俺は口を開くことが億劫で、ただ首を横に振つた。事實を話すことが立証することになる。そう言われたのに、事件の核の部分になると俺にはわからないことしかない。どうすれば良いか、完全に見失つてしまつ。

「わかつた。……ほら、手止まつてるぞ、食えよ」

刑事の醸し出す雰囲気が柔らかいものに変わつた。もう終わりということか。

「梶さん」

ふと俺から喋りかけると、刑事はすぐ驚いた顔をした。それに少なからず俺も驚きながら言つた。

「浅霧家の使用人つて聞いた…」

「ああ…確かにこのご令嬢が同じ学校だつたな」

「刑事にはすでに調査済みのことだつたようだ。」

「なんであんなとこ歩いてたんだ」

世羅の家はあの付近にはない。

どこかと聞かれればそれはわからないが、違うことだけは知つていた。あの辺は俺が小さい頃からいるテリトリーだったから。金持ちが住んでるという話しさ聞いたことがない。

「自宅があの殺害されたマンションなんだ」

「……住み込みつてわけじゃないんだ」

俺は溶けかかったアイスにスプーンを突つ込んで、よつやく食べ

ることを再開させた。

「彼は運転手だからな」

「ふうん。じいやとかじやないんだ」

勝手にそう思っていた。しかし庶民の俺にはじいやだろうがばあやだろうが、具体的に何をしているのか知らない。咲田さんのような家政婦とは違うのだろうか？

「ところで、ずっと気になつてたんだが……」

しばらく俺が食つているところを黙つて見守つていた刑事が、ふと窓の外を見渡しながら言つた。

「君の周りに怪しい奴がいるな」

怪しいヤツ……。

「それつてもしかして……」

「心当たりあるのか？」

俺も気になつていた。常に感じる視線。家に帰るまで消えない、

ということは裏を返せば家にいる間は離れている。

事件解決までお前を護る。あいつはそう言つていた。本気だつたのか。

俺は刑事に探偵のことを話した。別に言つ義理なんてなかつた。だけど……目の前の男にどこかいい人といつのを感じたせいか、警察の為せる技とでも言つのか……気づいたら話す気になつていたんだ。

「その探偵の名前は？」

「ええと……くぼ 大久保？ ちがう……久保田だ！ 久保田

「久保田修次か？」

くぼたしゅうじと何回か心で繰り返す。

「あー、たぶんそんなん。 知り合い？」

「俺は知らないが、何度か捜査現場に現れて、ちょっとした騒ぎになつてたな」

捜査とかもすんのか、あいつは。俺もつられて窓の外に視線を移した。どこにいるのか全然わからない。

「今回も捜査とかしてんのかな？」

「それはないだろ。神崎君には護ることしか言つてないんだろう？いくらなんでも依頼がなければ調査までしないと思つ」

実際俺は会つてないし、と刑事は続けた。

好奇心でしてるんじゃないのか。テレビや漫画とは違つみたいだ。しかし俺にはもうひとつ問題があった。乗り越えなければならぬ壁、と言つても今の俺には過言ではない。目の前のパフェだ。

「あー…。もういらねえ。甘い」

半分過ぎたところで俺はスプーンをぶっさして手から離した。匙を投げる、ってこうこうことかと冗談じゃなく思つた。

「ばつ、食えよ全部！まだこんなに残つてるじゃないか！」

刑事が焦つていた。

「クリーム多すぎなんだよ。あとチョコ邪魔

「おまえなー2800円だぞ！」「せんはっぴやくえん！」

「ケチくせえ」

「けちつ…………、やっぱお坊ちゃんだなーおまえー」

刑事は項垂れてテーブルに突つ伏した。なんかその言われ方はムカつく。

「庶民だろ、俺なんか」

「わかつてねえな、おまえ」

刑事は頬杖をついて上目遣いで俺を見た。

確かに比べていたかもしない。学校の連中と。もっと苦労してるヤツはいくらでもいることは知つていた。でも知識として、だ。なんか悔しくなつてもう一度スプーンを握つたら、刑事はそれを見て笑つた。馬鹿にしたような笑みではないことはわかつた。

「そうだ。連絡先教えてくれるか？待ち伏せしないために」

住所と家の電話番号は事情聴取されたときに伝えてある。刑事の言つているのは、日中とれる連絡先のことだ。

「俺、携帯持つてないから」

本当は持たせてもらえたかった、というのが正しい。

高校入学

と同時に父親になだつたら、お前には必要ない、の一言で一蹴された。

変わりにくれたのが、クロノグラフの腕時計だった。十代の子どもがもつようなものじゃない、高そうで立派な時計。時間を無駄にするなど一言添えて。

「笑えるよな。いまなんて小学生だって持つてんのに」

時間を確認するために携帯電話が欲しかったんじゃなくて、ちゃんと他人と通信したくて、勇気を出して言ったのに。暗に、くだらない友人をつくる暇があつたら勉強しろと父親は言っていた。

自虐的な気持ちになつた俺に、刑事は優しい笑顔をみせて言つ。

「そんなことないだろ？俺の子供も持たせてない」

「子供つ！いんのか？」

聞き返してから、いてもおかしくない歳だと気づいた。多分だけど。なにをそんなに俺は驚いたんだか…。

「いるよ」

「いくつ？……ってかあんた何歳？」

まずはそこからだ、と俺はびしひとスプーンを突きつけた。

「内緒だ」

しかしあつさり刑事はかわした。何が内緒だよ、女か。

「じゃあこれ、俺の連絡先な。なにか思い出したことがあつたら連絡くれ」

刑事は手帳にさらさらとペンを走らせて、ビリビリ破つて俺に渡した。十一桁の数字の羅列の上にはフルネーム。池田浩一郎いけだこういちろう、と書いてあつた。変な話だと後から思つたが、このとき初めて俺は刑事の名前を認識した。

やつぱり、ところが想定内というか、火のないことじろに煙はたたないというか、因果応報には、ちょっと違うな。つまり刑事が校門に来たことで、さらに俺の噂は広まつたらしかった。ひそひそと話してゐる生徒に目線を向けると、決まってばつの悪い顔で逸らされるのだ。

(もう好きにしてくれ…)

なかばうんざりしながら、俺は放課後を待つて玲華の部屋に向かつた。

一応協力することになった手前、昨日のことは報告ひとつと思つたのだ。

「……それはいけませんわ。落ち着きなさつて」

しかしあの豪華な扉な前で玲華の声が聞こえてきた。あの喋り方、来客中ということか。

俺は数秒扉の前で一度迷つた。

(あとにしよ…)

なんとなく俺は入りにくさを感じて踵を返した。

「いいじゃないか玲華。僕らは周り公認なんだよ」

しかし俺はこの声で立ち止まつた。聞き覚えのある声。ぽんと鼻の下を伸ばした一人の男が俺の頭に浮かび上がつた。

「いけません、こんなところで。ダメです…あつ

なにやら不穏な空氣を感じ取つたときには、俺の体は勝手に動いていた。躊躇わす扉を勢いよく開く。

「玲華！？」

そこには、机に押し倒すように屈めている綾小路の背中があつた。両手は玲華の両腕を掴んでいるのだ、と一連の流れでわかる。まず

綾小路が振り返つて、少し遅れて玲華と目が合つた。

「悠…神崎さま……」

「お前はあのときにいた…………なんだ?何しに来た!」

綾小路は玲華を離して俺に詰め寄つてきた。負けずに睨み返す。

「センパイこそなにやつてんですか?」

「キミには関係ないことだ!出ていきたまえ!」

綾小路は俺の胸ぐらを掴むと部屋の外に追い出そうとした。見た目にそぐわざかなりの力だったが、意地を張つて踏ん張る。なんて言つてやろうか考えている隙に玲華が口を開いた。

「出でいくのは綾小路さまの方ですわ」

「なに?」

綾小路の力が緩んだ。

「彼はこここの部員ですの。彼を追い出すというのなら、わたくし許しません」

玲華は薄く笑みを浮かべて、真剣で力強い眼差しをしていた。綾小路が目を見開いくのが見えた。

だけど少なからず俺も驚いた。圧倒されていたんだと思つ。

「こままで済まないからな」

ぼそりと俺にだけ聞こえるように呴いて、綾小路は出て行つた。それを見送つてほつと息を吐くと玲華に向き直つた。

「大丈夫か?」

「ヤバかったわ。もうすぐで蹴つ飛ばすところだつた」憎しみの色を込めて玲華が言つた。

「蹴つ……」

なにを?とは聞かないことにしよう。

玲華はさつと机に戻つてパソコンを打ち出した。

「なんかごめんねー。あいつに恨まれたね」

「いや俺は問題ないけど……」

「うん、そうだと思つた。でもありがと。助かつたわ」

「こんなにサバサバしてるものなのだろうか?女つて……。玲華が特別な気もするが。

「あのバカ。あたしが一人になるの、見計らつてなーにが一人きり

だねよ！」

パソコンを打つ指に力がこもる。やっぱり怒っていた。俺はやっぱりここで室内を見渡す。

「世羅は？」

「なんか先生に呼ばれて職員室行つたわ」

「ヒテは？」

「風邪で休み！」

なるほど、と納得する。その隙に綾小路は来たのか。

「あ、ねえ今の世羅に言わないでね」

玲華がパソコンから顔を上げて言った。

「なんで？」

「なんでも良いから言わないで！」

玲華の声は語調が鋭く、俺の心を貫く。珍しく余裕のなさを感じ取つた。驚いていると、ふつとその眼が伏せられた。

「トラウマ、あるのよ。きっといまのこと知つたら、あの子あのバ力になにするかわからないから……」

トラウマ…といつ葉が重く感じた。それがなにか気になつたが、聞くことは憚れたし、玲華もこれ以上言つつもりはないようだつた。だからただ、わかつたとだけ答えた。

「でもあいつ、綾小路って言つたか…大丈夫か？また来るんじゃねえ？」

「大丈夫。他に人がいれば大胆なことはしてこないし、あたしも気をつけろわ」

またしてもさらりと言い切る。俺は玲華の隣の世羅の席に座つた。キスター付きの事務用の椅子。

「本性だせば？」

「それができたら苦労しないわよ。一応家との繋がりあるしぃ」

玲華はとても重いため息をついた。それでもキーボードを打つ手は止まらない。

「家？そう言えば公認つてぬかしてたな」

「ぬかしやがつてたわね！もう！お祖父様の会社の取引先の息子とかそういうハナシで、えらく押してきて、お祖父様がつい“あ、うん”って頷いたのを認めてもらつたと勘違いしてるのよ！」

しまつた、カタカタと鳴っていたはずのキーボードからガチガチつと聴こえる。家の話か。だつたら俺にはわからない話だ。

「まあ、それでもいよいよヤバくなつたら出すわ。それより今日はどうしたの？逃げなくていいの？」

「逃げる逃げる言つたなよ。話すべき情報が無かつたから来なかつた！それだけだ」

「教室にもいなかつたじゃない」

「……」

確かにそう言われるとなにも否定できない。

俺は誤魔化すように伸びをした。ぎしつと椅子が唸る。

「それで？なにか思い出したの？」

「思い出したつづーか…新情報つづーか…」

「昨日の刑事から？」

「……知つてたのか？」

「人の噂なんてね、一日もあれば広まるのよ」

「はあああああ

「まつたく、油断もスキもない。

「ほらつため息ついてないで教えなさいよ」

「……今回の、事件だけ通り魔じやない可能性あるつてさ」

玲華の手は止まらなかつたが、明らかにスピードが減速していく。ディスプレイを見つめていて、斜め後ろにいた俺にはその表情は見えない。

なんとなく、疑われたことは言いたくなかった。噂で、なにか読んでいるのかもしない。玲華は鋭いから。しかし結局晴らせたかどうかは不明だつたから、言わなかつた。

「そつ……だつたらなおさら解決しないとね」

玲華は振り向いて微笑んだ。今まで見た中で一番美しいんじや

ないかと思つた。なおさら、といつ台詞で一言にまとめていられるけれど、玲華も気づいているだろ。

無差別に殺す通り魔が、犯人ではなかつた場合の意味を。もしもそれが確かならば……、梶剛志という人物は、怨恨の果てに殺された、という可能性がより浮き彫りになる。

……彼女は強い。強くて優しいんだと思つ。猫を被つっていてもその芯の部分は隠しきれない。だから綾小路も夢中になるのかもな、とらしくもなく少しだけ思つた。

「……俺、ちゃんと頭使うわ…」

「は？ いきなりなに言ってんの？」

吐き捨てられた言葉にちょっと前言撤回したくなつた。だけど確かにわかりにくかつたかも、と思つて頭を搔いて誤魔化す。

「いやー…ホントはあまり考えないようにしてたから」

「じゃあ、もう逃げない？」

にやにや笑つて玲華が訊いてきた。変な汗が滲んだ。僅かにキヤスター使ってじりじり下がる。

「ま、まあな」

やつぱり見透かされていた。それが俺の感想。

俺はやつと気づいたというのに。あの恐怖の正体を…。薄々は分かつていたのかもしれない。でも、いつまでも逃げてばかりもいられないだろう。玲華がこんなに強いのに。

「もう逃げない」

自分自身に言うようにその言葉をつむいだ。

「いーんじやない？」

玲華の言葉はそれだけだつたけど、声に笑みが含まれていた。もうパソコンに向き直つていたから顔は見えなかつた。

「なにしてんだ？ さつきから」

体重を移動して玲華のパソコンを覗き込もつと近づく。

「クラス全員のデータを打ち込んでるのよ」

語尾にハートマークがついてそうなテンションで玲華は答えた。

俺の動きが止まる。

「今度の球技大会のためにね」

「げえつ！」

俺は床を蹴つてできるだけパソコンから…いや、玲華から離れた。キヤスターという機能は最高で、かなりの飛距離を稼げた。

「言つてるそばから逃げてるし…」

恨めしげな顔で玲華が非難している。

「あー、どいつもこいつも人気ある競技希望しそぎなのよねー」

玲華は今度はマウスを力チカチいわせていた。離れたままそれを見ていると、俺はふとあることに気づいた。

「もしかして…わざわざ投票させて抽選形式にしたのって…」

「ふふん。気づいた？」

ニタリと玲華が笑う。

「もちろん、それぞれの一一番向いてる競技を当てはめるためよ。やりたいものじゃなくてね。拳手制にしたらそれがバレるじゃない？」

なんてやつだ。やっぱり少しではなく前言撤回だ。

「でもちゃんと考へてんのよ。あまりに希望とかけ離れてても怪しまれるしねー。あーくそつ、こいつもテニス、サッカー、バスケか。中途半端にどいつもプライドありそうだしなあ」

聞かせられない。とてもではないが、あの陶酔しきっていたハギとかクラスメートには絶対に聞かせられない。俺は頭を抱えた。
「でえ？ 結局どれにするのよ、あんたは」

「なんでもいい」

「またそーいうー…」

「苦労してんだろ？ それを少しでも減らそうとしてやつてんじゃねえか」

キツと睨む玲華にすかさず俺は言葉を被せた。

「だめ！ あんたは最優先だから」

「じゃあ卓球…」

「じゃあってなによ？ 卓球バカにしてんじゃないわよ。アレだって

真面目にやつたらハードなのよ

ピンポンとは違うのよ、カットとかあるんだから、と玲華は諭しかかつた。ああ？

「じゃあいいじゃん。それガンバリマス」

「だめよー！もつと派手で華のあるやつしなさいよ。卓球なんて誰でもいいわ」

「おまえが一番バカにしてんだろ！」

俺はついシャーツと席に戻った。

そのとき田に入った。綺麗に並べられたデータがエクセルに打ち込んであるのを。全員の名前の横に、パワー、テクニック、スピード、体力、集中力、そして経験値の数字が一人一人打ち込まれている。そして身長体重スリーサイズまで…えええ？

「すげえ…」

つい本音が盛れた。

得意気に笑つて玲華はマウスをクリックした。

「こんなのもあるわよ」

パツと画面が変わる。一人一人別れていて、写真の横には六角形^{ヘキサゴン}のグラフ。一目でそれぞれの能力がわかつた。見やすい。

「これ、おまえが？」

「そうよ、全部あたしの判断だけど一寸の狂いもないと思うわよ」洞察力も凄いが、パソコン技術も凄い。そしてその執念も凄かつた。どれにまず驚けば良いかわからない。

「なにしたいの？おまえ…」

「うつわあ、悠汰に呆れられたー。サイアク」

「いや…誰でも呆れると思うけど…」

「しようがないでしょーなんとしてでも優勝したいのよ、あたしは！」

優勝、という二文字に俺は愕然となつた。そして玲華のすべての行動が附に落ちた。

ああ、そう、としか答えられない。

「だからはやく決めてね！あー、そうだー中学ではなにやつてたの？」

「なにも…」

「信じらんない。もつたいない！才能埋もらせて楽しい？」

「あのさ、そもそも過大評価しそうだと思わねえ？」

「思わないわよ。してないもの、評価」

聞き捨てならない」とを聞いた気がした。俺の眉がおもいつきりしかめられる。

「な、な……」

「だつて本氣出してやんないんだもん。見てよ、コレ」

玲華はマウスのホイールをグルグル動かした。俺のページに止まる。

「え？」

俺のデータはすべてゼロだった。それは能力値がゼロといつひとではなくて、データが入力されてないためのゼロ。

「なんで…」

「わからないのよ、あんたは。……最初のテニスのときはホントに驚いたわ。対戦相手だった喜多川くん、知つてる？中学では全国クラスの大会に常連で出てたのよ」

なぜか悔しそうに玲華は語った。

「そんな相手に悠汰は互角に戦っていた。でも途中から手を抜いたでしょ。しかも集中力が切れた、とかじやなくて周りが騒ぎ出していくから」

俺は玲華の言葉を遮るように立ち上がった。軽く聞こえるように、元気で明るく言つ。

「やっぱり過大評価してんじやんか。あれはなに？ビギナーズラッシュっていうの？……たまたままだよ。初めてやつたから、たまたまウマくいったんだ。運だよ運」

「初めてって言つたわね？バカねえ。さらになにあたしの期待値上げてどーすんのよ」

玲華は苦笑いでそれに答えた。どうこう表情をしようが迷ったうえでの苦笑に見えた。

言つべきことが見つかなくなつて、俺は話を逸す。

「だいたいなんでそんなに優勝にこだわつてんだよ

「やるからには勝たないと意味ないでしょ？ 力、貸してよね」

「……ホントにそれだけか？」

「聞いてから後悔しても知らないわよー」

「かハかでふるいをかけたら、またこんなこと書つし……」

「その返し、きたねえ」

「なによ、教える変わりになんかしろっとかは言つてないでしょ」

「じゃあ教えるよ」

「ふふふふふ」

不敵に笑う玲華にビクリと俺の体が反応した。はやまつたか？

右手の人差し指をピッとして玲華は続けた。

「優勝したらお父様からご褒美もらえるのよ、なんでもひとつー」

「…………はあ？」

お父様ということは理事長か。入学式のときに見た程度しか知らないが、子煩惱のようだな。親バカともいう。

「物欲かよ？」

「そうよ、冷蔵庫もいらつの。この部屋にーこれから季節には必須だと思わない？」

両手を広げて、そもそも当たり前のように玲華に、俺は力が抜けた。じっくり損した気分だった。

「あー……つと、報告終わつたから帰るわ。またな」

片手を軽く降つて出口に向かつて歩く。

「ちょっと、まだ話は終わつてないわよ？」

突然の変化に玲華は戸惑つた声を上げた。俺は少し考え込んで、一度だけ振り向いて笑つた。

「どのスポーツを選んでも、同じなんだよ…結局」

ちゃんと笑えたかわからない。だけどいまの俺に成すすべはもう

ないとわかった。結局は、俺の問題だから。

「……っ！球技大会、月末だからねっ！ギリギリまで待つから」

玲華の諦めない、力強い言葉が最後に聞こえたけど、そのまま扉を閉ざした。

心の扉までは閉ざさないように気をつけたから、そこだけは進歩だろ？、と誰に言つでもなく思つてしまつた。

止めどなく押し寄せる恐怖。暗雲が垂れ込める天みたいに徐々に、たが確実に濃く蝕んでいく。どこまでも覆う黒雲。

足搔くように手を伸ばしても、ずっと拡散するだけだった。払つても払つても意味がなく、やがてまた形成される。

でも俺は掴んだ。掴むことができたんだ。雲の中にある、恐怖の正体を。

そこにあつたのは期待。

そして…勝手に期待をされて、幻滅されることに怯えている自分がいた。

どちらも物心ついたときから始まっていた。両親の手によつて。

トラウマ？……そんな大袈裟なものじゃない。ただ俺は逃げ出しただけだから。トラウマに至るまえに。一度逃げると癖がつくとわかつていながら…それはもつ、どうじょうもなかつた。

もう逃げない、と玲華に答えた。親にも刑事にも、そして玲華からも逃げていた。まずはそれを認める。自分の弱さを見るとも、別の恐怖があるけれど、まずはそこからだ。

(悪いな、玲華。ひとつづつじゃないとムリみたいだ)

そしてこの日の夜、もう一度俺は事件現場に行くこととした。

夜にしたのは人の目に触れたくない…あと、思い立つたのがその時間帯だったから、というのもある。腕時計は二十一時三十分を指していた。

いつものようにP o dを耳にぶつこみ、俺は家を出た。

咲田さんは住み込みじゃないから帰つていなし、兄貴は多分勉強だ。邪魔するものは誰もいない。

雨は降つてなかつたが星が見えるほど晴れてもいなかつた。いまの俺の気分にぴつたりだ。

梶さんの無念を晴らせ。

刑事の池田に言われた。正直なところ、申し訳ないがそこまで想う気持ちにはまだなれない。俺はいつだって自分のことばっかりだ。嫌になる。

(だけどまだガキだから)
ガキ扱いされてムカつくのは、子供の証拠だつてこともわかつて
いる。

(でもちゃんと思い出すから)

見たことは全部。目を逸らさずに。いまはそれで許してほしい…。
そう思いながら、まず歩道橋から下を眺めた。いまは車の往来も
多いし、ポツポツ帰宅に急ぐ人がいた。そのなかでの田の記憶を
刷り込ませる。

まず梶剛志を見だしたのはあの辺りだつたな、と確認する。そして次に見つけたのが後ろにいた犯人の影。

……やっぱり、ここからでは顔まで見えない。でも着ていた服
くらいは判然できただはずだ。

(犯人はなにを着ていた? …… 黒い服? ……いや、スーツかも知
れない)

ではレインコートを着ていた? ……ダメだ、そんなイメージ
はない。

そこまで考えて、はたと我に返る。

(イメージってなんだよ)

俺は真実を見に来たはずだ。固定概念は消さなければならない。
しばらく考え込んでから、俺は歩を進めた。歩道橋を降り、現場
に近づく。

気を紛らわすために聴いていたBGMは、ドラムの刻むビートが
俺の鼓動に重なり合つかのように鳴っていた。速いテンポに押され
るように足が動く。

iPodを持ってきて良かった。些細な助力だつたけれど、前に
進むことの難易度が確実に低くなつていたから。それでもあの場所

に近づくにつれて、俺の鼓動は速くなる。狂ったメトロノームみたいに規則性もなくリズムの先をいく。

(「こじだ…」)

あのときと同じ位置に俺は立ち止まつた。その瞬間、感じた衝撃が蘇る。

(「そうだ。それでいい…………それから、俺はどう想つた？…………なにを見た？」)

今にも逃げそうになる脚を意識的に踏ん張り、隅々まで視線をやつた。

左側には猫が入り込めるほどの中溝。グレーチングがあり底は見えにくい。ボタンが落ちていた位置はおそらくここにこじだ。

視線を中心に戻して、倒れていた姿を思い浮かべる。そして記憶を辿つていった。

恐怖と血の臭いがした。そしてあの見開かれた眼が現れた。わかつていて、すべて幻だ。

周りの気配が消え、iPodの音楽も、他の余計な音もいまは何も聴こえなくなつていた。ただ感覚を目の前に集中させていたから。そして、まるでかつて父親と対峙したときのような感覚になつていつた。

逃げたいのに逃げられなかつたあの時期。

すり変わつていた。

返ってきたテスト用紙をテープブルに置き、それを挟んで向かい側に父親が座り、荒げた声で責め続けられた。毎晩毎晩繰り返し行われた叱責。手も、出ていた。俺は見えないロープで縛られたように動けなかつた。

何でこんな点数しか取れないんだ？本当に俺の子か？部活がやりたいだと？そんな暇があつたら勉強しろ！こんな成績でどうやって生きてくんだ。次に満点が取れなかつたらこの家から追い出していくやる！

そしてだんだん俺は呼吸が乱れ出したんだ。息苦しくて死ぬんじ

やないかと思つた。

だけど父親は医者だつたから冷静に対処した。情けのひとつもかけられないままで。

それからも、叱られるたびに息ができなくなつていた。いつもそれで逃げられると思つたが、ついには放つとかれるようになつた。

(ヤバッ……)

昔のことによく意識がリンクし過ぎて、気づいたときには遅かつた。俺はまた、息苦しくなつっていた。意識して空気を全身で吸う。しかし吸つてゐるのに酸素が入つてこない。苦しみから襟元を無意識に握り締める。

「…はあっ、はあっ、あっ……」

じきにそれもままならなくなり、俺は立つていられなくなつた。左手で胸元を押さえ、いつの間にか目の前に迫つてきていた地面に右手をつく。そしてその手と脣が痺れだす。気づいたときには、右側から道に倒れ込んでいた。

「過呼吸か?」

ふいに耳に声が届く。

それと同時に音楽も流れ出した。本当は途切れはなかつたはずなのに、そう思つた。このとき流れていたのはハスキーナ女性ボーカルの曲。

苦しくても明日はくるから

大丈夫だから 悲しまないで

顔をあげて 一緒にいこう

そんな歌詞が流れてた。笑われるかもしれないけど、俺に言われている気分がしたんだ。

その通りに顔を上げて声の主を見たかったけど、出来なかつた。激しい耳鳴りと悪寒までしてきて、うずくまることしか出来なかつ

なんだ。

* * *

呼吸が整い、落ち着いたときには俺は車に乗っていた。まだぐつたりとダルさが抜けなかつたから、後部座席に寝転がつたまま運転席を見ずに言つた。

「やつぱり…あんただつたんだ」

「まあな」

声の主は久保田だつた。久保田はすぐに俺を抱き上げると、乗つてきた車の後部座席に移動させた。青いコンパクトカー。

狭いけどあの場所にいるよりは良いと判断した、と後から言つていた。

刑事と来たとき、やはり遠くから見ていたらしいことも。

久保田はすつと背中をさすつたり、胸の辺りを押したりして、丈夫だゆつくり息をしろと繰り返してくれた。

「ペーパーバック法はあまり良くないと最近聞いてな。とりあえず場所を移動して様子を見ようと思つた。ごめんな、すぐに楽にさせられなくて」

落ち着くのを待つてそう言つと、運転席に戻つた。そのまま今に至る。どこに向かつて走つているか聞けていない。

氣分も気持ち的にも最悪だつた。乗り越えようと思つた壁は乗り越えられず、それどころか昔の症状まで再発してしまつた。しかもまた他人に迷惑かけて…。

「過換気症候群か、女性に多いと思つていた」

「…んな大袈裟なもんじゃねえよ、つーか偏見やめろ」

でも一番最悪なのは自分だ。感謝したいのに、素直に言えない。特に大人相手だと。

「あ、そうか。ごめん」

嫌味のひと欠片も感じない言い方で、さらりと久保田は謝つた。

調子が狂う。前はあんなにムカついたのに。

(雰囲気変わった…？)

「…」がどう変わったかと聞かれれば解らないが、そう思つた。だからそのまま伝えた。

「ああ、探偵だからな。いろんな人格持つてるんだ」

なにが探偵だからのかまったく分からぬ。しかし人格変わるやつ多すぎる。しかも俺の周りだけ集まつてないか？

「なあ……本当に護衛してたんだな」

「嘘だと思った？」

後部座席からは久保田の表情が見えなかつたけど、柔らかい口調で訊いてきた。

なんかつられる。つられて、口調が静かになる。

「いや…でも家に帰るまでしか、ついてきてないと思つてた」

「そうだな。今日は油断したよ」

「……もしかして発信器とかつけてる?」

ふとひとつ可能性に気がつく。俺は上半身を起こした。もう体は辛くなかった。

「言えないな」

「否定しないってことはそれが答えだろ」

「もしそうなら、怒る?」

バックミラー越しに田代が合つた。声の通りで穢やかな田代だった。

それを見ると怒る気も失せる。

「怒つたってやめないだろ?」

「確かに」

ふつと笑つたその顔を見て、今なら言えるとと思つた。でも氣恥ずかしくて俯く。

「……今日は…その、ありがと」

「なにもしてないよ。裏られてたわけじゃないし」

「……でも安心した」

裏られてたよ、過去に。そういうになつたけど、あまりに自

虚的すぎでやめておいた。

それからしばらくして車は俺の自宅の前に止まった。

「ああ、俺が落ち着くまで適当に走っていてくれていたんだ、つて
ようやくそこで気づいたんだ。大人のやることの深さに脱帽する。
敵わねえな…やっぱりまだ俺はガキだ。」

「なあ今回の事件、捜査してないのか？」

「車から降りる直前、ずっと気になっていたことを聞いた。

「刑事になにか聞いた？」

「まあに捜査現場に現れたことあるつて」

「そう……、でも今回はそれどころじゃないかな」

答えるとき少し目線を逸らされた。なにがあるのか?とちょっと
気になつたけど、もう一度お礼を簡単にいつてドアを閉めた。

* * *

明日はくるから大丈夫。

登校するのに iPod を聴いていたら、またあの曲が流れていた。

(よくかかるな…)

適当に入れすぎてタイトルも忘れてしまつたような曲なのに、最近決まって一回はかかる。

どんなに苦しくても、明日がくるから大丈夫なんておかしい。

(明日がくるからイヤなのに…)

ふとそこまで考えて少々後悔した。またネガティブ側に思考がいつているようだ。ちょっと悔しくなつて次の曲にしようと本体を手にとつたが、それも負けたみたいで悔しい。

「おはよっ。どうしたの? 神崎くん」

どうしようか迷いながら iPodを見つめていると、後ろから肩を叩かれた。

「あーハギかー」

そこには以前の俺のぼやいた言葉を聞いて、律儀に挨拶を変えて

きた萩原がいた。なんだかんだよく話しかけられるな、こいつには。「その呼び方固定するつもり？」

不満そうに頬を膨らませながらも、萩原は俺の隣で立ち止まつた。先に行くつもりはまたしてもないようだ。そういうえば萩原には様と呼ぶのを変えてもらつていたな、と気がつく。

「えーと……拓真だけ？」

「当たり」

爽やかに、嬉しそうな笑顔を見せると、拓真は iPod を覗き込んだ。

「それで何を見てるの？」*iPod*？」

ホントにこいつは好青年だ。アイツとかソイツとか見習わせてやりたい。そう思つてます思い浮かんだのが、綾小路の顔だつたりした。

「そう、この曲ばっかりかかるから悔しくて。かと言つて飛ばすのも悔しいだろ？」

「その理屈よくわからないよ」

拓真はつづんと唸つていた。

「そりかあ？ 悔しいだろ？ 普通」

「普通、飛ばすんじゃないかなあ？ だつてボクなら、そういう曲は耳に残つてリフレインされるともつと嫌だから」

田からウロコだつた。すげーと俺は目を輝かせた。

「そういう考えもあるんだな。すげー頭いいな拓真」

頭をぐしゃぐしゃにしてやつたら、やめてよと怒られた。なんかどつかでこの逆の光景を見たな。

そういうながら何気なく*iPod*を操作してると、あれ？ と俺はあることに気づいた。そしたら横から見た拓真が先に口を開いた。

「これプレイリスト設定してるよ……ええつ？ いまの会話をなに？ わざと？」

信じられないといふ眼差しで拓真に見つめられる。ええつ？

「そんなはずねえよ、だつて俺はずっと全部の曲をランダムで……

あ、と俺にひとつジグザグが浮かぶ。

「玲華だ…あーいーつー…」

何日か前にジッとの iPodを持つて見ていたのを思い出す。あのときしか考えられない。そんな設定をする時間はなかつたはずだが、あのヘキサゴンを見せられたあとではそれも可能かもしれないと思える。

「玲華をもつー!?」

なぜかぎよつと拓真が目を剥いていた。

大

「玲華！どういうことだ、てめえ！」

なんか抑えて拓真と登校したが、教室で玲華の姿を見つけると、

我慢できなくて俺は詰め寄った

やめなよ禪嶺ぐん

後ろから拓真が押さえにかかつてきただが、そんなのは無視だ。ここまで歩きながら設定したのは玲華だと、いくら説明しても信じなかつた。まったくなんなんだ？この信頼度の違いは。

「うわー、うれしいです。おめでとうございます！」

笑む玲華に拓真はぽうつとなつていた。

「これ設定したのおまえだろ？」

力が抜けそうだったが、引っ込みがつかなくて、やや声を抑えながらもiPodをグイッと玲華につきだした。

お気きにならぬ
おはなしに金賞が
いたが

悪びれもせず口元に手を当てて、おほほと笑っている。

ほらみる、と拓真を見たがまた心醉中だつた。おいおい。そのう

「ドアがうなづいて、心配でした。」

してしまいましたわ」「は？ いつ？」

「球技大会のお話をした前の日でしたでしょ？」「あの日に設定したんじやないのか？」

「いいえ。あのときはそんな時間！」ざこませんでした。それより前…かれこれ二十日は経つてますでしょ？……本当に今日お気づきに？」

呆然としている俺だけに見えるように、玲華の瞳がキラリと光った。よう見えた。

今日とか強調してんじやねえよ！ ちくしょう。

反論しようとしたとき、はたと気づいてしまった。そこにいた全員が俺たちを見ていたのだ。ひそひそと話す小声のなかに、なんであの一人が……？ と聞こえる。そう言えば皆の前でこれほど会話するのは初めてだったか。本性まで知っているのに変な話だ。世羅もすでに来ていたが、無関係を決め込んでいる。

「ああ、そう」

それだけでまとめて席の方へ振り向いた。これは部屋で話をつけてやる。意図を問いたださないと気持ち悪い、と思ひながら。

「いかがでした？ わたくしの選曲は？」

だけど玲華は気にしてないとでも言つよう、「話を続けた。

俺はしばし目をパチクリさせて止まる。そつが、こんなことを気にするようなタマではなかつたか。

彼女が猫を被つていたのは、最初から喋り方だけだつた。向けられる態度…はちょっと悪くなつたかもしれないけど……表情や眼差しに変化はない。常に芯は貫いている。

きつと彼女は俺のことを考えて、一人の時を狙つて話しかけてきたんじやないか、とさえ思えてきた。

「バッカ、最悪だよ。趣味悪い」

「もともどご自分でダウンロードなさつてるのに…」

つい笑いながら非難したら、これ見よがしに玲華はため息をつい

た。あー悪かつたな。

「そ、うなんですよ、玲華さま。しかも神崎くんときたら聞き飽きた曲なのに、飛ばすのが悔しいとか言うんですよ」

陶酔から溶けた拓真が、裏切つて先ほどの出来事を語つていた。

おい！

「あら、悔しいという定義がおかしいですか。きっとランダムだとお思いになつて、これは選ばれた曲だから試練だ！とでもお考えになつたのかしら」

「さすが玲華さま。それですよ。だから一ヶ月近くも気づかなかつたんでしょうね」

「おい！2人とも、悪口は本人のいないところでやれよー！」

あーなんか頭痛くなつてきた。丁寧語でバカにされると、余計に

ムカつくことを俺は体感した。

「「それでは陰口になつてしまひますわ」しまつよ
二人の反論がユニークンした。ちくしうー

「なあ……おいつて……無視すんなよ」

長々ある廊下。俺は玲華の後を追いながらなんとか朝の疑問をぶつけていた。

「う、る、や、い、ですわ」

「……」

ものすごい迫力で睨み付けられた。

一応まだ誰が現れるかわからない廊下、しかしいまは俺たちしかいない、ということで、猫かぶつた状態と地との境目にいるようだつた。それゆえにアンバランスで怖い。

一緒にここまで来ていた世羅は、一人スタッフ歩いて部室の鍵を開けていた。鍵にまで龍があしらわれていて豪華だった。

「だつてさーあんとき以外 iPodさわるチャンスなかつたじゃんかよー」

ぼやきまくる俺をむりと無視して玲華は部室に入った。続いて俺も入る。

「まだ言ひつやだもーあんたしつこいー」

すでに口調が変わっていた。地になつても言ひ残はないよつだ。ちつ。

それを確認したら俺も諦めた。

「じゃあもういい」

ため息を吐きながらソファに寝そべると、やつぱりこいつは心地いい肌触りだつた。部屋に欲しいかも。無理だけど。

俺はそのまま直帰しようと、教室から持つてきていた学生鞄からiPodを取り出して、仰向けになりながらじつた。最近確認せず再生しかしながら、確かにスタンダードプレイリストが二十曲くらい設定されている。

一番上にあるタイトルは『comewith tomorrow』

。ふーん。

そんなに売れてはいないが、何かのCMのタイアップだった曲だ。
「気をつけなさいよ。先生に見つかったら没収だから」

パソコンの電源を入れながら玲華が言う。それには生返事で返して、くつろいでいると扉が開かれた。

綾小路か、と思い顔を向けたら秀和だった。秀和は高い声で元気そうに言った。

「お休み頂きまして」迷惑かけました！」

「2日ぶりねー」

玲華がヒラヒラと手だけ振って返していた。世羅はうむ、と頷くだけだった。なんの迷惑なんだいつたい、と思いつながら見ている俺を見つけて、秀和こちらに掛けてきた。

「うわあ、神崎さまがいる」

はつはつと舌をだして喜んでいる犬が想像できる。

「風邪だつて？大丈夫かよ」

「はい！もうすっかり！嬉しいなあ、神崎さまに心配してもらひつて」「してない。いま思い出した」

「そ、そんなあつさりきつぱり即答しなくても…」

クウーンと鳴くように秀和は落胆した。本当に表情がころころとよく変わる。確かに肌が艶々しているし、健康そうだつた。

「あ、早速ぼくお茶いれますね。皆様なにを飲みたいですか？」

かいがいしい秀和は、ダメージなど初めからなかつたように奥の方に向かつた。その背中に向かつて玲華と世羅はそれぞれパソコンから目を離さず頼む。

「あーありがと！あたしレモンティね」

「抹茶を頼む」

「はい！神崎さまは？」

聞かれて俺は少し考えてから、立ち上がりつて秀和の方へ行く。なにがあるんだろう、と興味を惹かれたのだ。

秀和の机がある左側にその一角はあった。ソファのある位置から

は見えなかつたが、カップなど置いてある棚と、キッチンまではいかないがちゃんと水道がひいてあつた。そして小さなテーブルに電気ポットがあいてある。最近有名なすぐに沸くといつやつだ。

「いろいろあるんだな」

棚には紅茶や抹茶、ほうじ茶、ジャスミンティーや煎茶に玄米茶などあらゆる種類のお茶があつた。

「ええ！ぼくの仕事です」

「ふーん。あ、コーヒーもある。じゃコーヒーで」

「かしこまりました！」

嬉しそうに秀和はカップを並べたり、お湯が沸くのを待つていた。慣れている、というか秀和にむいているみたいだ。それで次は冷蔵庫ね…、と俺は妙に納得してしまつた。

「確かに…ここまであると、次は冷蔵庫が欲しいって気持ちもわかるかも」

「知つてたんですね、神崎さま。そつです、この部屋に冷蔵庫は合はないつて最初お許しにならなかつたんですよ、理事長が」
俺たちの会話に玲華が反応してこちらを見ていた。俺はすぐに後悔の念に襲われる。

「そう思つでしょー？ひどいでしょー？いたたまれないでしょー？」
だからせ、お願ひね、球技大会。悠汰のも置いてあげるから

しまつた。やつぱり話がそこに戻つたか…。

正直、不安な要素はまだある。最近かたちになつたものだ。俺は玲華が言つほど運動神経に秀でているわけではない。だからきっと当田はがつかりされるだろう。

幻滅、される。

それに過呼吸だ。もう大丈夫だと思っていた。だが昨日再発したことでの、またいつなるかと心配になる。

俺は話を逸らそつと、手前にいた世羅に歩み寄つた。世羅もパソコンになにやら打ち込んでいる。

「おまえはなにやつてんだ？」

「あ、『ラーラー無視してんじゃないわよ』

世羅は迷惑そうにこちらを見たが、俺が覗き込むのを拒みはしなかつた。変わりに…。

「スケジュール調整だ」と、冷たい声で言われた。

確かに間にかの表がずらすっと画面に貼り付いている。日付とクラスと時間と場所とスポーツ…。これは…と俺は気づいてしまった。気づいたら玲華が世羅を挟んで、腰に手をあて悠然と立っていた。「球技大会の練習よ。お休みと放課後に少しずつそれぞれのクラスが予約を入れてるの」

「練習…？」

そんなものまであるのか、と俺は愕然とした。

「だからさ、昨日ギリギリまで待つって言ったけど、よく考えたらそんな余裕ないのよ！これっぽっちも…」

「そりゃあ…タイトだね」

「だね、じゃないわよ、タイトなのは実際。一応予約はしといたださーまだ他のメンバーも発表してないし…やばいのよ」

玲華の顔色が青ざめたようにみえる。俺はため息だけ残して定位置に戻った。そうソファだ。

「それで結局、希望はどれよ？まだ決まってないの？」

「だけど玲華はついて来た。仕方ない。本当のことを話そうか。一瞬そんなことがちらついたが、やっぱり駄目だと思い直す。言いにくい。

俺は重く口を開いた。

「卓球は…ダメなんだっけ？」

「だめっていうか…本当にないの？得意なやつ

「そりなんだ…しかも…」

言葉を切ると、玲華も向かいのソファに座つて覗き込む。

「しかも？」

「怒らないで聞いて欲しいんだけど…」

「なによ、怒らないわよ」

「なんの競技があるか、全部知らないんだ」

「…………っ！」

ちょっと殊勝に話を続けていたら、最初は神妙な面持ちだった玲華がいまは怒りに震えていた。

オコラナイって言ったのに。

「いまさらなに言つてんのよ。あたしが何のためにあの日、黒板に、わざわざ全部書いてあげたと思うの？いやー信じらんないー！」絶叫したかと思うと、パソコンまで戻り一枚の紙を持って勢いよくソファに座り直した。ばんとその紙が置かれる。

「聞いてなさいよ！男子はサッカー、バスケ、テニス、クリケット、ゴルフ、バレー、バドミントン、卓球……」

「ちょっと！なんだよその量は！」

ずらすらと読み上げる玲華に俺は血の気がひいた。冷ややかな目で玲華が見据えてきた。

「うちの学校、スポーツに力いれてんのよ。だから競技大会は3日に渡つて行われるのよ、知らなかつたの？」

「しら、知らない……」

なんとか答えるも俺の声は弱々しいものだった。ちょうどそこで秀和がそれぞれの飲み物を持ってきた。俺たちを見てクスクス笑っている。

「おまえなにすんの？」

俺の前にコーヒーを置いた秀和に訊いた。少しだけ悔しげに響いてしまつた。

「ぼくはバスケです。もし当たつたらよろしくお願ひしますね」

余裕たっぷりの笑顔で秀和は答えた。

「ヒテのくせに生意氣」

「ええっ！どうしてですか？」

秀和は目を丸くしていた。自覚なしか。

ふうとため息をついて競技大会の用紙を見る。一枚のうちのもう

一枚は前に配られた希望を書く用紙だった。ここで書けといつて
か。

「ちょっと考える」

初めて前向きな発言をすると満足そうに玲華は机に帰った。自分
も戻ろうと移動しかけた秀和を呼び止め、低い声で囁く。

「そういえばなんでおまえは入部したんだ？ つーかホントに部活か、
ここは」

まだ部活動として納得できなくて俺は聞いた。玲華に聞いてもは
ぐらかされるか、無視されるかだけだから。それに、ここにきても
やることがないし、玲華なんて学級委員の仕事をしていた。ただの
憩いというのも納得できる話ではある。

しかしそれならば玲華の人気度からいって、他の生徒がいないこ
とと、逆に秀和がいることが不思議だった。

「ぼくは西龍院家の使用人の息子なんですよ。玲華さまの『厚意で
置いてもらつてるんです』

僅かに驚いてへええと呟いた。また使用人か。

「ここは正式には同好会ですね、部費おりてないんで」

「あー、まあ必要なさそうだしな」

「でも理事長がなにかと気になさつてて、直々にこの空間をお造り
になつたんです」

「…………」

なんということだ。かなりのベタ甘らしい。

「いい親子愛ですよね」

両手を胸の辺りで組んで秀和は言った。

「感動してくれてもいいわよ」

聞いていたらしい玲華が割つて入った。

「するか！」

呆れはするが感動する余地がどこにある？ つい玲華を見て突つ込

んだ。

やーねーカルシウム足りないのかしら、と玲華はパソコンに向か

つて眩いでいる。本当になんであんなに皆が陶酔しているのか疑問だ。

それを無視する」とに決めた俺は、体重を戻すと秀和に向き直つて内緒話をするよつに囁いた。

「他の連中、入りたがるんじゃねえの？」

「そうなんです。玲華さまが立ち上げた同好会つてことは、生徒会長に内緒してもらつてたんですけど、どこから漏れちゃつて最初は希望者が殺到したんですよ」

それはまた光景が容易く想像できる内容だ。

「だから玲華さまがあらゆる策略……じゃなくて、入部テストをお考えになさつたんです。掛け持ちしてる人は駄目つていうところですでにどこかに入部していたかなりの人が落選しました。残りは…」

「ヒテ！ あんたなにベラベラ余計なことチクつてんのよ！」

せつかく声を潜めて訊いたのに、秀和が高い声で普通に答えるから当の本人に聞こえていた。

「す、すみません！」

さらりと高く上ずつた声で謝る。多少責任を感じた。

「ヒテ、小声で話せよ。……使用者の息子つてことは昔から玲華のこと知つてんの」

「はい、そりやあもう」

「昔からあんな性格？」

「ああ。そうですよ。身内以外には完璧な振る舞いをなさつています。でもご家族やぼくたちにもとてもお優しいんですけど、ときには欲に目が眩むと、田的のためには手段を選ばない感じになっちゃうんです。この間も…」

「秀和！ 男のおしゃべりは嫌われるわよ！」

「も、申し訳ございませんっ！」

きつちり名前を呼ばれて鋭い制止をかけられると、謝りながら秀和はあわてふためいて俺から離れていった。話し出しは完璧だったのに、秀和の声はだんだん高くなつていったのだ。だから俺のせい

じゃない。睨むな、ヒトよ。

幼少期から猫かぶるのは身についてるわけか、と俺は納得した。多少のことでは崩れない完璧さがあるのは、ここ数年でつくものではないだろ。いろいろ苦労したのかもしねない。

しかし…と俺は手元の紙を見直した。どれもハードなスポーツだな。面倒くさい。

ひじ掛けに全体重をかけて迷つてると、とうとう綾小路が入つてきた。

「やあ、玲華！ 1日ぶりだね」

めげる、もしくは諦めるという言葉を、知らないらしい綾小路は今日もウザかつた。やつぱり毎日1回は来てんだろ? ここには。「じきげんよう綾小路さま」

慣れたもので玲華は何事もなかつたよ、優雅にお辞儀していった。これが上流階級のたしなみというやつだろ? うか。

「デートの日は決めたかい? 次の週末はどうだい?」

「部活の練習があるのでありませんか? わたくしも同様ですの」「僕はきみのためならいくらでも時間を作るよ。それに玲華、いいかげんここで何をしているのか教えてくれてもいいんじゃないか?」

「あら、いけませんわ。サボリなど綾小路さまに似合いません」

いけしゃあしゃあと見事に応じているが、俺には玲華の青筋が見えた、気がした。しつかり活動内容を無視してゐあたりがすごい。しかし、綾小路は何を勘違いしたのか頬を赤らめて、そうかい? などと答えてる。

これはこれで成立してるのかもしれない、と思えてきた。

「今度試合があるんだ。応援にきてくれるかい?」

「ええ、もちろんですわ、時間が合えばいいんですけども」

「ああ、もう! なんて愛らしいんだい玲華! いつなんどきだつて離したくないよ!」

綾小路はくねくねと体をくねらせたと思ったら、ガバッと両手を広げて玲華に近づいた。おい、ヤバいんじやないか? そう思い立

ち上がりうとしたとき、それより一瞬速く世羅が口を開いた。

「綾小路様、部員の方々があなたのことを探しておいでのようだ。もう行かれた方がよろしいのでは？」

いつの間にか世羅は窓際にいて、下を見ていた。あたかもその下に部員がいるように。助け船をだしたんだ、と俺は気づいた。綾小路に恥をかかせないよう配慮して。それも玲華のためになることなんだろう。

不思議な感じがした。ただ仲が良いだけではない、なにかを感じる。これが幼なじみというやつなのだろうか。俺には持っていない感じだ。

「残念だなあ。また会いにくるよマイハイーー！」

お花が背後に飛んでるようなイメージで綾小路は玲華から離れた。振り返り扉から出ようとした瞬間、ふいに綾小路がこちらを見た。

目が合った。つかの間のフリーズ。そして。

「ああーおまえはー！またしてもこんなところにー！」

「今まで気づかなかつたのかー！驚愕の声をあげる当人よりも俺はそのことに驚いた。背後ではなく脳に花が刺さつてんじゃないのか？

「どーも」

関わりたくなかつたが世羅を見習つて挨拶してみた。驚きが去つたら綾小路は座つたままの俺を見下すような目で見てきた。

「貴様が神崎悠汰だな。調べたぞ貴様のことは。玲華にちょっとかいかけるのはやめたまえ」

（うわー敵視されだした。マジ勘弁）

調べたつて何をだよ、と思つ。しかし、じじでキレるような真似はしない方が利口だつてことを今ならわかつた。だから短く一言で答える。

「だだの部員デス」

「そんな虚言を吐いたつて無駄だ！調べたと言つたのが聞こえなかつたのかい？貴様はここに登録されていない！生徒会長に確認済だ」

うわーあつさりバレてる。生徒会長にまで手を回すなんて意外と暇人じゃん。

「これから登録なのですか」

「昨日のことといい、なぜきみはこんな男を庇う…? 騙されているんだね? そうだろ?」

間に入った玲華に綾小路は慌てていた。ちなみに最後の一言は俺に向けられたものだ。どうやつたら騙せるんだよ、と聞きたい。

「おっ! それは球技大会の案内! なにをやるんだ? 貴様は」
あーもう、面倒くさい。綾小路は俺の手元の紙を見て詰め寄つてきた。嫌なものが見つかって俺は顔をしかめた。

「まだ決まってマセン」

「だったらテニスにするんだ! 僕のまえにひれ伏すがいい」
綾小路はテニスをするようだ。またテニスかよ、と俺はため息をついた。

「いやデス」

「なんだと? 貴様逃げるのか?」

「逃げマス」

「ふつざけるなああ!」

なげやりに答えていると綾小路が胸ぐらを掴んで俺を立たせた。
しまった、適当に答えすぎたか。

「だったらクリケットにしろ!」

「なんですか?」

ふと怪訝に思う。

「僕はクリケットにも出るからだよ!」

「なんで二つも出るんですか?」

「知らないのか? 貴様。一人ひとつは出るのが決まりだが、それでも空きができる。そこに僕のような優秀な人材がかり出されるのさ」

綾小路は前髪を搔きあげながら得意気に笑つた。玲華を見ると、ヤバいという顔をしている。俺にも一つの競技をやらせよつとしていたようだ。

「冗談じゃない。ひとつでもこんなに不安なのに。

「だつたらそれ以外を選びマス」

「はつ、とんだ腰抜けだな。僕にやられるのがそんなに怖いとは
掴んでいた俺をようやく放すと、馬鹿にした笑いをした。

「こんな男に玲華がどうかなるとか、なんて僕はバカなことを考え
てしまつたんだろう」

らしくなかつたねと自己完結している。

「きみは優しいからこんな情けない男に同情したんだね？でも僕は
心が広いから許すよ」

一人で大騒ぎをして、一人で納得して綾小路は出ていった。なん
といふか幸せなやつだ。

「ちよつと、なんでなにも言い返さないのよ」

だけど玲華は怒っていた。我慢できないと顔に書いてある。心外
だ。相手にしないように必死だったのに。

「言い返したほうが良かつた？」

「当たり前でしょう。もしあたしに遠慮してとか、そんなんだつた
らぶつ飛ばすから！」

なるほど、どうやら玲華の方が心外だつたらしい。

ああそつと返しながら、俺は腰を降ろすと鞄の中からペンをとつ
た。

「昨日のこととはなんだ？」

おもむろに世羅が切り出した。一瞬だけ玲華がフリーズする。

「昨日も勝手に勘違いして勝手に俺を目の敵にしてたんだ」

つまりなそつに俺は言い、球技大会の希望を書いた。第一希望、
ゴルフ。第一希望、バドミントン。第三希望、バレー・ボールと記入
する。サッカーやテニスはほぼ走らないといけないから、これで完
璧だと自己満足して玲華に渡した。

「これでよろしく。じゃあまたアシタ」

逃げるように出ようとする俺に玲華は呆気にとられたようだつた。

「なによこれ、本当にあいつの挑戦受けないつもり？」

不満そうな声を聞きながら俺は部屋を後にした。

* * *

その夜部屋のパソコンを開くと、純平からメールがきていた。
俺は携帯がないからパソコンのメールだ。携帯は許さないのに、
パソコンとかiPodとかをあっさりと買い『えた両親はどこかお
かしいと思う。というか、基準がわからない。

メールには、あの日交わした他愛ない話の続きと、最後にまた遊びにこいよと締めくくっていた。俺の家の事情やら、中学時代の愚痴や憤り、すべてを知っている数少ない友人。だけどあえて触れてこない。

不意に、意味もなく、泣きそうになった。

……胸に足りない部分がある。泣けば少しは満たせるかもしれない、と思う。

この部屋が感傷的にさせてるのだ、とも思つ。
だけど…。

もう少し頑張りたい。それは決して簡単じゃないけど、少しずつ
しか進めないけど、前に行く。

だからそれまで純平には会わない。会えない。醜くすがるまでにはまだ至っていない。

足掻きたいんだ。

俺は他愛のない部分だけの返事を打ち込み送信した。

足掻きたいとか強く思つたわりには、一夜が明けたとたん、さつそく俺は挫けていた。

でも考えられなかつた事態とか、理解不能とか、そんなことは全然なかつたはずなのに、心構えが足りなかつたんだ。すゞぐびつくりした。

(見間違い…とかじやねえよな)

でも何度も見直しても変わらない。俺の手元には玲華が皆に配つた、球技大会の決定通知。内容はバレー・ボールと……テニスにされたいた。

「Jの日程で練習をしていきます。J報告が遅れて申し訳ございませんでした。でも何度見直しても変わらない。俺の手元には玲華が皆に配つた、

にこやかに玲華が微笑むとクラス全体の士気が高まつた。

「なにかJ質問のある方はいらっしゃいますか?」

「はい!」

なんか黙つていられなくて、俺はすかさず手を挙げた。

玲華の目が細められる。やだー、無視したいって思つてゐるのが見え見えだつた。でもすぐに取り繕い完璧な学級委員長に戻る。

「はい、神崎さま」

「希望と遠く離れてるんだけど」

「確かに皆様のJ要望にこたえられましたら、それが一番いいのですが……」

「気にしないでください玲華さま。僕たち頑張ります」

クラスメートの一人が立ち上がって言つたのを皮切りに、あらゆるところから声が沸きだした。

「そうですわ。西龍院さま、気にする」とありません

「神崎くんは贅沢なんだよな」

「玲華さまにあ一言つて振り向いてもらおうとしてるんだ」

「イヤー不潔ー！」

「おまえら喧嘩売つてんのかつ！」

俺が冷や汗をかきながらその場を制したとき、ぽつりと誰かが呟いた。

「僕も納得できないな」

ちょうど静かになつた瞬間の呟きはとても響いた。周りの注目がそいつに集まる。

喜多川だつた。テニスでかなりの好成績を修めてるやつ、という喜多川からの情報が俺の頭に浮かぶ。

「喜多川くん部活に入つてる人は、その競技はできないんだよ。だからテニスは……」

「知ってるよ！」

おずおずと拓真が先読みして教えたのを、喜多川は真っ赤になつて叫んでた。

「そうじゃなくて……どうして僕がひとつで神崎くんはふたつなんですか？」

数の問題らしい。彼は運動部にさえ入つてないのに……と喜多川がぼやくと、周囲も同調しだした。

「確かにおかしいよなあ」

「それなら僕も納得いかない」

「西龍院さま、神崎さまに弱味でも握られてるんですか？」

「もしかして神崎くんが脅してたりして」

「イヤーサイテー！」

あのなあと呆れながらも、俺は何も言わずに玲華を見ていた。

内心、よしよしもつと言え。もつと騒ぎが大きくなつて見直しなれば良い、と思っていたのだ。

クラスのボルテージが最高潮になつたとき、玲華が口を開いた。

「皆さまお静まりください！」

そこにいる全員を黙らせることのできる、透き通つた、力強い声だつた。上に立つ人間が持ち合わせている声。ピリッとそれが教室

を走った。

「わかりました。では他の希望に添えなくて」不満をお持ちの方も含めて、練習をみて最終決定をします。実力がすべてです。それで調整いたします」

そこには笑顔ひとつで皆を納得させた、あの日の玲華はいなかつた。ただ静かに厳かに命じたみたいに思えた。それでも反論するものはない。

悔しかつたら力を誇示しようとしだ。わかりやすい。わかりやすいけど一番厳しい。

「ぐくりと生睡を呑む音が聞こえた。たぶん喜多川とか運動部に入っている連中だろう。

* * *

その日の放課後からすべての学年、すべてのクラスの練習が始まった。体育館もグラウンドも使用権利は予約制で、その間は本来使用している部活動も時間が短縮される。全校生徒がそれぞれそういうシステムだから、不利だと嘆く者はいないのだろう。

といつてもたかだか約一週間だ。二十日後には大会本番。

（みんな熱すぎ…。ただの球技大会だろ！校内の！）

俺は流れる汗を拭いながら心だけで愚痴る。それは喋つてる余裕も時間も、体力もないためだった。

向かいのコートにいる喜多川が、ネット越しに俺を睨んでる。その手には白いボール。

喜多川もバレーボールだつたんだ。それをコートにきて初めて知る俺もどうかしているが、本当にそれどころじゃなかつた。気持ちに余裕なかつた。

（賞金とかないんだろ？）

喜多川がボールを高々と上げ、ジャンプしながら右手で打つ。まっすぐボールは俺のところに迷うことなく突っ込んできた。

(なのになんでつ…………いつ、てえ！)

なんとか両腕で弾いたが、速くて重いボールは俺の腕を破壊する
気だと思った。レベルが違う。

だいたいバレー部でもないのにジャンプサーブするか？普通、と
聞きたい。

六人制でローテーションでまわってるのに、喜多川は俺ばかり狙
うし。いや、喜多川だけではなかつた。ほとんどの男子がそつだつ
たのだ。

侮られているんだ。狙い目だと思われている。もしくは調子にの
るなど、制裁をくだしたいのかもしない。出る杭は打たれる。
(だからってうぜえ！)

一度敵コートに渡つたボールが一いつ矢りに戻つてきた。当たり損ね
たアタックで。

後列にいた山仲やまなかというクラスメートがレシーブし、それが俺の上
に上がつた。トスもせずに俺は怒りに任せてボールを打つた。バッ
クアタック。

たまたま喜多川に向かつて行き、近くで落ちた。

フェイントみたいになつて、おもしろいくらいに決まつた。本當
にたまたま、偶然。

「くそつ！」

喜多川が悔しそうに地団駄を踏んでいた。さうに鬪志がみなぎつ
ていく。

(やべ……)

ひやひやしながらやつた初田の練習はなんとかこなせたけど、俺
の見せ場は後にも先にもその一回だけだった。

* * *

運動不足がたたつて疲れきつた体を、引きずりながらあの部室に
行つた。玲華のために用意された部屋。

おかしな話だと自分でも思うけど、ここしか思いつかなかつた。

人の目がつかない場所に行きたかつた。

(違うだろ。そう思うこと自体がおかしいだろ。人の目つて……あの三人もいるのに)

自分の考えに愕然とする。いつのまにか本当に俺にとつても憩いの場になつているとでも言うのか。

でもいまそんな余裕がない。深く頭を働かせる余裕がなかつた。ぐちゃぐちゃと余計なことが頭をよぎつたのに、部屋に行くと当の本人も世羅もいなくて、秀和だけだつた。

「うわっ！大丈夫ですか？神崎さま！」

俺を見るなり秀和は慌てていた。そんなにひどい顔をしているのだろうか。

「ちょっと休ませて」

倒れるようにソファに横になつた。衝撃で僅かに体が沈む。

秀和は慌てるわりには行動が素早く、すぐに透明なグラスが近くにあつた。

「み、水つ、水ですよ。飲めますか？」
「わりい…」

上体をゆっくり起こしてそれを受けとる。冷たい水が喉を通り、熱くなつた体を冷やした。気持ちが少し落ち着く。

秀和にグラスを返して、再び俺はソファに沈んだ。頭がくらくらして、世界がまわつてゐみたいになつっていた。気持ち悪い。苦しい。意識して呼吸を落ち着かせる。

(まだ……大丈夫……大丈夫だ)

「あの……ぼく自販機でなにか買つてしまふか？スポーツドリンクの方が良いかも」

秀和の言葉に、右腕で目を覆いながら顔をしかめる。そんなのは変だ、と思う。

気を遣いすぎている。秀和は俺のパシリでもないし、もちろん使人でもない。そこまでする義理はないはずだ。

「いいから、ここにいろ」

「えつ？ええつ？」

秀和に焦りが加わった。言い方を間違えたな、と気づいた。でも体がダルくて訂正する気力がない。

「あ、寂しいんですね。大丈夫ですよ、ここにいますから」

(違う!)

予想通りの勘違いをして、秀和は俺の様子を窺いながら側から離れなかつた。

「……玲華と世羅は？」

「まだ女子の方は練習中ですよ。バレーより遅くから開始していますから

同じクラスの俺より、隣のクラスの秀和の方が詳しいのはなぜなんだろう。

玲華がラクロスで世羅がバスケだつたな、とまわらない頭で思い出した。ラクロスなんてルールも知らない。世羅はある長身だからバスケに向いていそうだ。

しかしたつた一時間程度、本気で動いてこれだ。体育のときいかにサボつていたのか認識させられる。

「冷やしたタオルお持ちしました」

やつぱり落ち着きなくパタパタと秀和が動いていた。

「あのさあ、氣い遣いすぎて疲れない？」

「いいじやないですか。気持ちいいんだから」

さらりと言つて勝手にタオルが額に乗せられた。ひんやりしてて、確かに気持ち良かつた。きっと性分なんだろうな。こいつの。

「サンキュー……」

「いいえ。神崎さまこそ氣を遣わずになんでも言つてください。できることはちゃんと断りますから」

思い出したように秀和は付け足した。できたやつだ。同じ年なのに、こんなにも心遣いで負けるとは。

(勝てたやつもないけど……)

少し自己嫌悪に陥りながらもしばらく休憩していると、一人が帰ってきた。

「ただいまー疲れたー。あ、ひとり死んでる」

「彼はまだ生きてると思つぞ、玲華」

「ひとり死にかけてるー」

「そうだな。それが正しい」

「もつと鍛えないと当日ヤバいんじゃないの?」

「一週間で鍛えさせればいい」

瑠華の人生経験が少しありでありますから、お手本が無い。

と死にそなが顏色してかゝててから
アシニハ、開つておまへ一氣二室四ド面つハ

第一回 気に室内万葉や方へた
ハシマリノミノリ。 因幡バ頃ハ
ひのくわ

田舎の火事は、月に一回、必ず起る。

原作の文庫化

陰口が嫌なのは以前聞いた。だけでもうの前ではつきり言われると、応える義務がでてくるような気になる。でも体がそのテンションについていかない。

「あれ？ マジな感じ？」

玲華のトーンが下がつて心配そうな声色が混じつた。それを聞いて、やつと、俺はぐつと腹に力を入れて起き上がる。意地が八割。心配させたくない気持ちはたつたの一割だった。残りは多少体力が戻つて可能だつたから。

「いぬせえぬ…。」れぐらごでくたばるか

寝ていいわよ。最初の方だけ見てたけど、ちゃんと頑張ってたからね

意外にも優しい言葉をかけられて、思わずぎょつとなつた。
いろんな人に優しくされてる気がする。

(なんて？)

「ほらほら寝た寝た」
わからぬ。俺は優しくないから。優しくされる意味がわからぬ。そんな価値ないのに。

「ほらほら寝た寝た」

玲華が強引に、俺にボディブローを仕掛けってきた。無様なつめき声を漏らして俺はまたソファに倒れた。

「あっ！玲華さまがごどめを刺した！」

慌てる秀和。

「あっぱれだな」

冷静な世羅。

そして俺はもうしばらへソファにしおくまつてないといけなかつた。殺す氣か。

* * *

耐性とか、慣れ、というものは実際すごい。一週間も経つと俺は一時間フルに動いても、とりあえず倒れ込むほどバテることはなくなつた。

これは身体の機能だけの話じゃない。心でも言えることだ。その感じは昔から体感していることではあった。

例えば過換気症候群、過呼吸だつてそうだ。最初はパニックに陥つて、本当に死ぬんだと思った。だけど今では予感がするときがある。あ、来るつて。そして対処法も知識としてある。いつまでも最初ではない。

ペース配分だつてわかるようになつてくる。そんなんでセーブしてたら結局同じじゃないの！つて辛辣に玲華は言い放つてたけど。（優勝、させればそれでいいんだろ？）

それぐらいには強気に思えるようななつてきた。それがただの強がりなのが悔しい。

まだテニスがしんどいから。バレーは他に5人がカバーしてくれる。でもテニスは俺が全部走らないとボールを逃すんだ。

「その考えがすでに甘いのよー。バレーでも全部自分が決めてやるとか言えないの？」

「じゃあおまえもラクロスで独壇場みたいにファインプレーラーしてん

のかよ」

「否定はしないわね」

「それはスバラシイことで。他のやつらは玲華さまのオカゲでって感謝すんのか？それとも妬ましくて悔しそうで泣くのかよ？」

「だからそういう気持ちが大事つて言つてるのよ。そういうことは言つてないでしょ」

「どう違うんだよ」

「あなたはまず団体競技がなんたるかを学ぶのが先ね」

「はあ？ だつたら卓球やらせろよ」

「まだ言つてんの？ ホンと意外としつこいわね」

玲華の言いたいことも多少はわかる。だけど言い方がムカつく。そう指摘したら、國星だからムカつくだけでしょ、って返されてしまつて、もうなにも言えなかつた。いつだつて男は女に口では勝てない。別に勝負している気はないのに、氣づいたら玲華とはこんなことばかり言い合つていた。

それでも、嫌でも練習時間はやつてくる。

違うな。嫌じゃない。

だんだんまんざりでもなくなつてきてたんだ。しんどいし余計な

プレッシャー そのほとんどが玲華によるものだ

けど、体を動かす爽快感やら充足感も確かにあつた。

「あれ？」

そんなある朝、学校に着くと俺の下駄箱に変化があつた。ちなみにあれ？ つて先に反応したのは拓真だつた。一瞬立ち尽くした俺の小さな異変に気づいて覗き込んできたのだ。拓真とはよく登校の時間帯が一緒になる。

俺はどういう表情をしていいかわからず、片眉を上げて拓真を見た。

「なんか古典的だね」

他人事である拓真は気楽に笑つてゐる。俺は視線を戻した。

そこには、上履き……は無くなつてなかつたし、画ビヨウとかも

別になかったけど、それとは逆の……つまり。

「ボク、ラブレターって初めて見た」

そう一通の真っ白い封筒が入っていたのだ。俺だつて初めてだ。

「待てよ、まだソレと決まつたわけじゃねえだろ」

言つてさつさとソレを取つて靴を履き替える。そのまま教室に向かうと、置いてきぼりをくつた拓真が慌てて着いてきた。

「開けないの？」

「おまえの前では開けない」

好奇心丸出しの拓真を睨んで俺はズボンのポケットにソレを押し込んだ。

「いけずうー」

某、マルチヤンかおまえは。

* * *

今日の練習のあと、第一体育館のうらで待つてます。

あとからこつそり一人で確認すると、それだけ書いてあった。差

出入不明。

ソレの正体は拓真の言つ通りだつたようだ。

* * *

この日の練習はテニスだつた。

玲華が昨日からさまざまな練習風景を見てまわつてゐる。最終決定をするためだ。それに合わせて空いてるやつらが一緒に連なつてきていた。部活もないから暇なんだろう。

だからといってギャラリーが多いことは問題だ。やりにくくてかなわない。

(集中するんだ)

余計なことを考えたら駄目だ。体よりも神経が疲れる。周りが見

えなくなるほど集中すればなにも問題ないはずだ。

クラスメートの新城^{しんじょう}が相手だった。新城は喜多川と同じようこ一種類しか選ばれてないことに不満を抱えている。

(イヤだなあ…)

すごく苦手な精神を持つている人種だ。体育会系の熱い根性とか努力とかいうやつ。新城は返してくるボールを左右上下に振つて搖さぶりをかけてくる。ただのラリーで試合でもないのに、玲華に良いところを見せようと必死だつた。

(…んのっ！-ジャマくせえ！)

俺といえば返すだけで精一杯で、落とす場所を狙つている余裕がない。

とくにバックに来ると辛い。フォームの基礎がなつてないから油断するとあらゆる方向に飛んでいくのだ。

「…っ！」

フォームを意識していると力が自然と抜けていて、ボールの重さでラケットが落ちた。右手首が痺れていった。

新城から得意げな表情が返つてくる。素人相手になんてやつだ、と思う。でもそんな感情もなんか悔しくて俺はラケットを持ち直した。

(なんでこんなにガンバってんだ、俺は…)

ふと我にかえる。

玲華が見てるなら、とくに。わざとできないところを見せて考え直されれば良い。それで楽になる、はずだ。

(期待されると苦しい)

迫つてくる圧迫感。喉が締め付けられるよひになる感覚。

(ヤバい…)

こめかみから流れる汗は冷たく感じた。これ以上はダメだ。そう告げる気管。

それでもここに居続けるのはなぜだ。

脚が動かないから？期待に応えるため？

(期待に応えたい？)

それもあるかもしれない。そもそもそれを含めて前へ進むためだ。

前へ行け。立ち止まるな。

俺はボールを持ち直した。次は俺のサーブだ。高々と上げたボールを、しつかり見て振り下ろす。

(え？)

振り下ろしたつもりだった。

だけどボールは重力に逆らわずなんの抵抗もないまま下に落ちた。腕が上がらなかつたんだ。

周囲が少しだけざわついていた。

* * *

身体が言つことを聞かなくなつて、俺はそこで練習を切り上げた。新城とか他にも練習していたクラスメートが不満を漏らしていくけど、関係ないみたいにその場を後にした。

玲華はなにも言つてこなかつた。珍しいな、とか思いながらシャワーを浴びた。スポーツクラブじゃないのにシャワーがあるなんて、と思う。

これで初めてこの学院の恩恵を受けた氣がする。他にもトレーニングマシンとかあるのだ。普通の高校にはない。

制服を着直すと、ポケットから封筒が出ていた。朝から入れっぱなしにしていたことを思い出す。

正直行きたくない。気分が最悪で、いまは誰にも優しくできない。そう思うから。

だけど拓真とか秀和あたりの人種なら、自分に余裕がなくても優しいのではないかと思う。

(こんな考えがエゴだな)

とりあえず行ってみることにした。もしかするとただ、からかわれているだけかもしれない。なんにしても、はつきりしないとスッ

キリしない。

だけど体育館の裏には誰もいなかつた。

からかわれていたの決定だな、と思つて踵を返した。

どこに行こうか一瞬迷つ。なんとなく玲華には会いたくない。

「あのつ」

そのとき前から女生徒が走ってきた。見たことある顔だと思った。クラスメートだ。話したこともないおとなしい生徒。名前が出てこない。

「ごめんなさい。予定より早く終わつたんですね」

「ああ、そうか…」

彼女の言葉で自分が早く来すぎたことに気がついた。といふことはコレは本物？

「コレ、あんたが？」

封筒をポケットから出して見せると彼女は顔を赤らめて俯いた。

「はい、ごめんなさい呼び出しなんて…」

消え入りそうな声だつた。肩が微妙に震えてる。

「ずっと、気になつてたんです……あの、神崎さまのこと。言葉は少し乱暴ですが、優しくて……最近、スポーツなさつてるときも、すごく格好良くて……ずっと、目で追つてしまふんです」

ものすごく驚いて、眼を瞠みはつた。彼女のまえで優しかったことなどないはずなのに。思い当たらぬ。

「優しくした覚えないけど？」

「わたし、わたし保健委員の資料をたくさん持つっていたとき……落としちやつたのを拾つてくれて。他の人もその優しさを見せてて、それでやつぱり怖いだけの人じゃないんだなつて……」

保健委員という単語で思い出した。彼女は櫻井さくらいだ。櫻井あやな。でもそれはたまたまその場に俺しかいなかつたからで、別に優しさじゃない。

途切れながらもしつかり櫻井は続けた。

「あ、あの……好き……です。付き合つてください」

こんなにはつきり他人に想いを伝えることのできる彼女は尊敬できた。すごく勇気がいったことだな。だけど……。

「悪いけど……」

いまは田の前の壁にどう対処するかで頭が支配されている。決して優しくない、厳しく重い壁。

彼女に敬意を感じたから、少しでもちゃんと向き合いたくて、俺は真実を伝えた。

「気持ちちは嬉しいけど、いま付き合いつとか、そんな余裕ないから」

「西龍院さまのことがお好きなんですか？」

悲しげな表情を見せながらも言った櫻井の言葉に、俺は呆気にとられた。

「いま、なんて言った？」

「あ？」

「だ、だつて、神崎さま仲良く話されていたし。最近よく一緒にいるし」

つい、すぐんと聞き返したら櫻井はびくびくしながら答えた。玲華と皆のまえで話すことは確かに増えたけど、それは球技大会のことがほとんどだ。ただそれだけ。

「恐ろしい誤解」

「でも西龍院さまのまえではすぐ伸び伸びされてて」

「んなわけないだろ！」

ダメだ、これ以上話すと玲華の本性をばらしてしまこやうになる。じゃあな、と断つて俺はその場を立ち去るうとした。

「ま、待つてください！ だつたら、お試し期間でも良いから、あの……もう少しチャンスが欲しくて……！」

意外と櫻井は押しが強かつた。でもその田は固くつぶられていって、いまにも泣き出しそうだった。

なんでもいいから傍に置いてほしい……そう言われた気がした。

「やめとけよ、そんなん……。空しくなるだけだろ」

やめろよ。俺なんかにそんな必死に夢を見るな。俺は応えられな

い。だから、期待するな。

拒絕が伝わったのか、なにも言わずに櫻井は来た道を走つて去つて行つた。残されたのは罪悪感。

俺は長いため息を吐いた。

そのときふと田の端で何かが動いた。見覚えのある背中が一瞬見えて、すぐ大木に隠れた。

嫌な予感を感じながらそちらに向かつ。

「なんているんだよ？」

裏庭の脇にある大きな木の陰にそいつらはいた。

……そいつら？

俺は拓真だけの姿を想像してたのに、その先にはなんと玲華と世羅もいたのだ。

「う」、「ごめん。でも君が隠すからいけないんだよ？」

「可愛い子ですね。泣いてらしたわよ、おかわりそういう」「ばれたな」

三種三様の反応を見せながらそいつらは俺の前に現れた。

とりあえず俺の標的は拓真に絞る。拓真は今朝一緒に封筒を見ている。明らかに原因はこいつだ。

「てめえ拓真！だからって、なんでこいつらまでいるんだよ！」

「そこで一緒になつたんだよ」

「いいじゃありませんか。滅多に見られるものではありませんわ」

「あのなあ！見せ物じやねえんだよ！」

「断るとは意外だったな」

ポツリと世羅が呟く。するとつかの間静まりかえつて、それを拓真が破つた。

「お試し期間ぐらこなら付き合つてあげたら良かつたんじやない？まだ櫻井さまの良さを知つてないでしょう？」

「おまえなら付き合うのかよ？アホらしい幻想に」

「そういう言い方ないんじゃない？」

なぜか俺の言葉に拓真はムツとしていた。怒る権利はこいつにあ

ると思つんだけど？

「もういい。帰るわ、じゃーな」

疲れきつてそう締めぐくると、俺は鞄を取りに校舎に足を向けた。
また逃げてるよー、っていう田で玲華が見ていた。

心労の原因とか心配事とかって、なんでこんなに立て続けに起ころんんだろう。

今日は一日中激しい雨が降つていて、グラウンドが使えない。体育馆を予約していたところだけの練習だ。バレーはもともと無かつたし、俺は久しぶりに暇を持て余していた。

暇だと困る。いろんな想いがよぎつて困る。

だけど、体を休めることができるから、それはそれで良い。好都合だ。正直今日もテニスをすると、完全に肩がやられる不安があった。

(やつぱりフォームが悪いんだろうなー)

そんなことも考えながら、相変わらず教室で時間を潰していた。

iPodで音楽を聞く。

吹き飛ばせ！闘え！

立ち止まるな！叫べ！

パンク系でそんなシャウトがバックに聴こえる。主旋律では“辛くなつたら逃げちまえ”とか歌つていた。

どつちだよ、と突つ込みたい。昨日興味本位で入れた曲だった。はやまつたな。

そんなことを考えていると、ガラツと教室の扉が開かれた。玲華か？と思つたけど違つた。世羅だつた。

「神崎、ちょっといいか？」

意外な人物に少しだけ身構える。世羅とはあまり会話らしい会話をしていない。玲華とよく話しているのは聞いているが、俺と玲華が話しているときは、きまつて黙つていたから。

初めて部室に行った日以来かもしれない。俺は嫌われているんだ

ろうな。

「珍しいな、世羅一人か？」

「おまえの無礼には慣れたと思ったがな……」

ため息と同時に世羅は声を吐き出した。俺はわずかに眉をしかめる。

(ああ…)

そしてワンテンポ遅れて世羅の言いたいことがわかった。

「呼び捨てムカつく？」

「玲華は気にしてないようだから、それに私がとやかく言つつもりはないが……私には馴れ馴れしく接せられる理由がない」

「つていうか……玲華の場合は名字が呼びにくいか。世羅……あんたは名前の方がインパクトが強くて、つい」

「あんたと呼ぶ方が礼儀だと思っているのも、激しく勘違いだな」

世羅とは相性が合わない。口を開くと結局こんな言い合いだ。玲華とも喧嘩っぽくなってしまっけど、はつきり言つてくれるだけいい。分かりやすいのだ。

だが世羅は真意が読めなくて先に進まない。

「おまえ、つて言つのはどうなんだよ?……つーか、じゃなくて、何の用?」

イヤホンを外しながら訊くと、睨むように見据えてきた。

「事件のことだ。なにか思い出したか?」

そのことか、と俺はため息をつきそうになつたけど呑み込んだ。

玲華が先に哀しみの表情を見せたけど、世羅はいつも淡々としていて、だから気にしてないと思っていた。そんなこと一ミリも思つべきではなかつたのだ、と気づく。いつだって俺は気づくのが遅い。この話は変わらず目の前が暗くなる。当たり前だった。人がひとり死んでいるのだから。

「いや、まあ玲華に言つた情報ぐらいで……思い出したことなどなにも

…

「玲華に言つた情報?」

聞いてないのか？と俺は愕然とした。真っ先に報告しているものだと思っていた。言わなかつた理由でもあるのだろうか。……と言えなかつた？

「なんのことだ？」

「……玲華に聞けよ」

「言え。あの人は浅霧家のの人だ」

「最初に見切りをつけたのはおまえだろ？俺は玲華に頼まれたんだよ！」

みつともなく俺はうろたえながら立ち上がつた。ガタツと木の椅子が鳴つた。

玲華の狙いがわからない内は言わない方がいいのだらう。

（違う。ただ俺が二度も言いたくなかっただけだ）

「わかつた、玲華に聞こつ。しかし大きな口を叩いても結局なんの役にもたつてないな。あれから何日が過ぎたと思つ？球技大会が終われば1ヶ月だ」

「仕方ないだろ？実際見たことが少ないんだから！」

「それだけとは思えないな。おまえにとつては暗い記憶だ。すべて忘れて日常に戻りたくなる気持ちもわからんでもない。だが私にとつては……」

一田世羅は言葉を切つた。田に深い怒りがよぎつてゐる。

「……私にとつては唯一無一の存在だつたんだ」

憎悪と悲哀。それは時間が経つても薄れることはなく、それよりも深く刻まれてゐるようだつた。

あまりに深い負の感情に触れて俺は息を呑んだ。

「どうせ玲華に認められて、女にちやほやされて、さぞや嬉しい毎日だつたんだろうな」

「てめえ！」

俺はカツとなつた。我を忘れて世羅の腕を掴み、力ずくで窓際に押しつける。

いくら許せないことがあつたつて、悲しかつたとしても……そこま

で言われるいわれはないはずだ。心外だ。なにも知らないくせに！「人の気も知らねえで、勝手なことばっか言ってんなよ！全部一気にできねえってんのはわかつてんだよ、だからひとつずつやってんだろう！」

怒りにまかせて叫んだけど、だから待つてくれとだけは言えなかつた。警告が鳴つたから、そんなことは言つべきでないと。待てるはずないよな。一日だって一秒だって早く、犯人を取つ捕まえてやりたいんだろ？ それはわかるから。

「は、離せ……」

俺のわざかに下の方から弱い声が聴こえた。世羅が震えていた。先ほどまでの強気な彼女はそこにはいなかつた。

(トライアーサー)

こんなときになつてやつと俺は玲華の言葉を思い出した。はつとなつて腕を離す。

「あ……悪い……」

綾小路がしたこととはまったく意味は違う。だけど男が力任せに女の動きを封じるということでは同じだつた。

最低だ。勝ち氣でも女だ。長身と言わっていても俺より低い。

「悪い、俺……」

言葉を封じるように俺の頬をばしつと平手で殴つた。睨む目に涙が滲む。

それを見るとなにも言えなくなつた。どうせ謝罪の次に出でくる言葉は、言い訳とか戯れ言いたずらごととかなんだ。言えなくていい。苦しい。息苦しさを感じる。

「やはり……おまえはキライだ」

ぼそりと言い残して世羅は教室から出ていった。しばらく頬の痛みは消えなかつた。

忘れていたわけじゃない。事件のこと。今でもあの場所には行けない。

(もう、どうして良いかわからないんだ)

苦しい想いをしてあの場所に行つて、本当に思い出せるのかわからない。思い出せたとして、犯人検挙に繋がる事実があるかも不明だ。

(俺が狙われたら早いのに)

おとり、という言葉が浮かんだ。でも犯人は俺の存在に気づいてないと思う。そもそも探偵に護衛してもらう必要なんてないのだ。

(探偵、か…)

久保田と話がしたいな。

そう思つて俺は教室を出た。

いまもどこから見ているはずだ。気づいたらいつの間にか、感じていた視線が慣れたせいか感じなくなつていて、けど…たぶん。スコール並みに振る大雨で、今日も気配がかき消されていて自信がないけど、きっといる。

俺から連絡するすべがないことに、今更気づくのもどうかと思つけど。

俺は学校の外に出ると、人気のない場所を選んで声を張り上げた。「いるんだろ？ 出てこいよ！」

しばらく辺りを見回したがなんの変化もない。聴こえるのは雨の音のみ。いなかつたらどうしよう。恥ずかしい。

「話があるんだけど！」

焦りながら雨に負けないように再び叫ぶ。しーん。

どうしよう、もう一度叫ぶ勇気がない。心が折れる。

もしかしたら、あまりに何にもないから……もうやめてたりして。

(事件解決までつて言つてたよな… 確か)

期限のことを思い出す。無視されてるのか、本当にいないのか、確かめるにはどうしたらいいんだろう。

(俺の命が危なくなれば?)

どうしようもなくアホな考えをしてる、つてことはわかってる。だけど俺の頭には、もうそれしか残されていなかつた。一度思いついた思考はなかなか離れてはくれない。

そのまま、ふらふらと大通りに出る。歩道側は赤信号。通行を許された車が横をなんの躊躇もなく走りすぎる。

やつてはいけないとをする気持ちになる。すいべじわどきしている。鼓動がうるさい。

いない可能性もあるのになにをしてるんだ俺は。 そつ思いながらも足が動いていた。

「なにやってんだ！」

すごい焦ったような長いクラクションと、激しい怒声が耳に届いた。

それから支えていた足が宙に浮いて、後ろに体重が傾いた。次に右肩に感じた衝撃と冷たい雨のシャワー。

なんだいるじゃん。

後ろで俺の体を支えながら、一緒に倒れ込んだ男の顔も見ずに俺はそう思った。

やつぱりいるんじゃん。

「おまえアホか！ なにを考えてんだ！」

体勢を整えながら後ろを見ると、つかの間雨に触れただけなのに、すでにびしょ濡れの久保田がいた。あ、眼鏡も飛んでる。

「なに笑ってんだよ」

呆れた口調で久保田がそう言つて、初めて自分の顔が緩んでいることに気づいた。先に横に落ちた傘を掴んで、眼鏡と傘を拾つている久保田の上に掲げた。

周囲がざわついてこちらを見ていたが、信号が青になると、もう意識はこちらを離れていて、散り散りに去つていった。

それでいい。 それ前を行けば良い。

「呼び掛けても来ねえんだもん」

すつゝと立ち上がる久保田を待つて、俺は言つた。

「だからといつてこんなことするなよ

「仕方ねえだろ？ なんの連絡先も教えないから…… なんで一回田で

出でこないんだよ

「教えてよ」としたけど逃げただろうがー最初にー」「あ、そうだった。今更思い出した。

久保田は、呼ばれてホイホイ出てきたら護衛にならねえんだよ、と言つて眼鏡をかけずにジーンズのポケットに押し込んだ。

「悪い、壊れた？」

「いや、いい。ただの変装用だから」

なんのための変装なのかわからない。だけど確かに眼鏡を外した久保田は印象が違つていた。五歳くらい若返つた。俺がまじまじと久保田を見ていると、やつは苦笑しながら言つた。

「来いよ。話あんだろ？」

なんか印象とか喋り方とか一致しない男だけど、今が本当のこいつなんじゃないかと漠然と思つた。

* * *

近くに車を停めてるつていうことで、俺をコンパクトカーに載せて久保田は移動した。

濡れた服で乗るのは一瞬ためらわれたけど、そんな俺を見て気にするな、と久保田は言つた。確かに車内はお世辞にも綺麗とは言えなかつたから、気にせず乗り込んだ。

それからどこに行くのか聞いたら、事務所だ、と答えた。

「濡れたまま帰せないだろ」

「女にもそう言って口説くの？」

俺がそんなことを返したら、久保田はすぐ嫌な顔をした。「生意気なこと言つてんじゃない」

「照れtenの？」

「うるさい。少しモテてそつち方面が開花したのか?」

「なんで知つてんだよ」

不機嫌丸出しで答えてから、ふと新しい可能性に気づいた。

「まさか発信器だけじゃなく、盗聴器までつけてんのか?」

「どこにそんなん仕掛ける余裕があつたんだよ」

俺の突飛な考えがよほど可笑しかつたのか、久保田は肩を揺らすほど笑いやがつた。運転に集中しろよ。おい。

「で？初めて告白された感想は？」

「別に初めてじゃねえし」

「やっぱ生意氣ー」

「……って、こんなくだらない話をしたかつたんじゃなくて」

まずい、久保田のペースに巻き込まれてる。そう気づいて話を戻そうとするが、久保田はまっすぐ前を見たまま言つた。

「それは事務所についてからな」

仕事バージョンに戻つたみたいに、真剣な眼だつた。

* * *

事務所は特に特徴もない小さなビルにあつた。

テレビや漫画みたいに、なんとか探偵事務所つて窓に書いてあるのかと思つてた俺は、肩透かしをくらつた気分だつた。

でもエレベーターで3階に上がると、扉には久保田探偵事務所と書いてあつた。楷書字体で堅苦しいイメージだ。知らないで来たら氣後れしそう。

中に入ると応接間と事務机が2つ同じ空間にあつた。

「お帰りなさい先生。あら、大変！濡れネズミ」

事務机のひとつから女性が立ち上がり俺たちを見ると驚いていた。スーツを着こなし髪を後ろにまとめた二十五歳くらいの女性だつた。美人というより可愛い系に分類されると思う。

「祥子君。オレはいいから、こいつにタオル出してやつて」

そう言うと久保田は奥の扉に消えて行つた。置いてきぼりかよ？

「大丈夫ですよ。先生も着替えたらすぐ戻ると思いますから」

よほど俺が情けない顔をしていたのか、祥子と呼ばれた女性は一言フォローを入れると、反対側の扉に入つてタオルを持つてすぐ出

てきた。

「どーも、と言つてそれを受けとる。

「あ、ソファに座つててください」

そう言つて彼女は、今度は温かいお茶を持ってくれた。濡れたままで座つて良いのかな、とまた少し躊躇う。

「温まりますよ」

しかし彼女はなんの氣にもしてなきをつゝて微笑んだ。
ぎこちなく座りながら俺は訊いた。

「えーと……ここの人？」

「あ、申し遅れました。わたし先生……久保田修次の助手で坂上祥子と言います」

名乗りながら自分も座り、彼女は名刺を差し出した。シンプルな活字で確かに助手と書いてある。具体的に助手ってなにをするんだろう？

「あなたが今回、護衛の対象の神崎悠汰くんですね」

「ああ、そう……」

そういうえば俺も名乗つてなかつた。つていうか、久保田が紹介し合つものじゃないのか？こういつとき。

「久保田…さんって何者？」

「先生ですか？探偵ですよ」

「それは知つてる。じゃなくて…えーと…」

なんと聞いていいか漠然としそぎて自分でもわからない。頭がまとまらないまま口が勝手に動いた。

「あの人何歳？」

「二十八歳にこの間なられました」

「いつから探偵やつてんの？」

「さあ…わたしが入つたときは三年前ですけど、それまではわかりません」

坂上祥子は人差し指を口元に当てて、斜め上方を見ながら答えた。

違ひ。本当に聞きたいことは違う気がする。

「じゃなくてさー、なんか秘密とかありそりゃん? そりこいつの知らない?」

やつぱり俺の質問は漠然としている。祥子さんも困ったように笑つていた。

「『ア、なんの陰謀を画策してやがる?』

気づくと後ろに久保田が腕を組んで睨みながら立っていた。スリーブに着替えていて、髪もいつもみたいにボサボサじゃないくて、きちんと束ねられていた。眼鏡も続けてしない方針らしい。

普段のだらしなさがない。それどころか綺麗な造形で美形だ。違います。どこからどう見ても好青年だった。喋らなければ。

「詐欺すぎる…」

ついそう呟いたけど、詐欺だとふつー逆になるな、とちよつとどうでも良いことを考えた。

「つるせえな。なんとも言え、着替えがこれしかなかつたんだ」すっと俺の前に移動すると、当たり前のようになに祥子さんが立ち上がり、変わりに久保田が一人掛けのそのソファに座つた。態度悪く脚を組んで、腕を背もたれの後ろにやつしている。態度悪いのは俺も同じだから言わなかつたけど。

「で? あんな無茶苦茶なことをしてまでしたい話つてなんだ?」

ああ、そうだった。

俺は教室での出来事を思い出した。やりきれない想いが蘇生する。「その……捜査とかしないんだよな、今回の事件」

「ああ。前に言つた通りだ」

前回…それどころじゃないと言つてた。それどころじゃないって何が?俺の護衛があるから?

「でもさ、事件解決しないといつまでも俺から離れられないんだろ? いいのかよ? それで」

久保田はなんかため息を吐いていた。呆れられたような態度だった。

「なにが言いたい？」

「だから普段捜査とかもするんだろ？ だつたら早く解決してやー」

「つたく、わかつてねえな」

言葉の裏にだからおまえはガキなんだ、といつ意味が含まれてる気がした。

今日のこいつはムカつく。

「時間給だからボディーガードしてる時間が長ければ長いほど、こちにとつては良いんだ」

「力ネの話かよ！」

うげつて顔をしたら久保田は憮然とした。

「あたりまえだ。仕事だからな。ついでに捜査つてのは警察がやることで、オレがするとしたら調査だ」

「じゃあ調査したいとか、疼いたりするもんじやねえの？」

「いいが、いくらおまえが金の話に嫌悪感を抱いても、オレは稼がなきやならんし祥子君に給料も渡さないといけない。勝手なことをして、オレが例えば死んだとしたら、祥子君は路頭に迷うことになる」

すこく現実的な話をされた。そんなことわかつてゐ、つて返しかつたけどなぜか言えなかつた。

ビビつてたんだと思う。死ぬとか簡単に言つし、大人の責任とかそんな話も俺には重い。だけど諦めるわけにはいかなかつた。藁をもつかむ想いつてこいつうことなんだ。

「だったら、俺が依頼したら調査してくれんだ?」

「おまえ…あの家の娘になにか言われたのか?」

見透かすように久保田が切り返してきた。図星だった。

「やつぱり盗聴器か?」

「バカだな。調べた資料とおまえの行動みたらイヤでも分かるんだ

よ」

車の中みたいにもう笑つたりしなかつたけど、変わりに馬鹿にしたような表情をされた。

ムカつく気持ちを抑えて、ざつこいことだよ、と訊いた。調べてることもあるのか？

「護るための最低限の情報はつかんでんだよ。それと前回のおまえの行動な。十日以上もたつてわざわざ現場に行つただろう？あんな想いをしてまで。浅霧世羅、それからその切つても切れない関係の西龍院玲華と接触してたからな、なんかハッパかけられたと読んだんだ」

まったくもつてその通り！と示したいくらいの内容だった。

なんか悔しかつた。推理力は確からしい…………悔しいけど。発破をかけられたかどうかはまた別だけど。

「今回はなにを言われたんだ？」

「別に……唯一無二の存在だつたとは言われたけど、それで動いたわけじゃない。俺だつてすつきりしたいんだ」

「それでオレを利用して情報を聞き出そうとしたわけか」

勘も鋭い。

「浅暮だな。オレが喋るとでも思つたか？」

「思つたよ！まえのあんたは優しかつたのに、なんで今日はムカつくことしか言わねえんだよ！」

相変わらず馬鹿にされてとうとう俺はぶちギレた。

たまらず立ち上がりつてタオルを久保田に投げつける。でも柔らかいタオルはたいした衝撃を与えてくれず、パラリと落ちた。

「ちくしょう！俺だつて、期待されれば応えたいつて：人並みには思つんだ！悪いかよ……人並みには……」

離れていく。周りは幻滅して離れていくんだ。俺から。

「落ち着け。過呼吸になるぞ」

静かな声で久保田は言った。静かで穏やかだつたけど、その顔は眉が寄せられて険しかつた。

そんなこともう遅いんだよ。胸が鷺掴みにされたように苦しい。息苦しい。

でももう遅い。

呼吸を意識するより感情をぶつけることを優先してしまった。

「余裕、かましやがつて！いいよな……大人は、余裕があつて。どうせ、俺はガキだよつ。なんとかしたいって、思つても、結局つ他人を頼つて……つ。自分を、おどりにしようど、思つても……やり方が分からなくてつ、情報足りないし」

「おい、もうしゃべんな！」

久保田も立ち上がりつて俺の両腕を掴んだ。だけど止まらない。いまさら止められるかよ。

「母親なんかに、頼まれたおまえに、頼りたくないのに……でも、結局おまえがつ最後の望みで……そんなんも、俺はすぐえいやなのにつ……なんでもする、から……頼む……よ」

ギリギリまで、叫べなくとも声を出して、そして最後には懇願していた。

(けつきょく、じついうオチかよ)

みつともねえ。自分の身体も制御出来ないで、なにをやつてるんだ俺は？

気づいたら、ソファに横になつていた。

そのまま倒れ込んだみたいだつた。それを久保田が支えた感触があつた。衝撃がなかつたからたぶんそうだ。
息が吸えない。

「先生これを……」

「でもこれは……」

「これで治まるならいいと思います」

朦朧とする意識の中で、2人の会話が聞こえた。内容まで考える余裕はなかつた。気づいたら目の前に茶色い紙袋があつた。

「大丈夫だから、ゆっくり呼吸しろ」

久保田が背中をさすつたり胸の辺りを圧迫していた。

そして声に出して呼吸を誘導する。その通りに出来るのか出来ないのかさえ分からぬ。なかなか息が続かなかつた。

さつさと氣を失えれば楽なのに。さつさとくたばつちまえれば……

……。

なんとか治まつても動けないでいた俺の背中を、久保田はしづら
くさすり続けた。そしてポツリと言葉を落とした。

「馬鹿になんてしないよ、おまえのことはちゃんと護衛しながら見
てたから。頑張つてんの見てたから、そんなやつを馬鹿にはし
ない。……だから、おとりになるとか言つなよ。オレが護つてる意
味がないだろ?」

それを聞きながら、背中に伝わる温かさを感じながら、ひとつだけわかつたことがあった。

久保田は俺が過呼吸になつたときは優しくなるんだ。
ちくしょう。足下見やがつて。惨めな気分になる。
やつぱり俺は素直になれないガキなんだ。

* * *

俺が落ち着くのを待つて久保田は車で送つた。まるで当たり前み
たいに。

車内では無言だった。久保田がなにを考えているかはわからなか
つたけど、俺は喋る気力がなかつた。
行きのときの、バカみたいななんでもない会話も、前回の優しか
つた久保田に感謝した俺も、いまでは遠い昔のようだつた。

「彼女が」

そのなかで一度だけ久保田が口を開いた。

「祥子が過呼吸になつたんだ。オレの事務所には新卒で彼女は入つ
てきたんだけど、そのころオレは厳しくて他人を顧みないやり方を
していた」

少し意外な気がしたけど、黙つて俺は聞くだけだった。なんのつ
もりで話しているのかわからない。

「初めて目の前で過呼吸になつた人を見たから、かなり驚いた。
驚いてみつともなく慌てた。……それからいろいろ症状のことを調

べて、精神的なものと知ったときは愕然としたよ。オレのせいだつたんだ。彼女に対して優しくしなかつたことを後悔した」

聞いているうちに、俺に言つてるんじやなくて、懺悔をしたかつたんじやないか、と思つよつになつていつた。

「それ以来、一度きりで祥子はなつてないけど、今でも怖い。オレのせいでまた苦しませるようなことになつたらどうしようつて、そればかりだ。だから……」

赤信号につかまつて、久保田がギアを引いて車が止まつた。久保田と田が合つ。

「余裕なんでないよ、オレも」

あ、ちゃんと俺に言つてたんだつて田を見て氣づいた。懺悔じやなかつた。

こんなにあつさつ怖いって年上の男に言われることは、全然許容範囲になくて、やっぱり俺は何も言えなかつた。

次の日も大雨まではいかなかつたけど、天気が崩れていた。霧雨とか小雨くらい。

でもグラウンドはとてもじやないが使用できる状態ではなかつた。今朝になつて、このままでいけば中止、最低でも延期になつてくれるんじや……とやつと気づいて、期待を込めて天気予報を見た。しかし週間天気予報で、明日からは晴れるでしょう！もう晴天でしばらく心配することはありません！とまで気象予報士は宣言しやがつた。

本番は明後日の金、土、日の三日間に迫つていた。振替休日が月曜と火曜にあつて、その辺の体育祭よりもタチが悪……力を入れている。

だから今日はテニスはなかつたが、バレーの練習は昼休みにやつた。食後の運動は健康面でどうかと思う。

また時間が空いてどうしようかと迷つていると、東の棟を一人で歩いている玲華を見かけた。ちょうど対角線上に。

正直今日は部室には行きたくなかった。世羅にどんな顔で会えれば良いかわからない。

だけどもし玲華が1人だつたら、ヤバいんじやないかと思つた。世羅がいなくても秀和がいる。その可能性の方が高い。でもいなかつたら？そんな時を狙つて、また綾小路が来るかもしれないのに。気づいたときには、東の棟に向かつっていた。そして躊躇いながらも扉を開くと、やっぱり玲華は1人でいた。

「なに必死になつてんの？」

なにも言つてないのに、俺の顔を見るなり玲華はそう言った。

（必死……？）

つい手で顔を触る。触りながらも別に、と答えた。

「秀和は？」

「バスケの練習」

来て良かつたかも知れない。そしてドキドキしながら次を訊いた。

「世羅、は？」

「……たぶん来ないんじゃない？」

なんでもなさそうに玲華は答えたけど、違和感を感じた。たぶん？

「ケンカでもした？」

「していない」

相変わらずパソコンに向かって玲華は呟く。でも明らかに様子がおかしかった。らしくない、ってやつだ。
もしかしたら俺のせいいか？とか考えていたら玲華が先に口を開いた。

「最近へんなのよ、あの子」

「最近？」

昨日からではないなら、俺のせいでこともないのか。しかし授業中の世羅はいつも通りに見えた。少なくとも俺には。「なんかずっと上の空で、でもあたしにはなにも言つてこない…こんなこと初めてよ」

わずかに玲華が涙ぐんだ。戸惑っているのがわかる。

「事件のこともなにも言つてくれないし」

事件という言葉にドクンと俺の鼓動が反応した。そして思い出すされるのはあの憎悪に満ちた日。

あれほどまでの憎しみをつかみどりのない犯人にできるだらうか。もしかしたら、世羅は…。

「なにか…知ってるのかも…」

「どういうこと？」

「なあ、俺が言つた情報なんで言わなかつたんだ？通り魔じゃない可能性の話」

玲華は一度じちらを見て、そして逸らした。言つべきかどうか迷いがあるみたいだった。

「まだ可能性の話だつたし……」

「じゃあ昨日なにか聞かれた?」

「昨日もここに来なかつたから。ねえ、それよりなんの話よ?」

玲華に不安な色が滲む。俺は戸惑いながらも昨日のことを包み隠さず話した。

軽蔑されるかもしない、という恐怖はあつたけど玲華には言つべきだと思った。

「だから今回の件が無差別な通り魔じゃなかつたら、梶さんに狙いを定めていたつてことになる。そしたら……」こんなこと言いたくなideon…一番関わり合いのあつた浅霧家の誰かが犯人かもしない玲華はなにも口を挟まなかつた。ただ悲しげに目を伏せている。

「だとしたら俺たちよりも世羅の方が事情を掘みやすい」

真犯人かどうかは別として、世羅の頭には特定の人物がいるのかかもしれない。なぜかそう思った。

「そうね」

玲華の頷き方は、まったく初めて聞いたそれではなく、どこか自分でも思いついていたみたいだつた。いくつかの可能性のひとつ。でも認めたくなかったような…。

だから言わなかつたのだろうか。

「なんで言つてくれないのかな? そんなに頼りないかな、あたし」「向こうも向こうで同じこと想つてそうだけど。心配させたくないとか…」

しばし沈黙が流れ玲華が深いため息を吐き出した。

「だつたら許せないわね」

「おい?」

意外な話の流れに俺の方が慌てる。玲華の目に輝きが生まれた。

「こうなつたら、あたしたちもあたしたちで犯人見つけましょ。世羅ばっかりわかつてるなんてズルい」

そして立ち上がつたかと思うと、両手をぎゅっと握りしめてきた。あまりの変わり身の早さに、わずかに反応が遅れる。

「なんの真似だ？」

「いいじゃないの。これから同志として頑張りましょう」

「やめ！」

俺はその手を振り払った。

「どうやって探すんだよ？ なんの手がかりもないのに」

俺をアテにされても困る。俺は探偵じゃないし、当の探偵には断られたし。

「そうねえ。なんとか世羅んちに行ければいいんだけど……あれから一家全体が頑なだしなあー」

ぶつぶつ玲華が呟きだした。やっぱりなんの考えもなかつたようだ。まったく女ってのは行動が読めない。

「だい？ 俺がおどりになることも考えたけど、やり方わからんねえし」「おどり……」「おどり……」

玲華がまじまじと俺を見つめる。イヤな予感がした。

そして、考えとくわと頷いた。なにをだ？ イヤな予感が増長する。

「とりあえず世羅んちね。いつ行こっか」「

「当たり前のようになんかに俺に説くな。ビートと行けよ」

「あんた行かない意味ないじやん」

「なんでだよ」

「犯人がもしいるならあんたを認識させるのよ。それでうまくいけばおどりになれんじやん」

悪魔あくまがいる。あいつと殺伐と言い放つ玲華は容赦がなかつた。

数歩後退る。

「なに逃げてんのよ」

ちらつと横目で玲華を見つめられて、俺は体裁を取り繕つた。逃げる、といつ言葉に敏感になりすぎてるのかもしね。みつともなかつたと思つて少し後悔した。

「だいたい俺は世羅に嫌われてるみたいだし、行かない方がいいだろ？」

「ああ、世羅は男がキライなのよ。あんただけじゃないわ

だから関係ないわ、と玲華が言った。なんだよそれ、と思つた。

なんのフォローにもなつてねえじゃねえか。

「トラウマって…やっぱそういうこと?」

聞いていいものか憚れたが、この流れで触れないのもわざとな感じとか違和感があつて、俺は思いきつて訊いた。

「うん。そう…」

玲華のトーンが落ちた。でも彼女も、いじりまできて言わないのは不自然とも思つたのか、教えてくれた。

「世羅の両親ね、世羅が小さい頃に離婚したの。もともと浅霧つてのは母方の姓で、すぐにお母様が再婚したから、いまのお父様は義理の父親なんだけど……」

ふと言葉を一旦きつて、玲華は窓際に寄つた。外を見ているふうで、実際にはどこも見ていないようだつた。過去を見ているんだ。「その人がまたヒドイ人でね、まだ子供だった世羅に虐待したのよ！性的な暴行も混じつてたみたい。世羅も隠してたから、近くにいたはずのあたしも…知つたのはかなり後になつてから。そんときはあたしは怒り狂つたわ！」

玲華の目に世羅に見たものと近いものが見えた気がした。いまだに、許してないのだとわかつた。

「でも世羅が……。もうその頃には、あの男も虐待とかしなくなつてたから…おおごとにしたくないつて…」

聞いてるうちに、俺は察していた。わかつてしまつて胸焼けがした。よく聞く、ありがちな話のはずなのに、実際に耳にするとただ嫌悪感があるだけだつた。

家庭があるだけ問題もあるんだ。いつでも犠牲になるのは子供なのか？ 力のない、逃げる術さえもたない子供。

「それで…トラウマ、か…」

「あ、でも、あんまり大げきことらえたダメだからね。意識したら迷惑だから」

さらりと自分のことのように玲華は言った。すいへシビアだと思

つた。

でもなんとなくわかる。俺だって同情されるのはまっぴらがめんだ。惨めになる。

「だから、もうイヤなの。全部終わってから知つて、後悔したりやるせなくなつたりするのは、もうイヤ」

「そうだな…」

「こいつはやっぱり強い。強くて迷いがない。

そう思うのと同時に、世羅が羨ましくもあつた。ここまで想つてくれる人間が身近にいる人は、どれくらいいるんだろう。

「さて」

いきなり玲華が腕を腰にあてて立たちになつた。声の調子が明らかにこれまでのと違う。百八十度変わつた変化に俺はすぐについていけなくて、しばし呆然とする。

「しゃべつたらノド渴いたわ。なんか飲もー」

そのまま、お茶の葉が置いてある棚に近づいて行つた。

玲華なりに区切りをつけたかったのかもしれない。自分も同情とかしないように。これまでの玲華を見ていると、そんな気がした。サバサバして見えるのは、いつこいつからきているのかもしれない。

「なんか飲むー？言ひとくけど、断つたら一度とあたしが入れたお茶飲めないわよ」

呼び掛けるよつこ声を張り上げて、玲華が棚から顔をひょっこり出した。

「なんで？」

「ビデがいるときはやうせてくれないんだよね。アイツ、なんか変な使命感持つってセーー」

「あー…」

俺は納得しながら棚の中を見た。相変わらず充実している。

「でも暑いしなー、いら…」

「な・に・の・むー？」

いらねえと、最後まで言わせてくれなかつた。俺に汗が滲んだが、暑いだけが理由ではなさそうだ。

「んな強制的に飲ませるもんじやないだり？普通…」

「じゃーどうやって飲ませるのよ！ふつーは…」

「違うだろ？飲ませるつてのがおかしいだろ？もつとコワシクスするためとかに飲むんだろ？お茶は」

「だつたらリラックスしなさいよ！ほら早く…」

「……だから、リラックスも強制されるもんじやなくて…」

なんだか疲れて、俺は片手を棚に預けて頃垂うなだれた。

「あんた氣い張りすぎなのよ、こいつ見ても」

何氣なく言われた言葉に顔を上げる。

「こっちが疲れるわ」

仕方ないわね、と言いたげに玲華は苦笑いをしていた。

俺は顔をしかめた。そんなふうに思われているとは、予想だにしなかつた。何か返さないと、と思つて口を開いたら全然別の言葉が出了た。

「じゃあ水

「なによ、あんたバカにしてんの？いーわよつ、杜仲茶煎いれあげるわよ」

「なんだよその意地は…」

とりあえず何かお茶を作りたかつたらしい。呆れる俺をしり目に玲華が手際よく粉末状の杜仲茶を入れていく。手際は確かに良いけれど。

「ばつーおまつ、入れすぎだろ？」

「なによー濃い方が美味しいに決まってるでしょ？」

「……ちなみに聞くけども、おまえ料理出来んの？」

「できるわよ！」

「……じゃあさ、料理したことあんの？」

「機会がないだけよーやればできるわよ、あんなもん！たしなみとしてー」

「…………」

たしなみとしてすることを、あんなもん呼ばわりかよ。なんか頭が痛くなってきた。

頭を抱える俺に、ポットのお湯が沸くのを待ちながら、何気なく玲華は言つ。

「体にも良いのよ」

俺の場合は体に問題があるわけじゃないから、あまり意味がないように思える。

「ダイエットにも良いらしいしねー杜仲茶」

「俺がダイエットしてどうすんだよ」

「あー、あんたヒョロヒョロだもんね。肉つけた方がいいわよ、筋肉」

俺の上から下まで見て言われてムカついた。以前、久保田にも同じように言われたことを思い出す。

「だから運動部入つて筋肉つければもつとよくなると思つたんだけどなー」

「……杉村に頼まれて勧誘してんのかと思つてた」「なんでよ?」

……俺が全体の輪を乱しているから。

しかしそう言うには、なんとなくヒガニッぽくて言いたくない。

「まあね、先生からまつたくそういう話がなかつたわけではないけど、運動部に勧誘したのはあたしの判断」

「なんで?」

空氣で察知したらしく玲華が続けると、逆に俺が聞き返していた。でもそれに答えるまえにポットが沸騰して、お湯を杜仲茶の粉がたくさん入つてる湯飲みに移す。

「ほら、出来たわよ!」

苦虫を噛み潰したような表情で、杜仲茶　　たぶん。味がどうなろうと、たぶん杜仲茶　　を一つトレーに乗せて、玲華がソファの間にあるテーブルに置いた。

入れ方の手順すら合つてゐるのか危ぶまれる。俺もお茶の入れ方なんて知らないけど。

(急須を使つてないけどいいのか?)

ソファに腰を落ち着かせて、意を決して湯飲みを取る。そしてちよつど口に含んだところで玲華が言つた。

「そういうや右肩ケガしたでしょ」

ぶはつと勢よくお茶がすべて吐き出された。吐き出したわけではない、吐き出されたんだ。

虚をつかれた指摘のせいか、あまりに濃すぎてお茶が喉を通ることを拒んだせいか、真相は俺にもわからない。

(全部だ全部!)

玲華といえばさつとソファから身を翻し綺麗に避けたので、被害は全部ソファにかかつた。

「やーだあ、ちょっと汚いー」

「不味い…」

「なにが不味いよー飲んでないじゃないー吹き出したじゃないー全部!」

「口の中に残つてんだよーついでんの一舌こー入れすぎだろ、あきらかに!」

「たくさん入れた方がいいっぱい効果があるに決まつてんでしょう! なんつー単純思考だ。おかしい…あんなに頭が良くて、成績も良いのに……どうしたらこうなるんだ?」

俺はまじまじと湯飲みの上から黒く濁つたお茶を覗いた。

「もう良いわよー飲まなくて!」

怒鳴つたかと思つたら、玲華がガシッと湯飲みを掴んで一気に飲み干した。

「お、おこ…」

止めようと右手を伸ばしたとき、ぶつと不吉な音がして、熱い液体が全部俺の顔にかかつた。

「あつ…つー!」

「なんか……殺氣を覚える味ね……」

「おい！ 黄昏てねえでつ！ ふく、拭くもんつ」

俺がぶんぶん頭を振つて滴を飛ばしていると、玲華がハンカチを出して拭いてきた。

「ちょ……いい！ 自分で……」

「らあつきいー」

ハンカチだけを貸して貰えれば、とひつたぐりうとしたら、玲華が目を爛々とさせて不敵に笑つた。我が耳を疑う。

（いま、ラッキーつったか？）

あきらかに俺がこんな状態になつたのは、目の前にいるこいつのせいだ。それをラッキー？ 当の加害者がラッキーだと？

「火傷したら大変ね！ 上着脱ぎなさいよ」

わざとらしく慌てた素振りを見せて玲華がのし掛かつてきた。

「はあ？」

突然のことにより、まつたく意味がわからない。驚きすぎて熱いのも忘れた。

「早く脱いで！ それとも脱がされたい？」

「バカかつ！ なに言つて……おまつ、やめる！」

「じつとしなさいよ！ んもう、男のくせにナニ恥ずかしいがつてんのよ」

「つーか、女のくせになにやつてんだよ！」

「イヤダイヤダ、男尊女卑ね」

「おまえな……」

俺が玲華を押し退けようと、力を込めたときだった。

「マイハ二ーご機嫌いかがー？ 僕は君に逢うと機嫌が100倍アップさー」

いつもの「ご」とく、綾小路が入ってきた。

戯言を言わないと扉を開けないのか、といつ感想を述べている場合ではなかつた。

そのとき。

玲華は俺のシャツのボタンを外し終わり、襟元を両手で鷲掴みにしていた。まつたく色気などない感じで。俺の手は玲華の腕に添えられている。

最悪のタイミング。綾小路の目が点になる。俺も玲華も一瞬フリーズした。そのままの状態で。

「な、なにをしているつ！」

綾小路が先にフリー^ズが溶けて俺たちを強引に剥がす。そして標的は俺に向けられた。綾小路の性格上、当然といえば当然と言えるが、納得いかない。

「貴様！玲華のまえでなんて真似を！」

胸ぐらを掴んでそのまま力任せに引きずり上げられた。いまにも殴りかかる勢いで。

「綾小路さま！」

それを思い留まらせたのは、玲華の制止の声だった。

一瞬の隙をついて掴まれている手を振りほどいた。シャツが伸びるだろうが。しかし綾小路の怒りは収まらない。

「言つんだ！玲華になにをしようとした！」

「は？あんたどこに目つけてんだよ、逆だろ逆」

「なんだ！その口の聞き方は！」

「もとからだよ」

「はつ、猫をかぶっていたわけか。だから庶民は嫌なんだ」

猫かぶりのところで、つい玲華を見ると、とても冷ややかな眼差しをしていた。怒ってる。だれに対してもか、その真意は読めないが、めちゃくちゃ怒っている。

「ハイハイ。先輩、練習はいいんデスカ？」

どうどうと、両手を広げて落ち着かせてみる。でもやつぱりとうか、綾小路は逆上した。あ一面倒くさい。

「適当に返すんじゃない！練習は兩で中止だ！貴様もだらづが！」

「あ、そうデシタ」

綾小路は意外と冷静だ。

「どうやつて追い出そうかなーと考える。綾小路より先に俺がここを離れることはあり得ない。なぜか、あり得なかつた。面倒くさいの。」

「おうーううだ、貴様も結局テニスにしたそうだな」「…………」

「覚えておくが良い。テニスで僕は誰にも負けない。つまり貴様はハッピーなはずの日曜日に、人生のドン底を味わうのやつ」

テニスでは誰にも負けないといいつつ、綾小路はテニス部ではない。「道部だ。俺がそこを突っ込もうとしたとき、あーはつはつと、悪人によくある高笑いをしながら、またもや血口完結して綾小路は去つて行つた。

(あん?)

俺の眉が歪む。ゆが

「あいつ自分から帰つて行つたよ……」

なんだ、考える必要なかつたじやん。

「結局、アイツもただの臆病モンなのよ」

腕を組んで容赦なく玲華が言い放つ。なんかだんだん綾小路が哀れに思えてきた。

「まあ良かつたわ。邪魔者はいなくなつたし……」

玲華が改めて、というように俺に詰め寄る。

ちよつと待て、眼が怒つたままだ。俺は後退る。しまつた、後ろはまだソファだつた。

「逃げんじゃないわよ…………いいから、右肩見せなさい」

「…………は?」

俺は綾小路が入つてきたときより固まつた。なんだつて? 右肩? 固まつたのを良いことに、玲華が俺のシャツを右側だけ剥いだ。肩に赤紫色の大きめの痣。玲華が息を呑んだのがわかつた。想像を超えていたのだろう。それはそうだ。これはテニスによるものではない。その後の久保田に庇われたとき、道路に打ち付けた痕あとだ。

「なによコレ。ちよつとどうしたのよ? こんなで練習してたの?」

「違う違う。これは昨日の帰りのハナシで、テニスとは関係ない」

俺は玲華の手からシャツを奪い取つて、着直しながら言った。

「あーそう、…………って納得すると悪いの? ジヤ、今日のバレーは

「これでやつたつてことじやない!」

「すぐ治るだろ? 打ち身ぐらい」

「もー、変なとこ強がるんだから」

「大丈夫だつて」

ほら、と右腕を上げて前後にグルグル回す。少し疼く程度。やつてやれないうことはない。

「な?」

玲華に頷いて見せると、彼女は無言でバシッと俺の肩を叩いた。

「いっ!」

「やつぱり痛いんじやなーい」

「打ち身つつたろ? なんか当たりや痛いんだよー!」

思わず涙目になつて抗議する。

「じゃ、テニスのときは? いきなり帰つたからあのときかと思つたわよ」

「あれはただの電池切れスタンダード」

ソファに座ろうとして、お互いやんと拭いてなかつたことを思い出した。布巾があつたよな、と棚に向かう。

もー、とぶつぶつ咳いて玲華もついてきた。一応責任の一端は感じているようだ。棚から新しい布巾を取り出すると、ふいに俺の目に先ほどの杜仲茶のパッケージが入つてきた。

「おい、これ食用つて書いてあんじやん」

「なによ! 食用なら飲用でも問題ないじやない」

「まあ……そうだけど……あつ! ちゃんとティーパックであんじやんか! こつちでやれよ」

俺はお徳用と書いてあるティーパック用の大袋を取り出した。覗き込んで玲華が言つ。

「そんなの邪道よ」

玲華の言ひ」とはよくわからない。

「いいから、入れ直すぞ」

ため息が思わず出た。はいはい、と言ひ玲華が戻ろうとしたときだつた。

「あーーー！なにしてんですか！？」

いつの間に入ってきたのかビデの声が聴こえる。俺は棚越しに扉を見る。秀和はソファの方を見ていた。

「シミつ染みになっちゃうじゃないですかっ！」

「あー悪い、いま拭こうと……」

「遅いですよー！こうこりのは一分一秒が勝負なんですよー。」

なんの勝ち負けだ、一体…。

「あああっ！こんなに染み込んでっ！」

「つるせーわよー…」

玲華の一喝で秀和は前面だつて嘆くことができなくなっていた。
はあ…。

単純な思考回路だつて、玲華のことを思つたけど、俺も充分それだつた。

球技大会の話がでれば、そのことが8割くらいを占める。そして今は事件のことでいっぱいだつた。

そして気づくと一日中世羅を田で追つてしまつていた。上の空だと玲華は言つていたが、やはりわからない。教師に当てられてもすんなり答えてるから、授業中もほんやりしてゐわけではないんだろう。

(俺はなにもなくとも、当てられたら慌てるけどな…)

そんなわけでじっくり観察していたら、休み時間に世羅が教室から離れたのを見計らつて、玲華が俺の席まで近寄ってきた。

「あんたなにしてんのよ」

周りに気取られないよう、囁きに近い小声で言つてゐるので、その顔には迫力があった。なぜか俺の方が焦つた。

「おい…コトバコトバ…」

「誰も聞いてないわよ。てゆーか、マズイと思つてくれてるんなら、そのあからさまな視線なんとかして」

確かに周りを見渡すと次の授業のため移動しだしていふ。次は音楽だ。

「そんなんにアカラサマだつた?」

「まるで恋してるみたいにね」

「こ…………」

傲然と口の端を上げて言つ玲華に、俺は一瞬言葉に詰まつた。すぐ取り繕つて頬杖をつく。

「女つてすぐそういうこと言つよなあ…」

「遠い目で見ない！とにかくやめてよ、世羅スルディんだから仕返しどばかりに俺も笑いながら言つてやつた。

「嫉妬してんの？」

すると、すつと玲華の目が細められ、これ以上ないほど低い声が発せられた。

「心配しているのですわ。神崎さまの失敗で、世羅がくだらなくも無意味な、あらぬ誤解をしてしまわないかと…」

「は？」

なんでいきなり言葉が変わる…、と疑問に思つていると第三者の声がした。

「神崎くんにか失敗したの？」

拓真が玲華の後ろから覗き込んでいた。まだ移動してなかつたようだ。しかも妙なところだけ切り取つて聞こえたらしい。

（こいつ背中に見えあんのか？）

俺の背中に僅かに冷や汗が流れた。

「ええ。わたくし心配ですわ。あまりに人の口口…特にオンナゴロゴロがわかつてなくて…」

「神崎くんは、言わなくてもわかるだろ！タイプなんですよ、玲華さま」

「人のことを断言して語るな！」

「そうですわね。萩原さま。家庭を顧みないで仕事ばかりして、でもそれで甲斐性があると思い込むような旦那タイプになつてしまわるんですわ」

「おまえも勝手に俺の将来決めんな！」

最近この二人は俺を貶すことに一体感を覚えてやがる。俺もつい相手にして突つ込んでしまうから、調子に乗つてるんだと思つ。どつと疲れていると、いつの間にか一人は音楽の準備をし。

「置いていくよ」いきますわよ

とまたタイミングを合させて言つてきた。気づくと教室には俺ただけしか残つてなかつたのだ。

ちょっと待て、ユニゾンにはまだ早えぞ、とまた俺は返していた。玲華の言いたいことも、全然わからない訳ではない。俺が世羅を

つい見てしまつことで、俺と玲華が結託……まではいかなくても、少なくとも玲華が、自分の話を俺にバラしたということを察するだらう……ということだ。

(どつちが大ゲサに考へてるんだか……)
女心なんて一生解るかつ、というのが男側の正論だらう。

* * *

(ウゼーな……フケるか)

と、毎回思つてゐるのに、結局体操服に着替えてグラウンドに向かつてゐる。

これから久々のテニス練習があるので。これが最後の練習。そのあとは本番しか残つてない。それでもダラダラと着替えたから、すでに始まつていて、今頃廊下を歩いているのは俺ぐらいだった。

(あ、違つた……)

階段のところで生徒が立つていた。珍しいな、と思ひよく見ると、四人いてその内のひとりは見知つた顔だつた。

そいつは手すりに背中を預けこちらを見つめている。そしてそれを取り囲むように、初めて見る顔の生徒が三人、ニヤニヤ笑いながらやはり俺を見ていた。

(うわー、あきらかヤな感じ)

無視するにも階段を下りないとグラウンドには行けない。それに、反対側に行くには意地が邪魔をして引き返せなかつた。

「顔貸してもらおうか」

そいつ、綾小路は俺を待ち伏せしていたのだ、とこの言葉で確信した。

玲華がいる前では決して見せない冷たい表情だつた。といつても、いつもは鼻の下を伸ばした間抜けな顔だから、まともな顔もするんだ、とそつちに驚いた。

「練習あるんで」

さらりとかわして、階段を下りる。はずだつたが一人に左肩を掴まれた。

「亨ちゃんが用事あるつていいてんだろ」「

三人の内の一人だつた。綾小路しか目に入つてなかつた俺は、その他三人を改めてこのとき見た。

三人ともネクタイの色で一年生だとわかる。綾小路と同じ青だ。しかしそのネクタイは緩められシャツのボタンも上三つ四つ開いていて、きつちりしている綾小路とはどこか一線を画していた。

つまり、この学院にもいたんだ、と思わせるようなガラの悪い生徒だつた。しかし時計とかゴツい指輪とか、そういう装飾品が高価なもので、余計に嫌味つたらしさが引き立つ。

「その呼び方はやめたまえ」

綾小路の不快そうな顔で、とくに仲は良くないと気づいた。今だけの仲間か。

(必死だな…こいつも)

俺を脅すためにわざわざこんな引き連れて。どこから連れてきたんだ?と俺は思つ。

「とにかくさあ顔貸せや」

俺の肩を掴んだままの金に近い茶色い髪と、顎からチョロつと生やした鬚が特徴のやつが、更に強引に押してきた。ガタイが大きく、ガツチリしているそいつは、力も強くて危うく階段から落ちそうになつた。思わず手すりを掴む。

下に行けと促す気なら最初から引き留めんなよ、と激しく思った。

「がはは、『イツみつともねー』

落ちそつになつた姿を見て、隣にいたやつが、何がそんなに可笑しいのか、体をくねらせて嘲笑つていた。青い髪に鼻ピアスをしており、ガリガリに瘦せ細つた体格だ。コレックスの時計が光つて見える。時計はともかく鼻ピアスは校則違反だから、普段は外しているのだろう。なんというか、実はタカられていそうなタイプだ。明らかにボスじやない。

もうひとりは少し後ろにいて、明るくない茶色い髪に中肉中背で
この中では一番普通だった。一見控えめに思える態度だったが、目
を見てわかった。

(「コイツがボスだ」)

綾小路なんかよりも冷淡で、一番蔑さげすんでいる眼だった。

「練習なんて必要ないさ。どうせ貴様は負けるんだからな」

綾小路が言う。昨日と同じことを言わわれているのに、まったく意味合いが異なつて聞こえた。

「先輩たちが俺の選手生命を断つから、ですか?」

嫌なほど相手のしようとしていることが分かつて、ヤケ氣味に笑みを作る。

奥にいたボスが俺の言葉に薄く笑つたのが見えた。

「亨、噂通りの奴だな」

「生意氣だらう?」

面白くもなさそうに綾小路が相槌あいづちを打つ。 ああ、そうか、ここで気づいた。

この二人が仲間なのか。悪友つてやつだ。それも質の悪い。

「こんな人数にものを言わせたやり方して恥ずかしくないわけ? テニスで人生のどん底、味あわせるんじゃなかつたのかよ?」

こんな挑発めいた真似しても得なことはない。そう分かつているのに、あまりにムカついて、言わずにはおれなかつた。

「その前に、目上に対する口の聞き方を教えてやらねばならないな」

綾小路が眉に皺をつくりたまま顎をしゃくつた。

「とにかく下りろ!」

それを合図に、声を張り上げてガツチリしたやつがまた押した。手すりに支えていた手が強引に離される。ここで抵抗しても危ないと思い、しつかり自分の足で進んだ。

ぞうぞろと後ろから他の連中もついてくる。その間、誰もなにも言わなかつた。今の時間、生徒だけでなく教師もグラウンドや体育馆にいる。

騒いでも無駄だと悟つた俺は覚悟を決めた。本当は逃げ出したいほど恐ろしかつた。一対一ならば、気力ぐらいは負けないでいられるかもしれないが、四対一なら分が悪い。悪すぎだ。

だからといってここで逃げても解決しない。それに、傍迷惑な綾小路に俺も言つてやりたいことがある。なんとか闘争心を燃やして恐怖を鎮めた。

どうやつたら多数を相手に出来るか、アレコレと対策を練ついたら、連れてこられたのは東側の裏庭だつた。こちら側は玲華の部屋含め、文化部の部室が多い。現在コソコソするのには、絶好の場所というわけだ。

たどり着いた途端、ガツチリしたやつが突き飛ばすように俺の肩を離した。すぐさま振り向き、なるべく背中を見せないようにする。そしてまず綾小路が口を開いた。

「貴様には一度と玲華に近づけないようにしてやる」「無茶言つなよ。同じクラスだし……。だいたいてめえ、近づく男全員にこんなことしてんのかよ、暇人だな」

綾小路が俺の挑発にせられて、勢いよく飛び出してきた。

「なんだとつ？ 貴様……」

「まてつ！」

ボスらしき男がそれを制する。

「まずは白木しらきと東あさまにやらせよう」

その台詞にガリガリとガツチリが前に出てきた。相変わらずニヤニヤ笑つてる。

一人ずつ来てくれるなら、俺にとつては有難い。注意すべきはガツチリしたやつ、東と呼ばれた方だ、と見た目で判断してみる。

「ワリイな、恨みとかはとくにないんだけど美山みやまサンの頼みだからな」

東が一言断つてから、右腕を振りかざし地を蹴つた。

そんな言い訳に納得するバカはいない。

正面からくる東に目を逸らせずにいると、左側からすでにアッパ

一をくらわせる体勢で、一ヤケた顔の白木が近くまできていた。

速い。

ガリガリな体重が活かされているのか、白木はとても素早かった。といつても東が遅いわけではない。

俺は咄嗟に右側に避けた。すぐさま東が左腕を伸ばし俺を捕らえようとする。

捕まるわけにはいかない。動きを封じられたらアウトだ。

そう思った瞬く間に、白木がアッパーの体勢のまま懷に入り込んでいた。素早くてもパワーは弱いだろうと判断した瞬間、俺の目に飛び込んできたものがあった。

(メリケンサック！)

いつの間にか、白木の指には指輪からメリケンサックに変わっていたのだ。

最悪。武器持ちかよ。

ヤバい、と思ったときには俺の拳が先に白木を殴っていた。避け方がわからず、それしか考えつかなかつたのだ。というか、体が勝手に動いたというのが正しい。

ぐええっと唸つて白木はよろけた。でもそんな様子を見ている余裕もなく、まわし蹴りで東を牽制する。東はそれを簡単に避けて、なおも俺に突っ込んできた。

(ヤベえ！)

避けきれない、と悟ったとき、脚の力が抜けて膝がガクンと折れた。連日の運動疲れが足にきていたようだ。こうなつて初めて気づく。

しかしそれが功を奏し、東の拳は標的を失つて空を切つていた。だが、そこで安心している場合ではなかつた。格好など気にせず、がむしゃらに東から離れる。

「んのつー！ちよこまかと！」

(あああ…キレイてるよ…)

立つて後退りながら冷や汗をかいてると、どんどん背中が校舎の壁

に当たった。逃げ道を阻まれた。

じりじりと唇を舐めまわしながら東が近寄つてくる。肩で息をしながら白木を見ると、やつは寝たままだつた。防御力は弱いらしい。（あとはこいつをなんとかすれば…）

「ゴクリと生睡を呑み、グツと拳を握りしめる。白木を殴つたとき、頬の骨に当たり手がじんじんと痺れていった。

「つらあああ！」

すごい迫力のある雄叫びと共に、東は拳を振り上げ、一気に間合いを詰めてきた。

俺は背中に預けた壁に力を借り、腹部目掛けて右足を力一杯突き出す。俺の足は、東のちょうど真ん中、鳩尾みぞおちに綺麗に食い込んだ。

「な……拳……つくつ……て……卑……怯……」

確かに一瞬まえまで俺も殴るつもりで、そういう体勢でいた。

「しうがねえだろ、腹がガラ空きだつたんだから」

腹を押さえて、苦しみながら東は膝から落ちた。

ほつと一息ついたが、これで終わりではない。まだあと一人いる。

「なんて弱い奴等なんだ、美山」

「確かに。たつた数分、それも一発でやられるとは…修行が足らんな」

まったく情の欠片もない感じで、ボス美山は言った。この二人に勝てる自信は全然ない。明らかに最初の一人とはレベルも迫力も違う。

その一人はゆっくりと俺に近づいてきた。美山がうすくまつている東のところまで来たとき、重そうな体格を、いとも簡単に持ち上げひよいと捨てた。うづあづと東が呻く。あまりの情けの無さに、つい俺は訊いた。

「仲間じゃねえのかよ？」

「別に。近寄つてくるからそのままにしてただけだ」
なんか哀れだな。俺は少し呆れた。自分もそんなに情に熱いタイプでもないし、美山の言いたいことも分からんでもない。

(でもなんかムカつくんだ)

使い捨てみたいな、あんなこと俺ならやらない。自然と怒りが生まれた。

「亨、ここなんか睨んじゃつてるけど?」

「まったく…少し痛めつけて脅しになれば、と思つたが…もついに、徹底的にやつてくれ、美山」

ため息をつきながらも冷酷なことを言つ綾小路に、ついに俺はキレた。

「ちょっと待てよーだいたいこんなことして本当に玲華が手に入ると思ってんのかよー普通に考えろよーてめえ、自分がどんな汚えマネしてんのか分かつてんのか!？」

綾小路はピクリと眉をあげ、手をポキポキ鳴らしながら、更に俺に近づいてくる。美山はうるさそうに顔をしかめただけで、動かなかつた。

「分かつてないのはどうちだ。玲華はすでに僕の婚約者なんだよ。それより…」

俺のまえで止まると、一旦口をつぐんだ。あ…。ヤバい。ぞわっと足元から冷えてくる感じがして、身体に力を込める。

「玲華と呼ぶな！馴れ馴れしい！！」

バキッと鋭い音がして、おもいつきり左頬を殴られた。来る、つていう予感はあつたのに、逃げられなかつた。

遅れて痛みがくる。頭までガンガン響いてるみたいだつた。

綾小路も、それから櫻井もなんでそんなに幻想を追えるんだ？本質も見ないで、好きとか婚約者とか…。馬鹿みたいだ。

感情に任せて俺は叫ぶ。

「それが勘違いだつて、さっさと氣づけよー本人に避けられてんじやねえか！あと、俺を怨むのはスジ違いつ……」

遮るように再び綾小路は殴ってきた。今度はこめかみに近くで、頭がくらりとした。すぐに立つていられなくなつた。

「口の聞き方がなつていないと言つただろう?馬鹿は一度で学習し

ないから嫌いなんだ」

「……ひとりで遊ぶなよ、亨」

「ああ、すまない。あとは好きにしてくれ」

「まったく、顔は外すんじゃないかったのか？」

二人の会話が頭上で聞こえる。

（逃げないと…）

逃げないといけない、と思う頭の隅から、別の声がした。

じゃあ、もう逃げない？

まえに玲華に言われた言葉だ。なぜ今頃思い出すんだろう。

逃げんじゃないわよ、とも言われた。

……逃げてもいいだろ？こんなときは、頑張った方だろ？

もう逃げない。

俺が答えた台詞。本心での時はそう決意した。

まだ、と俺は思い直す。まだ闘える。こんなところで座り込んでる場合じゃない。

（こんなやつに…）こんなアホにやられっぱなしでたまるか

美山の手が俺の胸元に伸びてきた。胸ぐらを掴んでこようとしたのだ。それを右手で振り払う。自分で立つんだ。震える脚に力を込めて立ち上がり、美山と対峙する。

俺の目を見て美山は笑っていた。なかなかやるじゃないか、とその目が言っていた。でもすぐに真顔になり右手が俺の腹を殴る。

「ぐつ…」

無様な声が出た。それが悔しくて、俺は間髪入れずにタックルを食らわせた。美山の鳩尾を狙って頭突きをする。一瞬だけ美山の動きが止まった。

その隙について左側に移動する。背中に逃げ場がないのは不利だ。

「てめつ」

美山はあまりダメージが効いてないようだった。確かに頭突きした頭の方が痛い。

素早い動きで近づき、また腹を殴られた。勢い余つて後ろに倒る。

「かつ……はつ……」

胃液が喉まで上がる。たまらず俺は吐き出した。息をするたびに腹部が軋む。

なかなか立ち上がりがないでいると、美山が足で俺の頭を踏んできた。ぐりぐりと地面に右頬が擦れて痛かつた。

「ここまでかあ？勢いだけは良かつたんだけどなあ

「美山もういいんじゃないか。そろそろ写真を撮ろつ

写真？

俺は耳を疑つた。そしてすぐに気づいた。無様な写真で言うことを見かせようっていう魂胆らしい。

（はじめから、そのつもりで……？）

馬鹿にして。

ソツがないというか、用意周到というか。本当に呆れる。

美山が綾小路の方を振り向くために、僅かに足の力が抜けた。それを感じると、脚を持ち上げ両腕でしっかり抱える。バランスを失い美山が尻餅をつくように倒れた。

「どいつもこいつも！馬鹿にしやがって！」

俺は力任せに美山に全体重かけて、エルボーを味あわせてやつた。さすがに美山は呻き声を出した。それを聞く間を惜しんで綾小路に飛びかかる。

一番許せねえのはこいつだ。

もともとの元凶はこいつなんだ。

綾小路は、携帯を取り出そうとポケットを探つていた。それで一瞬反応が遅れた。捕らえた。俺はニヤリと笑う。

「てめえええ！」

「！」

だけど俺の拳は綾小路に届かなかつた。変わりに、怒声と俺の脛^{すね}に痛みが走る。

いつの間にか東が復活していて、スライディングを仕掛けていたのだ。

(脚……)

体が傾き倒れていくなかで、脚にケガをしたら球技大会に出れない…なんてことが頭をよぎった。

こんなときに球技大会かよ、と少し笑えた。あんなに出たくないつたのに。

俺は左肩から落ちた。右肩じゃなくて良かった、とまた思つてしまつ。

(これはホントに…)

いつの間にか玲華に飼い慣らされ、感化されていたのだろう。

「うわー コイツ、ナニ笑つてんだ? キモー」

白木の声だった。あいつも復活したのか。自分だって、笑つているくせに。撫然とした。

起きないと。

また起き上がらないといけない。すぐ体中が痛くて、ダルいけど起き上がるうと思つた。

(あつ…)

だけどそれは断念された。いきなりきた。

先ほど殴られたときは違う種類の息苦しさが襲つてきたのだ。

(こんなときに…)

同時に襲つてくる絶望感。眩暈がした。手足と頭の痺れがやつてくる。

俺の意識はすでに呼吸に向けられていた。それしか、出来なかつた。

「オラオラ、どうしたんだよ…さつきの勢いは!」

東の声とともに、無数の足が俺に降りかかった。もうどこつがどこを蹴つているのかもわからない。

(守らないと…)

漠然と思う。喉とか肺とか、呼吸に関する器官を守らないと、と思つた。

自然と丸まつて体で内側を囲つた。

「はつ…つ…はあ…」

丸くなると余計に酸素が足りない気がする。背中とか脚にくる衝撃もあって、ゆっくり呼吸するための集中ができない。

痛みより息苦しさの方が辛かった。

(死ぬ…)

今度こそ死ぬかもしない。

誰か…。助けて。誰でもいい。この悪夢から身体から解き放つてくれるなら…なんでもいい。

苦しくないところにいきたい。

イキタイ。

逝きたい。

「悠汰あ！おまえら離れろっ！…」

そのとき、ものすごく切羽詰まった声が聞こえた。ああ、そうか。こいつがいた。

そう思うのと同時に遅えよ、と思つた。

俺は顔を上げられなかつたけど、体中に降る衝撃は消えた。変わりに俺の背中をさする手と、呼吸を誘導する久保田の声。

「もう大丈夫だ。安心しろ」

合間にそう言って落ち着かせる。

少しだけ楽になつて薄く目を開けると、茫然と立ち尽くす四人が見えた。

同情するなよ。

こんなときなのに、真つ先にそう思つた。懇願に近かつた。

そして徐々に周りに意識を向かわせることができて、気づいた。いつの間にか、何十人かの生徒が少し離れてこちらを見ていたのだ。どこからか騒ぎが伝わつたらしい。

そして…。

その人たちをかき分けるように玲華が現れたのが瞳に映つた。最強に最悪だ。

一番見せたくない人に、一番見られたくないような場面を見られ

た。

早く治まらないと。

いつものようじ、しないと。

しかし、その想いに反して、俺の呼吸がさらに荒くなる。

「余計なことは考えんな」

久保田がそれに気づいて叱る。すく静かな声だったけど、叱責が混じっていた。

（でも……）

「綾小路ーーーあんたなにやつてんのよーーー！」

突然、それはきた。

玲華の罵声だった。

一瞬マジで息をすることを忘れる。

（ヤバいって…。こんなみんなのまえで…）

思わず田を見開くと、玲華は髪を逆立てるように怒っていた。綾小路もきょとんとした顔をしていて。他の三人は度肝を抜かれたような顔をしていたから、綾小路はまだそこまで至っていない感じだった。現実逃避にでも脳が働いてるのかもしれない。

その場の空気が凍つてゐるのも気にせず、玲華はズカズカと歩いてくる。綾小路の前まで行くとその顔を一発平手打ちした。

「バカだバカだと思つてたけど、あんたがここまでバカだとは思わなかつたわっ！ちくしょう！」

変わらず綾小路はポカーンとしていた。

「いい？一度と悠汰にこんなことしないで！ついでに言つけど、あたしあんたのこと好きじゃないから！」

ついでの話が一番衝撃だったようで、みるみる内に綾小路の顔が真っ青になつた。

あー、俺があの顔をさせてやりたかったのに。

途切れる意識のなかでそう思った。

気づくとそこは保健室だつた。

田の前に玲華と拓真と秀和がいた。そしてなぜか櫻井も離れたところに立っている。保健委員だつたな、とぼんやり思い出していると玲華に怒鳴られた。少し涙声で。

「バカ！ あんたなんで言わなかつたのよ！」

なにを？ と一瞬思った俺は、まだ頭がちゃんとまわつてなかつた。過呼吸のことだ。そんなこと言えるか。こんな空氣になるのがイヤだつたんだよ。

気を失うくらい酷いのは一度田だつた。一回田は小学生の初期の頃。まだ父親に責められていたときだ。

だから少しショックだつた。ショックといえば、あんな大勢のまえでこんな失態をおかしたのもショックだけど。

「玲華さま。まだ怒鳴つたら駄目ですよ」

秀和が玲華を制していた。そういうえば玲華も本性さらしていたな、と思い出す。拓真や櫻井は初めて拝む姿のはずだ。

「大丈夫？ 神崎くん。痛むとこない？」

とりあえず拓真はいつも通りだつた。もう衝撃も超えたのかもしれない。

なにか言わないと、と思つて口を開く。

なにか応えないと…。

だけど、まだ少しだけ胸が締め付けられるように苦しかつた。なにも言えない。なにか喋つたら泣きそつた。

(胸が痛えよ)

「ボクたち、出てようか？」

なにも答えない俺に、拓真が気を利かせたようなことを言った。

「いい…。居て、いい」

なんとかそれだけ呟くと左腕で目を覆つた。左肩もやられたよう

で、少し疼いた。

独りにされても泣きそだ。

胸に渦巻いてるのは自己嫌悪。

でもそれがなんに対してなのが分からなかつた。あいつらに痛めつけられて、結果勝てなかつたことなのか、また久保田に迷惑かけたことなのか、いま目の前にいるこいつらに心配をかけたことなのか、大勢の前でこんな失態をやらかしたことなのか……。やっぱり全部なのだろう。

「あんた、また余計な気をまわしてない？」

ボソリと玲華が言ひ。もういつも声だった。

「玲華さまっ」

「ヒテはちょっと黙つて。そりやーそーあたしも正直責任感じたわよ。悠汰の苦しむ姿見てや。なんか氣、張つてるのは気づいてたけど、その気のなかにあたしが入つてるつてのもわかつてたけど」
俺は腕を下ろして玲華を見た。なにを言つてる？

「それでも前向きにならうとしてす」いって思つたし…あーもう、だからそうじやなくてアレよーお互いたまなよ、こうこう」とぱ。生きていりや誰だって人に迷惑かけるし恥ずかしい目にも遇つわけなんだからさ…」

珍しい…。珍しく玲華がどもりながら語つてる。でも迷つているというより、なにを言いたいのか自分でも探ししながら語つてしているみたいだった。

「だから、あたしももう責任は感じないから、あんたもいつまでもメソメソ泣くなつつてんの！」

「泣いてねえ！」

せつかく不器用ながらも元気つけようとしてくれていたのに、まづ俺がしたことといえば訂正だった。口の端が切れて喋ると痛かつた。

そしたら拓真がため息をついた。

「素直じゃないなあ…」

「悪かつたな！」

「もー信じらんない。あたしの話聞いてたー？」

「まあまあ、いつもの神崎さまが戻られたといつ」とで、

秀和がほんわかした笑顔でそう言つ。

「いつもの俺つてどんなんだよ？」

「そりやあ、意地つ張りで乱暴だけど優し……いてて」

最後まで言わさないよつ、俺は上半身を起こしその首を締めた。秀和がぐるじい～とバタつかせていると、クスクス笑う声が聞こえた。

櫻井だった。関わらないよつに、でもこちらを伺うよつな心配しているような、距離感を保とうとしているのがわかつた。そのなかで思わず出た笑い。

俺だけじゃなく、皆の視線が一斉に櫻井に向いて、彼女は赤面して俯いていた。

そのとき保健室の扉が開いて、保健医である高科たかしなと杉村が一緒に入ってきた。

「気づいたか？動けるよつなら校長室に来なさい」

杉村は険しい顔をしている。もしかしなくて、お説教をされるんだろう。

仕方ない、と思つて俺はベッドから降りた。体の節々が痛かつたけど、歩けないほどではなかつた。皆の心配そうな顔を後にして、杉村について廊下に出る。

「あまり…心証悪くないよつにな」

杉村は一言だけそう言つた。なんの話だ。あいつらが元々悪いのに…と内心思つ。

でも杉村に八つ当たりしてもなにも始まらないから黙つていた。

* * *

校長室に行くと先に四人とその担任が中に入つた。それとなぜか久

久保田も生徒みたいに、校長の前で並んで立たされていた。

「そういえば、久保田がいたのだ。この学校はセキュリティもちゃんとしているから、どこから入ってきたのかとか聞かれたのかもしない。俺も知りたい。」

「失礼します。神崎悠汰を連れてきました」

杉村が俺を促して校長の前に立たせる。変わりに他の者は一步下がった。久保田以外、誰とも目を合わせなかつた。久保田は俺の様子を窺うように見ていた。

「今回の事の顛末を話しなさい」

どつしりとした恰幅のいい校長は威厳たっぷりに命じた。鬚がもつそり鼻の下に蓄えられている。

俺は玲華の名前を出さないよにし、あとはすべてを話した。ジリジリと焼き付くような視線を後ろから感じたけど、一切無視した。俺は被害者だ。結果自分も手を出したけど、きっかけはそうだ。臆する必要がどこにある？

「ふむ。では殴ったのは認めるんだね？」

なんでそこを強調して聞くんだよ、とイヤな感じを覚えたが、正直にハイと答える。

しばらく沈黙が続いて、校長は重々しく口を開いた。

「よろしい。美山君、東君、白木君には三日、神崎君には一週間の謹慎を命じます。今後このようないふうに。以上！」

なんだと？

俺は目を瞠^{みは}つた。納得いかないなんてものじゃない。すべてが逆だろう。何よりなんで綾小路になにも無いんだ？

「校長先生っ！それは……」

さすがに杉村もおかしいと思つたのか、声を張り上げた。しかしすぐに校長が制す。

「以上！と言つたのが聞こえなかつたのかね？暴力を奮つた回数を考慮してある。さあ分かつたら退出したまえ」

「なにが回数だ！結局家柄を見ているだけじゃないか！」

躊躇わざ俺は怒鳴った。そういうことだろ？ 詳しくはないが、綾小路の家は西龍院家と取引するようなところだ。あの三人は知らないが、明らかに綾小路に罰がないのはおかしい。

だいたい回数で言つたら俺の方がやられてるじゃないか。認めたくないけど。

心証なんて関係ない。

初めから俺がどう話そつと、処分は決まっていたんだ。

「キミねえ。そういう態度だから田をつけられたのではないかね？ キミは自分が被害者だと思っているようだが、キミにも責任の一端は有るということだよ」

俺の主張にも動じず校長は言つ。

アホらしい。心底そう思つた。校長はイジメられる側にも非があるというタイプの人ようだった。

「神崎」

杉村は抑えるように俺の腕を掴んで、外に出そうとする。他の四人はすでにドアを開けて退出しているところだった。美山だけが俺を見て薄く笑つた。嘲笑、していた。

（くそつ…！）

俺にできるのは、出る前に校長をもう一度睨むことだけだった。
「神崎。そういうことだから明日から一週間は…」

「わかつてるよ」

杉村が俺の肩に手を置いて言つのを、振り払つて遮る。なぜか杉村が申し訳なさそうな顔をしていた。

そんなふうに見られても困る。別に杉村が悪いんじやないから。俺はそのまま鞄を取りに教室に向かつた。そうだ、あと制服もあるから、更衣室にも寄らないといけない。面倒くさい。なんなら退学してくれればもう戻らなくて良いのに。

やや自暴自棄に陥つていると、少し先で久保田が待つていた。

「帰り送るから。校門のところで待つて」

それだけ言つて立ち去ると、入れ替わるように玲華を先頭に秀和

と拓真が来るのが見えた。

なぜか後ろで二人がびくびくしている。秀和なんかは顔が真っ青だ。玲華はいつも通りで、姿勢正しく颯爽と歩いてる。

「どうかした？」

「なにが？」

玲華は俺の質問にも無関心で聞き返してきたけど、秀和が青ざめた顔で詰め寄ってきた。

「いまそこで綾小路さまたちとすれ違ったんです。綾小路さまは立ち止まられて、じつと玲華さまを見つめられて……でもなにもおっしゃられないんです。あの綾小路さまがですよー。」

「そうそう。玲華さまはまるつきり無視でさつさと行っちゃうし」「なんか気まずかつたです。ぼくたちもその流れで見つめられちゃって」

「すれ違った後もずっと見てたよ。ボク視線が痛くて」「なるほど。要はその雰囲気に呑まれたらしい。

玲華は髪をかき上げながらつまらなそうに言つた。

「大袈裟なのよ。もう本性出したし、近寄つて来ないでしょ

「悪い。俺のせいだ…」

責任の一端を感じて、声を絞りだすように謝つた。家との繋がりなんて、俺には分からぬ。でもこの玲華が、対面上だけでも繕わないといけないと判断した男だ。やっぱリマズかつたんじゃないかと思う。

「ちょっとナニヨソレ、誰があんたのせいだったのよ。もとから、あのままエスカレートしてたら出すつもりでいたのよ」

玲華はきつぱり言い放つ。あまりにもあつたり言われて俺の方が戸惑つた。

「責任ならあたしだつて感じてるつて言つたでしょ？」「

ふと玲華の顔が気まずそうなものに変わる。

「あいつがここまでやるとは思わなかつたけど、敵意むき出しだつたのは、完璧あたしのせいじゃない」

「でもそれは……」

「だからあ、いつこいつに責任の擦り合ひの逆になるのがイヤで、前もつて保健室で言ったのに……」

前も二度二の恩をつく、八月

玲華は一度ため息をつくと
照れたよーに苦笑いをした
そして
真っ直ぐ俺の目を見た。

「だから、あたしも『めんなさい』

- 1 -

俺はなんと返して良いか分からなくて黙る。玲華が謝る必要なんてないと思っていたのに。謝らせたのは俺だ、と気づいた。

「それで一回す「謝」たんだから、もうこの話はナシよ」
やっぱり玲華はさっぱりしている。まだ「こりゃ」続けたら、
終いには怒られるんだろう。だから俺はその通りにすることにした。
それに、なぜか玲華が言うと納得できた。

「そうだ、ボクたち神崎くんの荷物持つてきたんだ」
話が途切れるのを待つて、拓真が鞄と体操服の入っていた鞄を渡してくれた。体操鞄には制服が入っている。

一
「

「ふふ。いろいろときはありがとうって言つた方が良いよ」
悪戯っぽく笑つて拓真が言つ。この流れがなんか気まずくて、気が恥ずかしくて俺はつい話を逸らすように拓真に訊いた。

「おまえ、玲華の本性知つてどう思つた？」

「そりや驚いたけど、口が悪いのは神崎くんで慣れてたから、大丈夫。怖くないよ」

「ちよつとどうこつ意味よー怖いって

俺たちの会話を耳にして玲華が乗り込んでくる。

「違います！ 慣らないって言つたんです！」

「わ

「大丈夫です。玲華さまはお優しいですよ」

「こまそんなんワザとらじこフオロー入れないで、ヒート」

「そんなあ…」

思つたより俺の質問がその場を騒然とさせてしまつて、ヤバいと先に昇降口に向かつた。

一人で逃げてんじやないわよ、とまた玲華に言われた。
それでふと、言わなければいけないことを思い出して俺は振り向く。

「これは謝らないとな……悪い玲華。俺、球技大会出れねえ」「え？」

唐突すぎたのか玲華の動きが一瞬止まる。俺は歩きながら、校長が下した処分とその内容について話した。ついてくる三人の表情に驚きの色が滲む。

「そんな！なんで神崎さまが一番重いんですか？明らかにおかしいですよ」

「ヒドイ。神崎くんは確かに口は悪いけど、校長先生にそんなこと言つちやうとか、ボクには信じられないけど…でも田をつけられなきゃいけないほど迷惑なことなんてしてないのに」

「おい、それは底つてんのか？ケナしてんのか？どっちだ拓真」

凄味をつけて睨むと、拓真は力なくハハハ…と笑つた。

横から玲華が口を挟む。

「家柄があ。確かにねー、あのコーチヨー、例えばあたしが素つ裸で逆立ちして校内まわつても、あたしにはなにも罰を与えないんじやない？」

「おい、それはヤメロよ。見たくねえ

「例えばつつたでしょーーやるわけないじゃない、バカ！」

「そんなつ玲華さまっ…」

「うるたえてんじやないわよーヒテーーきやーーあんたはなに鼻血なんて出してんの？ヘンな想像すんなー」

よく見ると、拓真がひとり茹でタコのように赤面して、鼻血を片方からタラリと流していた。これは玲華が悪い。喻えが悪すぎる。

「えーと…。つまりそういうことだから、俺は帰る」

下駄箱に着いて、靴を履き替えながら俺はぼそりと呟いた。こいつらといふとすぐに騒がしくなる。

「あ、ねえ、あたしお父様に言つてみよつか?・相手が家柄氣にするなら、こっちだつてそれを利用してもイイじゃない?」

なんてことない、ただひとつの提案として出されたそれに、俺は激しい嫌悪感を覚えた。

「やめろよ! これ以上惨めにさせんな!」

ばんつと勢いよく下駄箱のフタを開ざす。

わかつてゐる。八つ当たりだ、こんなもん。玲華はなにも悪くない。でもそんなやり方は嫌なんだ。

俺は逃げるよひにその場を離れよひとしたとき、背中から玲華の声が届いた。

「わかった。ああ、球技大会なんてどうでも良いから、ゆっくり休養するといいわ」

こま思いついたかのよひに、なにかのよひに、玲華がさらつと呟つ。

どうでも良い、なんて思つてないくせに……きっと俺に負担をかけさせないよひに言つたのだろう。俺は振り返られなくて、そのままバイバイ、と手だけ振つて帰つた。

* * *

校門を出ると、久保田のコンパクトカーが停まつていた。慣れたよひに俺は助手席に乗り込む。

「ひつどい顔してんなー」

俺を見るなり久保田は悪態をついてきた。確かに殴られた痕とか酷かつたけど、たぶん久保田はそこではなく表情のことを言つてんだ、と気づく。

「つるせえよ

「……遅れて悪かったな。なかなか入れなくて、手こずった」「やっぱり盗聴器つけてんだ？」

入らうと試みた時点でそういうことだらう。ただ、いつ着けたの

か、どこに着いてるのかが気になる。

「つけてねえよ。つーか企業秘密だ」

言いにくそうに顔が歪む。

なにが企業秘密だ。カッコつけやがって。

「じゃあ……なんで俺のピンチがわかつたんだ?」

「それも企業秘密」

「便利な言葉だな、それ」

「良いだろ? 使つてもいいぜ」

「どこで使うんだよ!」

まったく適当すぎるやつだ。

「最初に言つただろ? オレは優秀な探偵なんだよ」

不満そうな顔でいたせいか、久保田はそう言つてつけ足した。やっぱり納得いかない。

「いいから休んでろよ。今日は疲れただらう?」

まだ聞き足りない俺に久保田はそう締めくくつた。確かに身体中が悲鳴を上げていたけど、それよりも疲労感が半端ない。

俺は窓側に寄りかかって、ぼんやり外の景色を眺めた。

なにも考えたくない、いまは。

それから數十分経つてから家につくと、俺は全身の血の気が引くのを感じた。

(ー)

いつもは空いてる車庫に、見慣れた真っ赤な車が停まっていたのだ。母親の車だ。

油断していたところに、ガツンと殴られたような衝撃だった。

よりによつてなんで今日なんだ? いつもいないくせに。わざわざ今日みたいな最悪な日を選んで帰つてこなくともいいじゃないか、と思ひ。

「なあ…今日は、あんたの事務所に泊めてくんない?」

「気づいたときには口がそう動いていた。みつともなく、声が震えた。

「駄目だ。今日は帰るんだ」

まるですべて解っているかのように、久保田は力強い目で諭すよう言う。俺の顔が強ばるのが自分でもわかった。

「なんでだよ?いいだろ、わがままとか言わねえから!」

「オレがあまえの母親に連絡したんだ」

「ひどい。非道い。

なんだそれ、って思った。

だけど同時に、そうだった、こいつは母親に依頼されていま俺といふんだ、と気づく。

馬鹿だ。ちょっと考えれば予想できることだ。初めはそれにムカついて避けたはずだったのに。結局こいつも他の大人たちと同じなんだ。

「わかった。もういい」

吐き捨てるように言って車から降りると、俺は玄関ではなく左側に向かつて歩きだした。

見せれない、こんな顔。なにを言われるかわかつたもんじゃない。いや、違う。分かりすぎるくらい分かる。分かつていて解りたくない。

後ろから、ぱんっと車のドアが閉まる音がしたかと思つたら、久保田が走つて近づいてきて俺の腕を掴んだ。

「帰るんだ」

「離せよ!関係ねえだろ、あんたに!」

「逃げるのか?」

逃げる

。

俺の原動力にもなり、縛るものもある言葉。逃げたいわけじゃない。でも、いまの俺には高すぎる壁をまえにしたみたいに感じる。

「なんだよあまえ!どうしたいんだよ俺を!」

過呼吸になつたら優しくなるくせに、過呼吸の原因を作つた親に荷担する。俺にはワケがわからない。

「一番おまえが解決しないといけない問題はなんだ？」

掴んだままの腕をさらに力強く引いて、俺を正面に向かせた。

「他のことで頑張んのも悪くない。大事なことだと思う。でも根本的なところを解決しないと、なんにもならないだろ？それから逃げるな！」

久保田の言つことは正論だ。

だけど、ひとつずつ解決したかつたんだ俺は、一度すべて乗り越えるのは無理だから。そんなに器用じゃないから。

「ほつとけよ！てめえ母親になに言われたか知らねえけど、俺に構うな！護衛だけしてろよ！」

久保田がなにか口を開こうとしたとき、別の声が耳に飛び込んできた。

「なにも言つてないわよ、私は」

外の様子を察したのか、母親が玄関から出ていた。黒いミニスカートに胸元の開いたブラウスで、相変わらず露出の多い服装だった。化粧も濃くて女を前面に出してるのがわかつて嫌悪感を覚える。

「久保田さんご苦労様。今日は連絡有り難う。もういいわ」

「はい。神崎さん、また後程ご報告の連絡をいれます」

久保田は俺の腕を離して、大人な対応をしていた。久保田がやはり母親側の人間だったと、まざまざと見せつけられた気分だ。嫌気がさす。

「来なさい悠汰」

母親に命じられた。俺はなにも考えられなくなつて、声に反応する操り人形みたいに足を動かした。

どのタイミングで久保田が帰つたのか、俺にはわからなかつた。視界が暗い。閉塞される世界。

玄関のドアが閉められて、周りに他人がいない空間になると、いきなり母親は俺の頬を平手で殴つた。今日殴られたなかで、一番痛

かつた。

「わざわざあんな名門な学校行って、どうして喧嘩なんてするのよ。あんたには自制心がないの？」

リビングに行きながらそつと呟つ。俺の話しさは元から聞くつもりもない。いつもそうだ。昔からそつだつた。

先入観で物事を捉えて、自分の言いたいことだけ言つんだ。

「売られたケンカを買つただけだ。俺のせいじゃない」

だけど俺だけ言われっぱなしで終わる子供じやないだろう？ もう違つただろう？

「喧嘩自体が野蛮だつてわからないの…？」一週間の謹慎なんて恥ずかしい！ それにその顔！ 「近所の人になんて言い訳するのよ。顔が元に戻るまで外出禁止よ！」

一言返しただけで、母親は怒濤のじとく怒鳴つた。ヒステリックな金切り声。

こんなときまで世間體かよ。だつたらおまえはなんなんだ。今は暴力ではないのか。一体どれくらいぶりに帰ってきたんだ。

言い返したい言葉はたくさんあつたけど、俺はなにも言えなかつた。胸がつかえて苦しい。無理に叫んだり、また過呼吸に陥りそうだつたんだ。

やつぱり言われっぱなしよ、ちくしょつ。

それから散々、母親の愚痴のような責める言葉が続いた。俺は立ち尽くして聞いていたしかできなかつた。言い返せばまた倍に返つてくるから。

どれくらい続いたのか、計つてなかつたから解らない。永遠に続くんじやないかと思われたその時間が終わり、解放されて部屋に戻るとそこに兄貴が立つていた。

ドアノブに手がかけられてる。トイレの帰りか、なにかはわからぬ。家でしかかけない眼鏡の奥底に、これでもかというほどの侮蔑^{ぶつ}の色が見えた。

「なにしてんだ？ おまえは」

一言だけ言い残して、兄貴は部屋に入った。
たまらなくなつて、逃げるよつに俺は自分の部屋に入ると、早々
とベッドに潜り込んだ。

引きこもりとか、ニートとかの気持ちが俺にはわからない。パソコンでゲームをしても半日で飽きたし、部屋にある本はすでに読み終わってるし…。

まだ謹慎一日目だというのに、すでに時間をもて余していた。部屋にいてもすることがないのだ。

いろんなところが痛むせいか、あまり眠れないし。

(今頃…なにやってんだろ?)

暇になるとビリしても……ビリでも良いことが、ビリでも良くないこととか、さまざまなことが頭を巡る。

球技大会に対する想いは複雑だった。最初は億劫で面倒くさくて……たぶん玲華にあそこまで言わなければ、体育のときのよう握手を抜いて適当にやつただろう。

だけど逃げないと決めてから、いつの間にか目標にしていたんだ。壁を乗り越えるための手段のひとつ。勝敗はともかく、全力でやって過呼吸が出ずく満足いく内容だつたら、ひとつ階段を登れるような、そんな気がしていた。

(やりたくないってたんだ。……出たかった…)

今さら、昨日遭ったことを後悔なんてしない。もう一度同じ場面がきたら、やっぱり俺は逃げずに喧嘩してたと思いつ。

ただ、出たかった。

それだけだ。誰かを怨むつもりはない。

それが叶わないものとわかつたら、残っているものは……。

(事件解決だ)

俺は咲田さんが買い物に出掛けた時間帯 夕方四時くらい

を待つて、下から電話の子機を部屋に持ち込んだ。

咲田さんはいつも午後くらいからきて、家事を一通りして帰つていぐ。だけど今日からは十時から来るようにな母親に言われていた。

俺を見張るためだと思つ。

咲田さんといい、今回の久保田といい…母親は他人を介してまでも俺を見張つてる。なにがそんなに信用できないのかわからないが、嫌になる。

(じゃなくて!)

また暗くなつている頭を振つて、俺は学生鞄から紙切れを取り出した。入れっぱなしになつっていた。

この紙を貰つたときはかけるつもりはなかつたし、一度は棄てようとした。だけど…。

(探偵がダメなら刑事しか残つてないだろ)

俺は書いてある数字を、間違えないように確かめながら、慎重に押していくつた。受話器を耳に押し当て、コールをなんとなく数えていた。

(…サン…シイ…「」…おい…)

何回鳴つても出ない…。もしかして出ないつもりか?

忙しいのかも、とやつと俺は思った。変な話だが、なぜだか俺は刑事が出ないことをまったく考えてなかつたのだ。

(かけろつつたのに!)

つい八つ当たりで、紙切れをぐしゃぐしゃにして、ゴミ箱に投げつけると、コールはそのまま留守電に変わつた。紙切れが、ゴミ箱の縁に当たり入らなかつたのが見えた。次に聴こえた甲高い発信者が、とくに耳障りに感じる。

「携帯電話に出なくてなにが携帯だ!言つとくけど折り返すなよ!」

迷惑だ!」

自分で思うより苛ついた声が出て、少しばかり啞然とする。

折り返してほしくないのは本当だつた。変なタイミングでかかつてきたら堪たまらない。例えば咲田さんが取つたら、取り次いでもらえないか、もしくは取り次いでくれても確實に母親まで報告がいく。最悪、こつそり親機で内容を聞かれるかもしれない。

とりあえず子機を戻そとかと立ち上がつたときだつた。

電話がかかってきた。家中に鳴り響く呼び出し音にビクリと一度震えた。

なぜか慌てる。

普段あまり電話に出ないから、出慣れてないからかもしれない。慌てながら、先ほど捨てきれなかつた紙切れを拾つて伸ばした。子機に光つているディスプレイの番号と照合する。

間違いない、刑事からだつた。

その確認だけして、やつぱり俺は慌てながらボタンを押した。「折り返すなつつたろ！」

もしもしどか何も言わずにいきなり怒鳴る。

……違う。こんなことが言いたいんじゃないのに。本当はかかつてきて良かつたって思つたのに。

自分のガキすぎる対応に嫌気がせして、ベッドに座りながら頭を抱えた。

「どうした？ なにがあつたのか？」

耳に聞き覚えのある刑事の……池田浩一郎の声がした。心配するような優しい声音だつた。

最低だ。こんな甘え方。

そうだ俺は甘えてるんだ、と気づいた。妙に感傷的な気分に陥つてしまつこの部屋で、なんとか外と繋がるうとしただけなんだ。消去法で池田になつただけで……。事件のことを聞きたいとか、確かにそれも紛れもない理由だけど。

「神崎君だらう？ 僕の携帯にあんなタンカ切れるのは君くらいだ」沈黙が不自然に続いてしまつと、受話器の向こうで軽く笑う声がした。そういうえば名乗つてない。

「そりだよー忙しいならかけ直さなくて良かつたのに」

また意地を張るようなことを言つてしまつ。

「大丈夫だ。いま区切りがついた。……なにか思い出したのか？」

ああ、そうだ。池田は、思い出したことがあつたら電話しろと言つたんだ。

仕方なく、言つつもりもなかつたことを答えた。本当はもっと前に思い出したことだつた。

「ボタン…」

「ああ、あの日落ちてた……君のボタンか…」

「そう。あれが落ちた原因、思い出した」

最近ぶり返したように呼吸が苦しくなる。そのきっかけは、あの事件を目撃してからだつたんだ。再び、あの場所に立つただけで過呼吸になるくらいだから、当田もやはり過呼吸になつていた。

あの、いまでも忘れられない、あの眼を見てからだ。あの眼がそうさせた。引き金となつた。あまりの苦しさからシャツを握りしめて、そのときボタンが飛んだのだ。俺は池田にそのことを話す。これで思い出すべきことは何もない。もづ掛けられない。

「眼？ 彼の眼を見たのか？ 彼はうつ伏せに倒れていたんだぞ。どうやつて見たんだ？」

しかし池田はさらに突つ込んできた。

「どうやつて…？」

考えもしなかつた部分だつた。確かに梶さんがうつ伏せに倒れていたのは俺も知つてゐる。見て知つてゐる。

（顔を覗き込んだ？）

いや、違う。

ふと浮かんだ可能性はどうしてもしつくつこなかつた。

「次の課題だな」

また黙り込んだ俺に、やはり穏やかに池田は言つた。あまり前のときのような聞き出す感じがない。

なんか変だ、と思つた。

その違いはおそらくすでに俺が疑われてないから。もしかしたら、着々と捜査は続いていて公にしてない情報を掴んでいるのかもしない。

「なあ、あれから犯人のメボシつてついてんの？」

「答えられない」

短い拒絕。期待をもたせないよう厳しい。

池田は事件、いやおそらく仕事のことになると厳しくなるんだ。
厳しさを持たないと出来ない仕事なのかもしれない。だからといって、俺も譲る気はなかつた。

「じゃあ答えられること教えて。なんでもいいから」「ニュースでも見ろよ」

「見てる。つーか対した情報ないし… 最近ニュースでもやんねえじ
やんかよ」

梶さんが通り魔ではないことも流れなければ、あれから新たな被
害者も出てなかつた。

「だつたら諦めろ」

「俺には知る権利があるだろ!」

「なぜ?」

疑われたから…第一発見者だから……。

一瞬なんて答えようか迷つた。どれも説得力がないようと思える。
簡単にかわされそうだ。

「まえは教えてくれただろ?」

「以前か…。あれは流れで必要だつたから話したんだ」

ため息混じりに言られて頭にきた。あれは失敗だつた、といつて
ユアンスが感じとれた。もう完全に俺は蚊帳の外なんだ。
疑いが晴れたのなら喜ばしいことのはずだ。おまえの見たことだけが頼りだと、期待をかけられることがなくなるなら、それは俺が
望んだことのはずだつた。

なのに…。

「タダとは言わない!俺はまだ警察に話してないことがある…。
気づいたらこんなハッタリをかましていた。」

「あのな…見え見えなんだよ」

「だけどすぐバレた。」

呆れた声が耳に届いて、めちゃくちゃ恥ずかしくなる。うるせえ

と俺は唸つた。

「なにをそんなに必死になつてゐるんだ? 最初は俺は関係ないとう姿勢だつただろう」

「…………」

確かに必死だ。俺には必死に足搔くぐらいしか、やり方を知らない。上手い駆け引きの仕方なんて分からぬ。

「俺は……だから……」

迷いながら言葉を選んでいふと、向こうの空気が変わる。

「すまない。また連絡する」

やつぱり忙しそうで、そのまま切られそうな雰囲気だつた。俺はいまにも切れそうな通話をすがるように叫ぶ。

「待て! 一言分ちょっと待つて!」

まだ途切れていなことを耳で感じながら、一番伝えないといけないことを言つ。

「本当に折り返しはやめて……ほしい。用があんなら別だけど……フオローとか、そんなつもりならいらないから」

「…………わかった」

一瞬間が空いて、違つことを言おうとしたのを感じた。それがなかなかは分からない。だけど本当に急いでいたようで、一言だけで切れた。

耳に残つたのは虚しいツーザーという不通音。

遮断された。外と。そんな気分だった。

それから、子機を返さないと、とぼんやり思つた。もとに戻さないと。

ベッドから立ち上がるだけなのに、いつもの何十倍何百倍の労力を要した。リビングにある親機のところへ戻る。無駄に広い家は、普段はなんとも気にしないのに、一人きりだと階段の軋みさえ大きく響いた。

リビングへ続く扉を開いて電話を直し、息を潜めるよつて踵を返す。

「お電話どりりり？」

田の前に居ないと思っていた咲田さんがいた。ギクッと体が条件反射で強張る。

(なんで?……こいつのまに……ー。)

咲田さんは光のない冷めた眼で一ひとともせず、じりじりと俺を見る。

「帰ってきてたんだ…」

なんとか誤魔化しながらも、平静さを装いつつ俺の頭はパニックに陥っていた。

いつから?もしかして聞かれた?どこから?

「ええ。お財布を忘れまして」

咲田さんはふいと田を逸らすと、再び家から出でていった。嘘だ。

真っ先にそう思つた。これから買い物に行くのだとしたなら、わざと俺を泳がせたんだ。だとしたら会話を全部聞かれた。しばらく俺はその場に茫然と立ち尽くしていた。

* * *

うあーんうあーんうあーん…。

泣いている子どもがいる。闇の中でひとり。

あれは俺だ。小学校三年生のころの俺。

泣くことで誤魔化していた。すべての感情を表していた。両親に振り向いても、うつ手段がわからなくて、泣いたら駆け寄ってくれるかもしれないと思いながら。

五月蠅いわねえ……なんとかならないかしら。あの子の声。

おまえが何とかしろよ、母親だろ。

[冗談でしょ、赤ちゃんじゃないのよ。大体あなたが叱りしきるから泣いてるんじゃない。

俺は言つべきことを言つただけだ。あいつがこんな点取つ

てくるから。

だけど2人は俺とは離れた場所で嫌悪感を示しただけだった。責任を押しつけ合いながら。

そのときの算数のテストの点が九十八点だった。たった一問の間違いも父親は許してくれなかつた。常に完璧を求められていたんだ。絶望感なんて言葉も意味もわからないまま、更に俺は泣く。嫌な想いを打ち消すように。

そしたらやつと二人が立ち上がつた。

気配を感じて嬉しくなつて振り向いたけれど、二人の顔を見た瞬間……怖くなつた。

決して子供をあやそうという顔じゃなかつたから。予感は的中した。

あやす代わりに繰り出されたのは拳。ただ黙らせようとするためにだけの、ただひとつ手段。

それから俺は泣いても無駄だということを悟つた。発散する術を失つたら、あとは溜め込むだけとなる。簡単な方式。やがて鬱積された感情は、呼吸困難という形になつて表れる。そういう時間はからなかつた。

ちょっとあなた医者でしょ。あれなんとかしてよ。

あれは心身症だ。弱い人間がなるものなんだ。別に死にはしないから放つておけばいい。

なんだ、そうなの？まったく大袈裟ねえ。まあ静かだからいいわ。

まさに息が吸えないその瞬間に^{とき}一人がしていた会話。

今でも忘れられない。

惨めだつた。苦しかつたけどそれよりも、心細さの方が辛かつた。いつも重くて、不安な心。吹きさらしで、庇ってくれるものも庇うやり方もわからない。知らなかつた。

それから家にいない日が日立つようになつていき、二人がいなないところではあまりそれに陥ることはなくなつた。皮肉な話だ。

だから。

(それでも俺は)

帰らなくていいよ、もつ。今さら俺は道を促されてもその通りには歩けない。医師にはなれない。

(期待を…)

もう期待してないんだろう。諦めるんだろう。せめて重荷にならないように、しようとと思うんだ。

(途方のない……想い)

惣一。じつちへきなさい。それはいいから。うん。

惣ちゃんは賢いから大丈夫よ。ああはならないわ。

兄貴…。

俺とは対照的に兄貴はいつも笑っていた。両親たちと三人でひとつのお家みたいに見えた。

だいじょうぶ?

苦しんでいる俺に声をかけるのは誰だろ。すべての音が聞こえなくなつたときにひとつだけ届く声。

労りの言葉。

わかるのはそれが両親ではないこと。
「じめんね。もっとおおきくなつたらきっとかにほうされる

よ。

声が言つ。

本当に?

あれから6年も経つのに何も変わっていないんだ。むしろ再発みたいになつて、いまも苦しめられてる。

だいじょうぶだよ

誰? 頬を見せて。もつとよく話を聞かせて。

俺は、声の主を追い求めながら眼が覚めた。
夢、だった。

* * *

いまが何曜日で、あれから何日経ったのか把握出来ない。気が遠くなるほど、すごく長い間部屋に居る気がする。
あれ以来とくになにもせず、体がしんどくてほとんどビッグで過ごした。

気分がすぐれない。

痛みはもうほとんどなくなつていただけど、常に襲つてくるように吐き気がする。胸がつかえているような感じもあつたから。
それなのにあまり眠れない。睡魔が襲つてもすぐうなされて起きる。その繰り返しだつた。

でもさすがにベッドにばかりいると体中が痛くなつた。ダルい体を引きずつて、勉強机に座る。

そこまで移動するのにも体力を奪われた感じがあつて、しばらくぼんやりとした。

いくら暇でも勉強する気になれない。兄貴ならこんなときでも勉強するんだろうな、といつ考へがふと浮かんで笑えた。比較されることを嫌いながら、自分が比較するなんて可笑しそぎる。

それから何気なくパソコンの電源を入れた。セキュリティは万全で、親に閲覧できるサイトを制限されたパソコン。ゲームも簡単なものしか出来ない。だからいまはメールか、楽曲をダウンロードする固定のサイトしか使ってない。

メールの九割は純平で、あとは迷惑メールだつた。とはいって、純平にだつて別の世界があつてそこには友達がいる。そんなに頻繁には連絡はとつていない。

パソコンが立ち上がると今日の日付と時間が分かつた。

あれから三日が過ぎていた。今日は月曜日だつた。

(終わつてる)

学校では球技大会が終わつて代休に入った一日目。いまの俺にはあんまり関係ない。

(メールきてた…)

だけど知らないアドレスで題名がない。純平じゃない。

迷惑メールかも、と思いながらもなんとなく開く。

「え！？」

部屋で一人しかいないのに、つい大声をあげていた。慌てて片手で口を押さえる。

やほー！玲華です。

元気に謹慎してる？

どうせ暇でしょ？てゆーことで、明日遊びに行くから！
絶対家にいなさいよ。もし、わけたら…………ふふふ。
後悔することになる、とだけ言つておくわ。

じゃーねん。

(.....)

なんとこうか…なんと言つてこいか、ビラに「ふう」と思つていい
が分からぬ。

(元気に謹慎つて…)

変な日本語。

あんまり元気じゃない、とか内心思いながら、なんとなくメール
から田が離せなかつたら、とある重要なことに気づいた。

重要で重大といえば、玲華がウチなんかに来るのもそうだ。なん
とか思い止まらせると、もしくは追い返さないと…。

それより。

(このメールつて昨日発信されてるじゃないかあああ！)

よく見ると、昨日の夜十一時頃の受信だった。つまり、玲華の言
う明日とは……今日だ。

血の気が引くのを感じた。

(今日のいつだよ！)

とても大事な時間が書かれていない。いまは午前十時だから……

……。

まだ、メールを返したらなんとかなるかもしれない。俺はそう思つてクリックし、文章を悩んだ。電話番号聞いていたら早かつたのに…悔やまれる。

(つーかなんでアドレス知つてるんだよ?)

俺は教えた覚えはない。怖い。怖すぎる。

ハッキングして探つたのかも、とまで考えて、さすがにそれはあり得ないだろうと思った。妄想がすでに病んでる。冷静な判断ができなくなってる。

返信画面を開いたまま、しばらく物思いにふけつていたら、下の階からチャイムの音が聴こえた。

まさか、もう?

焦つて何日振りかにカーテンを開けた。窓から下を覗く。そこには明らかに高級車とわかる真っ黒い車が停車していた。車の傍らには真っ黒いスースを来た男。玄関先はここからでは見えない。

そのあとの俺は、今までスローモードだったのが信じられないくらい素早い動きだつた。音が響くのも無視して階段を駆け降りる。あまりに驚きすぎて、困つているのか、怒つているのか、それとも突然の訪問者に喜んでいるのか…感じたり考えている余裕がなかつた。

ただ、急いだ。

もう頭は、訪問者は絶対玲華だと信じて疑わなかつた。あんな高級車持つてる知り合いは他にいない。

玄関先では咲田さんの毅然とした拒絕の声と、後ろ姿が見えた。
「私はただの家政婦ですので、いくらクラスメートさんとはいえ、この家に他人様を上げるわけにはいかないんです」

「わたくし悠汰さまとお会いできればそれで良いのですが」
このバカ丁寧な口調は確かに、猫を被つているときの玲華のものだ。俺はさりに一步踏み出した。

玄関のドアの向こうに、いつもはおろしている、ゆるく巻いた髪

を後ろでひとつに束ねている玲華が見切れた。赤いリボンと、白いワンピースのスカートの端が揺れていた。

「ですから、先ほども申したようにですねえ」

咲田さんは引かない。母親に命じられているからだ。他人を、とにかく俺に関する人間を接触させないように。

「あ、悠汰さま」

玲華は奥にいた俺を見つけると、手を振ってきた。咲田さんも振り向き俺を確認すると、険しい顔のまま立ちはだかるように言った。

「悠汰さんは謹慎中ですよ」

「わたくし謹慎の邪魔はいたしません。でしたらわたくし悠汰さまのお部屋でお話しますわ」

まるで名案とでも言つよう手を合わせ口元にもつてくると、玲華は形の良い唇を優雅に持ち上げた。目は力強く、支配する側の威厳があつた。

あのときと同じだ、と思った。クラスの皆を束ねた時の。生まれもつて身についた王者の風格。

咲田さんは一瞬たじろいだみたいだった。その隙をついて玲華が中に入る。訪問販売の営業すんのに向いてる…とか、また俺はくだらないことを考えた。

「構いませんわよね？ 悠汰さま」

今度はにっこりと無邪気に笑つて俺に言う。

拒むつもりだった。こんな家を見られたくない。まるで牢獄のような戒めのなかにいる弱い自分を見られたくない。バレたくない。

そう思っていたのに、気づくと、勢いに押されて俺は頷いていたんだ。

初めて彼を見たのは入学式のときだった。

まだ教師でさえ全員は来ていない時間帯に、彼は隠れるように体育馆の裏にあるベンチのところで寝ていた。朝陽に透けられ、際立つた色素の薄い茶色い髪。閉じられた目には長い睫毛。すっと整った鼻に形のよい脣。

……あたしは一目見て思つたんだ。

（ナニコレ。新手の家ナキコ？）

とても朝早かつたし、つい天氣が良くて寝てしまつたぜ……という感じではなく、ヨダレまで垂らして爆睡だつたから。着ている制服が新品で新入生だとわかる。左腕にはクロノグラフの時計がキラキラと反射していた。

あたしは新入生代表の挨拶があつたし、理事であるお父様と一緒に來ていたから早く来なければいけなかつたのだけど、他の生徒はまだ一時間以上は余裕があつたはずだつた。

そのときはそのまま立ち去り、式が終わつてから教室に入つたら同じクラスだと知つた。

神崎悠汰。彼は面倒くさそうに自己紹介でそつ名乗つた。

というか、悠汰はなにをするにもつまらなそうにしていて、気力がなく面倒くさそうだつた。そして誰ともつるまない。なんかピリピリしてるとこころがあるから、周りの人も近寄り難いんだろうな、と思う。

いづれにせよ、あたしはどうこうする気はなかつた。どこにでもいるじやん。クラスに一人は、こうこうウルフタイプ。

だけど放課後、教室に一人で音楽を聴いているところを見かけた。（やっぱ変なヤツね。そんなにメンドイならさつさと帰ればいいのに）

最初感じた訝しさが浮上する。

担任の杉村先生も気になつてゐるみたいで、学級委員の仕事を頼まれたついでにぼやいていた。

「神崎の気迫に怖がつてゐる生徒がいるんだ。なんとかならないかな」「大丈夫ですわ。こいつことは無理に動けば歪みが生じます。そのが成るようになります」

「そういうものかな。先生はそのうち何か問題を起こしそうで用心してゐるんだが」

「そうでしょうか。わたくしには彼は迷える子羊に見えますわ」なぜか絶句している先生に笑みを残して去つた。無闇に関わるつもりはなかつたから。こっちの方がメンディイわよーって気分。先生も先生で、生徒に別の生徒のことを愚痴るのはどうかと思つた。まだまだ若いのね。

気になりだしたのは、テニスのとき。初めて悠汰の本氣を見た。絶対にあればそうだ、と思う。

フォームもめちゃくちゃで動きに無駄も多かつたけど……目が違つた。なにより足が速い。どこにボールを落とされても追いついた。喜多川くんは気迫にのまれてミスが増えた。ただそれだけ。技術で負かしたわけじゃなかつた。でもそれはある意味テクニックよりも凄い才能。誰もが持てる能力じゃない。

なのに……周りの声援に悠汰が気づいた途端、彼は失速した。どうして？ もつたない！ 勝てたのに！

そう思つたら止まらなかつた。その日の放課後、教室に駆け込んだ。……駆け込む気持ちで、本当は優雅に教室に入つたんだけどね。

最初になんだ？ ロイツつて目で見られて、内心驚いた。それから初めてちゃんと（起きてる悠汰と）対峙したんだわつてことを思い出す。

「神崎さま」

思いつきり愛想よく声をかけてみた。すると悠汰はぶっきらぼうに「なんだよ」と一言だけ答えた。真つ直ぐ、睨んだと言つても過

言でないほどに見返された。

正直、猫をかぶつたあたしにこんな目をするやつはいなかつた。だから驚いた。

だいたいはトロンとした危ない目か、真つ赤になつて逸らされるかだから。

その後の態度も悪くて、あたしのなかで、神崎悠汰はナーニコレ? からおもしろいヤツに変わつたんだ。

神崎さまと呼ぶ度にイヤあーな顔を見せるくせに、なにも否定してこない。（これは後から、いちいち否定すんのが疲れてたつづてたけど）

教室で寝ているところを見かけて、iPodにイタズラしてやつたのに気づかない。（二十日もよ？ 信じられないわー）

……つていう、打つても響かない加減もまた良かつた。調子に乗つてるわけじゃないけど、本当に押しの強いヤツには嫌気がさしてたから。（某綾小路とかサイア克ー）

それから、話しかければ話しかけるほど、悠汰が時折みせる寂しそうな顔が気になつていて。わざわざ馴染んでない学校に、遅くまで一人でいるのも不思議で…。

そして気づいた。悠汰はウルフタイプじゃなくて、ただ他人に無頓着だつてことを。

だつて彼が周りに目を向ければ、だんだん空氣が丸くなつたせいか、友達もできたみたいだし。

……だけどあたしの部室に招待するきっかけが、梶さんの死だなんて皮肉すぎる。最近世羅は勝手に一人でなんかしてゐるし、悠汰は悠汰でまた一人で抱え込んでいるし。ちょっと寂しい。

「玲華さま見ていただけました？ぼくの華麗なるスリー・ポイント・シユート」

（あーヒデがいたわね）

でもなあヒデなあ…とか考へながらも、ビシッとあたしは言い放つた。

「つるさいわね、今日から三日はあんたは敵よー。わざわざ関係ないクラスの試合なんて見てられないわ」

「そんなあ……」

そう、とうとう球技大会本番になつた。悠汰がいないのはイタいけど勝つしかない。最初つからあたしのデータは完璧だつたから、メンバー入れ替える気は毛頭なかつた。まー、一応練習風景見てまわつたけど、結局はこれでバツチリじやん、つていう最終確認になつただけだつたし。

それなのに悠汰がいないから、ちょっとメンバーを調整するハメになつてしまつた。

「玲華、玲華」

総本部席にいる父親が声をかけてくる。あーもう、忙しいのに。お父様は自分がやるわけでもないのに、某有名なメーカーのポロシャツにジャージという出で立ちだ。

「聞いたよ昨日のこと。綾小路君を全校生徒の前でひっぱたいたそ
うだね」

どこに全校生徒がいたのか説明してもらいたい。ちょっと脚色して伝わつてるようだ。

「あら嫌ですわお父様。噂話する殿方は嫌われますわよ

お父様がいるテントは他にもP.T.Aの父兄がいるから、猫をかぶることに決めた。

生徒の前ではあれをきっかけに地でいくことにした。もつ隠す必要はない。綾小路亨の件はこれからグチグチ言われるかもしけないが……。

(…んなことよりホントは、悠汰を落とすまでは本性隠していくよ
うと思つてたのになあー。あーあ)

でも悠汰は地のあたしを見ても態度が変わらなかつた。他人では唯一の人だ。

やっぱしあたしの目は確かだわ。

「なんてこと言うんだい？玲華あー噂じやなくて報告があつたんだ

よー

「わたし学級委員などで忙しいので失礼いたしますわ」
嘆く父を無視して離れる。構つてらんないわよー。冷蔵庫がかか
つてるんだから。

冷蔵庫をあの部屋に入れたら、もつと悠汰も来てくれるかもしれ
ないし。

そのためには全種目の敵の動向をチェックだわ。

今のところなかなか好調な滑り出しだ。ただ、女子はともかく男
子は三年生相手になると、少しビビッているフシがある。気合い
入れにいかないと！

あたしはそんなわけで頭に叩き込んだスケジュールで綿密に校庭
と体育館を往復していた。

「玲華」

なのに、またあたしを呼ぶ声がする。他の生徒が誰もいない渡り
廊下だつた。もー誰よつーと声の主を睨むように振り向くと、なん
と綾小路が突つ立つっていた。

ゲツと思い、文句を言おうとしたけど……やめた。綾小路があまり
にいつもと同じ感じが違つっていたから。

どこか申し訳なさそうに、眉尻を下げて俯いている。いつもの自
信たっぷりの彼はそこにはいなかつた。

それはいいんだけど、名前を呼ばれてから次の言葉がなにも出て
こない。

最初はあたしもちゃんと聞かなきゃって気持ちで待つてたのに、
何秒いや、何分待つても出てこない。

「ちよつとあたし忙しいんだけどお」

さすがに苛立ちを覚えて急かす。すると弾かれたように綾小路は
顔を上げて……また俯いた。

もう逃げてやうかしら、と考えたときこ、やつと綾小路は口を開いた。

「あ……僕は……そ、その……君のことが本当に好きで、そうなると周

りが見えなくなつて……」

モ、ゴモ、ゴしてるーあの綾小路亨がモ、ゴモ、ゴしてどもつてるー

それはあたしには衝撃的なことだった。子供のころから綾小路を知つているけど、いつも鼻につく感じでナルシストだし……とにかくこんなになにを言つてるかわかんないような態度は初めてだつただ。

「その……すまなかつたと思つてる……」

プライドの高い綾小路にとつては充分すぎる謝罪だと思つた。
だからあたしは言つてやつた。

「いーわよ、もう。あなたがあたしにしたことは許します。でも悠汰にしたことは悠汰に謝つてね」

「待つてくれ。僕が玲華に謝らなければならぬことつてなんだい？」
「は？」

一瞬あたしたちの間にすきま風が吹いた気がした。
見直したと思つたらこれかー！じやあなんで謝つたのよ？と、あたしは眉を寄せながら叫んだ。

「したじやない！部室でー押し倒そつとしたじやない！他にもイロイロ

「だつて僕は大好きな君に精一杯の想いを伝えただけだ」「ちょっと開き直る気？」

「だつて本当にそうなんだよ」

なにがだつてよ！あたしは相変わらず噛み合わない相手に頭を抱えた。先ほど思つた言葉をそのまま聞く。

「じゃあなんで謝つたのよ？」

「あれは……君が怒つっていたから……僕もやり過ぎたと反省して再び綾小路の肩が落ちる。

まったくそれはもういいわよ。いや、聴いたのあたしだけじや。

「じゃあそれは悠汰に謝つてくださいね」

「玲華はあいつっ……！神崎悠汰のことが好きなのかっ？」

焦りながら綾小路が詰めよつてくる。ちょっととちょっと、とあたしは後退つた。これじゃ何も変わつてないじゃない。

「えーとつまり、綾小路… わあ… は、まだあたしの」と好きなワケ?

「僕は君が本当は口が乱暴でも…たとえば実は庶民の出でも、たとえ犯罪者でもたとえ男でも、好きつ…」

「ダメれ」

どんどん寄つてきたのと、闇を捨てなつない口調に、綾小路のスネを蹴つ飛ばした。

「いっつ…！」

喉をつまらせて、涙田で綾小路は苦しみでいたけど、急所じやないだけ感謝してほしいもんだわ。

あたしは腕を組んでため息をついた。

「まつたく全然わかつてないよつだから言つけど、あたし、あなたのそういう見境ないところキライよ」

「そんな…」

綾小路は秀和のように垂れた目をした。でも秀和より可愛くなかった。キャラにないのよ。

「では見境があればいいのかい？」

「あんたさ、じゃあたとえばで話くけど、あたしが悠汰のこと好きつて言つたら諦めるの？」

「諦めない」

綾小路の目がマジになつた。鼻の下を伸ばしたような腑抜けの顔でも、ふつとキメたナルシストの顔でもなく、真剣と書いてマジといつような顔だつた。

その表情と言葉の内容に、少し驚く。

「もう諦められないよ。僕には昔から玲華だけだつたんだから」

なんだ、こんな顔もできんじやない。でもそれはね、恋じやなくてただの思い込みなのよ。あたしもあんたも何も分からぬ子供のときに、周りの大人に面白がられて離^{はや}し立てられただけ。あたしは

そんなので人を好きにはならないし、嫌いにもならない。他人に影響はされない。あたしの気持ちはあたしが決めていく。

だからあなたも早く気づいてね。自分の望みに、気持ちに。

……あたしはそう想っていた。最後の想いは、綾小路はもうらん、もうひとり　ここにはいない男にも、向かれたものだつた。

* * *

球技大会はリーグ戦のものとトーナメント戦のものがある。あたしが一日目に一番応援を外せなかつたバスケットボールはリーグ戦だつた。男子は昨日終わつてゐるから、今日は女子バスケ。

そう世羅が出场してゐた。いつもなら安心して見れるのに、今回はどうか心が騒ぐ。

こつもの世羅ならしないミスを、今日は多発させていたのだ。それはささやかな小さなミス。失点に繋がるようなものではないけど。（やつぱり体が硬いわ。あ、いまのちょっとファールくさい）

審判からは死角になつてたけど、世羅がボールを相手から奪うとき、軽く接触したようにあたしには見えた……。

* * *

「ハラハラしたわ」

なんとかあたしたちのクラスが勝利を收めたけれど、我慢ができなくなつたあたしは、まずそのことを世羅に告げた。

「私はいつも通りにやつたつもりだが？」

タオルで汗を拭き取りながら、世羅は答えた。シャワー室に向かつているところだ。表面上はいつも通りよね、確かに。

「全然集中してなかつたじゃない」

「勝てたから問題ないだろ？」「

「そう？ホントに？」

「らしくないな。なにが言いたい？」

「どちらがらしくないのよ。やっぱりいつもと違う。いつもの世羅ならこんなところで苛立つたりしない。あたしはいい加減うんざりしていた。

「気が散る気持ちも分かるけど、ほじほじしてよね。迷惑だから」

「なんの迷惑がかかつてるって？玲華に」

「とりあえずは精神的に。あたしが変な気の遣われ方するの、嫌いつて知ってるでしょう！」

悠汰がまえに言つたことが本当なら、世羅はあたしに気を遣つてる。だからなにも言わないんだ。確かにそうだ。というか、それ以外考えられない。

「相変わらずたいした自信家だな。私が玲華を気遣つてるとビリしてそう思えるんだ？」

「…………何年の付き合いだと思つてんのよ」

「十年以上だな。…………だからこそ、玲華はもういいんじゃないか？」

一瞬、世羅の言いたいことがわからなくなつて、あたしは次の言葉を失つた。もう、いい？

「もう、私にはかり気にかけなくていい、ということだ。おまえは神崎悠汰とでも普通の高校生活を楽しめばいい」

「なんでそこに悠汰が出てくんのよーあたしと世羅の話をしてるんじゃない！」

頭にきた。

あまりに世羅がはぐらかすから。

(普通の高校生活つて……！)

だつたら世羅は普通の高校生活が送れないと言つの？それであたしをそちら側に連れ込まないようになにも話さないと言つの？そんなの酷すぎる。他人行儀だ。

「あんたつていつつもそうね。そんなことされてあたしが感謝するとしても思つてんなら、勘違いもハナハダしいわ！あたしを力ヤの外にするんなら絶対に許さないから！」

「仕方ないね」

あたしが啖呵たんかを切つても世羅は態度を変えなかつた。そのすらり

と伸びた長身を背筋を伸ばしたまま、あたしから距離をとりシャワールームに入つていつた。

（やつぱり、おかしい…）

悠汰が戸惑いながら話してくれた教室での一件。あのときも感じた。

いくらトラウマがあると言つても、常に冷静な世羅ならあの程度であんなにあからさまな態度にはでないことは知つてゐる。見たわけではないから、想像の域はないけれど、今の世羅は明らかに心を乱されているんだ。ポーカーフェイスが出来なくなるほどに…。

あたしは感情をぶつけた側だったはずなのに、まったく胸のつかえがそれなかつた。世羅の本気が伝わつて、ただ哀しいだけだつた。

* * *

「あ、いたいた。玲華さまあー」

校庭のベンチに座つて目の前のクリケットを観戦していると、サッカーを終わらせたばかりの萩原拓真が走つてきた。

すぐ真つ直ぐなやつで、あの悠汰でさえ氣を許した男だ。今日も爽やかに手を振つてる。

吹奏楽部だし、あたしのデータではそんなに運動神経がいい方ではないけど、ムードメーカーになると黙つて団体競技を選んだ。順応性も高くて、悠汰のだけじゃなく、あたしの本性にももう慣れたみたいだつた。初めのころに感じた崇拜する念がない。

「お疲れ。なかなか良いプレーだつたわよ

「でもボクは一点も入れてないよ」

「ちゃんと見てたわ。いちばん良いパス出したのは間違いなく萩原くんよ。他の人はダメね。自分が自分が、だもん」

「ふふ、手厳しいね。でもありがとう。玲華さまのラクロスは勝つ

たの？」

「当たり前でしょ。明日決勝に出るわ」

「さすがっ」

「それよりなにかあたしのこと、探してたみたいだつたけど？」

「ああそうだ」

萩原くんがパンと手を打つて、思い出したみたいだつた。古典的な動作だ。

「玲華さまと話したいつていう人がいるんだ。あそこにいる人」
萩原くんの指差す方を見たら、ゆっくりとした足取りで歩いてくる男性がいた。長めの髪をひとつに束ねてだらしない格好をしている。でも端正な顔立ちで勿体無かつた。キチンとしたら絶対イケメンだわ。

その人には見覚えがあった。

（あ、悠汰と一緒にいた）

苦しんでいた悠汰を献身的に支えていた人だ。

彼が氣を失った悠汰を保健室まで運んだ。謹慎処分を受けると親を呼ぶことになつてゐるけれど、自分が親代わりだと言い張つて、連れて帰つたと後から校長に聞いた。

（そんな人があたしに用事？）

訝しく思いながら、その男が近づいてくるのをじつと見ていた。

「はじめまして。つて言つても顔は合わせたよな。オレは久保田修

次

見つめられてるのにまったく動じず、男はそう名乗つて名刺を出してきた。歳上にきつちり挨拶されたから、仕方なくあたしも立ち上がる。相手がこういう態度に出ることが予想つかなくて、対応が遅れることをやや悔やんだ。本来ならば先手を打つべきだったのに。丁寧に両手で名刺を受けとると、そこには久保田探偵事務所、所長という文字が刻まれていた。

探偵が悠汰の親代わり?なんだか納得がいかない。

一瞬迷つたあと、地でいくことに決めた。どうせ彼にもあのとき

聞かれてる。

「それで、その探偵さんがどういう用へくだらない用事なら、あたしま構つてられないからあとにして」

「なるほど、なかなか活発なお嬢さんだ」「手を腰にあてて先制したら、久保田探偵は薄く笑つてかわした。「いま君とオレが話をするとしたら、その内容はただひとつだと思うが」「ただひとつ…」

そう、それは悠汰の話だ。あたしが言つたく、だらない用事というのは、それ以外のことに該当する。

わかってる。わかつているけど言い方が癪しゃくに障さわつた。ビニカ上から目線だから。まあ確かに歳上うえなんだけどさ。

「わかりました。じゃーまあ、とりあえず座りましょ」

あたしの隣のベンチを促す。

少し離れたベンチに、萩原くんがそわそわしながら座つたのが見えた。離れすぎず邪魔にならない距離。察してくるんだと思う。それから彼もやっぱり心配してくるんだ。悠汰を。

久保田探偵はベンチに座るや否や態度悪く足を組んだ。悔しいけど脚が長い。

「悠汰は元気?」

挨拶代わりにあたしはさらりと訊いた。一緒に帰つてたから、ホントに何気なく訊いただけだったのに、久保田探偵は眉をひそめた。

「さあな。多分元気じゃないだろう」

「なにそれ。親代わりなんでしょ」

「聞いたのか。あれは仕方なくああ言つただけだ。悠汰のためを思つてな」

「どういうこと?」

「今日は簡単に入れんだな…。一昨年もこれくらいスマーズに入れればこんなことには…」

あたしの質問を無視して、探偵はどこか遠くを見ながら物思いに

耽^{ふけ}っていた。 ちょっとといい度胸^{じや}ないの。

「普段は不審者^{ひしんしゃ}が入らないように万全の体制でいるのよ、あなたみたいな?」

「オレは不審者^{ひしんしゃ}じゃない」

ちょっと明るめに切り返したつもりだったのに、久保田探偵は眞面目に否定した。「冗談だつたのになーもう。

しかもなかなか本題出さないし。

仕方がないから、別のところからあたしは攻めてみた。

「それで? あなたはなにをそんなにヘコんでいるの?」

なのに、オレのどこが? っていう顔をされた。自覚なしかー。無理に高みを目指して、越えられなかつた人みたいに見えるんだけどな。それもきっと一昨年のことだ。

「へコんでるといえば悠汰だ。……彼は君や浅霧世羅に言われて一度、動いた」

いきなりきた。これが本題なんだつて、久保田探偵の顔を見て分かつた。本人は自然に話の流れに乗つたつもりみたいだけど、気まずそうな表情だつたから。きっと言いにくいんだ。

「動いたつて… 事件のことね?」

「察しがいいな」

「あたしと世羅のことで悠汰が絡むといえばそれしかないわ」

あたしがそう言つと探偵は頷いた。そして、自分が悠汰のボディガードをしていることと、その一回のことを事細かに話してくれた。

話を聞いている間、あたしはずつとクリケットの方に目を向けていた。小さく綾小路が見える。相変わらず派手なプレーだ。だけどあたしの視覚までそれは止まつていて、記憶までにはこない。記録はされない。

だつて、久保田探偵の話が… あまりに…。

(あまりにもムカつくから)

「だから悠汰は、君たちが期待すると無理をしてしまうんだ。頼む

から悠汰を唆すようなことを言つのはやめてくれないか」

「ソソノ力すつてねー…」

あたしは髪をかき上げながらため息を吐く。なんだつて大人はこういうことしか言わないんだろう。いくら子供のことが心配だからつて、なにも聞かずに個人同士のことには口出されるのは腹立たしい。大人にも大人の都合があるつてのもわかるけど。

「悠汰本人から言われるならともかく、あなたに言われてハイ分かりました、つて答えるわけにはいかないわね」

「君は悠汰がこのまま過換気症候群で苦しみ続けても構わないと言うんだな」

わざとそんな、責めるような言い方を選んで言わなくてもいいのに。

あたしの心はその術中にはまつて揺れた。だけど、それは違うと本能が告げる。

「わかつてゐるくせに… とてもキタナイ言い方をするのね」「なんだ?」

「そういうのつて過度な不安とかからなるんでしょう。過呼吸につたそもそも問題を解決しないと、なにも終わらないわ。それにあなた肝心なことを話してくれてない。その大元の問題、悠汰の心の闇よ」

「それは……」

あたしの主張に、久保田探偵は組んでた脚をおろして前屈みになつた。両腕を腿ももにおき、項垂れたように見えた。

「まー普段の悠汰を見てれば分かるわ。つていうか、いま分かつた。家庭の問題ね、違う?」

入学式の早すぎる登校。いまから思えば、家で眠れず仕方なく早目にでたところ、つい爆睡したように考えられる。それから、馴染めてないときから、なかなか帰りたがらなかつた悠汰。学校だつて実は一日も休んでない。どんなに辛くても。

今日だつて……昨日だつて本当は、謹慎になんてならなければ、

今「じゅこじ」といふんだろ？ リンチされた次の日でも。

「だつたらいま、悠汰が元気じゃないだうつていうのもわかるしね」

「嫌な言い方してるのはどっちなんだか。……悠汰が逃げ切れない気持ちが少しわかつた気がする。君は鋭い」

「大人が子供になに言つてんのよ。それくらいかわしなさいよ」あまりにあつさり泣き言を言つもんだから、ついあたしは顔をしかめた。だんだん歳上に見えなくなつてくる。てゆーか、コイツは愚痴を言いにきたのかしら？ だつたら相手にしてられない。

「確かに…悠汰は両親のしがらみから抜け出せずにいる。オレは悠汰の母親に依頼されたから、悠汰の依頼は受けられないし、そっち方面では助けてもやれない」

悠汰の依頼。事件解決。

あたしたちのために。

(違う、あたしたちの期待に応えるため、か)
そして自分が乗り越えるため。

「オレは悠汰が一番嫌がることをした。暴行された日に母親に告げ口したんだ。あのあとから、悠汰はまったく家から出ていない。だからオレは今ここに来れたんだけど…」

聞いているとだんだん独り言を言つてるのかと思いだした。まつたく男つてこういうところ情けない。

「ちょっと懺悔ざんげなら他でやつてよね。あたしはマリア様でなければシスターでもないわ」

「君がシスターか。向いてるかもな」

「こんな口の悪いシスターがどこにいるのよ…って、そういうことを言いたいんじゃないわ。話の腰を折らないで」

ピシッと人差し指を突きつけて、言つてゐうちに、はたとあたしはひとつ疑問が生まれた。

「ところで、じゃああたしがあなたに依頼したらどうなるの？」
「なにを？」

「事件解決よ！もちろん悠汰のボディーガードは最優先で良いけど、あたしだって本気だ。世羅の言う通りにはならない。あたしの行動だつてあたしで決める。

「なにを言つてるんだ。断るに決まってるだろ？ オレは悠汰にこの件から手を引かせたいんだ。オレが関われば必然的にあいつも…」「ふーん。なんだかんだ言つて犯人みつける自信がないんでしょ」「どうとでも。オレはそんなに単純じゃない」

(うーんダメか)

挑発には乗らないみたいだ。

「じゃあ悠汰を守る自信がないんだ」

これならどうだ、と言い換えたらい、久保田探偵は虚をつかれたような顔になつた。うーん、こつちだつたか。

「とにかく、悠汰にはこの事件から手を引かす。警察ももう別のところに向いてるようだからな」

「だからそれはあたしが彼に聞きます。悠汰がそう言つなら初めからそつとしてたし」

「駄目なんだよ。君に言われたら悠汰は断れない、きっと…」

久保田探偵は諦め悪く声を荒げ立てた。ついあたしもつられて周りの目を気にせず叫ぶ。

「それは悠汰が頑張りたいつて思つてるからでしょ…」

「壊れたらどうするんだ！ 責任なんてとれないだろ？！」

どうやら探偵の心配は奥が深いようだつた。多分守る自信がないのは、身体の方じゃなく心のことなんだ、ってわかつた。

でもあたしだつて逃げられないんだよね。

お互い責任を感じるのはやめようとあの口言つた。あたしから言った。なんて浅墓だつたんだろうつていまなら少し思える。頑張りすぎた結果なんだ、あれは。

(でもそんなんで氣を遣われるのはイヤだつたんだ。あたしがイヤだから)

「あたしが壊させない」

気づいたら先に口が動いていた。全然構わない。本心だから。

「あなたに出来ないことがあたしには出来る。どうしても止めたいんなら、力ずくでなんとかしなさいよ。そのときはあたしもあらゆる手を使って成し遂げるから」

探偵の顔が複雑に歪んだ。やや沈黙があいて長いため息を吐き出す。

「IJの学園は高貴な出のヤツらが多いと聞いたが……悠汰といい生意気なヤツばかりだな」

「そんなことないわ。あなたの後ろにいる彼なんてひとつでも素直よ。あなたも見習うべきね」

探偵が振り返って萩原くんを見た。萩原くんは心配そうな顔をしていたのが、突然話を振られて慌てていた。なんでもない、というふうにあたしは小さく手を振りながら言つ。

「悠汰はいつまでも一人じゃないわよ」

あたしがそう付け足しても、探偵はすつきりしてない顔で懐から煙草を出した。中から一本だけつまんで取り出したけど、指で挟んだままでいる。

「今までだつて、別に悠汰に友達がいなかつたわけじゃない。君が思つてるより、アイツの闇は深いんだ」

落ち着きなく煙草をもてあそぶ。その手元をなんとなく見ながらあたしは聞いていた。

「逃げるな、って言つちまつたけど、そんなことじやなかつたんだ。逃げられないことで苦しんでるんだ。アイツは」

探偵が口元に煙草を持っていく。ライターを取り出し、ちょうど火をつけようとしたところであたしは言つた。

「学園内はすべて禁煙よ」

久保田探偵が慌てて少しむせた。気まずそうに箱に戻すといふのを横目で見ながらあたしは立ち上がった。

「どうやら平行線のようね。これ以上話しても時間のムダだわ。こんなところで愚痴る暇があつたら、他の手を考えることね」

「ちょっと待て！」

離れようとするあたしの腕を久保田探偵が掴む。ものすごい力だ。それだけ必死つてことね。

（でもあたしだって引けない）

あたしはわざと振り払わずに、痛くなる腕を耐えて久保田探偵と対峙して睨みあげる。

相手の身長が高くて見下ろされるけど、不利には感じなかつた。だつて彼の田がすでに弱い。綺麗な造形の顔が歪んで、余裕もなくて負けている。

「痛いわよ」

あたしが冷静にそつまつと、探偵はあつ、と咳いて力を緩めた。だけど離さない。

「なにを…するつもりなんだ？おまえ、悠汰になにをさせるつもりだ？どうせ素人が犯人探ししたつて出来ることなんて限られてんだよ！中途半端に関わつて、さらに状況が悪化したらどうする！悠汰だつて、浅霧世羅のことだつてそうだ」

饒舌になるにつれて、腕がキリキリと痛み出した。無意識に力がこもつてゐるんだ。

だけどそれよりも、探偵が世羅の名前を出したことで、そんなことは気にならなくなつた。

「世羅がなに？」

あたしの声は小さな物で風に乗つて散つた。自分で口について出たことも気づかないものだつたから。

どうして探偵が世羅の名前を出すの？いまこのタイミングで！あたしが動くと世羅になにか起こるとでもいうの？それも悪い方向に？……探偵はなにか知つてゐる。事件のことを。調査しないなんていつて、実は調べてゐるのかもしれない。

「おまえ自身後悔することになるぞ！それでもいいのか？」

「やめてください！もう離して！」

悲鳴に近い萩原くんの声であたしと探偵は我に返つた。いつの間

にか萩原くんはあたしたちのところまで近づいて来ていた。

(痛つー)

今じろ腕の痛みが襲ってきて、あたしはよつやく氣づく。探偵の爪が皮膚にまで食い込んでいて裂けていた。少し血が滲んでる。探偵がすまないと謝つて手を離した。その手をあたしが掴む。

「聞き捨てならないわね。いまのどうじつこと?」

「……平行線なんだろ?話す義理はない」

探偵はあたしの手をいとも簡単に振り払つて、もと来た方向へ歩いて行つた。

「さんざん愚痴つといて最後がそれ?ずいぶん無責任ね!」

あたしの叫びは捨て台詞みたいにむなしく探偵の背中に響いた。

今日はこんななんばっかりだわ!ちくしょー!

「玲華さま。消毒しないと……」

あたしの怒りのオーラが伝わったのか、恐る恐る萩原くんが言ってくる。

「ちょっと」

それを無視して萩原くんに声をかける。

「な、なに?」

「どう思つた?あの男の話」

「ボクたちが知らないなにかで恐れている…と思つ」

萩原くんは探偵が去つた方向を見て言つたから、ちょうどあたしにはその顔が見えなかつたけど、もうあたしに怯えた声じやなかつた。ただなんの混ざり気もない、素直な悲しげな聲音だつた。

「やっぱりそうよね。同感だわ」

それがなにか…あたしは知らなければならぬ。なんの疑問もなくあたしはそう思つた。それは必ず悠汰に繋がる。そしてこの事件にも……。

* * *

「えつ？」

素つ 頓狂な声つてこひいつ声か、つてあとから思つよつな声が

あたしから出た。

なぜあとからかつて言つと、やつぱりそんな声を出すよつなときつて、他のことを考える余裕がないからで…。

「パーティするつて？世羅ん家が？」

あたしはその夜、執事の葛城さんから受け取つた手紙を、お父様からさらに受け取つた。

「ああ。月曜日の夜だそつだ。今回はパパ行けないんだけど、玲華はもちろん行くよね？」

「一二二二笑つてお父様が内容を告げる。確かに招待状と書かれたその白い手紙の内容と相違ない。リビングのソファで、1日の疲れを取ろうとくつろいでいたのに、またドッと疲労感が増した気がした。

「なに考えてんのよ？あのおば様は！」

「あの奥方はパーティが大好きだからね。一応慎んでたみたいだけど、まあ血の繫がりのある身内じゃないから不謹慎とも言えないよ」お父様は梶さんの話をしているのだと分かった。

そう、浅霧家はもともとパーティをよく開く家だ。世羅の母親がパーティ好きなのだ。だけど梶さんのことがあつて、ずっと自肅していた。

でもあたしが言つたのはそういう意味だけじゃない。梶さんが亡くなつてから、あたしがいくら訪問しても一切家に上げなかつた。誰にも会わせてもらえず、ゴタゴタしてるという理由で追い出されてきたのだ。あんなことは初めてだつた。いつ行つても親戚のようないや、それ以上に親しみを持つて接してくれていたのに。

それほど閉ざしていたのに、ここへ来ていきなりのパーティだから驚いたのだ。

なにかの罷か、それともたんにおば様が我慢の限界を感じたのか…とぶつぶつ考えてると、お父様が「あれ？行かないのかい？」と

言つてきた。

「もちろん行くわよ」

浅霧一家の様子を窺えるチャンスをみすみす逃す手はない。

「あ、ねえ。お友達も連れて行きたいんだけどいいわよね？」

「いいかな？ではなく、いいに決まってるわよね、といつ含みを持たせて訊いた。

「オープンなパーティみたいだから良じだらうけど…誰だい玲華？まさか男じゃないだらうね？」

お父様の顔色からサーつて血の気が引いていた。まー、予想通りの反応だ。

「男じゃいけないの？エスコートをせいやるのよ」

「エスコートなら綾小路君がいるじゃないか」

不気味な名前を聞いてあたしの方が、ざわりと全身を総毛立たせた。まだ固執してんのか。

「なによーお父様は娘に幸せになつてもらいたくないの？」

「もちろん玲華の幸せは願つてるよーだから綾小路君は完璧な男じゃないか」

「どこがよー性格に難有りよ。じゃなきや今回暴力事件なんて起きてないわ」

「玲華…まさか……」

はたとお父様の動きが止まる。何かに感づいた顔をした。

「君が連れていきたい男つて」

さすがにこの流れで気づいたか。あたしはあーあ…と思つて髪をかき上げた。名前は出さないようにしてたのに。

「別に良いじやない誰でも」

「良くないよー神崎君つてこいつ子だね。報告は受けたるけど問題ある子だそりゃないか」

「報告つて校長からでしょーあのコーチヨーがなにを見抜いてるっていうのよー今回もバカな判決言い渡しやがって…」

「玲華ー言葉づかいに気をつけなさいーとにかくパパは反対だから

ね

お父様は激昂していた。普段穏和で甘い父だけに、久しぶりにみた怒りで、ちょっとたじろぐ。

「あら？ いいじゃないの。ママも見てみたいわその子

突然ソプラノの高い声が響き渡った。

お母様が愛猫のシルバー（^{メス}、アメリカンショートヘア）を胸に抱いてリビングに現れたのだ。いつもなら、面倒くさい展開になりそุดと敬遠するところだが、今日は違つた。思わぬ味方が現れた、というところだ。

「ママ！ 玲華が危険な子と付き合つても良いとこいつのかい？」

「玲華ちゃんはそんなおバカじやないわ。ママは玲華ちゃんの選んだ人が見たいの」

この母親もあたしに甘い。しかも自分も良家出身のせいかどこか暢氣^{のんき}でマイペースだつた。この母親と情けない父親のもとで、しつかりしなきや！ つて物心ついた頃には思つていたのよね。

… つてゆーか、まだ友達としか言つてないんだけど。早とちりはお母様の特技だつたりする。

「ママ！ 神崎君というのは一般家庭の子だよ。パーティなんてマナ一も知らないよ」

慌てながら言つたお父様の言葉に、あたしとお母様がピクリと反応した。

「信じらんない！ お父様は家で判断するようなオトコだつたのね！」

「パパ！ ひどいわつ！ お義父様の事業を継がないで学校やりたいっていう夢を語つたときは尊敬したのに… もうあの頃の気持ちとは変わつてしまつたんだわ」

「これじゃあ校長と変わんないじやない… せいでー」

「玲華ちゃん！ ママが許すわ。連れてきなさい神崎くん。吉野さん

の見立てで立派な紳士にしてあげます」

「わあーい！ ママ大好き！」

あたしたちの怒涛のごとく浴びせた責め言葉を、口を挟む暇なく

お父様は聞いていた。田が点になつて、徐々に青い顔になつていいく。ちなみに吉野さんはお母様専属のスタイリストだ。こういうパティなどのときに駆り出されている。そしてあたしは普段お父様、お母様と呼んでいるのだが、おねだりするときだけパパとママになる。どうでもいいけど。

お母様と勝手に完結して一人でリビングを出ていくと、とうとうお父様は声を張り上げた。

「誤解だよ！パパは玲華のことを心配しただけなんだあああああ！」

お父様の悲痛の叫びはあたしたちの心には届かず、葛城さんの慰める声を最後に耳にした。

* * *

それからお母様と吉野さんと打ち合わせして、夜は更けていった。自室にひとりになり、あたしはパソコンを開ける。寝る前にはいつもネットサーフィンなどを楽しんでいた。

でも今日は目的がある。あたしは昼間もらった名刺を取り出した。ある情報は久保田探偵の住所と電話番号とメールアドレス。でもあたしの欲しい情報はこんなんじゃない。久保田探偵の情報ではなく、彼が持っている情報だ。

(ホントは気がすすまないんだけど…)

* * *

球技大会三日目は円滑に終わつていった。

結果は…三年一組のクラスが優勝した。一年生全体では一番を取れたものの総合では三位。

「現実はこんなもんよねー」

三年一組には文武両道の生徒会長がいる。表彰台の上にはその生徒会長が理事長、つまりお父様からトロフィーを受け取っていた。

「まあまあ、充分凄いよ三位でも」

あたしの隣で朗らかに萩原くんが笑った。あーちくしょう。悔やんでるあたしがバカみたいじゃんか。

「冷蔵庫…」

「え? なに?」

「なんでもないわよう」

まあいいわ。あたしは気持ちを切り替えることにした。綾小路のクラスには勝てたし。

(いまは明日のことだけ考えよ'つ)

悠汰のメールアドレスはひょんなところから手に入れることができた。というか、久保田探偵の情報を盗んだのだけど。さすがに探偵のデータは鉄壁で、本来欲しかった情報は手に入らなかつた。探偵が怯えているもの。

(だけど……あれは……)

「玲華さま。MVPに選ばれましたよー」

あたしの思考をぶち壊すようなテンションの高さで、萩原くんがあたしの腕を振つて揺らした。

ん? つて周りに視界を広げると、確かにあたしの周りにいたクラスメートも、はしゃいで拍手を送つてくれたりしている。

まったく放送を聞いてなかつたあたしは、つかの間呆然としていた。MVPが男子と女子、1人ずつ選ばれるのは知つてたけど、ふいをつかれたわ。

すぐに姿勢をただしてケンカしたままのお父様の前に行く。

「おめでとう玲華」

「ありがとうございます」

一応口ではお礼を言いながら田ではお父様に釘を刺していた。

(んな笑顔には騙されないわよ)

すぐに壇上から下りたから、お父様の顔は確認してないけど、多分青ざめてんだろうな、って思った。

壇上を下りるとき、綾小路が手を振つてるのが見えた。口元がお

めでとうって言つてゐる。あたしは人前だといつて、ついたため息をついた。

* * *

悠汰にメールしてみたけど、返信が返つてこない。筆不精なんか読んでないのかわからない。いや、メール不精か…。

お父様は最後まで反対していた。あたしとお母様がタッグを組んで勝てるはずないのに…。

「着きましたよ玲華さま」

運転手の眞鍋さんとあたしは悠汰の家に来ていた。

眞鍋さんが先に降りてドアを開けてくれる。眞鍋さんは同じ職業といふこともあってか、梶さんと仲が良かつた。だけど決してあたしたちには悲しみを見せない。できた人だと思つけど、なんか寂しい。

「ありがとう。眞鍋さん」

きつと立場をわきまえて自由な行動が出来ないんだ。だからあたしが変わりに動くから。あたしは改めて決意を固めた。

(この事件はこのままにしておかない)

悠汰の家のチャイムを鳴らす。なぜか心が早鐘のように鳴つた。そんなに会わなかつたわけではないのに、すこべりキドキする。

「どちら様ですか？」

対応してくれた声は女性のもので無機質に聞こえた。

長年の勘が告げる。この相手には猫を被つた方が良いと。「わたくし悠汰さまのクラスメートで西龍院玲華と申します。悠汰さまいらっしゃいますか？」

その勘を頭で考えるよつはやく、あたしの口は動いていた。

「悠汰さんは誰ともお会いしません」

しかし問答無用といつゝよつて、相手はガチャンとインターほんの通話を切つた。

(なるー、やるじゃないの)

あたしだって負けてられない。構わず再度インター ホンを押す。するとしばらく経つて玄関が開いた。凄く嫌そうな顔をした四十代くらこのふくよかなエプロンをした女性が出てきた。

(この人、母親じゃないわね。お手伝いさんつてどこか)

瞬時に品定めを終わらせて、あたしは閉められる前にその女性に詰め寄つた。

「どうしても悠汰さまにお会いしてお話ししたいことがあるのですが」「言付けなら私が承ります。学校のことですか?」

なかなか引かない女性の態度に少し怪訝に思う。これでは最近までの浅霧家と同じじやないの。

「直接お会いしてお話ししたいのです。とても大事なお話ですので」「悠汰さんは謹慎中です。誰とも会わせると、主人に言われてますので」

この言葉でやはりお手伝いさんだと確信した。そしてかなり忠実に家の主の言い付けを守るようだ。西龍院家の葛城さんだつて眞鍋さんだつてそれは変わらないけど、明らかになにかが違つた。こんなに心を開ざしてない。

「悠汰さまはいらっしゃいますのね。でしたら少しだけで構いません…どうかお願ひいたしますわ」

「私はただの家政婦ですので、いくらクラスメートさんとはいえてこの家に他人様を上げるわけにはいかないんです」

「わたくし悠汰さまとお会いできればそれで良いのです」

いい加減苛々してきた。こんなこと繰り返し言うだけならロボットだって今時できるわよ。なにがなんでも会つてやる、と意気込んだときに、女性の後ろに現れた人物を見つけた。

「あ、悠汰さま」

やつた!つて思ったのと同時にあたしは目を瞠つた。確かに現れたのは悠汰だったのだけど…。

(ダレ?これ……ホントに悠汰?)

彼の顔は生氣と呼ばれるものがすべて剥がれ落ちたみたいだつた。無精髭が伸びて、やつれている感が際立つてゐる。憔悴してゐて、いろいろ顔を言つんだつて初めて実感した。

君が思うより悠汰の心の闇は深い…。

今こりになつて、探偵の言葉が浮かぶ。

「悠汰さんは謹慎中ですよ」

怒りが混ざつた声で女性が間に入ってきた。

その声にはつとなる。

そしてあたしはなんとか泣きそうになりながら、それを耐えて言った。なんとかしなくちゃ、といつ気持ちが増える。是が非でもあたしがなんとかしたい。

「わたくし謹慎の邪魔はいたしません。でしたらわたくし悠汰さまのお部屋でお話しますわ」

悠汰だつて一応、家の主の一員なんだから悠汰が了承すれば良いのよ。

そう思つてわざと悠汰に向かつて言ひ。

「構いませんわよね？ 悠汰さま」

かなりびっくりして固まつていたかと思うと、悠汰はその顔の状態のまま……頷いた。あたしはすつごい長い、ほつとした息を吐いてしまつた。

あたしが気を抜いたところで、変わりに女性が慌てていた。

「いけません悠汰さん。奥様の言い付けが」

「俺には……外出禁止としか言われてないから……」

ここへきて初めて悠汰の声を聞いた。今にも消え入りそうな弱い声。

（なにがあつたの？）

悠汰から目を離せないでいると、その顔が女性からじけりに向いた。悠汰と目が合つ。

ドキリだかギクリだか分からぬけど、鼓動が鳴る。

あたしは自分がいま、どういう気持ちになつてゐるのか、初めて

わからなくなつた。

俺の部屋に玲華がいる。

それはとても不思議な感覚だった。閉ざされた空間に一輪の花。例えるならばそんなところか。

「ふーん。意外とキレイ好きなのね」

俺の部屋をしげしげ眺めて玲華が言う。

「咲田さんが…さつきの家政婦が掃除してる。俺じゃない」

俺には自由に模様替えする権限すらない。玲華はまた、ふーんと言つた。

何しに来たのか全然分からぬ。無様な顔を見て笑いにきたのか、とぼんやり思った。思つて、違うと否定した。

そういうことを思うタイプじゃないのに…、やつぱり俺はどこかおかしい。しかも思考能力が低下してゐるみたいだ。頭がまわらない。「ちょっとちやんと食べてんの?」

ひとしきり眺めて、終わつたかと思つたらクッショソの近くに座つて俺を見上げた。そこで自分がまだ突つ立つたままだつたことに気づく。俺はベッドに腰をおろした。そのまま寝転びたくなるのを必死に耐える。

「あんまり…食欲がないんだ…」

食欲がないのも事実だけど、動くのが億劫だといつても大きな要因だった。一階に降りたくない。とはいへこゝも居心地は良くないけど。

玲華は何も言わず、クッショソを膝の上に抱えたままじつと俺の顔を見ていた。

なんか気まずくて俺から口を開く。

「そう言えば、球技大会つてどうなつた?」

「あーダメダメ。やっぱり三年には敵わないわ。つてゆーか生徒会長の一人勝ちよ。実技でも頭脳面でもね」

話が続いてほつとしている自分に気づいた。早く、帰つてほしい。いや、行かないで……。独りにしないでくれ……。複雑な感情が俺のなかを渦巻く。

「残念だつたな、冷蔵庫」

「まあね。でも別の方法考えるからいいわ」

玲華は意外なほどあつさりしている。

「もつと…落ち込むのかと思つてた」

「どうして？」

何氣なく言つた言葉だったのに、玲華は真つ直ぐな目で俺を見つめた。意外な対応に変な汗をかく。

「燃えてただろ。最初から」

「……バカねえ」

「……」

彼女は馬鹿にするでもなく、ちょっと笑つてそう言つたから、まつたく真意が分からない。

バカなのは否定できないし。とくにいまは。

「……そう言えば久保田探偵に会つたわよ。学校に来てたわ

「……」

その名前はいまの俺には複雑だった。裏切られた気持ちと、初めからわかつてたことだろう？ つていう諦めが行き交う。

「なにしに？」

「あんたの話しかないでしょ、この場合。くしゃみとかしなかつた？ あたし、いっぱい悠汰の噂話したんだけど」

くしゃみ…。それはただの迷信ではないのか、と思つ。

いつもだったら、俺のいないところでつ！ つて憤りを感じそうなのに、今はただくしゃみが出ていたかどうかを、真剣に思い出そうとしていた。ホントにバカだ、俺は。馬鹿になつてんだ。

「俺のなに？」

訊くつもりなかつたのに勝手に言葉が出るし。

「んー。あんたのこと心配してたわよ

ちょっと迷つたように玲華が言つ。言わなかつた。言えなかつた部分を知りたくて、ずっと玲華を見ていたら彼女は更に付け加えた。

「すゞく心配してた」

心配？罪悪感の間違いじやないのか。

頭のどこか遠くでそつと思つた。

（あー…違つ……）

アイツは俺が弱ると心配してた、いまでも。

「今日はどうしたんだよ。なんでアドレス知つてたんだ…？」

この会話を終わらせたくて話を変える。ちょっとあからさまだつたかもしれない。

「やつぱり届いてたんだ。返信くれないからどうかと思つたわ」

「…………見たの、やつきて」

俺はダルくて視線を落としたまま答えていた。顔が上げれない。あまり今の顔を見られたくない。

「そつ、なら仕方ないわね。それよつさ」

勝手に話を変えて、玲華が近寄ってきたのが気配でわかつた。こいつはなんでも有りだから、あまりアドレスの入手先は気にしない方がいいだろう。結局訊いても教えてくれないような気がした。iPadのときと同じように。

「今日は誘いに来たのよ。世羅ん家がパーティすんだって。浅霧家の秘密を探るには千載一遇のチャンスだと思わない？」

俺の顔を覗き込むように身を乗り出して玲華は言つ。謹慎の邪魔はしない、つて言わなかつたか？

「…………俺が行つてどうするんだよ」

「気にならない？事件のこと」

気になる、ならないの問題ではすでになくなつている。刑事との会話を咲田さんに聽かれ、それが親に伝わっているかと思うと、やる気とか決心とか、そういう上向きな気持ちは剥ぎ取られた。また余計なことして！そんな暇あつたら勉強しろ、つて責められそうだ。

立ち上がりかけた脚は一度転ぶと、再び立ち上がるのに、倍の労力を要する。なるべく怒りに触れないこと。それが俺のできる精一杯の防御。

「パーティーなんて行つたことないし、イヤだ」

「そんな堅苦しいものじゃないわ。オープンなものだし、たくさんいろんな人が来るわよ」

「聞いていたらますますイヤになる。人の多いところなんて冗談じやない。しかも今はこんな顔だ。」

「ごめん、たくさんつてのは言い過ぎたわ。招待状がないときさすがに来れないし。悠汰はあたしので行けるけど」

「俺の読みを察したのか玲華がフォローする。でも…そういうじやないんだ。」

「傷が治るまで外出禁止なんだ」

「もうそんなに目立たないわ。マイクすれば隠せる」「まじまじと俺の顔を見つめてくるから、なんだか照れくさくなつて俺は顔を背けた。」

「やめろよ」

「もしかして鏡みてないの？」

「とにかくイヤなんだよ」

「あんたがそんなに引きこもりタイプとは思わなかつた」「こんなとこ一秒钟つていたくねえよ！」

「気づいたときには必死になつてていた。怒鳴るつもりなんてなかつたのに。」

あまりの余裕のなさに自分自身愕然となる。片手で口元を押された。

「元気、あんじやない。良かつた」

「悪い夢ばかり見るんだ…ここにいると」

「だったら良いじやない。一緒に逃げよう」

上田遣いで真剣な眼差しで玲華は言った。

逃げる。

俺の頭にその言葉は特別なものとして響いた。

だけど今日はいつもと違う。前は逃げるなって言っていたのに。

玲華も久保田も池田も、そして両親も……。

(逃げる…)

本当に逃げて良いのだろうか。頭を震^{かす}めるのは外出禁止を言い渡したときの母親の顔。

逃げてどうにかなるのか?いや、それよりも逃げられるのか?今だつて咲田さんはきっと見張つてる。

「いつから食べてないの?」はん

同じ調子のままで、続きみたいに玲華が訊いてきた。
いつから?そんなの…。

「忘れた…」

「じゃあうちで食べよつよ。食べたいものないの?」

そんなんに俺は腹へつてるような、物欲しそうな顔をしているのだろつか。一応、頭であらゆるメニューを描いてみる。

「きもちわるい…」

片手で口を覆い、慌ててイメージを払拭する。考えただけで吐き気がした。こんなで実物を見たら…想像するだけで恐ろしい。しばらくそのまま治まるのを待つていると、玲華が背中をさすってきた。膝で立っている状態でかなり近い。

(なんだこんな無防備に…)

いくら昼間とはいえ、仮にも男の部屋で。軽い女なのか?それとも同情?あまりに俺が情けないから。

「やめろって!なんで俺に構うんだよ」

俺は玲華の手を弾いた。

「事件のことがあるんなら無駄なんだよ。俺は犯人の顔を見てないし相手も俺のことは見てない!だからもう放つとけよ!」

少し怒鳴つただけなのに、すべての体力を使つたみたいに肩で息をするくらい疲れた。

同情で優しくされるのは真つ平だ。久保田みたいにあとから裏切

られたような気持ちにさせられるんなら、なおさら」めんだ。

だけど玲華はベッドの上に片膝を置いて、ふわりと包み込むように俺の横から両腕を回してきた。

「バカね…。ホントにわからないの？」

最初からずっと変わらない口調。だけどいまは、わずかに涙声だつた。

「あたしがあんたに構うのって、事件の前からじゃない。なんでわざわざ放課後の教室なんかに顔を出したと思うのよ。球技大会だつて…。冷蔵庫なんてただのひとつの中の理由でしかない。悠汰が塞いでるよう見えたから、スポーツでもやれば、そういうのが解放されるんじゃないかな、って、思つた…。浅墓だったよね、過呼吸のことを知らないで。…でも…」

微かに消えゆく言葉の続きを俺は聞いた気がした。

でも謝らない。

そう決めたから。

また、振り払おうと腕を持ち上げたのに…出来なかつた。
驚きすぎて体に力がはいらなかつたんだ。

(まさか…ウソだろ…?)

担任の杉村に言われたからじゃないのか？同情、じゃないのか？
そんなにまえから、俺のことを見ていたのか？いつから？

「事件のことはあたしが助けてほしかつたの、悠汰に。でもむづ…」

…

ふつと体が軽くなる。玲華の重み分が消えたんだと気づくのに、時間を使つた。

「迷惑なら仕方ないわ」

なんで…。

どうしてこんなときでも玲華は笑うんだろう。確かに強いひとは知つていたはずだけど…。

本当に良いのか？」のままで。玲華にここまで言わせて、引き下がるのか、俺は……。

恐怖心が邪魔をして、素直に頷けない。

なんの恐怖だ？

思い当たることが多すぎてわからない。

「また、立てるのか？」

「また頑張れるだろ？ 何度も挫けて、そろそろつとめりしているのだけど。今度こそ起き上がるんだろうか？」

俺から離れて、帰りかけていた玲華は立ち止まつて振り向いた。顎を上げていつものように傲然と笑う。

「あたりまえでしょ。生きてる限りチャンスはあるわ」

玲華が言うと、そんな気がしてくる。

「逃げれるのか？ここから」

「悠汰が望めば、初めから可能なよ。ここには繋ぎ止める鎖はないし、牢獄のような鉄格子も、ましてや鍵さえない」

俺が望めば？

だつたら決まってる。一秒だつてここにいたくないんだ。だから、俺は重い脚を無理矢理伸ばして立ち上がった。

* * *

咲田さんがやつぱり聞き耳を立てていたみたいで、俺たちが廊下にでるとそこにいた。

「いけません。私が奥様に叱られます」

いきなり現れた俺たちに、かなり慌てたふうだったけど、まず止めに入つたのはさすがだと思つ。

「言わなきやバレない」

そうだ。そもそも告げ口なんてするからいけないんだ。どうせあの人は帰つてこないんだから。

「悠汰さまをお借りしますわ。ちゃんと送り届けますから大丈夫です」

いけしゃあしゃあと、玲華はまた猫を被る。玲華だつて不自然な

咲田さんの登場に気づいているだろうに。

「いくら咲田さんが喚わめこうが、二人の人間を止めることはできない。

「悠汰さん！お母様の言い付けを破るんですか！」

その言葉にビクリと俺の体が強張った。一瞬、迷いが頭を霧める。だけどその背中を玲華が支えてきた。優しくて力強い手だった。何も言わず窺うように俺を見る。

そんなに心配しなくとも、いまさら立ち止まらねえよ。

「やぶる。いつかは破らなければいけないと思つてたんだ。だつたら今やぶる」

そして足を踏み出して歩くだけで外に出れた。当たり前なことなのに、意外で不思議な感じがする。なにを躊躇つていたのかわからなくなる。

久しぶりに見た太陽が眩しくて少し目が眩んだ。

「私は言いますよ！その悠汰さんの言葉も全部！」

まだあきらめきれない咲田さんがついてくる。俺は人差し指を口元にあてて言った。

「外で騒がない方が良いんじゃない？あの人があー一番嫌がることだ」

母親は世間体を何よりも気にする。咲田さんもそれを知っているから、青い顔をして口をパクパクさせた。

それを最後に俺は玲華に促されながら高級車、BMWに乗り込んだ。

「早く行つて眞鍋さん」

玲華が運転手に向かつて言つ。なにをそんなに焦つてるのだろうか？俺の気が変わらないうちに…かもしけない。

虚しく見送つてゐだらう咲田さんの顔は見れなかつた。やつぱり凄く罪悪感が残るから。

でも意外とすんなり出されたことに内心驚く。

「出れたんだ」

つい咳いたら隣で玲華が微笑む。

「悠汰は、お母様の言葉のじがらみに囚われたのね。そしてその

鍵を持っていたのは悠汰自身だったんだ」「まるで詩人だな」

俺は玲華の言い方が可笑しくてちょっと笑った。

笑える、まだ。 だったらまだ、大丈夫なんだろう。

「逃げちゃいけない場面もあるけどね、逃げるべきときもあるのよ」背もたれに全体重を預けて、両手を前に組んで伸びをしながら玲華が言う。

「うちの一族ね、お祖父様がトップなんだけど、パパ合わせて子供が三人いるの」

玲華がなんでもないようにしてきなり語り出した。何が言いたいのかわからなくて、でも玲華のことだから全然無関係だとも思えなくて注意深く聞いた。

「でもお祖父様には妾とか愛人だとたくさんいたから、その人たちを合わせると両手で足りないくらい血縁の子供がいることになるの。この先の展開読める?」

「遺産相続…争い?」

テレビドラマや漫画で得た知識からいくとそういうだろ。

「そうよ。まだお祖父様は元気なのに、誰に継がせんだけ?とか、遺言書いてんのかーとか、あたしが物心つくころには、もう水面下であつたわ」

なんという世界だ。

現実に本當にあるなんて。俺は絶句した。

「一応パパ長男だったんだけどね、このままいくと相続争いに巻き込まれるって思つて、すべて捨てていまの学院を作つたのよ。あたしが七歳のときだつたわ」

ちらりとミラー越しに眞鍋さんが玲華を見たのがわかつた。この人もそのころを知つてゐるんだろう。

「周りの人はパパのことを逃げ出したんだ、とか弱虫だと責めたけど、あたしは知つてゐる。パパはあたしやママがその争いに巻き込まれないように、自ら引いたんだって」

あ、って俺はこのときやつと気づいた。玲華がなにを言いたいのか。
玲華が俺を見て続けた。

「あたしはそのときのお父様、尊敬してゐる。誰がなんと云おうとも、あのときのお父様の選択は間違いじゃない」

逃げるべきときもある。

つまりそういうことなんだ。玲華は俺にそれを教えたくて、身上を語つたんだ。

逃げてはならないときと、逃げるべきとき。まだはつきりと判断できないけど……。

さつと玲華が言つたは、いま家から逃げたのは逃げるべきときなんだ。

(本題に…?)

* * *

彼女の家はお城みたい……とまではいかないが充分バカでかくて、豪邸と呼ぶのにふさわしい家だった。これで本当に財閥の恩恵を受けてないと言えるのだろうか……疑問だ。

車は立派な門をくぐると、真っ直ぐ玄関まで走り停車した。
(レベルが違う)

そこにきて初めて自分が部屋着にしている、ジャージとTシャツで来てしまったことを後悔した。

……ダルそうにしていたせいか、玲華がそのまま良いつて言ったんだ。

「いらっしゃい、あなたが神崎くんね。玲華ちゃんから聞いてるわ、お上がりになつて」

玲華が開く前にドアが開いて、中から玲華とよく似た顔の女性が勢いよく出できた。聞かなくてもわかる。母親だろ？

しかし品があつて、どこかほんわかした雰囲気の彼女は、間違つてもオバサンとは呼んではいけない感じだ。黒いワンピースに淡い

ピンクのショール。薄い化粧だつたけど、実年齢が読めない。

「やだお母様、見てたのね。タイミング良すぎよ」

真っ赤になつて玲華が焦つている。学校では見せない表情だ。

「いいじやない。ママ待ちくたびれちやつた

「んもう一節操ないんだから」

「ひどい…ママに向かつてなんてこと言つた玲華ちゃん！」

「嘘泣きしないでよ！だつてホントのことじやない」

しばらく呆然と一人のやり取りを聞いていたけど、まだ挨拶していないことに気づいて慌てて取り繕う。

「あ、はじめまして。神崎です。スミマセンこんな格好で……」「

ピタリと一人の動きが止まつて視線を浴びた。なんか気まずい。

「やだ、なに気にしてんの悠汰」

「お父様の話しさウソね。礼儀正しい子じやないの」

「まあ、猫かぶつてるけどねー」

「そういうことはバラすものじゃないわよ、玲華ちゃん。ほほほ、

服なんて気にせずお上がりくださいな」

なんか勝手に女同士で話が盛り上がつたと思つたら、玲華の母親はにっこり笑つて付け足した。

「ちゃんとお洋服は用意してあるわ。どこのパーティーに出ても恥ずかしくない完璧な装いよ」

「人の女性に不敵に笑われて俺の背中を一筋の冷や汗が流れた。嫌な予感がする。

「玲華、確認するけど、堅苦しくないパーティーなんだよな」

「まあね、立食形式だからね。でも正装はしてもううわよ、ふふふ。あとけよつとした社交マナーも覚えてもらひつわ

「……嫌な予感が増長する。

わずかに逃げ腰になつてると、一人の女性にがつたり腕を組まれた。と言つても、色気などは程遠くどちらかと言えば捕獲された気分。

そしてこちいち豪華すぎる部屋をいくつも案内されながら、ます

始めて連れて来られたのがダイニングだつた。西洋式の細長いテーブルに、それと合つたたくさんの椅子がある。何人掛けか数えるのもアホらしい。

「やっぱりなにか口にしたら？消化に良いものがいいわね」端の方の椅子に強制的に座らせられる。確かに、動いたせいか腹が減ってきたかもしれない。

違うな、あの部屋を出たからだ。きっとそつだ。

「まさかおまえが作るのか？」

よせばいいのに、ついそう言つてしまい玲華に思い切り睨まれた。

「どういう意味よ！」

「ほほほ、玲華ちゃんなんでも出来るのに料理だけはダメなのよねえ」

「なによ。あたしは作らないだけよーお母様だつて作れないじゃない」

「心配いらないわ神崎くん。うちにはシェフがいるから。さつき頼んだからもうすぐ来るわ」

玲華の怒りをさらりと無視出来るあたりは、さすが母親と言えるのか。俺は変なところで感心した。

まー、こんだけ金持ちだつたらなんの問題もないんだろうな。

「お母様はもうあっち行つてよー吉野さんが待つてるわよ」

「あらあら、ごめんなさいママ氣づかなくて。邪魔だつたわね」

玲華に追い出されて、それくまと玲華の母親は去つていった。入れ替わるように、スーツを着た別の男性が入つてくる。白髪混じりで優しそうな笑みを浮かべた六十くらいのその男性が、ダイニングのドアを閉めるや否や綺麗なお辞儀をした。

「申し訳ございません。お出迎えもせずに。よつこわおいでになさいました神崎様」

その無駄のない動きに、この人も使用人だなと氣づく。

「良いのよ葛城さん。そんなにかしこまらないで。悠汰、この人執事の葛城さん」

かなりフランクに玲華が紹介する。いくらフランクでも執事という存在にはこっちがかしこまつた。

「はじめまして神崎です」

葛城さんに倣つて……つて言つても、いきなりそんなに身につくわけじやないけど　俺も立ち上がりつてお辞儀する。

「やだ、また猫かぶつて…どうしたの？熱でもあんの？」

あまりにらしくない態度だったらしく、玲華が手のひらを俺の額に置いた。

「失礼なやつ…」

俺だつて時と場合をわきまえた行動くらいできる。たぶん、出来る。

「おー一方は仲がよろしいようで」

葛城さんがにこやかに笑うと、玲華がパツと手を離してそのまま横に振つた。

「どこがよー全然よーつてゆーかもしかして葛城さんお父様になにか言われてない？」

「ほひ、旦那様がなんと仰るんです？」

「見張れとかそういうことよー！」

「いやはは、ご心配なさらずじ、お嬢様はいつものようになされようらしいかと…」

すうい。まったく否定せずに流してくる。やはり長年培つてきた成せる技なのだろうか。

「んもうー葛城さんはお父様の相手でもしてて」

「いえ、お客様に不自由をさせてはいけませんから」

おまけに、笑顔が崩れないのにまったく引き下がらない。

さりに玲華がかぶせようとしたときに、すうくいい匂いがした。どこか食欲のそそる匂い。

「お待たせいたしました」

シェフの格好をした…つていうかシェフが俺のまえのテーブルに料理を置いた。ステンレス製のフタ付きで、フランクス料理を思わせ

た。

「きたきた。座つて悠汰。好き嫌いは聞かないわよ」
切り替えの早い玲華は強引に俺を椅子に引き戻した。そんなことをしなくとも、いまの俺には食欲が戻っている。素直に有り難い。フタをとつてもらつたらそれはスープだった。よく煮込んである野菜たっぷりのスープ。他にもあるからね、となぜか玲華が嬉しそうに言う。

ひとりで、しかも他人の家で飲食をするのはなんだか違和感があつて氣恥ずかしかったけど、俺は欲求に逆らえず、いただきますと言断ると、卑しくもがつついた。

そのせいで途中で何度もむせたけど、そのたびに玲華がお茶をくれて、やっぱり少し申し訳なく感じた。だけど玲華は、全然気にしてないって感じで向かいに座つて笑っていたから、たぶん気にしないくて良いのだな。

そういえばそろそろ昼飯時じゃないかと思つ。

「みんなは食わねえの？」

半分くらい食事を終わらせてから、やつと俺は氣づいて聞いた。「もう少ししてからね。悠汰は待てないんじやないかと思つて。つてゆーかあたしが一刻も早く食べた方が良いと思つたのよ」

こんなところでも俺は心配をかけてるらしい。自分の体調管理も出来ないなんて本当に情けない。

「そんなに……よだれ垂らしてた？」

「ううん。食べてないんだろうなってのが顔見てわかつた。それだけよ」

それだけつて…。それが顔でバレるあたりが、問題なんだけど。俺は複雑な気分になつたけど、とりあえず食事を続けた。そしたらまたドアが開いて新たな人が入つてきた。この顔は知つてゐる。俺がそう思つて見てみると、チロリと流し目で睨まれた。

「いやだ、お父様なにしに来たの？」

玲華がガタツと音を鳴らして椅子から立ち上がる。そう、理事長

だつた。

なんか不穏な空氣…というか、招かれざる客な気分になつて、俺も立ち上がり今までここの人達にしたのと同じように挨拶をした。そしたらなぜか理事長は少し戸惑つた顔をして、玲華には怒られた。

「挨拶なんていいのよ悠汰。いまのところお父様は、敵なんだから」「は？」

まったく意味がわからない。聞こえがどうしようか一瞬迷ついたら、理事長が情けない声を出した。

「玲華ー。いい加減機嫌なおしてくれよー」

「知らないいつ！まだ悠汰をパーティ連れて行くの反対なんでしょう！俺はこの剣呑な雰囲気に自分が関わつてると知つて、虚をつかれた。

なんでそれでこの親子がケンカしてんだ。……いや、ケンカじゃないか、玲華の一方的な攻撃か。少なくとも今は…。

「反対なんてしてないよ。ただなぜ神崎君を連れて行くのか聞いただけじゃないか」

「もう！いいからどつか行つてよ！悠汰が気にして食べれないじゃない」

「いや…俺は…」

頼むから巻き込まないで欲しい。そう思つて口を挟もうとしたけど、玲華に遮られた。

「いいの、気にしないで。お父様はね、あたしが綾小路と付き合つた方がいいって言ったのよ」

「それは…」

ちょっとヤバいかもしない。口に出さず俺は思った。

あんなんでも玲華が好きなら問題ないが、嫌つてる相手だからな

…。

「そんなこと言つてないじゃないか！わざと屈曲して考へないでくれ！」

しかし理事長は学校で見るときより威厳がなかつた。今日はいつものスーツじゃなく、ポロシャツとジーンズというラフな格好だからか毛isableないが。それだけじゃないような気がする。」

玲華にかかると皆こうなるな。
玲華が負ける相手つているのだろう
うか…。

「神崎君！君は玲華のことがどう思っているんだい？」

考えに集中していたら、理事長の両手が俺の肩を掴んで揺らしていた。その内容にちよつと戸惑う。

「あやー、なんて」と言つのみ。お父様じやなかつたら殴つてゐわ

卷之三

「トロのわきあいでるから呪こでしょ。話しありがなこどよ。」
「か出でてー。」

すこい剣幕で玲華が理事長を俺から引き離した。

たんたん話の内容がつかめただけもあり以前経小路かした誤解と同じものか。相手が彼女の父親なら適当にはあしらえないと思つてしまつた。

(と云つてゐる、か……)
ちゃんと考へたこと、ない気がする。なんとなく彼女が好意を寄

せてくれていいのは、さつきわかつた…けど。

恐ろしく淡い期待だ。

(期待?)

自分の何気ない考えに愕然とした。期待しているのか、俺は。

何を言わない。やがて「」とたぬ玲華

「マジと笑って理事長が言つ。あ、それはマズいんじゃないかな？」

とうとう玲華がとどめを刺す。

理事長はひきつった顔のまま固まっていた。はあ……。

* * *

玲華が理事長を追い出して、俺が食事を終わらせると次にリビングに通された。そしたら、これまたでかい濃いグレーのソファが一字型に置いてあって、そこにはすでに先客がいた。銀褐色の地肌に黒の縞の猫。

「シルちょっとどぞいてね」

さつと猫を抱いて長いソファから一人用のところにおりした。迷惑そうに猫がニャーと鳴く。

「しる？ 汁？」

「シルバーよ。あたしたちもさつれど」飯食べちゃつから、ここでくつろいでてくれる？」

そう言い残して去っていく。

……くつろげと言われても。しつこにようだけど、ここは初めてきた他人の家だし。

だけどそのソファは学校の部室にあるソファに、負けず劣らず座り心地がよかつた。

「悪いな、場所とつちまつて」

誰もいなくなつたので、一応シルバーに声をかけてみる。シルバーはチラリとこちらを一瞥し、そして大きなアクビをすると寝起きをした。ちょっとソファの色と同化してる。

確かにここは陽の光がブラインドで薄く射していたから、寝心地が良さそうだった。俺も横になつた。今は消えているがきらびやかなシャンデリアが目に入る。

育ってきた環境があまりにも違う。

それは一人一人違つていて当たり前なのだけれど。

両親だけでなく、使用人含めて愛されている玲華。それを今日見せつけられて、いたたまれなくなつた。

こんな俺がこの家に居ていんだろうか？ 玲華の近くにいて、い

いんだらうか？汚してしまわないだらうか？

ぼんやりとそんなことを考へてゐるついで、いつの間にか睡魔に襲われた。

* * *

次に目が開いたときには、シャンテリアの前に玲華の顔があつた。

「……」

しばらくボウとした頭で時間がすぎる。

「ゆ、め？」

「夢を見てたの？」

だけどその声はしっかりと耳に滑り込んできた。遅れて現実的なものとして目の前の状況を認識した。寝転んだまま目をこする。

「俺、寝てた？」

「す、ぐ気持ち良さそう」

「そつか…どれくらい？」

「一時間半かな……」

時間の感覚がおかしい。俺には、一瞬だけ落ちたぐらいの時間しか経つてないのに…かなり深い眠りだったよつた。久しぶりに熟睡したんだろう。

俺は上半身を起こした。上質の眠りだつたらしく、一時間半でも、頭痛も吐き気もないしかなり体が軽くなっていた。

「悪い…勝手に寝て」

「良いわよ、くつろいでつて言つたのあたしだし。その代わり…」

玲華が一旦言葉を切つた。眼光が鋭くなり、ふふんと笑つた。

「これからはあたしの言つ通りにしてもううわよ」

わかつた。

目の前の女は俺をたらふく肥らせて食べる氣だ。そう思わせる不敵な態度だった。

それから午後は、まず風呂に入れさせてもらつてから、スタイルをしてるという吉野さんという女性を紹介された。二人の女性の使用人も加わって、メイクを少しされたり、俺の寸法を計つたりアレコレ着せ替えをさせられた。言われるままにやつてたら、なんか操り人形みたいな感覚になつた。

まー飯も食わせてもらつたし仕方がない。だけどタキシードなんて柄じゃねえ…。出来れば着たくない。

「やつぱり白かしらねえ。清潔に見えるわ

「グレーも大人っぽいですよさゆり百合様」

「そうねえ。でもデザインでいくと、」「ちなんかも…」

「細身で身長あるし、何でも似合いますね」

あまり聞きたくない話題が続いていた。聞きたくないというか、どう対応していいか困るというか…。

玲華は、とすると先ほどから一人どこかへ出ていき、戻ってくるころには様々な種類のドレスを何着か持つてきた。

「あああっ。玲華様、わたくしがお持ちいたしますからっ

「いーのいーの。ねえ悠汰、コレとコレどっちがいいー？」

「俺に聞くな！」

つい怒鳴つてしまつたが、わかるかそんなもん。

どうして女つて、ことファッショングリーンに関してはこう優柔不斷になるのだろう。俺からしてみれば、露出狂扱いされず、それなりにダサくなく、その場で浮かなければそれで良いと思う。とにかく早く終わってくれ、と内心願つていた。

「もーつまんないわね。でも悠汰の服が決まってからでいいか…合わない」とやだしなあ

「あらー玲華ちゃんはどう着たいの?それから悠汰くんのを合わせるつて手もあるわよ

玲華の母親（小百合さん）が指を口元に当てて迷いながら言つ。なんで俺と玲華の服を合わせる必要があるのか、まったくわからな。俺は招待状を持った玲華の同伴者というカテゴリーになるからだ、と先ほど説明されたが、やっぱりわからな……。

「えー。じゃあ悠汰、色は？何色が好き？」

「…………」

「いり……。

色に好きも嫌いもない。昔から必要なものは服から文房具まで、すべて買いやえられていたから、自分で選ぶことがなかつたのだ。そんな概念、持ち合わせてなかつた。

俺は困つてしまつて、とりあえず田についたロングドレスの色を口にした。

「じゃあそれ、その黄色とか？」

「やだあライムグリーンってゆつてよーつてゆーか趣味ワルーい」

「だから俺に聞くんじゃねえよー最初つからー」

言つんじゃなかつた。肩からガックリと力が抜けるのを俺は感じた。

そのあとも女性陣が色のことで盛り上がりてしまったので、俺はこつそりその部屋から脱け出した。付き合つてられない。

そしたらこちらを窺つていたと思われる理事長に廊下で会つた。

壁越しに。

「なにしてるんすか？」

半ば呆れながら俺は訊く。おわり中に入れて貰えないのが寂しいのだろう。

「いや……べつに……」

「ホンと咳払いして理事長が姿勢をただした。

理事長は、多分俺の父親と同世代というのに、その中身はまるで違う。当たり前、と言わればそれまでだけど。

（こんなお父さんもいるんだ）

理事長からは、いまは娘に対する心配しか伝わつてこない。こん

な出来損ないの、不完全な俺の存在を気にするほど。

(だから心配なのか…)

学校で問題児というレッテルを貼られた男が娘に近づいたら、どんな親でも心配するのだろう。でもうちには娘がないから、父親がそれに該当するかわからない。姉か妹がいたら、少しほつちの家族も違つていただろうか？想像もつかない。

「疲れただろう？ちょっと休憩しようか」

悶々と考えていると、なんと理事長からお誘いが掛かつた。

「いや、でも服が、まだ着たままだし…」

自分から逃げ出したくせに、こまさら言い訳をしてしまう。確かに白いタキシードを上下きつちり着たままだった。汚したら大変だ。「君の寸法は測り終わつたのだろう？なら大丈夫だよ。あとは彼女たちが選ぶさ。服のことも気にする必要はない」

俺のことを良く思つてないはずなのに、理事長は紳士だった。さすがだ。同じお金持ちでも綾小路とはえらい違いだ。

(いや…こんな考え方こそが失礼だな…)

俺は思い直して頷いた。

理事長は葛城さんに紅茶を持つて来るよう頼むと、俺を連れて一階に降りた。外に続くドアを開くとそこはガーデンだつた。立派な庭に、白いテーブルと椅子が日陰になるように設置されてある。真正面になるのはなんとなく気まずかつたから、俺はちょっと斜め横向きに座つた。向かいでは、理事長は悠然と背もたれに寄りかかっている。

「いやー悪いね、暑いところで。ここなら女性陣の邪魔が入らないから」

「いえ、大丈夫です」

なんの話をするつもりだろうか？やはり玲華のことか？なんて考えていると、だんだん恐縮してしまつ。

「今回の件は災難だつたね」

「え？」

「謹慎処分の件だよ」

あの日のことは、なんだかもつ遠い昔のことのような気がしていった。だけどまだ一週間経つてなかつたんだ、と今さら気づいた。

「あ、やばい。俺、それ破つてますね」

よく考えると謹慎処分を無視して学園のトップに会つてこの今の状態は、かなりマズいんじゃないだろうか。

「構わないさ。玲華が言つには妥当性のない処分だったのだりつ~。信じてるんですか?」

校長には何を言つても聞く耳をもつてもらえたかったのに。

「親バカだと言われるだろうが、玲華のことはね。彼女はそういう顛願目で物事を見て嘘を言つ子子じやないから」

得意気に理事長が笑つて胸を張る。

いいな……そういうの……。親に信用されるつて、どうこう気分になるんだろう?

「俺もそう思います」

気づいたらすんなり言葉が出ていた。

そのとき葛城さんがアイスティを二つと、ミルクと砂糖をトレーニに置いて持つてきた。それらをテーブルに置くと、今回はずべこの場を離れて家の中に戻る。

理事長に手振りで勧められて、いただきますと言つてから、スト

レートの状態で一口飲んだ。ストローから冷たい液体が喉を通る。

「処分のことは、確かに最初は憤りを感じました。暴力奮ったのは確かだし、処分は仕方ないと愚つけど、他の連中と比べてしまつて

……

ただ黙つて静かに理事長は話を聞いていた。

「比べるからこそ納得がいかないんだつて今なら思えるけど……、あのときは余裕がなかつた」

謹慎ということは、一日中家にいなければならぬ。すごく不安だつた。だからなんで俺ばかりが、という気持ちにも陥つたんだろう。

その他のことなら耐える。耐えたと思うんだ。いろんな意味で走っている途中だつたのだから。せっかく前に進んでいるのに、これで転がり落ちるんだつて自覚した。

「だからもういい。今ならもう終わつたことだつて思えます」

また俺は立ち上がれたから。玲華のおかげで。

だけど理事長は厳しい表情をしていた。

「随分諦めが早いんだね」

「…………」

「そして君は自分の事ばかりだ。なんでそんなこと言われるのか分からないつて顔だね。では今回の件、暴力を回避する術はなかつただろうか？ そう考えはしなかつたかい？」

「そんなのムリだ。最初からアイツらは暴力で俺を黙らせようとしていたし、俺も綾小路はムカついていたから……」

「むかついたのなら暴力を奮つても構わないど？ やられたらやり返せ、という精神は感心しないな」

「だったらどうすれば良かつたんだ！ ただやられてれば良かつたのかよ！ 僕だって誰が好きでつかよ！」

氣づくと敬語なんか使つてゐる余裕がなくなつていた。

確かに俺はキレてばかりだ。とくに大人に、こんなふうに諭されたときには。だけど納得がいかないんだ。仕方ないだろ！

「誰が好きでケンカなんかするかよ。そんな回避の仕方なんか誰も教えてくれないじゃないか！ 玲華だつて遠慮して逆らわないのは許さないって……」

はつとなつて俺は途中で黙つた。いまここで玲華の名前なんて出すつもりなかつたのに。出すべきじゃないつて知つていていたのに。これでは玲華のせいにしてるみたいじゃないか。

「どういうことだ？ 今回のこと玲華が関係してゐるのか？」

理事長の顔が険しいものになつていく。やっぱり知らなかつたんだ。

あたりまえだ、一体誰が言う？

玲華は絶対言わないだろうし、綾小路だって男のプライドで言えないだろう。好きな女に近づいた男に嫉妬した腹いせだったなんて。「なんでもありません。確かに俺はガキすぎると思います。もうしません」

すべての気持ちを封じて俺は頭を下げた。頬むからこれ以上突っ込まないでくれと祈りながら。

ガキすぎる、これは心の底から思うんだ。

もうしないっていうのはどうだらう?できるんだろうか? たとえば同じ場面になつたときには…? まだ解決方法が見いだせないけど。

「君は…危なつかしいね」

次にポツリと理事長が言つたのはそんな言葉だつた。どういう意味なんだろう。口口口口変わる俺の態度か、玲華のせいにしかけたことか不明だ。

「すみません…」

深く考えないうちに謝罪が出た。なにやつてんだ俺は。自己嫌悪が渦巻く。

「あー! こんなとこにいた! なにやつてんのよ、二人してー」

玲華の声が気まずかつた空氣を打ち破つた。あんまり良いタイミングとは言えないが、少しほつとした。

だけどその姿を見て度肝を抜かれる。

「玲華! ドレスはそれに決まったのかい?」

玲華! ドレスはそれに決まったのかい?

焦りながら理事長が話を振つた。
薄く化粧もしている。

「試着よ、ただの! それにしてもなに話してたのよー余計なこと悠汰に吹き込んだらお父様でも殴るわよー」

ああ、口を開かなければ可憐なのに。つい俺はそう思つてしまつた。

「彼に暴力事件のことを聞いていたんだよ」

理事長は俺の内心を知つてか知らずがあつたりとバラす。

「いや、あの…俺が…」

なんとかしようとした口を挟んだけど、どうも言つたらいいかわからず、しどろもどろになつた。

「今さらなによ！聞きたいならあたしに聞けばいいじゃない」

玲華も玲華であつたりそんなことを言ひ。理事長は青ざめていた。「玲華もなにか関わつていたのかい？」

「関わつたもなにも、あたしにも責任あるつていう話よ。別にあたしが暴力奮つたわけじゃ……。あー…そうこうやーひつぱたいたわね、綾小路に」

いまの今まで忘れていたようで、思い出したように玲華は言ひた。「まるでどうでも良いよ！」

責任があるって言つた。もうこいつとか言いながら、やつぱりまだ玲華も責任を感じていたのだ。

「違うだろ、あれはうまく俺が立ち回れなかつたから…」

「えー、やだ。んなこと思つてたの？なかなかお互に割りきれないみたいね、綾小路のせいで」

「ちょっと待つた！パパにもわかるように話しなさい。つまり綾小路君が悪いのかい」

「だから最初からそつ言つてるじやない。もしかしてまだ校長寄りの見方してたの？」

「いつたいなにがあつたつて言つんかい？パパは最初から聞いたじやないか、綾小路君をひっぱたいた理由」

「えー？ もう…」

玲華が腕を組んで迷つていた。俺は親子の会話に入れず、ただ聞いているしかなかつた。なにが言えるつていつんだ？

「でもアイツ、反省して謝つてきたからなー。いまあたしが告げ口するわけにはいかないんだよね」

ぶつぶつ呟いている内容にちょっと意外に思つた。謝つたりしたのか、あいつ。

「えー、パパだけ知らないのはちょっと…」

「しょうがないじゃない。お父様はお父様だけど、理事長でもあるんだから」「

確かに玲華は蠶殻をしない。誰に対しても平等だ。好き嫌いははつきりしてるので。

「悠汰、もう行こ。ここ暑いでしょ」「

さらりと切り上げて玲華は俺の腕を掴んだ。

「え、でも…」

あまりに切り替えが早くて俺の方が焦った。理事長と玲華を見比べる。理事長は長年の経験からか、もう玲華が絶対言わないことをわかつたみたいで、諦めたような顔をしていた。だったら良いんだろつか。

「まだマナー講習があるのよ」

だけど、玲華の言葉でやつぱり行きたくない！と強く思った。

とはいって、いまさら本気で俺が拒めるはずもなく、玲華のあとに渋々着いて行く。

腕を引っ張られたまま行き着いた先はダイニングだった。空の皿やグラスが置かれている。いつの間に用意したんだろう？

玲華はこれらを使って簡単に教えていく。片手ですべてを持つやり方から、料理の取りすぎはダメだと、温かい料理と冷たい料理を一瞬の間に盛らないとかまで…。

「あとはそうね…。基本的にパーティは『ワゴニケーション』を大事にする場所だから、雰囲気を壊さないようにね」「

「えー」

これが一番不満に思つて、つい口に出る。なんか面倒くさい。面倒だし、苦手だ。

「えーじゃない、話しかけられて無視しないこと！もちろん口論なんて」法度よ

腰に手を当て玲華が注意する。

「それはおまえも大変なんじゃねえ？」

「あたしは大丈夫よ。猫力づるから」

そうだ。玲華にはこういう基準があった。

シルバーでも連れて行こうかな、とか面白くもないことを思つてしまつ。

それからダイニングを出ながら玲華が続けた。

「次はダンスね」

そのキーワードに俺はすぐには足が出ず、着いていけなかつた。なに?なんつた?

ドアを押されて彼女が振り替える。

「言わなかつた?ダンスパーティだつて」

「聞いてねえよ!」

「良いからついてきて」

「絶対イヤだ!あんなもんこいつぱずかしくて踊れるか!」

「あんなもん?知識としては知つてるようね。大丈夫だつて、ステップ全部覚えるなんて言わなかつたらさあ」

俺はあまりの展開に、頭がぐわんぐわんと揺れるのを感じた。

(あ、悪夢だ…)

悪夢は続いていたらしい…。

立ち尽くして動けずにいる俺に、玲華はこれ以上ない言葉を浴びせた。片目を閉じて口元には笑みが浮かぶ。

「言つとくけど、ここには逃げちゃいけない場面だからね」

ああーー!こんなこと言つられて誰が逃げると言つんだ!

仕方なく大股で玲華に近づき交渉した。

「じゃあそれが終わつたら、次は踊らなくていいような振る舞い方教えるよ」

「んまつ、抜け目ない」

□元を押されて玲華が意外な顔をした。イヤでも学習するだろ、ここまでできたら。

そして次に玲華が連れて行つたのは、大きな広い空間だつた。ホテルにあるような大広間のさらにもつと広くなつたような。

…で、奥にはグランドピアノがひとつ置いてある。これは本当に一軒家の室内か？俺は茫然とした。

「ウチでパーティをするときはここを使うのよ」

そう言って玲華が楽しそうにピアノの前に座る。世界の違いを、また見せつけられた感じだつた。

優雅にメロディに乗せて玲華の手が動く。クラシックは詳しく述べけど、俺でも知っている曲だ。

「なに？ その曲」

「ショパンの幻想即興曲よ」

弾くのをやめずに彼女が答える。題名を聞いてもピンとこない。じゃあどこで聞いたんだろう？ テレビかもしれない。ふーんとだけ俺は答えた。

「なにカリクリエストない？」

「べつに…」

知ってる題名はいくつもあるが、別段聴きたい曲でもない。ピタリと玲華の手が止まった。

「あんたねえ、パーティではもし仮にこうこう会話があつたら嘘でもなにか言いなさいよ」

「なんこと言われて…」

「まーしょうがないか。そこが悠汰の良いところだもんね」「どういう意味だろう？ 嫌味には聞こえなかつたから、そのままの意味なんだろうけど。

ソコってどー？

疑問に思つているとまた玲華の手が動いた。新しい全然違つ曲。

あ。知つてゐる。クラシックでもなく、身近に聴いていた曲。

(題名…なんだつた？ 確か確認したはず…)

俺の iPod にあつた歌だ。女性ボーカルの…玲華が一番最初にプレイリストに上げたやつだ。

「これ、 come with tomorrow よ」

滑らかな発音で玲華は言った。そうだ。そうだった。

サビに入るところで玲華が歌詞を乗せた。

苦しくても明日はくるから
大丈夫だから 悲しまないで
顔をあげて 一緒にいこわ

W i l l y o u g o t o g e t h e r i n t o m o
r r o w ?

永久に 隣りで笑うから

玲華が歌うと全然違う歌に聞こえる。あの歌手はハスキーだったけれど、玲華の声は艶やかで透き通っていた。

「これね、あたしが大好きな曲なの。悠汰の iPod にあって興奮してセットしちゃった」

演奏が終わって玲華は悪戯っぽく笑う。俺はひょっと困惑いながら言葉を選んだ。

「ここのでいつつて訊いたら、またしつこいつて言う?..」

「んー、もういつか。別に隠すつもりもなかつたんだけど、ようは寝込みを襲つたのよ教室で。そんでも身に覚えがないくらいしつちゅう寝てたんなら諦めなさい」

寝込み……。

そう言われて考えてみても、確かにコレという田が出でこない。諦めるしかないようだ。どこにでもすぐ寝る自分が悪い。

「しかし、おまえなんでも出来るんだな」

「そんなことないわよ」

「謙遜はときに嫌味に聞こえる…」

「いやー、ホントにわ。あたし全部が中途半端なの。ピアノだって小さい頃から習つてゐるけど挫折しちゃつたし

「挫折つ！」

似合わない人から似合わない言葉を聞いて、俺は愕然とした。そういう経験もあるんだ。

「なによ、その反応。言つとくけど一応英才教育は受けたんのよ。もしその中で何かひとつでも突飛な才能があれば、今じゃあの学園にはいないわ」

確かにそうかもしれない。あの学園は運動に力を入れている俺は最近知ったけど ようだが、その他はちょっと他校より学費がかかる程度だ。勉強も俺が入れたほどだから、兄貴がいるようなハイレベルな進学校には劣る。威張れないけど。

「じゃあとりあえずダンスしましょっか」

切り替えの早い玲華は立ち上がりて片腕を差し出してきた。手首を下に曲げている。

「きなりそんなことを言われても困る。また俺は動けずについた。「ちょっと一ダルいんだけど」

玲華に睨まれても動けない。慣れてないことをするのは大変な勇気がいる。というかこういう状態は…。

（やべえ、照れる）

「やっぱり俺にはムリだ」

「いいからほら」「いいからほら」

グイッと強引に玲華から手を取つてきた。いつもより露出の多いドレスという格好だから、なおさら困る。彼女のどこを支えて…といふが触れていいかわからず、左手が行き場を失つた。

ヤバい。変な汗をかく。

「いい？まず左足からだからね。とりあえずあたしについてきて」「ちょ…待て…」

「はい！いつち、にい…違うわービン踏んでんのよ」

「なんこと言われてもなあ！」

「ほら左足前に出して、いひ、いひよ」

やつぱり玲華はスバルタだった。きなり実践するか？普通まず説明あるだろ。

そう言おうとしたら扉があいて続々と人が入ってきた。

「ダメよ玲華ちゃん。そんな考え方じゃあ、彼が困つてるじゃない」

「君たち近づきすぎじゃないのかい？」

「やだパパ。野暮なこと言つちやダメよ」

「でもママ…」

なんかあつちでも揉めている。

そして玲華の両親だけでなく葛城さんも後ろに控えていた。

「音楽をご用意いたしましょうか？」

「ちょっと勝手に話を進めないで。そりやあたしだって時間あればイチから教えるけどさー、今夜なのよ本番は。ちんたらやつてる暇ないのよ。とりあえず葛城さん、音楽はまだいいわ。まだムリだから。それからお父様はウルサイ」

容赦の欠片もなく玲華が言い捨てた。まあ、と小百合さんが言い、かしこまりましたと葛城さんが頷き、それから理事長はガントンショックを受けていた。

なんだか頭が痛くなってきた。こんなことをしてまで行かなければいけないのだろうか？

「ほりーみんながミズさすから悠汰が疑問持ちはじめたじゃない」ちらりと俺の様子を見て玲華が言った言葉に、俺はまたつい怒鳴つてしまつた。

「俺の心を読むな！」

それから数時間みっちり指導を受けて、改めて俺たちは着替えをすませて西龍院家を出た。

玲華は悩みに悩んだあげく真っ白いドレスに決めていた。俺は黒いタキシード。男性は黒か紺と決まっていたらしい…。なんであるにイロイロ着せたんだろう。

(首…苦しい)

着慣れない服はいつもの制服のネクタイより締め付けられる感じがした。

会場は世羅の家の本邸ではなく、同じ敷地内にある別館だった。パーティ専用に建てられたものだと玲華に聞いた。

広間は二階にあって、一階にはサロンとか気分がすぐれない人用の個室まであるのだそうだ。ここまでくると感動を通り越して呆れてくる。不景氣はどこへ行つた？

そして広間に集まつた紳士淑女も、同類の世界のきらびやかなオーラをまとっている。なんと…というかやつぱりというか、綾小路も来ていた。他にも見た顔が数人いる。学校のやつらだ。

(俺浮いてる…)

居心地が悪い。いま玲華は会う人会う人挨拶とか軽い会話をしている。

来て早々に、どうしても玲華に言われたので、主催者には挨拶に付き添つたが俺はすぐに邪魔にならないように隅に引っ込んだ。

主催者とはもちろん世羅の両親だ。母親はパーティ好きと言われていたが、それがじみ出でいて、メイクもドレスも派手だつた。

そして父親は薄くなつた頭髪に、でっぷりと脂肪の乗つた肉体。先入観があるのせいかもしれない。なぜこの女性はこの男を選んだのだろう、と考えてしまった。顔に出でいたらしく、そのとき玲華に肘で小突かれた。

そしてまだ世羅はちょっと遅れているとのことだった。

並んでいなくともわかる。父親は血が繋がっていないからもちろんだが、母親にも世羅は似ていない。おそらく彼女は実の父親似なんだろう。

そして隠れるように小学高学年くらいの男の子が母親の後ろにいた。可愛らしくも一丁前にタキシード姿だ。この子はこの一人の子供だとわかる。よく似ていた。

テーブルにはたくさんのが馳走があるけれど、西がらくとほとんど食べる気がしない。

綾小路は一度玲華に声を掛けたが、それだけだった。玲華の拒絕が効いているのか、反省したのか俺には分からなかつたけど、もう危うい目をしてないからアホな真似はしないだろう。

(はあ…帰りたい…)

何度も思つたことだけれど、またついそう思つてしまつ。だけどその都度、すぐに思い直すんだ。

どこに?

「どうしたの? また暗くなつてゐるわよ」

いつの間に挨拶を終わらせたのか、玲華が近くにいた。

「いや、なんか俺浮いてない?」

「そんなことないわよ、この中で一番格好良いわ

「社交辞令は腹イッパイ」

俺は玲華に片手を上げてウンザリ感をアピールした。ほとんどの人が一癖も二癖もありそうで、本音を別のところに持ちつつ誓め合つてしているのだ。話す会話といえば、ほぼ女性はドレスや装飾品で、男性は事業や趣味の自慢話。

「何が楽しいかわかんねえ…」

「まあまあ、みんなそれでストレス発散してんのよ。お互いわかつて会話してんだからそれで良いの」

俺の言わんとしてることがわかつたらしく、玲華がそう解説してくれた。うげつ、ますますわかんねえ。

「それよりほら、あの人。あそこで一際オーラを放つてゐる人いるでしょ。あの人世羅のお母様のお父様。浅霧功男様よ」

玲華の指差す方を見ると、一人タキシードではなく和服を身にまとつたご老体が、そこにいた。額にシワが濃く刻まれている。確かに威厳がありそうだ。二コリともせず、厳しい顔のまま一人の男性と会話している。

「ちょっと顔を出しに来ただけみたい。さつき挨拶したらすぐ帰るつて仰つてたわ。頑固な人でね、こういうパーティ嫌いなの。西洋カブレだと批判なさつてるのよ。でも娘、世羅のお母様には甘くて何も言わないの」

なるほどそれで和服か。

しかしあんな怖そうな人と対等に挨拶とかする玲華はやっぱり凄い。

「で、一緒にいる人がお母様のお兄様たち。世羅にとつては叔父ね。手前にいる頭が薄い方が長男の雅男様。今では功男様の事業をほとんど受け継いでるわ。奥にいる太めな方が次男で功一様。一応ひとつ会社を分け与えてもらつてるけど、あまり手腕はないわね」

様とか呼びつつ、玲華の紹介の内容が雑になつてきたのに気づいた。あまり尊敬してないのだろうか。

「で、近くのテーブルにいるスラッとした青いドレスの方が雅男様の奥様で礼子様。とっても厳しくて怖い人よ。で、あつち、あそこにある紅いドレスのふくよかな方が功一様の奥様で朋美様。スッゴいお金使いが荒いの」

わざわざ一言ずつ特徴を含んで紹介することで思い出した。俺がここにいる理由。

世羅の家の誰かが犯人かもしれない。この中の誰かが……。

そう考えると見方が変わる。いけないことだと分かつてゐるのに、あの日の犯人とダブらせて一人一人を当てはめてしまふ。そんなことをしても判るはずないのに。

「あと、あそこの奥の扉の前でこっそり控えてる人いるでしょう？　あの人気が執事の柳田さんやなぎだね。あまり棍さんと接してるとこからは見てないわ。それからメイドが…」

「もういい

俺はまだまだ続きを紹介に低く唸つて止めた。全員疑えとうのか？ 気分が悪くなる。

「まだ世羅の従兄弟とかーそれぞれの秘書とかもいるんだけじょー恐ろしいことを冷ややかな眼で玲華は言うし…」

「闇雲に言われてもわかるかっ。第一、覚えられねえ…」「ダメねえ。まあ全員いるわけじゃないから…あつ

喋つている途中で玲華が手を口元に当てる、凄く驚いた顔をした。なんだろう、と思つて振り向いたら、真正面の出入口付近に世羅が来ていた。

世羅はこんなときでも真っ黒いドレスを着ていた。黒がよく似合うとはいって、ドレスまで漆黒とは。でも髪をまとめている、やつぱり学校とは雰囲気が違う。

「世羅が男性とパーティに出席するなんて…」

玲華のこぼれるような言葉に、ようやく俺は世羅の隣にいる人に目を向けた。背中しか見えないが確かに男だ。しかもオジサンじゃない、若い男。

なんとなく見ていたら、世羅が男に何かを話しかけ、それに答えるように男が頭を動かした。顔がこちら側に向く。

「え？」

今度は俺が驚く番だった。驚くつていうより固まつた。目の前の状況を理解できない。

「なんで…」

「悠汰？」

その男を凝視する。

見間違ひなんかじやない。見間違えるはずがない。長年ずっと見ていた顔だから。

いくら見慣れないタキシード姿だからって、いくら外用の、眼鏡なしの顔だからって…。

「なんで、兄貴がここにいるんだよ…」

そう。そこにいたのは、間違いなく実兄である神崎惣一だった。

「兄い？ウソ…イケメン兄弟…」

兄貴は部屋で勉強している。俺にはそのイメージしかなかった。学校に出る時間も帰る時間も合わないから。合わなにようにしてたから、俺が。

その兄貴がこんなところにいて、俺を嫌っている世羅といふ。

「なんで…どうで…？」

どこで知り合ったんだ？世羅と。なんでいるんだ？…」「…」俺は知らず知らずのうちに、パニックに陥っていた。

「ちょっと悠汰？」

気づいたときには、駆け出していた。兄貴の姿がだんだん近くなる。近くなつて、大きくなつて、こちらに振り向いた。

「…っんで兄貴がここにいるんだよ…」

そして怒鳴っていた。会場の雰囲気とか、人の目とか無視で。思考能力皆無で。

だから空氣を読んでる余裕なんてない。兄貴は驚きもせず、なんの感情もない眼で見返してきた。

「お前こそ、なにしてる？謹慎中だろ？」「

静かな声。だけど呆れ返つてるのがわかる。

「答えるよー…なんで世羅と？」

「お前に言つ必要はない」

それだけ言うと背中を向けて遠ざかっていく。世羅を見ると鼻で嗤わらわれた。あざわら嘲笑つて、兄貴のあとについて行つた。一人の背中だけが残像のように見える。

冷たくあしらわれた。それがわかつて追えなかつた。何度もあの眼を見る勇気はなかつたんだ。

「待つて世羅。あたしにも挨拶しないつもり？」

気づくと前に玲華がいた。底われているように感じてしまつ。世羅だけが立ち止まり振り向いた。

「まさか君がこの男を連れてくるとは思わなかつたな」

「悪い? あたしの同伴者よ。バカにしないで」

その会話にまた驚く。いつもの仲の良さじやない。なにより玲華が……。

(玲華が怒つてゐる……)

「馬鹿になんてしてなこさ。今田は楽しんでいくといい

言葉とは裏腹に世羅は馬鹿にしていた。そのせいか玲華はもつ何も言わなかつた。

* * *

パーティも中盤に差し掛かり、とうとうダンスマタイムになつた。絶対踊らないといけないのかと思つたが、合間に休憩を入れる人がいた。踊らなくても浮かないのは助かる。

「いつの間にケンカしてたんだよ」

玲華も踊る気がないのか、俺と一緒にあの二人を見ていた。兄貴と世羅は遠くにいて、やはり踊らずに、何もなかつたように談笑している。

「ちょっとね」

玲華の口が重い。こんなことは初めてだつた。ダンスマジックがうるさいせいかもと思つたけど、曲と曲の間も沈黙してたから、もしかしたら落ち込んでいるのかもしれない。

そんな感じで数曲流れたあと、俺たちのテーブルに近づいてくる人があつた。

「こん、ばんは。あの……礼儀知らずとは思つたのですが……神崎さま」と……

淡いピンクのドレスを着ていた櫻井だつた。來ていたのか。

俺とも玲華ともどちらとも取れるようになつたあと、もじも

じしている。玲華は彼女の言いたいことが解明できたようで、安心させるような笑顔を浮かべて頷いた。

「とんでもない。」この時世、女性からダンスを誘つってのも有りだと思つた。ところが、悠汰踊つてあげなさい」

「げえつ」

すでに踊らなくて良いと安心していた俺は、不意打ちを食らつて気持ちが態度に出た。

「げつじゃないわよ。女の子に恥をかかす気?」

「あの……一曲だけでいいので……」

そう言われてしまつと、しぶしぶ俺は櫻井に向き直つた。

「言つとくけど下手だからな」

すると櫻井の顔が赤くなつて、それからほにかむような笑顔を見せた。

ここまで来たら仕方がない。俺は腹を決めて櫻井の手を引っ張りダンスフロアの端っこを陣取つた。

生演奏で曲が流れ出す。様子を窺うように会場全体を見渡していくと、下からクスクス笑う櫻井がいた。

「ワルツです」

読みを当てられて、今後は俺の顔が熱くなる。まだ曲を聞いただけでは、種類がわからない。それがバレたのだ。

ステップを頭で思い出しながら、曲に合わせてぎこちなく動いた。

「もうお怪我は大丈夫ですか?」

氣を遣つて櫻井が声をかけてきた。だけど必死であまり深く考えられない。

「ああ」

「良かった。心配してました」

「そう……」

「…………西龍院さまと、『出席なんですね?』

「まあな」

「やつぱり……」

「え？」「

不自然に櫻井が黙つて、俺は自分より小柄な彼女を見下ろす。

櫻井は踊り慣れてるだろうに足元ばかりを見ていた。

「なんだよ。途中でやめんなよ、気になるだろ？」「

怪訝に思つてそう言つと、パッと櫻井の顔が上がつた。ぎこちない表情。

「西龍院さま、素敵ですね。わたしのような者にまで優しくて…。あの日もわたしが保健室のまえでウロウロしてたら入れてくれたんです」

「…………」「

「この場合のあの日とは、俺がみつともなく意識を失つた日だ。保健委員だからいたんだと思つてた。」

「他にもワラワラいた生徒をすべて散らしたんですよ。神崎さまが気にするだろうからって

「なんで玲華の話なんかするんだ？そんなに気を遣わなくてもいいだろ」

「でもわたしの家はしがない一つの会社の社長で、今日も友人のツテで来てますし。財閥のお嬢様と話が出来るだけで…」

櫻井の声が徐々に小さくなる。そんなこと気にしてたのか、と思う。いや、おそらくそう思つるのは彼女だけじゃないんだろう。クラスマートの心酔した目が浮かぶ。

「くだらねえな。そんなこと思われて、本人だつて嬉しくないだろう」「う

「え？」

そのとき意識が散漫になつていって、別のペアと櫻井の背中が接触しそうになるのに気づいた。慌てて櫻井の手と背中を引き寄せる。

「あつぶね…」

「いい」とつまづきすり抜けて踊るのよ。それでもしふつかつたら謝るの。

玲華の教えが頭に響く。

(はいはい…)

心の中で返事をして、再び櫻井と周りを見渡した。

「あの…いまのお話…」

なぜか赤い顔に戻りながらも、櫻井は先を聞きたがった。

「ああ…だから、おまえはおまえで玲華は玲華つことだよ。もう比べんな

何回も同じステップを繰り返していたら、だんだん慣れてきた。

ホツと息を吐く。

「それと様と敬語はやめろよ。同じ年だら」

「でも」

「でもじゃねえ。ハナツから馴れ馴れしいヤツもムカつくけど、ずっと丁寧なのも変だ。空しいだら、そういうの」
端から馴れ馴れしいってどこで、自分のことを棚にあげてゐつて、ちょっと頭を震めたけど無視することにした。

やつと櫻井に笑顔が戻る。

「やっぱり神崎さまは優しいです」

「あの方…」

「聞いてたか？俺の話。

「西龍院さまが好きになるのがわかります」

「…………」

俺にはわからない。櫻井が言うその内容も、どうこうもりでそんなことを言つたのかも、わからなかつた。

「空しいだけだって神崎さまがわたしに言つたとき……、神崎さまが空しくなるんだと思って……ああ、わたし失礼なことを言つたんだって思つて、苦しくなつてつい逃げたけど……違うんですね。あのときの言葉は、お試しなんかで付き合つと、わたしが空しくなるつていう意味だったんですね」

勘違いしてたんだ、つて今“ぐる気づく”。確かに俺が言つた意味は後者だ。

櫻井は俺の幻想を追つてゐると思つていたから、幻想が真実と違う

姿だったとき、本当の気持ちに気づいたとき、寂しくなると思ったんだ。

「だからやっぱり神崎さまは優しかった。それが再確認できただけで、わたし充分です。今日を想い出にできます。『ごめんなさい困らせ。もうワガママ言いませんから』」

少しだけ目に涙を溜めて、口元には笑みを浮かべて櫻井は言った。しっかりと俺の目を見て。

女ってみんなこんなに強いのだろうか。

そう思つてゐるうちに曲が終わった。櫻井は自分から俺の手を離し、ありがとうと言つてお辞儀した。俺は元いた位置に戻るべくその場を離れた。

やつぱり残るのは罪悪感だけだ。応えられないから、なにも言えない。

(玲華がない)

辺りを見渡しても元いた場所にいなかつた。それどころか、兄貴と世羅も見えない。

(どこいった?)

焦つて探して回る。嫌な想像が勝手に頭を巡る。会場内にはないことを確認すると俺は身をひるがえした。

そのとき前に女が三人立ちはだかつた。突然で一瞬固まる。

一番右にいるやつはクラスメートだ、と俺の中のデータから呼び出される。確か澄川^{すみがわ}なんとかだ。残念ながら下まで名前は出てこない。

澄川が真ん中の子を指差しながら言つた。

「神崎さま。この方と踊つていただけるかしら?」

真ん中の女は緊張しているのか俯いて険しい顔をしている。この状態を一気に理解できて、俺は顔をしかめた。面倒くさいことこの上ない。

「悪い。俺ちょっと…」

「櫻井さまとは踊つてらしたのに、不公平ですわよー。」

澄川が厳しく言い放ってきた。それに俺は苛立つ。

(んな暇ねえのに)

だいたい当の本人が何も言つてこない。左のやつも澄川に任せているのか、ついてきてるだけだった。

「この子はね、あの澤登さまの『令嬢なのよ』

どの?、と突っ込みそうになつて俺はギリギリ黙つた。雰囲気を

大事にしろと言い続けた玲華の言葉が、思い止まらせているのだ。

苛々がつのる。

「いや、俺はそういうのわかんないから」

「お待ちなさい。無礼は許しませんよ」

そのとき俺の中のなにかが切れた。

「うるせえんだよー櫻井はけやんと自分で言つてきたんだー家の話なんか関係あるか!ー

ビクリッと体を強張らせて立ちぬく澄川を無視して、そこを通り抜けた。ちょっと遅れて後ろから声が届く。

「まあーヒードイー澤登さま、あんな無礼な方相手にすることはないわ

「そうですね、サイテーですわ。ああ涙をお拭きになつて……」「すぐにフロアを出たから最後までは聞こえなかつた。構つてられるか。

櫻井の勇氣には少なからず敬意を表していたんだ。そんな櫻井まで引き合ひに出してきたから、許せなかつた。

それより玲華だ。

気持ちを切り替える。一階の長々と続く同じような個室の扉側の廊下に出る。しかしさか個室を開けてまわるわけにもいかなくて、外から聞き耳を立てながら判断するだけで精一杯だった。

静まりかえつている部屋がほとんどだ。なかには怪しげな…といふか、夜を満喫する楽しげな男女の声が聞こえてしまって慌てて離れる。そして一番奥の部屋からは数人の会話が聞こえてきた。

「こんなパーティを勝手に開いたかと思えば、そんなことを考えて

いたのか

ちょっとしわがれた大人の男性の声。

「しようがないでしよう? 玲華ちゃんが怪しんでるのよ。何度もうちに来たわ」

じちぢらは世羅の母親の声だった。玲華の名前が出て、つい俺は立ち去るタイミングを逃した。

「もう遅いんだよ。噂は水面下で広がりつつある。あの刑事達がこそそこそかぎまわっているからな」

また、別の声が聴こえる。先ほどよりはちょっと高めの男性の声だ。おそらく浅霧家の誰か。

俺は玲華について挨拶にまわらなかつたことを後悔した。

「このままじゃまずいぞ。おい、世羅はどうした?」
世羅の義父の声もした。かなり余裕のない聲音だ。

「帰したわ。勝手な行動ばかりするんですもの」

「確かに、どこの馬の骨かもわからん男に唆されおつて」
馬の骨… 兄貴のことか。世羅の義父の台詞に、知らない間にムカムカしてきた。兄貴はそんなふうに言われなければならぬ人間じゃない。

「馬の骨、か。ここにもそういう出のやつがいたな」

「なんだと? 義兄さん! それはどういう意味ですか! ?」

「やめてあなた。揉める場合じゃないのよ。とにかくお父様にバレる前になんとかしないと…」

バレる? なんの話をしてるんだ? 俺がさらに扉に耳をおしあてようとしたとき、カツカツという足音が聴こえた。

(誰かくる…)

本能で隠れないといけないと脳が命令するが、廊下には隠れられるような場所がない。焦つて隣の部屋に飛び込んだ。静かな部屋だったそこは、やっぱり無人でホッと胸を撫で下ろす。

足音はこの部屋を通りすぎ、例の部屋で止まった。扉をノックする音が聞こえる。

「皆様そろそろお戻りになられた方がよろしいのではないかと」「わかつたわ柳田。そうね、主催側が揃っていないと不振に思われるわ」

誰も居なくなつたことを確認して俺も部屋を出た。
やつぱり浅霧一家はなにかを隠している…もしくはなにかを企んでいる?噂つてなんだろう?

俺にはその内容は解明できなかつたが、いまの人たちがなにかに危惧していることはわかつた。

それから少なくとも今の大人たちには、兄貴は招かざる客だとうことも。そして世羅は独断で動いている。

(あー、頭がクラクラしてきた…)

考えても解決しないから、俺はとりあえず玲華探しを再開することにした。

「うわっ!」

廊下からロビーに出る角で、突然目の前に男が現れて俺はみつともなく声を上げた。

その相手はあらかじめ俺の来るることを予想してたみたいで、出会い頭にぶつかりかけたことはまったく動じず、上着を両手で整えただけだつた。だけど顔には汗をダラダラかいてて、余裕がない。「顔を貸せ…ではなく、話をさせろ…でもなく……話がしたいんだが、良いかな?神、崎、君!」

がつしり俺の肩を掴み、その男、綾小路が瞳孔を開いた顔のままひきつりまくつた笑みを見せた。怖すぎる…。

なんで俺はここ…綾小路亭とバー カウンターなんかに隣同士で座つてゐるんだろ？…。

この建物には3階にバーまで用意されていたのだ。小さいけれど完璧にバーだ。

先に来ている客が数人いる。

玲華のことは気になるが、あんな顔を向けられては断れない。それに、兄貴と世羅がいないなら大丈夫だろ？と思つようになつた。

「こんなとこ來ていいんだ？」

金持ちだろ？が貧乏だろ？が高校生は未成年で、法律は平等だ。たぶん、たしか…。

「真面目なんだな」

そしたら綾小路はものすゞく意外な顔をした。ほつとけば、バーにいる制服を来た男性（たぶん浅霧家のお抱えなんだろ？）も、心得ているのか何も言わずにアルコールを出してきた。綾小路は来て早々にマティーニを注文したので、考えるのが面倒くさくて、俺も同じのを頼む。

「まさか飲んだことないとか言わないだろ？」

「べつに…」

俺だつて中学時代に、純平たちと集まつたとき正直アルコールを飲んだ。最初は缶ビールから飲み、苦いだけで美味くもなんともなかつたことを思い出す。…っていうか、綾小路だつて充分意外じやないか。

「あんたも意外と不良だよな」

女は押し倒すし、気に入らない相手にはボロぬし。俺の真意を読み取つたらしく、隣の男はばつの悪い顔をした。

「だからここに呼んだんだ…その、やり過ぎたと思つて…」

綾小路が玲華に謝つたと聞いたときには、信じられなかつたが、本当だつたんだと思つた。

「というより、玲華が言つたんだ。自分より、神崎悠汰に謝れと…。だけどそれだけじゃない。僕にだけ処分が無かつたのも、僕には辛かつた。校長先生が間違つていうのも分かつっていたのに、僕にはなにも言えなかつた。卑怯者だよ」

いきなり語りだした内容に少し驚く。あのときそんなふうに思つていたのか。目からウロコ。

「こんなとき玲華ならきつとはつきり言ひ、愛想を尽かされても仕方ないな。しかしそれでも僕は玲華が好きなんだから……困るよ」「困る」と言いながら心底嬉しそうに綾小路が笑う。そんな自分を誇らしく思つているみたいだ。コイツは心底スゴいやつだ。どこまで玲華に惚れているんだろう。

「だから君には負けない」

「なんでそこで俺が出るんだよ。俺を怨むのは筋違いつて言つたら？」

「本当は言いかけて殴られたのだから、伝わつてないかもしないが。」

「この期に及んで何を言つ？見ればわかるよ。あんな玲華は初めて見た」「猫被つてたから当然だろ」

「そのことじやない。僕たちは世羅君も含め、子供の頃から親の都合で付き合いがあつてよく知つてるんだ」「

綾小路がどこか遠くを見ながら口にグラスをつけた。

「子供の頃は僕にもあの頃なりの地で対応していたんだよ。いつからかな、他にも同じように遊んでいた子もいたけど、大人になるにつれて距離が出来るようになつた」

持つていたグラスを傾けて綾小路は俺を見た。

「世羅君とはずっと仲が良かつたのに…一人は喧嘩でもしたのかい？」

先ほどの一言い合ひを綾小路は聞いていたんだね。だけど俺に聞かれてもわからない。

「ちょっとね、って言つてたけど……」

「珍しいな。世羅君は玲華のことをとても大事に思つていたんだよ。男の子たちのイタズラから玲華を護る騎手ナイトみたいにね。でもまあ、玲華もただ護られるようなお姫様ではなかつたけどね」

当時のことを思い出しているのか、懐かしそうに笑う。

「コイツならなにか知つてゐるだらうか。ふと僅かな希望がわいて俺は訊いてみた。

「浅霧さんの家つていま大変なの？」

「…………さあ、そういう話しさ知らないが？」

なんだ今の間は……。

綾小路は顔色を変えたり、妙な動作はしなかつたが、その間だけは気になつた。

なにを躊躇つた？ なにかを知つてゐるのか？

「噂、あるよな世羅んち」

さらりに俺は突つ込んでみる。噂なんて俺も知らないが、先ほど世羅の母親たちが言つていたことを思い出して、カマをかけたのだ。
「知らないな。それより今日はどういう風のふきまわしだ？ なかなか似合つていたじやないか、ソシアルダンス」

無理矢理、話を変えられたように感じた。綾小路はダンスの形を腕だけで作つて、からかうように笑う。

「脅しにはのらねえぞ」

「なんの脅しだ？ ああ、君が恥ずかしがつてゐるから、ばらされたくなければ言いなりになれ、とかいう類いか？」

綾小路は呆れて肩をすくめた。

「それは無理だな。この学校では珍しくない場面だ。騒ぎにすらならない」

やつぱりイヤだ、こんな世界。ぐつたりと背もたれに体を預けながら、俺はため息を吐いた。確かに恥ずかしいなんて概念は、慣れ

てない、もしくはガラじやない一部の人間しか持たないだろ？

「さて、そろそろ行くか」

綾小路が立ち上がる。いきなりの展開の早さにギョッとなつた。

俺の動きが鈍かつたせいか綾小路が続けて言つ。

「謝りたかったのは本音だが、本当はまだ君は嫌いなんだ。あたりまえだろう？ 礼儀を知らないし、なにより恋敵なんだからな。そんな男とじっくり飲む趣味はないよ」

あまりに穢やかに嫌いと言われて、俺は対応に迷つた。怒鳴られれば怒鳴り返せばいいし、殴られるなら殴り返す。しかしこれでは反論できない。

訝しく思いながらも綾小路についてバーから出た。代金は参加費に含まれてるらしい。そういえば俺の参加費も玲華んちが負担してるんだ、と今さら震えた。

バーのすぐ近くにちょっとした囲われた空間があつて、ソファでくつろげるようになつている。

どこかの高級なホテルみたいだ。綾小路はそちらに足を伸ばした。俺は下に戻ろうと思い、じゃあとあと挨拶しようとしたら左腕を掴まれた。

「なんだよ？」

批判する声も聞かずに、綾小路は強引に無言のまま俺を引き連れ、ついにはソファに座らせた。力強くて、先ほどまでの穢やかさがない。

暴力の続きか？ と一瞬身構える。

「てめえ…」

「おまえはやっぱり馬鹿だな」

俺が叫ぶより早く、綾小路はタイをいじりながら吐息を吐いた。殴りかかるような素振りはなく、あの日にあつたような身の危険も感じなかつた。

なんなんだ？

不信に思つてみると、内緒話をするように俺の耳元に近づき綾小

路は囁く。

「浅霧一家の噂なんて、あんなにじぶん話すもんじゃない」
その内容に俺は眼を瞠る。

「おまえやつぱり……知つて……」

「その話しさはここではタブーだ。それをおんなとこりで。バー・テン
ダーも、他の客だって目を光らせたのに気づかなかつたのか?」「
まったく気づかなかつた……。それでおんな妙な間が空いたのか。

「なあ、それつて……」

「おまえがここにいる意味がわかつたよ。まったく玲華もお姫様に
なりきれば良いのに」

「ちょっと待てよ! 勝手に話を進めんな!」

「うるさい、怒鳴るな。こういうところでは喧嘩も本来タブーだ」
冷静に綾小路が諭す。やつぱりムカついたが俺はそれに従つてト
ーンを落とした。

「その噂教えるよ。やつぱり事件のことなんだな?」

「ああ、玲華も知らないことだ。だけど彼女なら気づいているかも
しれない」

「だからなに?」

俺の心がはやる。綾小路は少し迷つたような顔をした。それから
辺りを見渡してさりに小さい声で言つ。

「玲華には言わないでくれ。梶さんの件で警察が浅霧一家を疑つて
いる。そして殺害時間にアリバイがないのが……」

一旦綾小路が言葉を切つた。俺に嫌な予感が湧き上がる。なぜ、
綾小路がわざわざ玲華に言つなど釘を差す必要があるのか。それを
考へると、次に発せられる内容は容易に想像できた。

「この中でアリバイがないのは、世羅君だけだつたんだ。警察は世
羅君を犯人と絞り込んで捜査してると、いう噂がある」

やつぱり……。展開の悪さにイヤになる。

だけど世羅は違うだろ? あんなに、誰よりも犯人を憎んでいた。
唯一無二の存在だと俺に言つたんだ。あれが彼女の真実ではないの

か？

でも噂があることは本当で、だとしたら警察が疑っているのも頷ける。もしかすると、だから池田は俺になにも教えてくれなかつたんじゃないだろうか。

考え込んでいると綾小路が静かな声をだした。

「大丈夫か？」

意外な声に俺は顔を上げた。なにを想像したのか心配そうな表情。なにをつて…。

わかつてゐる。俺の精神状態だろう。

勘違いでもなんでも、あの日の過呼吸になつた姿を見て、恐れるんだ。そのことを知る人からは、よく浴びせられる視線だ。本当に見ている者まで苦しませる姿らしい。昔、小学生の頃同級生にそう言われた。

だけどそれは家族を除いて…だが。

「大丈夫だ」

いつまで…こんなことを気にしないといけないんだろう。そう思ひながらも、俺は気づけば綾小路にそう答えていた。

* * *

綾小路と別れて、俺は再びフロアに戻った。

だけど玲華の姿はまだない。探せることにはすべて探した。俺を置いて帰るはずはないなんて思う。まだパーティは続いているし。三階に行つてゐるあいだにまた移動したのだろうか？ そう考えて降りようか、と一瞬迷つた。
(まだそこがある…)

会場の奥にはバルコニーがあつた。きらびやかなカーテンが揺らいでいるのが目に入る。

俺は人の隙間をすり抜けてバルコニーに出た。一陣の風が頬を撫でる。

少し広めのその場所に玲華が一人でいた。手すりに手を置きながら見ていく。

「ここにいたのか」

余計なところをぐるぐる回っていた。

「どうしたんだよ？」

「ちよつとね」

先ほどと同じことを同じように言つ。

なんでもない、とか言われないだけマシかもしない。そういうわれたらそこで終わつてしまつから。

「俺に言えなこと？」

俺も玲華の隣を確保し手すりに背中を預けた。玲華がやつといちらを見る。

「悠汰には言えるわ。ちくしょー、やつぱそーかー。… そうなのよ。世羅が解らなくなつてきちゃつて…。ちよつと寂しいだけ」

なんか勝手に納得してから、本音を語る。

寂しい、か。確かにそれは感じていたけど、いつも素直に言われるとどう返していいか迷う。

「この間も世羅に話してもりおつと挑発したんだ。でも結果あたしが先にキレちゃつて。優しく促してもダメ挑発もダメで、今後どうしたものかと…」

玲華は迷つてこるようだつた。世羅に本音を語つてしまつんだ。

「仲悪いの？お兄様と」

突然そこに話を振るか？って一瞬戸惑つ。

本人が駄目なら周りからとことだ。そしていきなり現れた兄貴はきっと何かを知つている。なにかに関係してゐる。

「昔は、普通だった。普通と一緒に遊んだり、おもちゃの取り合ひなんかで喧嘩したり…。普通の兄弟だったよ」

他人の家と比べたわけではないが、少なくとも今みたいな距離感はなかつた。

いつからだらうか。親が介入し続け、なんとなくギクシャクして。

「ずっと比べられてたんだ。兄貴とは。兄貴は優秀で、俺は……。いつのまにか会話がなくなつて、兄貴も俺のことを……」

その先は言えなかつた。親同様、兄貴も俺をお荷物みたいに扱うよくなつた……なんて、どうして言える。

まだ認められない何かがあるんだ。認めたくない、軽蔑されてるなんて。

まだそれで終わりにしたくないんだ。それを認めてしまえば完璧に俺はお荷物になる気がした。

「ふうん。でも悠汰は良いところ、いっぱいあるけどね」

悠汰は男だけどね、みたいに当たり前なことを言つよつて玲華が言つた。

社交辞令はお腹いっぱいだと言つたのに。やつぱり玲華は社交界の人間なんだ。

「あー信じてないよー。まったく警められ慣れしてない人つてこれだから……。素直に受け止めなさいよ」

「なんこと言われても……じゃあどいが? つて聞いてやるよ

「裏表がないとこよ」

「ああ……」

なんだそんなことか、と思ひ。そう言えば聞こえは良いだらうが、

要は単細胞つてことだらう。

上手く立ち回れなくて、感情で生きるバカ。まともに交渉が出来ないし、かわされてばかりで……。

「警めてるのになに落ち込んでんの?」

「うるせえ。……じゃなくて、おまえも物好きだなと思つてな」

欠点ばかりの俺に気を遣うなんて、少なくとも俺にはできない。

「ホントにねー。ホレた弱味つてやつよね」

深く考えもせず、玲華が言つた。あまりにサラリと言つもんだから、一瞬流しそうになつた。そして、はたと固まる。

におわす場面はいくつかあつたが、言葉にして言われたのは初めてだつた。それも櫻井や他の女子みたいにコクるつて感じではなく

て…。

(本当だつたんだ…)
ヤバい、全然実感がわかない。そして無意識に同じ質問をしていった。

「どうが?」

「どこって?」

「えつと、……どこに?」

「あー…、あたしを崇めないとこかな?」

「なんだよソレ」

「猫力ブつたあたしに特別扱いしなかつたからよ。稀少価値だわ」「いくらでもいるだろ、そんなやつ」

あの学校にいるから会えないだけで、身分とか気にしないやつもお嬢様の価値が分からいやつもザラにいる。

「そんなのきっかけの一つでしょ。理由なんてあつてないものよ自信満々に玲華は言つ。どこか他人事に聞こえてしまふのはなぜだろう。

そんなんだから、適当にふうん、と答えてしまつた。

「イヤだなあ、告白され慣れてるやつって。まつたく有り難み感じてないんだもん」

「つて…言つわりには櫻井と踊らすし、俺とは踊らなこでさつせとこんなところに一人で脱出してるし」

「あら、途中までは見てたわよ。やつぱりあたしの教え方は完璧だつたと思ひながらね」

しつと玲華が胸を張る。

「教え方つてあのスバルタか?」

正直教えられる方にとつてはたまらない。完璧なんかじやない。穴だらけだ。

「イヤな顔しないの!それでどうだつた?初実践は?」

「向いてない」

俺は体を反転させ、手すりの向こう側に腕を力無くダランと下ろ

した。

「一度と踊りたくない。ガラじやねえし。つていうかこいつこいつ霧囲氣全体が」

「あつそ、残念。あたしは似合つてると思つたけどね」「櫻井と…踊つたら、知らない女がこの子とも踊れつて言つたんだ」言つつもりなかつたのに、俺はなんとなく語りだしていた。玲華が注意深く聞いている。

「霧囲氣を大事にパー・ティを楽しむ、つていう精神は素晴らしいことかもしんねえけど、そこでムカつく気持ちを抑えてまで笑つて合わせて、本当にそれで相手には良いのかつて話だし」「考え方は人それぞれだつて、そんなことはわかつてるけど。

「それつて俺は嫌なんだ。誤魔化されたくないし、嘘もつかれたくない。だから俺も正直がいい」

「つまり、断つたわけね」

大人しく聞いてるかと思つたら、声が途切れたところで玲華がため息まじりに呟く。

「それつて美緒ちゃんじやないの？澤登美緒ちゃん

「名乗らなかつたから……ただ澄川がそう呼んでた気もするけど」再び撫然としてため息をついた。

「あやなちゃんと美緒ちゃんか…。あんたつて女の敵だつたんだ」「どういう意味だよ」

「そこで怒らない。はあー。まあ正直なのも良いことだと思つわよ。はあ実際そうだし。素直じゃないときもあるけどねえ。でもねー。はあ

ー

これ見よがしにため息ばかり玲華はつく。なんだよ一体。

俺は憤りを感じずにはいられなかつた。女の敵？だつたら男の味方か？違うだろ。

オトコの…つてといひで、ふと俺はあることを思い出した。今まで忘れていたのもどうかと思うが、話を変えるのこちようど良くて利用してしまつた。

「もう言えば綾小路に会つた。つーか話した。謝れって言つたんだつて？」

「ああ、そりよ。相変わらず話の通じないこと」ひあるねだり、マシになつてたでしょ」

辛辣に容赦なく玲華が言つ。せつと当人が聞いたら泣くな。

「まあな…。“やり過ぎたと思つ”とか“謝ろつと思つて”とかは言つてたけど肝心な謝罪の言葉は無かつたけど」

「まあ、プライドの高い男だからね。それでかなりの進歩よだから許してやつて…っていう意味が含まれていた。あんなに嫌つていたのに、じつにこれはやっぱり幼なじみといつものなのだろう。

なんか面白くない。

「そう言つそつとなつて驚いた。面白くないってなにが？」

「で、他にはなにか話した？」

急に真面目になつて玲華が訊く。

どうしよう。綾小路は言つた。玲華は気づいているかもしれない、とも言つた。気づいてなかつたら、傷つくだろうか。それとも言わない方が…？

ダメだ。判らない。

「まだ、玲華が好きだつて」

違う。そんなことどうでもいいのに。

「はあー。あんたやっぱり嘘つけないねー」

「いや、嘘ではないけど…」

「世羅のこと話したんじゃない？違つ？」

「なんで…」

「しまつた。こんな返事では否定をしてこむことにならない。鋭い玲華には危険だ。

だからといって狼狽えてしまつて、次の言葉が出ない。

「この状況であんたがそんな顔すんのはそれしかないわ」

つこ自分の顔を撫でてみる。どんな顔をしてんだろう。せつと情

けない顔だ。

「正直者でいたいんでしょう、言つてよ」

「ひつきょー……」

卑怯な返し方。自分で言つたことだけぢ。

「大丈夫よ。だつてあたし信じてるから」

確かに俺だつて、世羅がなにかしたと思つてゐるわけではない。
俺に向けたあの眼の方が現実味リアリティがあるから。でも俺は世羅のことをよく知らない。本当に信じられるかは正直判らなかつた。

(でも……玲華なら)

玲華のことなら大丈夫だと思つてしまふ。それが過剰な期待になつてしまふのが怖い。自分みたいに負けるんじゃないかと、恐怖感に囚われる。

「信じてるなら、訊くなよ」

「あんたもあたしをノケモノにするの？」

玲華の目がウラ、ギリモノと責める。

間違えた？ 違つのに。除け者なんとするつもりはない。それは

“言つた”と言つた綾小路の言葉も例外ではなくて。

心配？ そうか、これが心配するつてことなのか。

まるで初めて触れたみたいに思つ。感じたことがなかつたわけではないのに。

「だから、そんなことは一ミリも思つてなくて……」

気づくと想いが声に出でいた。

「玲華が寂しいとか言つから。つて、もちろんそれを責めてるわけでもなくて。寂しいときにはうそ、追い討ちかける話しもどうかと思つし。かといって、俺がなんとかしてやるつて言えたらそれが一番良いんだけど……。兄貴に立ち向かう勇氣とか全然追いついてないのに、んな無責任なことも言えねえ……。結果、玲華がひとりで頑張らなきゃいけなくなるかもしねり。……心配なんだ」

正直に誤解のないよつとおおつとするだけなのに、やけにまわりくどくなる。

「玲華のことが心配なんだ。世羅がなにかしてるのは確かで。玲華が信じんのは自由だし、わかる。でも俺はまだよくわからない。俺がいま玲華に言えないつてことは結局そういうことなんだ。俺が世羅を信じきれないんだ、まだ」

玲華の視線が痛いけど、俺は外に目を向けていた。交わらないようとした。

「ばか

隣で玲華の頭が低くなつた。手すりにもたれ掛かつてゐる。しばらくどちらもなにも言わなかつた。玲華がなにかを考え込んでいたのは、空氣でわかつたけど、俺はこれ以上話すと言つてしまいそうで黙つていた。

そしてずっと外の景色を見ていると、ふと動くものが目に入った。動物、かとも一瞬思つたが違つた。人だ。

浅霧家の敷地の外で、電信柱に隠れるように、一人潜んでいる者がいる。

「あれ、刑事だ」

確かにそうだ。池田じゃない。あの日池田と共に俺に事情を聴いた刑事のなかのひとり。名前なんて当然忘れた。

「え？ どこ？」

「あそこ。電柱んとこ」

刑事は尾行や張り込みのプロだ。そんな専門家に俺が気づけたのは、対象が俺や玲華、少なくともいまこの建物にいる者ではないからだ。だつて久保田のことは見つけられないから。

俺は刑事の向いてる方を目で追つた。高い塀が邪魔をしてよく見えない。

でもなんとなく想像はつく。刑事が追つている者で、この建物にはいない者。

「世羅を尾行してるんだ…」

「なんですって？」

しまつた。また声に出てたらしい。

俺が玲華の方を向くのと、玲華が駆け出したのが同時になつた。慌てて腕を伸ばす。自分でも驚くようなスピードで玲華の腕を掴んだ。

「おい待て！ 行つてどうするんだよ！」

「刑事から話を聞くわっ」

「教えてくれるわけないだろ？ 僕だって池田にかわされたんだ！」

池田が誰かを教える余裕もなく俺は怒鳴つた。

「それでもあたしは… 逃げられない。逃げたくない。逃げたくない。世羅があたしから逃げるなら、追いかけなくちゃいけないの！」

ゆつくりと俺から力が抜けていた。

その隙に、するりと玲華の腕が滑り落ちる。そのまま玲華の後ろ姿が見えなくなつた。

逃げたくないって言つた。

そんな台詞を聞いてどうして引き留められる？ 今さら自分のバ力さ加減に呆れた。初めから、俺と玲華は違うんだ。元の核となる部分で違う。強さが。

先ほどまでの葛藤が嘘みたいに、俺も走つていた。

玲華のあとを追うようにフロアを走り抜けた。人と人の隙間に走るべき場所が見える。ぶつかることなく順調に走つたのに玲華に追いつけなかつた。

ヒール履いてたよな？ なんであんなに速く走れるんだろう。それだけ必死つてことか。

周りの人の迷惑とか考へてる暇もなく、一階に降りて、そのまま外に続く扉を開く。

バルコニーの下にあたる道路に向かつて右に曲がった。先にたどり着いた玲華の立ち尽くす姿が見える。

世羅も刑事の姿もすでになかつた。

誰もいない。移動したんだ。

左側に道がある。刑事が見ていた方から推察するに、こちらに行つたんだと思った。俺たちは会つてないから。

だけど玲華は諦めきれないのかわざりこまつすぐ先に行く。

「れい…」

違う、と叫ぼうとしたときだつた。浅霧家の高い塀が途切れると

ころ、その右の角から新たな影が現れた。

玲華の前。

影だと思ったのは、黒ずくめで闇に染まつていたからだ。一瞬見えなかつたくらい。

だけど街灯に照らされ、手元あたりでキラリと光るものがあつた。背景が影だからよく目立つ。

全身の感覚が警鐘を鳴らす。

見たことある。出会つたことがある危機感。

「玲華！」

俺は追いかける脚に力を込めた。まるで自分が追われてるみたいに本氣で走る。似たものがあつたから。

「きやつ！」

玲華の腕を掴むと、影との距離を引き離し、玲華の全身を覆うよう抱き寄せながら自分の背中で盾にした。

逃げる余裕まではなくて、硬く口を閉じ覚悟をする。

「うつ…」

だけど後ろから男の低いうめき声と、何発かの殴る音が聞こえてきた。

「久保田…探偵」

俺の腕越しに奥を見ていたみたいで、玲華が呟いた。それだけで後ろの状況がつかめる。

久保田もプロだな。ちゃんと仕事をこなしたんだ。こんな突然の非常事態でも間に合つんだから。

玲華もようやく状況を理解したみたいで、俺の中で少し震えた。

それが伝わつたのか俺も震える。いや、本当は俺からだったのかもしれない。

「悠汰、もう大丈夫よ」

玲華がそう言つて俺の腕を軽く叩いても、俺は動けなかつた。怖くて動けなかつたんだ。

玲華を失うかと思った。自分が死ぬかもしれない、と思うより怖かつた。

震えが止まらない。

「おい、大丈夫か」

久保田に呼び掛けられて、ようやく玲華を離した。

久保田をみると、ひとつも怪我はなさそうだ。ネクタイはしていないが、今日もスーツを着ている。

そしてその先に目線を移すと、影のように全身真っ黒な服を着た男が伸びていた。

「犯、人？」

この流れで玲華を襲うなんてそれしか考えられない。

だけど、なんで俺じゃなくて玲華なのかがわからない。俺のはずだつた。

おとりになると言つたとき、自分が危険な目に遇う覚悟をしたはずだつたのに。

玲華に危険が向くことは不思議と考えなかつた。だから怖かつたんだ。

「犯人かと聞かれれば、否定も肯定も出来てしまふな……」

「どういうことだよ」

「こいつは通り魔事件の犯人だ。ナイフの特徴が一致している」

久保田は犯人から取り上げたナイフを、顔の高さまで上げてちらつかせた。用意周到にハンカチでその大きめのナイフを握っている。タガーナイフだ。その情報はニュースで報道していたから、俺でも知つてゐるけど、そんなものだけで断言できるのか？

玲華は俺たちをすり抜けて犯人に近づいて行く。俺より早く久保田が反応した。

「おい、危ないぞ」

「……つまり、梶さんを殺めた人とは違つてことね」

「あを失つてゐるとはいへ、勇敢にも犯人の顔をじろじろ見てゐる。

「そうだ。それより早くここから離れるぞ。警察には祥子君から連絡してもらつ。あとは適当に知り合いを呼んでおくから」

「どういう意味だ？」

「またあの長い事情聴取をうけたいか？オレは御免だ。警察は好きじゃない。大丈夫だ、信用できるやつに第一発見者になつてもらつ」淡々と語りながら久保田は携帯を内ポケットから取り出した。あまりに当たり前みたいに言うから、しばらく呆然とその動作を見ていた。

「あたしはイヤよ。そんな真似できないわ」

「コイツは無差別犯だから、君が狙われたのはたまたまだ。恐らく自分の犯行にみたてた殺人が起こつたから、この家を見張っていたんだろう。大丈夫だ、女も用意して完璧な理由を考えてるからバレない」

「そういうこと言つてんじゃないわよーあんたつてバレなきゃ犯罪を犯しても構わないタイプ！？」

「最近のガキはタイプとかナーナー系とか、すぐ一括りにまとめたがる」

厳しいことを言つ玲華に、反論した久保田の声は弱々しかつた。二人が球技大会のときに話をした、というのは聞いたが、恐らくこんなときでも玲華は玲華だつたんだろう。

「俺も逃げない」

これで逃げたら男がすたる。疑われても噂されても、自分に後ろめたいところがなければ大丈夫だ。

それが逆なら？……考へるだけで嫌気がさす。

「いいのか？また母親が嘆くぞ」

「汚え言い方すんな！」

こいつは優しくしたり、突き落とすような言い方したり真意が読めない。

（だからイライラするんだ）

掌で転がされてるみたいに感情がむき出しになる。抑えられない。「てめえは好きにしろよーでも俺は言つからなー! てめえの名前とこのスバルらしい功績を」

「そうね。あたしたたちが警察に行くんなら、あなたもいすれは行かないといけなくなるわね、大変ね」

玲華も同様に被せてきた。違つたのは、やつぱり玲華は傲然と笑つていたところか。強さがまるきり違つ。

久保田が降参して白旗を挙げたのは、だからやつぱり玲華がいたからなんだろう。

俺だけだつたら言いくるめられていたかもしねい。
それはそれでちょっと落ち込んだ。

「また君か」

報告を受けた池田が、他の刑事たちと現場に到着して、まず初めに発した言葉はこれだった。

もちろん俺を見て。

今回は殺人事件があつたわけではなく、犯人検挙に結果繋がつたということで、前回より早く解放された。

世羅を見張つてた刑事もいた。池田に何やら耳打ちしていく、遠目だつたけど確かにコイツだと確信した。ここにいるつてことは、尾行は終わつたのか…もしくは巻かれたか、だな。

一番逃げたがっていた久保田は、顔見知りの刑事がいたみたいで、その人 いかにも威厳がありそうな感じで、池田より偉い人のようだつた から、なんか……叱られていた。また首突っ込んで！つて…。良いことしたはずなのに、ちょっと悲惨。

警察署から出る頃には夜も更けていた。

今回は久保田が送るつてこともあつたのか、親とかは呼ばれなかつた。玲華は家に電話を入れてたけど。

「帰りたくないな…」

またしてもそう思う。決心したはずなのに、いざ家へつて考えると帰りたくない要素がふんだんにあつた。まず出方からして強引で最悪だつたし、まだ謹慎中なはずだから、また閉じ籠らないといけない。それに兄貴には会いたくないし…。

玲華の運転手、眞鍋さんを一緒に待つてる間、俺はチラリと久保田を見た。

ウンザリしたようにヤツは切り返す。

「またそれか？」

「前は今日は帰れって言つたから、他の日だつたらいいんじゃないの？」

「イヤなこと覚えてるな。そんな意味じゃない。揚げ足とるな。今田も帰れ」

「だったらウチ来るー？」

樂観的に玲華が間に入ってきた。

「いや…さすがにそれはちょっと……」

「これ以上迷惑かけられない気持ちがあつて、さすがにそれには断る。」

「ふーんだ、つまんない」

「つていうか君は女の子だろ？ 気軽に男を家に呼ぶな」

「やだー久保田さんって、意外とオッサンくさい」

「おつ……」

やつぱり玲華には誰も敵わないのか。久保田は一瞬だけ怯んでた。
「だいたい、オレは君に言つたと思うが？ 事件に関わるなど。その結果がこれだ」

「そんな話してたのか？」

聞き捨てならなくて俺は顔をしかめる。

「いいじやない。一個解決してるじゃない。そりよ、そんなハナシしに来たのよ、この人」

「オレがいなかつたらどうなつてたと思つてるんだ！」

久保田が本気で怒鳴ると、さすがに玲華も黙つた。変わりに俺が言う。

「でもいたから、おまえ。ちゃんと譲つてくれた。助かつた、マジで。ありがとう」「う」と

素直な気持ちだった。久保田がいなかつたら、確かに今「じゅうじうなつていたか分からない。

玲華が傷ついていたかもしれない。それを避けただけで、感謝したかつたんだ。久保田に。

「いや…仕事だから……」

なぜか久保田が動搖したような声を出した。そんなに意外性があったのだろうか。素直な俺……。

「まったく、聞いてられないわね。それより今晚のことだけ、ウチがダメならビデんちならどう、頼んでみるけど」「行きたい！」

ナイスアイデアだ。俺は即答した。希望の光が射し込んだ気がした。秀和なら気兼ねなく一瞬にいれそうだ。あいつの方が気を遣いすぎるくらいがあるけど。

「駄目だろう。家族に心配かけるのか？」

「おまえはいつもそう言うよな！あんなん家族じゃねえよ！」

「まあまあ、落ち着いて悠汰。久保田さんにも大人の事情があんのよ。子どもは子ども同士、勝手にしましょ」

「そんな話を横でされて見逃せるか！」

「しようがないじゃない。あたしはあんな家にもう一度悠汰を帰すなんて真似はできないわ」

「あんな家でもコイツの家だ。いつまでも逃げれるもんじゃねえ」「あのさ、本人無視してウチのことで口論するつてどうかと思うんだけど……」

かなり複雑な気分に陥る。まーー、他人にあんな家呼ばわりされても仕方がない家だけど。

(あれっ？)

「つていうかおまえ母親の手先だろ？あんな家とか言つていいんだ？」

「手先って……。依頼者だ。間違えるな」

心底カンベンって頭を抱えていた。また、あれ？って思った。

ちょっと俺が想像してたのと違う。確かに依頼者なのは聞いていたけど、それ以上の動きをしてたじやないか。告げ口とか。

「母親の依頼って俺を護るつてことだけ？」

それならチクる必要ないだろ。

すると一瞬久保田の視線が泳いだ。それから、ホントは守秘義務

があるんだけど、と前置きして言った。

「護るうえで、見たこと聞いたことは全部報告することになつてん

だよ

「やっぱり手先じゃない」

俺より早く、玲華が冷たく言い放つ。

だけど俺は分かつていてことで、いまさらながら呆れた。呆れすぎて悲しかった。

「あの女…いつもそなんだ。咲田さんとか周りの人間を使っていつも俺を見張ってる。中学の時は教師の一人を買収していた。それでいつも、なにかあつたときだけ家に帰るんだ」

事件を目撃した日は外せない用事があつたのか、珍しく帰らなかつたけど変わりに久保田を雇うし。

「もう、なに考えてんのかさっぱりわかんねえ」

「なんでもって訊いてみなかつたの？訴えたことはなかつたの？やめろって…」

「最初は、あつた。でも“あんたの為よ”って一蹴されて終わり」「そこで終わりにしないでよ」

玲華が抑えた声で、でもとても厳しいことを言った。玲華なら、俺の親とでも渡り合えそうだ。見たくないけど出来ていたら苦労してない。

「とにかく、問題はそこだな。悠汰が言い返せれば一番良いんだ」久保田がこれまた簡単に結論を言う。

「とりあえず明日は休みだしさ、タキシードのまま帰るわけに行かないんじゃない？服はあげるつもりだったけど」

そうなのだ。そのまま警察に来たから、まだこんな格好のままだつた。玲華もドレスだ。

肩が寒しそうだから、今は俺が着てた上着を羽織つている。掛けてやつた、というより奪い取られたんだけど。

「え？いらねえよ」

「一着ぐらい持つても損はしないわよ」

「つていうか…なんかいろいろ貰いすぎてるつていうか…」

飯も食わせて貰つたし、参加費だつて払つて貰つたし…。貰いす

きて返せてない。特に玲華には。形のないものも呑わせて…。

そんな俺を見て、久保田がニヤニヤ笑いながら言った。

「遠慮すんなよ。未来のダンナになるなら、『ういづパーティーに
もつと出ないといけなくなるぜ』

「ちょっとあんた！なに下品なこと言つてんの？信じらんない！」

真っ赤な顔をして、立ち上がって玲華が叫んだ。先に玲華に叫ば
れて、俺は少し出鼻をくじかれた。

「君たち…うるさい！ここは家のリビングじゃなくて警察署ー！」

突然池田の声が後ろからした。通りかかったついでに叱つたよう
だ。

事情聴取が終わつたあと、受付のある一階のソファがあるところ
で待たせてもらつていたのだ。

そのまま池田はまだどこかへ行こうとする。俺は声をかけたくな
つたが躊躇われた。

「悪い」

二人に断つてから池田を追つた。

玲華には聞かれたくない話だつたから、一人からは見えない位置
で池田を呼び止めた。

「ちょっと待てよ」

「どうした？」

「あなたの相棒か部下か知らないけど、アイツなんで世羅を見張つ
てたんだ？」

单刀直入に訊くと、池田は少し困った顔をした。

「あいつ、まだまだだな。こんな少年に見つかるとは」

「疑つてんだろ、世羅のこと」

「君は訊いてばかりだな。教えられないと前にも言つただろう」

「世羅だけアリバイがないって本当？」

「探偵の真似事か？だつたら他を当たれ」

「やはりダメか。あつさり門前払いを食らつた気分だ。

「じゃあ、兄貴はいつから世羅と会つてんだ？それならいいだろ？」

「まつたく…」

池田はまいつた顔をしながら頭を搔いた。それから仕方がないと
「いつよう」に息を吐く。

「一週間くらい前から確認している。見かけたのは今日で二度目だ
った」

「一週間前…。短いのか長いのか微妙で、複雑な感情になる。

「気づかなかつたのか？」

「あ…。兄貴とはあまり家でも会わないから
では普段との変化も分からぬいか？」

「変化つて…？」

「いつもより苛立つてるとか、なにかソワソワしてたとか。なんでも
いい、小さな変化だ」

「そんなの…」

気づくと俺が質問されていた。タダでは転ばない感じが不愉快にな
る。

（でも結局、俺はわからないとしか言えないんだ…）

（俺にわかる」とってなんだ、なにがある？）

「もつと注意深く周りを見るようにすべきだな。確かに見ないこと
は楽だ。なにも知らなければ傷つかなくて済む。だけどそのうち大
切なことも見落とすぞ」

穏やかな声で、かなり本気で叱責された。

わかつてるよ、そんなこと。そう返したかったけど、また頭だけで
実感できてなかつたら嫌だから、言わなかつた。

大切なことつてなんだ、つて思つた時点で解つてないつてことだ。
「神崎君にはもつといろんな人と話し合いすることを勧めるよ。
最初はムカつくかもしれない。感情にまかせて怒鳴るかもしれない。
だけど根気よく、相手の意見がわかるまで話し合うんだ」

なぜいま、そんなことを言うのか分からぬ。だけど大事なこと
を話してるのは分かつたから、ただ黙つて聞いていた。

「特に今は兄と話してみると。今の君に一番近い存在だと思つ

が？」

ふつと笑つてそう助言する。

説教くさいとか、大きなお世話だと以前の俺は思つただろう。でもこのときは、すつと素直に耳に入ってきた。

というよりもただ、兄貴が近い存在つてどうことかを考えていたんだ。兄弟だからだろうか。

「悠汰、迎えが来たわよ」

玲華が俺を探して呼びに来た。もう世羅の話は終わっていたのに、ギクリとなつた。なんの後ろめたさか不明だ。

「じゃあな、頑張れよ神崎君」

忙しかつたのかもしれない。池田は俺の返事も待たずに足早に去つて行つた。髪もボサボサでスーツもよれよれだから、もしかしたらあまり寝てないのかもしれない。

忙しいのに、俺のために時間を少しぐれたんだ。やつぱりそういうことを、今頃になつて気づく。

「仲いいのね、刑事さんと。前に学園に来たのあの人？」

玲華が池田の後ろ姿を見送りながら言う。そつ…、とだけ俺は答えた。

「あ、そうそう。結論でたわよ。今日は探偵事務所に泊まらせてもらうことになつたわ」「は？ なんで？」

久保田が許すはずないだろ。

「それからあたしもね」「だからなんで！？」

ますます分からぬ。

怪訝に思つてる俺に、玲華は悪巧みをするような笑みを浮かべた。あまり良い予感のする笑顔じゃない。

「だつて、これから作戦会議するんだもん。必要でしょ？ 対策」「だもん… つて、おい」

「あーでも、祥子さん？ つて人の家が近いらしいから、あたしはそ

つちに泊まらせてもらひことになつたけど。残念ね悠汰くん

「ばつ！だれがつ！」

「だからね、とりあえず悠汰は久保田さんと帰つて。あたしは一旦帰つて着替えて行くから。悠汰の服も持つて行くわ」

なんか楽しそう。楽しそうに玲華は話を先に進めていた。

俺の青くなつたり赤くなつたりする反応はすべて無視の方向で！
「ちょっと待てって。そんなこと理事長が許すのか？」

突然の娘の外泊なんて、とてもじゃないがあの親バカ力加減では耐えられないんじやないか。俺の頭に、玲華を相手にしている情けないときの理事長の顔が浮かんだ。

「あれ？言つてなかつた？今日お父様はお母様と一緒に実家なのよ。あ、お父様の実家ね」

だからパーティ欠席だつたんだけど、言わなかつたかしら？と、もう一度玲華は付け足した。

聞いてない。つていうか不思議とそんな話の流れにはならなかつたのだ。

「まー、いたとしても女性の家に泊まるのよ、なにか問題ある？世羅んち泊まるのと変わらないわ」

堂々とした迫力で玲華は言い放つ。まー、そんなんだろうけど。「でもよくアイツが許したな。俺がいくら頼んでもダメだつたのに泊まることもそつだが、作戦会議だつてそうだ。事件のことに関しては関係ないつてスタンスだつたのに。

「悠汰は正攻法で頼むから断られたのよ。あたしもまえ、それでいつたらダメだつたわ」

一旦言葉を切つて、玲華が不敵に笑つた。至極楽しそうに、まるで史上最强の武器を手に入れたみたいに。

「いい？悠汰、真つ直ぐなのも良いけど覚えておくといいわ。この世には“奥の手”つてものがあるのよ」

一応知つていたけど。そんな言い方するもんだから、覚えたくなえよ！と強く反論したくなつた。

代わりに久保田に少し憐れみを覚えた。それはさすがに口にはできない。

* * *

玲華の意の通り、久保田はまた事務所に連れていてくれた。その間、なんで引き受けたのか、いくら質問しても答えてはくれなかつた。

「どうでもいいだろ？お望み通り帰らなくていいんだから」「ど、仏頂面で言われたのだ。拗ねているようだ。

事務所に着くと祥子さんがいた。久保田が遅くなるときは、キリの良い時間で先に帰るらしい。今日は一度帰つて、再び呼ばれたようだ。

「お腹空いてませんか？お弁当買つてきましょ？」

祥子さんは俺たちを見るや否やそう言つた。玲華も祥子さんも、女性が気にするのはまず食のことのようだ。言われるまで、腹がへつてることなんてすっかり忘れていた。パーティではそんなに食べなかつたし。

「そういうオレも食つてない。じゃあ適当にコレで」「適当が一番困るんですけどね」

久保田が財布を渡すと、受け取りながら祥子さんが苦笑した。そしたら久保田が矛先を俺に向けてくる。

「おまえなに食いたい？」

「なんでもいい…」

「なんでもいいが一番困るんだよ」

「自分が言われたからって俺に当たるなよ…」

オトナの汚い部分を見た気がした。

「じゃあ適当に買つてきますけど、文句言わないでくださいね」

そう釘を刺して祥子さんは出て行く。

そしたらしばらく妙な空気が流れた。なんか気まずい。

車の中では気にならなかつたのに。室内が静かすぎるからかもしれない。

向こうもさう思つたみたいで、ひとつ咳払いをしてから口を開いた。

「悪かつたな。手荒な真似して」

「なに? いきなり…」

「悠汰が母親と家ん中入つていくとき、そう思つたんだよ」
実は、久保田も辛かつたんだ。思いもよらないことだつた。
でもそれを信じたら、俺の為にしたんだつてことがわかつた。母
親の依頼のためじゃなく、俺のため。

「もういい。ホントのことだしな」

根本的なことを解決しないとなんにもならない。

久保田が言つたことが頭を巡る。

今日は解決法も教えてもらつた気がした。久保田に玲華に、それ
から池田に。言い返せと、話し合えと。

あとは俺自身の問題だ。

「立ち向かえるのか? いつか…」

勇気が持てるのだろうか。母親と兄貴と父親の三人。

特に父親には、姿を目にしただけで息が詰まりそうになるのに。

「立ち向かえるぞ。いまのおまえを見てたら、とくにさう思つよ。
成長期だらう?」

あんまりこうこう場合、成長期の言葉は意味が違うような気がするんだけど。

ま、いつか。今はこれで。

「嬉しかつたら素直に笑えよ。いますづえ変な力オしてんぞ」

「うつせえ!」

やつぱりこんなヤツに感謝すんじゃなかつた!

しばらくしてから事務所の扉が開いた。

田線を移すと、祥子さんが某有名なお弁当屋の袋を持って帰つてきた。後ろには玲華もいる。

「下で一緒になつたんですね」

「お邪魔しまーす。へえ意外とマトモな事務所じゃない」

やはり女性が加わると一気に華やかになる。玲華はジーンズにTシャツというラフな格好で、イメージが百八十度変わった。こういう格好もするんだ。

それから、まずは腹ごしらえだといつ話になり、祥子さんが買つてきたお弁当を広げた。

そんなことだと思った! って言つて、玲華も自宅からタッパーにサラダやらお惣菜を持ってきていた。

なんか庶民的。たぶん中身はあのお抱えシェフが作ったものだろうけど。

長椅子に俺と久保田が座り、向かいに玲華と祥子さんが一人掛け用のソファに座つた。

「もう食えねえ…」

いち早く根を上げ、つい食べすぎて俺はソファに寄りかかる。動けなくなるほど食べたのは久しぶりだった。いつもは途中で飽きてしまう。食べるのが億劫になるのだ。

(なんで今日は…)

たぶん楽しいから。人と食事をして楽しかつたからだ。

「情けないな。全然食つてないじゃないか。あつ信じらんねえ、コイツ唐揚げ一個残してる。メインは食えよ」

「そうよ、お昼も残してたし。育ち盛りなんだからちゃんと食べないと。とくに野菜をいっぱいね」

「胃が小さいんですね。大丈夫、毎回お腹いっぱい食べてたら大きくなるんですよ、胃つて」

三人に一斉に責められて俺はゲンナリした。

ちゃんと食えなんて、親にも言われたことない。それどころか、もう何年も一緒に食べてないけど。

いつもは咲田さんが作ったのを、一人で温めて食つだけだ。残しても誰もなにも言わない。

「うつせえ。食えねえもんは食えねえよ」

ボソボソ抵抗してみたが、もう三人は食事を続けていた。楽しそうに、軽口を叩くような会話をしながら。

俺はそれをぼんやり眺めていた。

慣れない光景。こんな大勢で食事をすることが、現実味がない。遠い位置にある。

(なんか…へんな感じ……)

パーティのときの食事とか、学食の空間まで行くと、逆に極端すぎてこんな気持ちにはならない。

こういうのが普通の家庭の食事?こいつらは家族じゃないけど。うんと小さい頃、家族揃って食事をするときが少ないけれど確かにあった。でもこんなに笑い声とか雑談みたいな会話は、なかつたよう記憶してる。

「あ、ねえ悠汰。プリン食べない?」

いきなり話を振られてすぐくびりくりした。

ぱうっとしそぎたらしい。反応が遅れた。

「こりない。……いや…やつぱ食ひ…」

「どっちよ。いま油断してたでしょ」

軽く笑いながら玲華が俺の前にプリンを置いた。三個で一パックのやつじゃなくて、デパートの地下とかじやないと買えなさそういやつ。玲華が持ってきたらしい。

「ありがとう…」

「うわっ悠汰が素直」

「どうした?食いすぎで熱出たか?」

「先生、あり得ませんソレ」

ぽんやりしたまま礼を言つたら、すく失礼な扱いをされた。ちくしょー。

ムカつきながらプリンを口に入れると、意外と旨かつた。それはそれでなんか悔しい。

「じゃなくて、作戦会議はどりうしたんだよ」

どん！とテーブルを叩いて話を無理やり変えた。

自分の気持ちを切り替えるため、と話が逸れすぎだと思ったから。

早く先を定めたい気持ちもあったと思つ。

「そういえばそんな話だつたな」

「おい…」

「いまさら降りたなんて言わせないわよ」

今度は玲華が俺側について久保田に先制攻撃を食らわす。

「わかつてゐるよ。考えればいいんだろ」

「もうあんじやないの、作戦」

「マジで？ なんだよソレ」

「やつぱり調べてたみたいよ、この人」

「ひでえ…。あんだけ俺に説教じみたこと言つといて」

「おまえらな…勝手に話を進めんな」

久保田はテーブルに肘をついて頭を抱えていた。横田で同情の余

地なしというふうに玲華がチラリと見る。

だけど祥子さんがお弁当の殻とか片付けだして、焦りながらあたしもやりますって言つていた。

「大丈夫大丈夫。玲華さんはお話ししていくください」

につこり祥子さんに微笑みかけられて、玲華はすみませんと言つて座り直す。

なんというか、同性には殊勝な態度だ。

なぜ祥子さんより歳上の久保田には容赦がないんだろう？ 俺にはともかく…。

「まず久保田さんが知つてゐる情報、全部教えてもらえる？」

「…………君はどこまで知つてるんだ？」

「ダメよ。あなたが先。伝える内容コントロールされたたらたまらないもの」

俺が池田と話しているとき、一人はどんなやり取りを交わしたんだろう。とりあえず玲華が優位に立つてゐるだけは分かった。

「警察が握つてゐる情報はだいたいな。それから、浅霧世羅と神崎惣

「のことにについて調査中だつた」

兄貴の名前のところで俺を見る。驚いたけど、ショックな感じはなかつた。

あー やつぱりって感じ。だから久保田も気にしなくていい、と思つ。

そんなことより嫌な会話の流れに警戒する。

「それで？ 怪しい人はいないの？」

「まだ分からぬ、と言つたところか。動機、とまではいかないが、浅霧邦春くわちほの くわちほがとりあえず一番仲が悪かつたらしい……」

「邦春様は世羅の義父ね」

玲華が俺に向かつてフォローを入れる。そういうえば挨拶はしたけど、名前まで聞いてなかつた。

そんなことより、この流れは……。

「一見アリバイがない浅霧世羅が怪しいが……」

「あのさあ！」

それは待て、と思つて口を挟む。

なに？ つていう感じで一人に見られた。だけど無計画に突つ込んだもんだから、次の言葉が出ない。

「えーと……」

「案がないなら黙つてろ」

途中で止められて不愉快そうに久保田が言つた。

「世羅以外の人にはどんなアリバイがあるの？ あんな時間にみんなアリバイあるなんて逆に怪しいわよ」

あつさり、あまりにあつさり玲華が言つもんだから、また俺はソファにもたれかかつた。

全身の力が抜けるのを感じる。

信じられない……やつぱり知つてたんだ。

（俺の葛藤はいつたい……）

「どうしたの？ マヌケな顔して」

「なんでもねえ」

なるべく心情を読まれないように低く答える。

「あー、もしかしてバルコニーで言えなかつたの、ソレ？」

(あつさり読むな!)

バカみたい。自分があまりにアホみたいで、情けない。

「それであたしのこと心配してくれたんだよね？ありがと」

俺はなにも言つてないのに、玲華はなぜか断定して微笑んだ。

「あー…まあ…」

「……続けていいか？」

反応に迷つていると、また不愉快そうに俺を見て久保田が言う。いつの間にか片付けを終えた祥子さんが、それを見守るような優しい笑みでちょこんと久保田の前に座つた。

「確かに、家族の証言だけだとアリバイとしては弱い。だがそれぞれ、使用人が姿を確認している」

久保田は言いながら立ち上がり、事務机からプリンター用のA4サイズの紙と、ペンを持ってきた。

テーブルに紙を広げ、一人一人の名前を書き出す。わかりやすく浅霧の一族の家系図を書いていた。世羅の母親は美希子^{みきこ}。邦春と美希子との間の男の子は陽希^{はるき}という名前らしい。

「あの日浅霧家は家族会議を開いていたと証言してる。だから皆、功男氏の邸宅に集まつていたんだ。それは使用人全員が見てる。お酒も軽く酌み交わし、終わつたのは深夜一時すぎ頃」

功男氏といふところで、功男の名前を大きく丸で囲み、それから家系図より右上に、『梶剛志殺害時刻AM2：48』と追記した。

そういうえばそんな時間だつた。

「それからは誰も出た形跡がない」

「世羅は？」

「彼女は一人離れに住んでいる。会議は大人のみだつたから当然い

ない」

「離れ？」

「功男様の邸宅に世羅たち親子も住んでるんだけど、世羅用の離れ

が同じ敷地内にある。離れつて言つてもキッキンあるし電気コン口もあつて、ほとんど世羅はそこにいて毎日家族と顔を会わせることがないみたい」

説明しながら玲華の顔が曇つた。

なんか本当に世羅だけが追いやられてるみたいに感じる。この家系図だつて、世羅に入る余地がない。

「他の従兄弟たちは皆成人しているからその場にいたし、陽希君を覗けば世羅嬢にだけアリバイがないことになる。そして梶氏はその家族会議が始まるより前に、浅霧邸を後にしてる。運転手だから仕事は早く終わつたようだ」

「それより前？あのとき、帰りだつたんじゃないのか？」

ふと疑問に感じて声に出す。そして池田が何と言つていたか思い出した。

あの辺りに梶さんの自宅があつた……といつことしか聞いてない。

(固定概念で帰りだと思っていたんだ)

「違う。午後十時頃に功男氏を家まで送り届けて、そのまま帰つたらしい。それからの足取りはわかつていながら、人と会つていた可能性がある」

何の心の変化なのか、あんなに拒んでいたのに、一度話始めると久保田は止まらなかつた。こうなつたら洗いざらい喋つてやる、とも思つていいのかもしれない。

「警察が押収した梶氏の手帳から、ここ数ヶ月で頻繁に逢つよつになつた人物がいることが判明している」

「その人が怪しいわね」

じっくり用紙を凝視しながら、玲華がやつと口を挟んだ。

「とりあえずその人が誰かを突き止めれば、先が見えてくるわ」「さすがだな。オレも調べるならそこからだと思っていた」

久保田が感嘆の声を上げた。

自分が置いてきぼりを食らつた氣分がして、焦燥感を感じる。

「なんでだよ。たまたま知り合って会つてただけかもしんねえじゃん」

「功男様の運転手をしていれば、とてもじゃないけど、時間をつくり誰かに会う余裕ってなかなかないの」

「朝迎えに行く時間はある程度決まつていたが、終わる時間はまちまちだつたようだな。しかもイレギュラーでいきなり呼ばれることも多かつたらしい」

「梶さんは真面目で柔軟な人だつたわ。確かにあたしたちの知らない一面があつたかどうか、聞かれれば否定は出来ない。でもあの仕事には誇りをもたれていた。予定を立てても、功男様が来いと言つたら駆けつけるでしょうね」

二人がかりで説明される。

「なるほどな、そうまでして会わなきやいけない人物か……」

「怪しいだろ？ 彼は妻子もちで身が固いことは周囲の人気が認めている。ただの逢い引きつてわけでもなさそうだし」

「手帳には書いてなかつたわけ？ 名前とかヒントは？」

「名前あつたら苦労はしないわよー。でも会つてた人が同一つて証明ならあるわ」

玲華が腕を組ながら難しい顔をした。その向かい側で久保田も同じように頷いてる。

「一体感を持つていいようだ。

「スケジュール帳には時間と、その下に大文字のR^{アール}という文字が書いてあつたそうよ。場所までは記してなかつたから、なかなか相手が割れないのね」

「Rねえ……アールアール……ラ……リ、ル、レ……玲華！」

ブツブツ呟いてみるとポンッと閃いて、つい本人に向かつて指差してしまつた。そしたら玲華に思いつき睨まれた。

「ちょっと！ ぶん殴るわよ！」

「わ、わりい……つい……」

そこらの輩より怖いかもしれない……。なまじ美人だから迫力が加

わってさらに恐ろしい。

「まったくもうー、バカなんだから」

「他にアールのつく人いねえの？」

話を変える方が利口だ、と思つて久保田に話を振る。

「さあな。まだイニーシャルだと決まつたわけでもないからな」

「このRが殺された日にも載つてたつてわけ？」

「そうだ。なかなか賢いじやないか悠汰」

「バカにすんな！」

久保田にニヤニヤ笑われて、俺は条件反射みたいにキレた。こいつのこいつこころは嫌いだ。

「でも、だつたらなんで警察はそこ調べないで世羅を追つてるんだるー？」

「調べてると思うわよ。同時進行してるんだと思つ」

「唯一のヒントだからな」

俺の疑問に一人がまた答える。

「あのさー、ずっと不思議だつたんだけど、一人ともなんでそんなに詳しいんだ？」

まるで近くで聞いていたみたいに、警察の情報をいとも簡単にスラスラ喋っている。

一瞬その一人は顔を見合せた。それから気まずいように逸らす。なんだよ、と続けて畳み掛けようとしたところでの、先に久保田が片手をヒラヒラ振つて言った。

「ちょっと失礼しますって覗いて見ただけだ。チラ見チラ見

「はあ？」

「あれよ」

玲華が視線だけで促す。その先には俺の部屋にあるのより最新のパソコンがあつた。

要は回路に侵入して情報を盗み見したということだ。なにがチラ見だよ。

(「マイツラ……そんなどころで共通点もつてたのか…）

「大丈夫かよ？ なんことして」

「見るだけならな。オレはともかく玲華嬢はヤバイ」

ふと久保田が玲華に真面目な顔を向けた。真面目…といふか、眼光が鋭くなつたといふか…。

「なんといっても、このオレの中にまで入つてくるんだもんなー」「妙な言い方しないでよ…」

全身の毛を逆立たせて玲華が非難した。

つまり、玲華は久保田の端末にハツキングしたといふことか。「なにやつてんだよ、おまえら…」

「馬鹿野郎、今どきチマチマ張り込みとか聴き込みなんて地味で大変なことは、警察にやらせとけばいいんだよ！ オレには時間もなかつたしな」

「そうよ、あたしたちはイロイロ日常が忙しくて、そんな暇でうだつの上がらないこと出来ないわ！ でもの人たちにはそれが日常で仕事なのよ！」

「同感だが、君のは卑怯だぞ！ 人の弱味につけこんで！ あまつ脅すなんてな！ クラッカージやないか」

「なにいつてんのよ！ 久保田さんが意味深なこと言つて、逃げるからいけないんじやない！ おまけにガードが硬くて肝心なところが見えやしない」

一人は揃つて、堂々と俺に言い訳をしていたが、気がつくといつの間にかそれは言い合いに変わつていた。玲華の言葉に、久保田がやられたつて顔をして横で頭を抱えていた。

「全部見たような口振りだつたじやないか… それでオレは…」

「いまさら後悔しても遅いわ。だいたい読めてきたしね」

「なんの話か教えるよ」

いい加減、間に入るのもウンザリしてくるが、こんな久保田は滅多に見れないから気になつた。

「いい、おまえは気にすんな」

「そうね、とりあえず今後のことを決めましょ」

だけど一人とも、また協定を結んで話を逸らす。

なんなんだよ、まったく。俺が除け者にされてる気分だ。

一人で不満そうにしていたら、斜め向かい側から祥子さんが天使のようないい匂いを俺に向けた。

「大丈夫ですよ。わたしも意味がまったくわかりません」

そういう慰めはなんか違う気がする。祥子さんは天然なんだ、と思つた。

得られる警察の情報は、捜査会議で集まつた内容をデータとしてインプットしているものに限られる。

だけど池田はじめ刑事たちの手帳の中身。あそこには、もつとリアルで最新のデータが記入されていることだろう。

世羅が隠していることを、一秒でも速く、一枚のヒントでもいいから知りたかった。そう玲華が話した。だからドレスのまま館を飛び出したのだと…。

玲華と世羅の間には歴史がある。それは簡単に俺が踏み込むことができないようなものを感じた。

絆。

俺が持つてないもの。最初に感じたときは、羨ましいと思つた。だけど今、それが壊れかけている。

踏み込めないから、自分は傍観者になるしかない。為す術がないんだ。事件解決したら元に戻るんだろうか。それなら頑張るだけだ。（でも、なにか取り返しのつかないことになつたら…？）

「聞いてるか？悠汰」

ふと久保田の声が感覚を貫いて俺の思考を停止させた。

（あー…そっか）

作戦会議中だった。俺は聞いてる、とうそぶいた。

「警察は世羅を追つて いるから、オレたちが動くとしたらコイツを調べるべきだと思う。同じもん追つても効率悪いからな」

そう言いながら久保田は、自分が書いた家系図の浅霧邦春のところを指差した。

世羅の義理の父親…。虐待してたという…。

「邦春様は頭は良くないけど、がめつくて強かよ。簡単に尻尾は出さないと思うわ」

「なら諦めるか？」

「冗談！その意見には賛成よ。ただやり方を間違えなによつにしないと、つて言つてるの」

「確かに。君ならどう出る？」

「なんでもいい。邦春様の弱味を握つて喋つてももうよつよつと脅すのよ。拷問するより効果があるわ」

「うつ……！」

なんだか、玲華がイキイキとしてきたよつに見えるんだが……氣のせいであつてほしい。

「それで？邦春氏の弱味とは？」

隣で青くなつてゐる俺を無視して久保田が続きを促す。

ダメだ……。【いやら同類だ】。

（席替えしてえ……）

とりあえず横と前で交差して話されてゐるから、居心地が悪い。祥子さんと世間話していた方がマシかも……って本気で考えた。だけど祥子さんは、ただ二口二口笑いながら黙つて聞く側に徹している。【こ】は俺と同類ではないようだ。

「こちばん邦春様が恐れてゐるのは、美希子様に捨てられる」とよ。捨てられて浅霧から追い出されないように必死なの」

「そうだろうな。彼は元々金に困るような人生を歩んでる」

「そういえば再婚するとき周りは大反対だったわね。遺産目当てだろう、とか言われてたし、子どもながらにあの対立は凄まじいものを感じたわ」

（それで馬の骨か……）

盗み聞きしてしまつた内容を思い出す。未だに兄弟たちにそのシゴリが残つているようだ。

「バレる前に……つて

なんと言つていた？世羅の母親は。

そうだ。

「お父様にバレる前になんとかしないとつて、言つたんだ」

「なにが？」

「こきなりどうした？」

考えが口に出てしまつて、不信そうな田で皆に見られた。そういうえばこの事はまだ話してなかつた。俺はなるべく思い出して脚色を加えずに、聞いたままを伝えた。

「確かにその噂つて世羅のことね。でもそれなら功男様もご存知のはずだわ」

腕組みをして眉間にシワを寄せながら玲華が呟く。

「なんでもつと前から聞いておかしいんだ！なにか重要なことを話してたかもしれないのに」

「んなこと言われたつて知るか！俺は玲華を探していただけだ！」

久保田に責めるようなことを言われて、焦つて弁解してしまつた。まったくコイツの変わり身の早さにはついていけない。事件には関わるなつて言つたくせに。

「だつたら、あの兄弟たちは重要なことを知つてんだよな。そいつらも脅して吐かせれば」

投げやりに、この一人に合わせて俺は言い放つた。

ホントに、深く考えずに言つただけなのに、久保田も玲華もすぐ深刻な感じで頷いた。

「それもいいわね。だからやつぱり、邦春様を仕留めれば万事解決するのよ」

「そうだな。調べたら一番簡単にボロが出そなのは彼だ」

「ああ…ダメだ。俺の入る余地がない。といつか入りたくない。

「じゃあそういうことで、久保田さんよろしく」

「オレは忙しいんだ！近い位置にいる君が適任だろう」

「近すぎて警戒されてるのよ。忙しさを理由にする人つて好かれないわよ」

「あんなあ、オレは悠汰から離れられないの…わかつてんだろ」「なんか不毛だ。

俺は、何の気なしに頭に浮かんだことを言つてみた。

「つてかさあ、そういうことはコンピューターで探れないワケ？」

そしたら、一人ともこちらを見て。

「いや……それはどうだろ？……」

「まーそういう手もあることはあるんだけどね……」

とかなんとか言いながら、部屋の隅に置いてある、パソコン机まで揃つて向かつて行つた。

意外と直点だつたらしい。

一人がソファから抜けて、すゞく解放感を感じたのはナゼだろ？…。俺はそのままソファに横になる。

祥子さんと目が合つた。

「神崎くんは行かなくていいんですか？」

「あんなん見てもさつぱりわかんねえから」

「そうですね、わたしも同じです。…………でも良かつた」

祥子さんがふと声の調子を上げた。

「先生、久しぶりに楽しそうです」

「そうかあ？」

俺には全然そんなふうには見えない。むしろ玲華に怒鳴つたりして不愉快そうだ。

「ええ。最近ふさいでましたから。今回の依頼、先生にとつてもわたくしにとつても、とても意味のあるものになつてるんです」

今回の依頼といつところで、無関係ではないことを知つて祥子さんを見た。

目を伏せ軽く俯きながら、それでも口元は笑んでいた。

「先生がわたしに負い目を感じてるつてことは気づいていたんですけど（あ…このまえの…）

車の中で聞いた話だ。

「だから神崎くんにわたしを重ね合わせたんじゃないかな？先生は神崎くんを助けたいと想つていてると思います」

「実際に助けてもらつたけど」

「そういうこともあるんですけど、それだけではなくて、精神面のことです」

俺はふと久保田を見た。玲華とあーでもない」「ーでもない」といながら、パソコンに向かっている。

「こちらの会話には気づいてないようだ。

「あなたを護るうちに情が湧いたんでしょうね。こんなことはわたしが知る限り初めてなんですよ」

「でもそんなん…同情だろ…」

「同情でもなんでも情は情じゃないですか」

哲学めいたことを言う。

俺にはよくわからないくて、眉をひそめた。

「愛情の方が良かつたですか？」

「arie neえ！」

これには即答できた。スッキリした気持ちが生まれる。

祥子さんは声に出して軽く笑った。

「でも、無責任なただの同情ではないことは確かだと思いますよ。

余計なお世話だと、神崎くんは思われるかも知れませんが、先生は真剣です」

「なんでそんなこと言つんだ？」

わざわざ。

まるでだから許してくれ、とでも言いたいかのよつな。庇つているようなものを感じた。

（許すつてなにを？）

「先生が楽しそうにしてるのは、本当は最初からあなたに協力したかったんだと思います。強引な方法だったけど、玲華さんに協力する理由をもらえて、少しだけ気持ちが楽になつたんじゃないかな？」祥子さんから久保田に対する想いが伝わってきた。労るような、安心したような想い。

好き、なのかな。

少し勿体ない気がした。

* * *

「悠汰、起きて」

また俺は知らない内に眠っていたらしい。玲華に激しく揺さぶられて起こされた。

祥子さんとの話が一段落ついたところの記憶はあるから、会話の途中で寝るつていう失礼なことはしてないはずだ。というか、これつて酔いつぶれた人の考えることじゃないか…。

「悠汰！早く起きないとイタズラするわよ」

ぼんやりしていたら、玲華がまた良からぬことを企んでる顔で言つてきた。

「起きてるよ。田え合つてんだろ」

イタズラつてどんな?とは、口が裂けても訊けない。聞いたら後悔する。間違いなく!

慌てて体を起こしたら、久保田も祥子さんもいなかつた。

「二人は?」

「給湯室の方。祥子さんは洗い物してる。久保田さんは換気扇の下でタバコ」

親指で玲華が後ろを示す。

あいつ煙草なんか吸つてたのか。見たことが無かつた。

我慢してたんだろうか?ふとそう思つたけど、俺はべつに気管が悪いわけじゃないから違うな、と思い直す。

「で?……なんだっけ?」

「んもー寝ぼけすぎ。ゆするネタでしょ」

「脅しからゆすりに変わつてんぞ、おい」

どちらがマシかは知らないが…。

どちらにしても悪いことだ。堂々としている玲華の心情が理解できない。

「なんかあつた?」

「有つたか無かつたかと聞かれれば…有つたかな
険しい顔ではつきりしない言い方をする。」

「……あつたんなら良かつた…んだよな？」

「頑張るわ」

不安になつたから確認するように聞いたら、よくわからない答えが返ってきた。

なんか気合いが入つた眼で上方を見ている。ますます不安だ。

「その内容は？」

「浅霧雅男氏が取締役をしてる株式会社シユウリスという企業がある」

一服が終わつたらしい久保田が、変わりに答えながらこちらに来た。

株式会社シユウリス、俺でも聞いたことがある大企業だ。輸入家具などを扱つていて、テレビのCMでも良く見る。

「どうやらお金の流れで怪しいところがあるな。裏帳簿が存在するみたいだ」

「それが功男様に隠してることがどうかは分からぬけど…。でもそういうことなつたら、皆が仲間つてことになつちゃうわ」

想像したより、大きな不正が見つかつたようだ。だからこんなに空気が重いんだ。

俺としてはデカすぎて、高い位置にありすぎて実感がわかない。

「頑張るつていうことは、それを脅しに？」

「まだよ。情報だけなら簡単に言い逃れできてしまうわ。現物をつきつけないとね」

「ここからはオレがする。おまえらは連絡待ちだ」

仕事用の、それもかなり厳しい顔つきで久保田が低い声を出した。

それがさらにヤバイことなんだつて実感させた。

俺は正直ビビつて言葉が出なかつたけど、だけど、玲華は黙つてなかつた。

「冗談でしょ？ここまできて、ただ待つてるなんてイヤだわ」

「向こうが本気になればオレらなんてすぐ潰される。探つていろ」と、いかに巴rezuに目的のものを掴むかが重要なんだ

「危険なことぐらいいわかつてゐるわ。でも言ひ出したのはあたしなのよー。」

「最悪の場合、相手は人殺しすら出来てしまつヤツつことになる。君は殺されたいのか？」

「んなわけないでしょー。それも含めてわかつてゐつてんの！ 覚悟はしてるわ。」

「駄目だ！ オレは悠汰は護るが君は護れない！ 一人同時に危険が襲えば、迷わず悠汰を護る」

「護つてくれなんて誰も頼んでないでしょー。なによー。いきなりやる氣出さないでよ。」

どちらも一步も引かなかつた。さつきは押し付けあつてたのに…。対等に渡り合えている玲華はスゴイ、と何度も思つたけど…。だけど俺は見つしまつた。玲華の拳が震えているのを。

玲華だつて恐いんだ。それを押し殺して、いろんな想いで引き下がらない。

強いつて思つてたのに、やつぱり玲華も普通の高校生なんだ。俺と同じ。

「玲華は俺が護る」

そんな力も無いくせに、なに言つてんだと言われればそれでおしまいだけど、俺は本氣でそう思つた。

「悠汰」

「おまえ…」

「だけど玲華、証拠を掴むのは久保田さんに任せよう。そつからの脅しか、調査には参加させてもらつからな」

なにか言つたそうな二人を無視して、俺は勝手に仕切つた。このままでは終わらないと思つたから。

「つてことでもう寝ようぜ。こへり明日休みつて言つてももうこんな時間だし」

俺は掛け時計を指差した。

時刻は午前四時すぎを示している。早くから仕事が始まる人にとっては

つては、すでに朝だ。

「昼夜逆転しまくってるおまえが言つたな！」

「あんたお昼もさつきもすでに寝てたじやない！」

「一人にすつじく非難されたけど、不思議とその前にについての提案は却下されなかつた。

誰も何も言わなかつたから、多分納得したんだろう。

* * *

玲華は欠伸を何度もしながら祥子さんと祥子さん家に帰つて行つた。

俺はそのままソファで寝てしまつたけど、久保田も家には帰らず事務所で寝たみたいだつた。…みたい、つてのは俺が起きたときはもういなかつたから。

それがだいたい朝の九時頃。

ソファで寝たせいか体が軋んでちよつと痛い。

好きなだけここにいろ

夜までには帰る

テーブルの上を見ると、たつた一行の置き手紙があつた。

ぼーとしていたら昼前くらいに玲華たちが来て、ご飯を祥子さんが用意してくれた。

手紙を見て玲華が。

「なんか愛人相手に書いたみたいな内容ね」

と言つていた。よくわからない評価。

その場合、俺が女になるんだろうか。…余計な心情が増えた。

「悠汰、午後からどうすんの？」

祥子さんが作ってくれた朝食兼昼食のオムライスを食べながら玲華が言う。

「アイツの帰り待つて……家に帰る」

「ええつ？」

モゴモゴと俺もオムライスを口に含みながら答えたが、すじくびつくりされた。失礼なやつだ。

「ずっとここにいるわけにもいかねえし……フロ入りたい」

「だからウチでいいのって言ったのに……てゆーか、お風呂入つてないんだ……。そういえばそーか」

そつかそつか、と繰り返しながら、ちょっと玲華が離れた気がした。やっぱり失礼なやつ。

「じゃあウチで入つていこりよ

「いい……」

「遠慮しないで、つてゆーか入つて」

強引に言われたもんだから、本当にお風呂だけもらいに行つてしまつた。

確かにやることもないし。

眞鍋さんの運転で事務所と玲華の家を往復した。

その間両親に会つことはなかつた。まるで鬼の居ぬ間にナントカみたいで、いいのかなあつてちょっとと思つたけど、どうせ葛城さんが報告するんだから知られるんだろう。

玲華も何故かまた事務所までついてきた。

暇なのつて言つていたけど、多分玲華も心配なんだ。

昨日の今日で……時間的には今日の今日かなにか危険な日に遭つてるのは思えないけど、気にはなつてる。

だけど……わたしにも連絡がないなんて、初めてのことです、と祥子さんが言つた。

それから三人で久保田の帰りを待つていたけど、結局久保田は帰つて来なかつた。午後八時くらいに、「帰つてきたら連絡します」と祥子さんが強く言つうので、俺たちは帰ることにした。

それからまた、眞鍋さんが俺の家まで送つてくれてる。

確かに運転手の仕事つて大変だ。楽な仕事なんてないつてのはよ

く聞くけど。

「明日学校か…」

窓の外を眺めながらボンヤリ玲華が呟いた。

「連休明けのサラリーマンみたいだな」

玲華も行きたくないとか、そんなことを思つたりすることに驚く。

「悠汰は行きたくないっていう日はないの?」

「俺の場合、家の方が居心地悪いから」

ただ一つの真実として言つた。自虐的な発言に聞こえたみたいで、

玲華が辛そうな顔をする。

そんな顔をさせるために言つたんじゃないのに。少し後悔した。

「あー、でも中学のときに純平と…純平って友達なんだけど、ソイツと大喧嘩したことがあって、さすがにその次の日は行きたくなかったな」

その喧嘩のおかげで、その後もつと仲良くなれたんだけど。そう

話したら玲華に笑みが戻った。

「男の子って、そういうところつきついしてて良いわよね」

「玲華だつてハツキリ物言つだろ?」

「まーね。でも女同士だと気をつけてるわ。世羅以外には」

女つて面倒なことをいろいろ考へてるなつて、そんな気がした。そんなことを話しているうちに、高級車は不似合いな住宅街を入つて、俺の家に到着した。

やつぱり母親の車がある。最近みた光景が、再び目に写つた。

あの時より、少しあは変わってるだろうか。少しあは、強くなれただろうか。

「悠汰、あたしも行く」

眞鍋さんが先に降りて玲華側の つまり家の方 ドアを開けた。

展開についていけず一瞬間が空いたけど、慌ててそのまま降りようとする玲華の腕を掴んだ。

「や、やめろよ。俺なら大丈夫だから…」

「違うわ。確かに悠汰のことは心配だけど、そうじやなくて、一応あたしが連れ出したから…挨拶よ」

ふんわり笑つて俺の手をすり抜ける。いや、そうじやなくて。（俺が見たくないんだ！）

ヒステリックな母親と、サッパリしてゐる玲華。絶対合はない気がする。

俺の心の叫びを無視して、なんの躊躇いもなく呼び鈴を押した。（ウソだろ…）

応答も何もなく、母親が玄関の扉を開けた。すでに怒り狂つた気持ちを、押し込めてるみたいな顔をしている。

多分カメラを覗いて、この状況を理解してから出たんだ。

母親は視線をそこにいる全員に一巡させ、そして玲華を見た。

「あなたが悠汰を連れ出した西龍院さんね」

「ええ。はじめまして、悠汰くんのお友達の西龍院玲華と申します」玲華も負けずに笑みを浮かべて挨拶した。やはり咲田さんはすべてを言つていたんだ。

「どうこいつもりかしら、謹慎中のこの子を一日にも渡つて連れまわすなんて。今日も帰らなかつたら、警察に通報するところだつたわ」

「申し訳ございません。」連絡を急つたことは謝罪いたします

「ちよつ…、違う！俺から出たんだ、コイツは関係ない！」

玲華が頭を下げたのを見て、やつと今更ながら俺は声が出せた。そんなことさせたくなかつたのに、勇気がなくて迷つてゐる内に

…どんどん進むから。

「あんたは黙つてなさい。」近所迷惑だわ。不本意ながら入れてあげるから、中で話しましょ」

玲華は受けてたつわ、とあからさまに言つてゐる感じに頷いて、眞鍋さんに待つてと指示した。

「その車も目立つから離れたところに置いてちょうだい

「眞鍋さん、その通りに」

声もなく一礼して眞鍋さんは車に乗り込んだ。そのままエンジンをかけて走つて行く。それを見送る間もなく母親に言われた。

「悠汰も早く入りなさい」

「……っ！」

なにか言い返したいのに、何を言えばいいのか分からぬ。

俺は母親と玲華に続いて家に入った。

扉を閉めると、いつものように間髪入れずに母親の右手が伸びた。左頬に衝撃と痛みが走る。

母親の氣にする“他人の目”の中には、未成年は含まれていないようだ。玲華を飛び越えてまで制裁をくだすとは思わなかつた。さすがの玲華も、突然の出来事に息を呑んだのが分かつた。

（ちくしょう！玲華のまえで…）

情けなさすぎる。こんな惨めな姿を見られたくないのに。

「二人とも来なさい」

先に立つて母親はリビングに促した。また閉塞感のなか、俺はついていく。

「いきなり暴力ってどうかと思いますわ」

耐えられないというふうに、でも丁寧な口調で玲華が切り出した。それに俺が戸惑つ。やめる、余計なことは言つた。そう止めたいのに、声が出ない。

くつろぐ空間であるはずのリビングが、その役目を果たさずに暗くて嫌な空氣に包まれる。

母親が聞こえるように舌打ちをした。

誰も座ろうともせず、母親も丁重におもてなしするつもりはないみたいだ。玲華も玲華でそんなものを望んでいないのがわかる。

「他人は口出ししないでくれる？わかってるの？あなたは人の息子を連れ出したのよ！誘拐犯と言われても否定できないの」

「わたくしはまだお友達を誘いに来ただけです」

「そんなどで通用するほど、この世のなつかは甘くないのよ。私が

訴えればどうなると思う?」

「おば様こそ、ご存知ですか? 男の子が一泊開けたぐらいで警察は動かしません、通報したって笑われるのがオチです」

「生意氣言つんじやないよ!」

母親の中のなにかが切れた。一喝して手を上げる。

ブツ気だ。

そうわかつてから、俺は今まで動けなかつたのが嘘みたいに咄嗟に間に入つた。「発立はなぜかそんなに痛くなかった。ナリフリ構つてられない母親の、感情に任せての平手打ちだつたのに」。

「悠汰!」

「なにしてんのよ! あんたは!」

俺が玲華を庇つたのが面白くなかったみたいで、更に二発立て続けに殴られた。

殴られるのは、慣れてる。

言葉では勝てないけど、殴られて母親の怒りが収まるなら、それでいい。玲華が殴られるより、ずっといい。

「やめてください! どれだけ」自分が理不尽な」としてゐるか、おわりですか!」

「つるさいんだよ! 小娘が! どこのお嬢様か知らないけど人の家庭に口出しすんじやないよ!」

「あー。悠汰くんが口が悪いのはお母様に似られたんですね」

「なんですつて! いい加減黙りなさい!」

また、母親が手を上げる。

やつぱりだ。だから見たくなかったんだ。

感情的に暴力をふるう母親と、公平で正義感溢れる玲華。どれだけ母親が叫んでも玲華は逃げない。それは殴られることも恐れず、立ち向かうことさえ厭わないほどに。

「もうやめろよ!」

見たくないんだ。余裕のない母親も、俺のせいで傷つく玲華も。

「もう帰ってきたんだからそれでいいだろ! 俺が悪いんだ!」

母親の手が止まつたのが確認できた。少しだけ力が抜ける。

「俺が悪かつたから……もう、やめて。……誘拐なんて、されてるわけがない。俺が……逃げ出したんだ」

心から望んで出て行つた。解放感さえあつた。だから後悔なんてしていない。

「言いつけを破つたら、どうなるかわかつてんでしょうね」
(破つたら?)

……わからない。

今まで母親の機嫌を損ねたことは多々あつたけれど、こんなふうに罰から逃げたことはなかつたから。

これ以上なにがあるっていうんだ。

自然と心が沈む。世界が暗く、狭くなる。

「ダメよ、そんなこと」

玲華の声が自分の世界を切り裂くように俺の中に刺さつた。心臓の真ん中。世界全体が戻された感覚があつた。

「良くないわ。なにもわかつてもらつてないじやない。そもそも謹慎処分が不当だつて言つた? おば様も、彼から事情をお聞きになりました?」

親子の間を取り持つように玲華に、母親は僅かに声を落として視線を横に向けた。

「子どもなんてね、平氣で嘘をついたり言い訳して逃げたりすんのよ。だから聞いても無駄よ! 信じないことにしてんの」

「そんなこと思つてたんだ……」

初めて聞いた母親の本音。

気づかなかつたと言えば嘘になる。だけど気づきたくなかった。思い知りたくなかつた。ひと欠片も信用されてないことなんて。

「いつ、俺が嘘をついたって?」

笑えてくる。全然可笑しくないのに、不思議と笑みが止まらない。とうとう俺は狂つたのかもしない。

「なんなの?」

気味悪そうに母親が顔を歪めた。

玲華は……。分からぬ。玲華を認識する余裕がない。

「言ひてみろよ、いつだよ。…わかるはずないよな。一度だつてまともに聞いてくれてないんだから……」

最初から、子供のときから一度だつて最後まで俺の言葉を聞いたことないくせに、勝手に決めるな。

「決めつけないで。俺のことコントロールしないで」

「決めてあげないと何も出来ないからじゃない！すべての入試に失敗して！高校だつて友達と一緒にいいなんて、あんな三流高校行こうとするし、バカじゃないの！」

母親は棚に飾つてあつたものを掴むや否や俺に向かつて投げてきた。

右腕の一の腕に衝撃があつた。

勢いが止まらず壁にも当たり重い音がしてそれが落ちた。置き時計だつた。ガラス部分が欠けて、電池が転がつてゐる。

「ほつといたら口クなことしないじゃない！変な事件には巻き込まれるし、ぶつさいくな顔して帰るし！今度はなに？外泊？呆れてモノも言えないわッ！ウチも神崎にも、そんな落ちこぼれ今までいかつたのよ！誰に似たのよあんたは」

ほら。結局こうなるじゃないか。少しでも言い返したら何倍になつて帰つてくるんだ。

「話を聞いてないつて？あんたなんかすぐ黙り込んで何も言わなくせに！なにか言い返したいならねえ、結果を見せてからにしてちようだい！」

言つても無駄なんだ。

「この人には何も届かない。俺の言葉も想いも、なにも。いい加減にしてください。悠汰はあなたの道具じゃないわ」

まだ。また暗闇に光が射したみたいな感覚を覚えた。

いつもと違うのは玲華がいたことだ。玲華の声が濁つたこの家を浄化して、解放する。

「決めて“あげてる”ですって？冗談じゃないわ。自分のことは自分で決めるものなのよ！それは親だらうと口を挟む権利なんかない」「あんたにはもっと口挟む権利ないわよ。ぬぐぬぐと育つてきた箱入り娘は箱から出てくんないよ！」

「やっぱりね。あなたは人を見る目がないわ。自分の教育が下手つくそだつたのを悠汰のせいにすんなつて言つてんの！」

「なんですか！子育ての苦労も知らないガキのくせに…」

「なんでこうなるんだろう。母親の怒りの矛先をいくらこちらに向けても、何度も玲華は突っ込んでくる。

玲華はただ護られてるお姫さまじゃなかつた。

今さら綾小路の言葉なんかが出てくる。

(確かにな…)

納得できる。

「もういいよ玲華」

もういいんだ。変わりに怒つてくれた。それだけで嬉しいから。

「もう帰つていいよ、ありがとう」

玲華の腕を引っ張ると、彼女は戸惑つた。

「あ…でも…」

「待ちなさい！まだ話は終わつてないわ！」

「話？」

よく言う。人の話なんか聞かないせに。話し合ひなんて無理だ。

「八つ当たりの間違いなんぢやないの？」

他人の子ども相手にまで、こんなふうに感情的になるとはさすがに思わなかつた。幻滅させられた。

だから有無を言わざずに玲華を玄関まで送つた。

これ以上ここにいたら、どんどん彼女に嫌な想いをさせる。そんなのはイヤだから。

「悠汰…」

心配そうに俺を見て、なかなかサンダルを履こうとしない。

「大丈夫だから」

なるべくそう見えるよつに笑みを作る。

でも本当に心が軽かつた。どこかでまだ痛むけれど、重さがないだけマシに感じるんだ。

「悠汰！ 勝手なことを…」

外に出るまえに母親が鋭い声で呼び止めていたけれど、追いかけでまでは来なかつた。

「眞鍋さん、呼ばなきゃ」

珍しく動搖しているのか、玲華の動作が遅い。あんな母親のまえでは対等でやり合つていたのに。

変なヤツだな、と思う。

でもそうさせたのはたぶん俺だ。いきなり強引に帰すよつな感じになつたから。

「ごめんな。嫌な想いさせて」

玄関のまえの段になつてゐるといひて座りながら、思つたことを口にした。

玲華は携帯電話を取り出すと、呼び出し音が掛かつたのを確認するだけで、出もしないですぐ切つた。

そのまま汚れるのも気にせず俺の隣にくる。

「うん、驚いた」

「……普通、タテマヒでもそんなことないよ、って言わねえ？」

素直に頷くもんだから、ちょっと可笑しい。

「嫌な想いしたのは本当だから。つていうか……悠汰がそつこつ気持ちにせられてるのが、嫌だつた」

真面目に玲華が答える。

「それにそういう社交辞令的なキライでしょ」

それから苦笑いした。

確かに俺はそう言つた。玲華にはちゃんと伝わつてる。

この世のなか、全員が親のような人間じゃない。それが分かるたび救われたような気持ちになるんだ。

* * *

玲華を見送つて家に戻ると、母親はダイニングの椅子に座つて頭を抱えていた。俺が入つてもそのまままで口を開いた。

「なんなのよ。みんな勝手なことばっかり！人の気も知らないで」
みんな
？

複数に向けた怒りなのか。

「兄貴は？」

気になつて聞いたら、母親が弾かれたように立ち上がりテーブルを力任せに叩いた。

「帰つてないわ！最近塾にも行つてない日があるのよーねえ、あんたのせいなの？あんたが勝手なことばかりするから惣一にまで伝染したの？」

そんな病原菌みたいなこと言われても困る。兄貴だつて、俺を見下してゐる内の人なのに。

(俺にとつては、親と同類で)

だけど、それでわかつた。いつもより激しかつた理由が。

「^{うつ}伝染するわけないよ…。彼女でもできたんじやない？」

「あんたと一緒にすんじやない！女につつづ抜かすなんて十年早いのよ！」

そうかな。高三なら充分じゃないかな…。相手が世羅つてのはあり得ないと思うけど、本当にいる可能性だつて充分ある。

だけどまた座り込んで、ため息をついている母親は、とても小さく見えた。昔は、父親の次に恐ろしかつたのに…。

いつのまにか、俺の方が背も高い。

(力も、きつと…)

「お父さんに報告するからね！」

「なんか。こういう奥の手があつたんだ。
軽くなつた心が、また沈んでいった。

「やつちやつたなあ……」

どんよりとした天気。いまにも雨が降りそうだ。

そんな空は見えない位置に部室の中のソファは置いてある。

悠汰のお気に入りの場所で、あたしは半分横になつて、クッショングを抱きしめながら何度もかのため息をついた。

空と同じどんよりした気持ちで。

「またですかあ？ もう元気出してくれださこよ。大丈夫です……つて……」

ヒテが絨毯を口口口口しながら相槌を打つた。

一度は染み付いたこのソファも、どうやったのか、すでにヒテの手で完璧に綺麗になつている。

（ヒテは良い奥さんになるわ。はあー）

「だつてさあ… フツー自分の母親と喧嘩するような女なんて引くでしょう？」

そり、あたしは自己嫌悪につちひしがれていた。やり過ぎたかなあ…つて。

「珍しいですね、そんなに悩むなんて…。らしくないですよ玲華さま」

「えー、そーお？ あたしだつてウジウジあることぐらー…」

「そんなに好きなんですか？ 神崎さまのこ。あつ、無くなつた」

ちょうど口口口口の粘着テープ部分が終わつたみたいで、サクサクと喋りながらヒテは替えを取りに棚に行つた。

（好き……なんだよねえ）

一度気づいたら、止まらない自分がいて驚いた。驚きの連続だ。いつもなら他人ん家のもめ事には手を出さない。手は出さないべきだと思っていた。そういうのは、あくまで当人たちの問題で、当人たちじゃないと解決しないものだと思つから。

「でもあまりにいつもと違うんだもん」

悠汰が。

なにも言わなくなる。

顔つきからして違つた。戦意喪失したみたいだ。

悠汰が護るつて言つてくれたときは、心臓が止まるかと思つた。

それから少しがんばる。おの先覺がこれりあとか語つてあるひざか分かうまい。

(まー、護られるのなんてガラじやないけどね)

「なにしてんのかなあ……いが……」

ちゃんと食べるかな
とか
ちゃんと寝てるかな
とか凄く気
になる。

「そんなに気になるなら連絡とればいいじゃないですか」

卷之三

「PCメールなら送つたけどねー、昨日。……あーあ、携帯プレゼ

ノエカナニ

「…意外とマトモなこと言ひじやない」

ପାତ୍ରବିଧି

でも確かにその通りだ。タキシードあげてもそんなに喜んでなかつたし。

一緒にいた二田のなかで、一番喜んでくれたのは食事中だったか

九思堂

「ねえヒテ。あたしにも料理ぐらい出来るわよね?」

- 1 -

なんとなく訊いただけなのに、ヒトは口々する手だけ動かして、あこがフリーズした。まじでー。

て、あとはフリーズしやがった。

「ちよつと！無視とはいひ度胸ね！」

「もう言つたわよ！」「クつたわよ！」昨日

「えええっ！！」

なぜかヒデが真っ赤になつて慌てた。話を逸らしたくて言つただけみたいだつた。ふんっ！

「で、神崎さまはなんて？」

「聞いてない…てゆーか、それどころじゃないみたい」

本人も認めてるみたいだけど余裕がないんだ。あたしだつてそれはそうだけど。

久保田さんは結局帰つてきてないみたいだ。なにかあれば祥子さんからあたしの携帯に連絡が入る。そしてあたしから悠汰に連絡する約束になつてるんだけど…。

なにやつてんだろうか、あの人は。無茶なことをしなければいいのに。

(なんかあつて悠汰が悲しんだらタダじゃおかない…)

「なんですか？それ。なにがあつたつて、恋愛は別でしきう」

「えー、どっちがらしくないのよ。じゃあヒデは好きな子いんの？」

「ぼくだつていますよ」

あたしの顔も見ないで口口口口したままで、ヒデがあつさり白状した。初耳だ。

「誰？あたしの知つてる子？」

「ぼくのことはいいんです。いまはこゝで玲華ちゃんのお手伝いさせていただいている方が楽しいですから」

「あんたもねえ、いつまでもこんなことしてなくていいのよ。ヒデは使用者の息子だつて悠汰に言つてたけど、ヒデが使用人なわけじゃないし、あたしが立場が上とかでもないんだからね」

なんつーか…それつてどうなんだろうつて思つて改めて秀和に言った。

彼が好きでやつてくれてるつてことはわかっている。

だけど、縛りだと感じるまえに、好きなときにやめて良いつて、ちゃんと云わればいいと思つた。無用な負い目なんて感じずに。

「はい。わかつてます。ぼくは父の仕事も尊敬してますし、玲華さ

まのことも…」

途中でヒテの言葉が止まる。それは扉がノックされたからだった。

「はーい」

ヒテが口口口をやつと手放して客人を出迎えた。
もうちょっと突っ込んで聞きたかったけど、解ってるみたいだからいいか、と諦める。

ヒテが開けた扉から現れたのは、なんと綾小路だった。ノックして訪ねるなんて初めてのことだ。いつもアホなこと言つて勝手に入つて来てたのに。

……間が悪いところは変わつてないけど。

「やあ玲華。……邪魔だつたかな？」

「どんでもないです！どうぞお入りください」

ぽかんとしてたら、勝手にヒテが招き入れていた。まーいいけど

さ。

「ずいぶん、くつひいでるんだね」
クッションを離さないままのあたしを見て、綾小路が戸惑つていた。

「……間がない、起きるか。

上体を起こし、座り直して制服も整える。

「あなたはずいぶん節操が出てきたのね」

「もうそれは言わないでくれ」

ちょっと恥ずかしそうに言つて向かいに座つた。確かにネチネチ言い過ぎたかな、と反省する。

「聞いたよ。犯人に襲いかかつて逮捕したそうじゃないか」

「襲いかられたのよ！誰よ！間違つた噂ながしてんの！」

どこから漏れたのか、学校に来てみたらちょっと脚色された噂で持ちきりだった。

(あたしが襲いかかるつて現実的に無理よ！)

相手が来てくれてやつと特定の人物がわかつたっていうのに。

あの会場には校内の生徒もいたし、バレるのは仕方ないけど、こ

んな噂になつたのはあたしが本性を出したからだらうな。自分ではそんなにギヤップがあるとは思えないんだけどね。

「噂だからね、すぐ消えるわ」

「そんなくだらない話をしにきたの？」

「違うよ」

続けて言う前にヒデが間にに入った。

「なにかお飲みになりますか？」

あたしのまえにある、九割り飲み終わったアイスコーヒーのグラスを見つめながら綾小路が言う。

「ここには冷たいドリンクもあるのかい？」

「ヒデが保健の高科先生から氷もらつてきたの」

おまけになんと保健室の冷蔵庫の一部を使わせてもらつてゐるようだ。

今日知つてあたしも驚いた。

球技大会のバスケで突き指して保健室に行つたらしい。それをきっかけにいろいろと話が咲いたようで、高科先生と仲良くなつたところだ。そしてさつき、氷をアイスボックスに詰めて頂いてきていた。

ヒデはあたしが知るなかで一番年上キラーじゃないかと思つ。確かに母性本能くすぐるタイプではある。…のかな？あたしにはよくわかんないけど。同じ年だから。

「アイスコーヒーならすぐお持ちできますけど」

「じゃあ頼む」

まるでウエイターみたいな受け答えをして、ヒデは楽しそうに作りに行つた。

「ちょっと氣になつてね。……君は世羅君とケンカでもしたのかい？」

話したかったのはそれか。あたしはため息を噛み殺した。

「そつか、聞いてたんだ。でもケンカじゃないわ」

「そうかい？神崎兄弟がややこしくしてゐみたいだつたけど」

ちつ。しつかり聞いてやがる。世羅と一緒にいたのが悠汰の兄といつとこ今までちゃんと。

あんだけ大きな声で喋つてたから、仕方ないといえばそれまでだけど。

「それは誤解よ。つて…まさか悠汰にそういう話してないわよね」「しないよ。といつより出来なかつた。なにやら事情がありそつだつたからね」

さすがは綾小路家の嫡男といつとこいか。すべての情報を逃すことなく収集し、ちやんと自分なりに噛み砕いて判断している。

「ならいいけど。世羅のことならなんでもないわ」「いじにいみたいだけ?」

綾小路は痛いところ突いてくる。

「だから心配いらないつて…」

「僕にも手伝わせてくれないかな」

あたしの言い終わらないいつかに、綾小路は両手を細めて笑つて言った。

またなにを言い出してんだら?、この人は。あたしは頭が痛くなつた。

「あのねえ…」

「犯人探しをしてるんだろう?」

ああ、やだやだ。頭がいいやつてこれから。適当に誤魔化せない。

仕方ない。まずは相手の力量を判断しよう。

そう思つたときにビデがアイスコーヒー持つてきた。律儀にあたしのお代わりまである。遠慮せずにお礼だけ言つて、新しい方を一口頂いてから話の続きを切り出した。

「なんか知つてることもあるの?」

「ああ。少なくとも神崎よりは、な」

「……なによ、その言い方は。いつとくけどアリバイのことなら知

つてゐるわよ

「あいつ… 口止めしたのに」

独り言のように綾小路が呟く。

つたく、コイツが原因か。すべての現況とまではいかないかもしない。でも確実に綾小路の一言で悠汰は迷ったはずだ。

「言つてないわよ、悠汰は。知つてたの、あたしが…余計なナミ立てないでよ」

僅かに綾小路は意表をつかれたみたいな顔をした。

やつぱり悠汰は損するタイプだ。あの正直すぎる態度のせいで誤解が多い。

それでも最近は徐々に雰囲気が柔らかくなっている。まだ不安定なときはあるけれど、怒鳴る回数が明らかに減つていた。

でも、それでライバル増えんのは困るんだけどな…。複雑だ。

「それは悪かつた。誰も君には伝えないと思つたんだよ」

「まー、確かに誰も言つてはいないけどね。なんとなく耳に入るものなのよ」

適当にあたしは流した。まさか警察の情報を探りましたなんて、

「冗談でも言えない。いまの綾小路にはまだ。

「で？ 目撃者の悠汰より知つてることってなに？」

「… そうだな、じゃあ犯人のことを推理してみないかい？」

「推理？」

「例えば、通り魔の犯人が別に捕まつたことで分かることがある。梶さんを殺害した犯人は通り魔に見立てた殺り方をしてるけれど、そうするにはどうしても必要な技術がいる」

「それは… 心臓の位置ね」

「そう。どれも背後から正確に心臓を狙つたひと突きのみで即死させていい。知識のないものには到底無理だ。実際に今回捕まつた犯人は外科医だつたそうだよ」

満足そうに綾小路は頷く。

気づかなかつたわけではないが、それならばどうしても腑に落ち

ないことがある。

「浅霧家のなかにそういうことに長けている人はいないわ」

医師はもちろん、それに近い職種の人もいない。

「どうして、浅霧にこだわる必要がある?」

「それじゃ…誰が?」

「まずはプロファイリングを聞いてくれるかい?先程言ったような殺害方法では、梶さんのような大人の男性を殺害することは女性には無理だ。力が無いし、敵うものでもない。これで世羅君は外される」

「そうね」

間違いない。世羅は違うんだから。

素直に頷いてから、ふと疑問点を感じた。ならばなぜ刑事は世羅を見張っていたのだろう。一介の高校生が気づくことだ、警察だって簡単に思い付くことははずだ。

「男性で医学の知識があるものが犯人だと思つ。そしてその中でも梶さんより体力のあるもの」

なぜか焦らすように綾小路は一旦言葉を切つて、アイスコーヒーを飲んだ。

その術中にはまり、すでにあたしは綾小路の話から逃れられない。

「そういえば、神崎惣一さんって、医学部志望なんだってね」

綾小路の言わんとしてることがわかつて、あたしはイヤな顔をした。

「悠汰のお兄様が犯人だと言いたいの?」

「怒らないでくれ。あくまでも、ただの推理だ。可能性の話をしているんだよ。彼なら心臓の位置も把握できるだろ?し、力だつてあるだろ?」

「いえ…無理だわ。まだ高校生って聞いてるわ。いくら志望してるからつて…。それに動機がないもの」

やつぱり腑に落ちなくて、あたしはかぶりを振る。

可能性の話でもこんな話はしたくなかった。いくら羨妬目で見て

いると言われようとも、悠汰の兄というのを考えたくない。

「動機なんかは後から見つかるものさ。だいたいそういうのは本人しかわからないからね。……では神崎の父親が絡んでるとは思えないかな？れっきとした内科医だそうだよ」

「いい加減にしてくれる？いくらなんでも神崎一家を絡めすぎよ」あたしはなるべく冷静に否定をした。ここでキレるのは得策じやない。

「だけど玲華。不思議には思わないか？あの日あのタイミングで……しかも世羅君とともに現れた神崎惣一に。彼は一体何しに来たんだろうね？」

なにをしに……か。あたしだって知りたくて仕方なかつた部分だ。だけど悠汰には聞けそうにない。

答えられない変わりに、あたしは一番ありえない疑問を提示した。「そもそも、世羅が梶さんを殺した犯人と一緒にいると思つ？」「…………騙されてるんだとしたら？」

「世羅が？」

迷いながらも言つた綾小路に、間髪入れずに切り返す。警戒心の強い世羅が、とくに男性に騙されるなんて考えられない。

「意外と、騙されやすい人っていうのは、彼女みたいな人だつたりするよ」

足を組み換え頬杖をついて、なんか首を傾けて諭すように綾小路は言つた。

なんて意地悪な……。

これでは逃げ場がない。四方八方塞がれて、あたしは返す言葉を失つた。

「警察もすべてを読んでいて、世羅君を張つてゐる振りをして神崎惣一を調べていたのかもしない。いや、それともはじめから尾行をしていたのは、神崎惣一だつたのかもしれないな」「どうして尾行のこと知つてるのよ？」

いくらなんでも情報を持ちすぎてる。あたしでも、あのパーティ

の夜に目撃していなければ掴めなかつた。

いや、正直なところあたしは目撃してない。悠汰に言われて見た

けれど、遠すぎて分からなかつたんだ。

悠汰の目良さに脱帽した。そして動体視力も良い。前にあやなちゃんが告白した場面のときも、萩原くんのちょっととした動きに気づかれたのだ。それはスポーツでも活かされてる。

「睨んでる顔も素敵だけどね、怒らせるつもりで話してるとんじやないんだよ」

「逸らさないで」

端的に答えを促す。目線だけで捕らえて逃がさない。

考えたくないが、久保田さんになにかあつたら、今のあたしたちは助ける術がない。少しでも早く、確かな情報が欲しがつた。綾小路は信用に足る人物か、迅速に判断しなければならない。「まったく…。変わらないな、君も。ちょっと二人と会話したときに気づいたんだよ。刑事の目線に」

「いつ？」

どのタイミングで。

「あの夜、ちょっとダンスに疲れて僕は夜風を当たりにガーデンへ出たんだ」

なぜか語り口調で綾小路は言つ。

一応綾小路はモテる。年齢層幅広く、毎回こいつの相手を変えて踊っているのをよく見ていた。

あたしには解らない！ そういう女性の心境がつ。

「ああ、念のために神崎のダンスだけは一通り見ておいたけどね。ふつ」

聞いてもないのに、わざわざ言つつかつ…そういうこと…しかもこのあたしのまえで！

(それも笑い付けて…)

「あんたねえ！」

「どうして玲華は踊らなかつたんだい？」

この野郎つと思つて勢いづいたら、変わらない態度で綾小路は訊いた。

「つまりつかなくなつて妙な間が空く。」

「つ、なんでもいいでしょ！」

正直あんときはそれどころじやなかつたし。ちくしょー、やつぱり踊つておけばよかつたか。

きつと悠汰ならあたしが踊つてと頼んだら、踊つてくれたと思つ。嫌そうな顔をしながらも、きこちなく、でも丁寧に扱つてくれただらう。

もう、あんなチャンスはこないかもしれないな、って思つたらちよつと寂しかつた。

「それよりなに話したの？その一人と？」

「奥の草むらから会話が聴こえるから、見てみたら先に一人がいてね。僕を見てすぐ気まずそうな顔してたなあ」

「二人はどんな話をしたの？」

「さあ……数秒だったからね。僕もそのあと挨拶をしたくらいや」

「うそでしょ？言わないのなら……」

「本当だよ。あの場で無粋な真似は僕には出来ないからね」

綾小路は肩をすくめた。

ダメじゃん。せつかく絶えて聞いていたのに、肩透かしを食らつた氣分だつた。

ため息をついて横を見ると、結局あたしたちの会話中、ずっと秀和はコロコロしつばなしだつたようだ。絨毯剥かれるんじゃないからー！

* * *

どんよりした空は耐えることなく、夕方にはそのまま雨となつてすべてをはきだした。

遠慮することなく大地に降り注ぐ。

あたしは家のリビングから雨の音を聴いていた。

結局、綾小路の申し出には丁重にお断りした。別に信用できなかつたとかそういうことではない。

あの話、悠汰にはできそつにない、と思つていた。本当は言つべきかもしれない。ひとつ可能性としてそれがあるのなら。ちゃんと話して、調べて、否定できる材料を探すべきなのかもしれない。確かに綾小路の推理は、むちやくちゃだけど一応筋が通つてゐる。これで、なんらかの動機が見つかれば…。

手帳にあつたRの文字。イニシャルだつた場合該当しないけれど。悠汰のお父様の名前はなんだろうか。

綾小路は断つたあと、「なにか詰まつたら言つてくれ。いつでも力になるよ」なんてキザに笑つていた。

気持ちは嬉しいけど、素直に喜べない。綾小路の気持ちがわかっている以上、それに応えられないのならば、借りはつくるべきではないのだ。

彼の心配の内容はわかる。あたしと世羅のことだ。確かにこんなふうに口を聞かない喧嘩は初めてだつた。
(まずは世羅の気持ちを知らないと…)

考えないといけない。

振り出しに戻つて1からちゃんと、考えないといけない。世羅からはなにも教えてもらえないだろう。

彼女の態度があからさまに違つてきたことは、梶さんが殺されたことが原因だとは思えない。

どこかにヒントがあつたはずだ。知らず知らずのうちに、あたしは見逃していたはずのなにかが。

彼女はいきなり感情を表す人間じやないから。それは長いつき合いでわかつてゐる。

もういいんじゃないか。

そう世羅は言った。長いつき合いでからこもつここと。それから…。

(悠汰の名前を出したんだ)

なんの脈絡もなく。

……本当に?

世羅が意味もなく悠汰の名前を出すだらうか……。世羅の気持ち
のなかに悠汰が関わっている?

(まさか…)

あまりに想像し難い、ひとつのおかしさがあたしの胸に渦巻いた。
悠汰と話したい。すゞく…。

まだ、一日しか離れていないのに、すゞく悠汰と話したい気持ち
でいっぱいになつた。

考えないといけない。取り返しのつかなくなるまえに。切羽詰まって今ごろ本気でそう思う。思つて焦る。いままではまだ全然真剣に考えてなかつたんだって気づく。全然足りなかつた。

玲華からきたメールには、まだ久保田が帰つてきてないことを教えていた。玲華のアドレスはすでに登録済みで、聞になんのメールも受信してなかつたから立て続けに三件ならんでる。

直近のメールはついさつき。いずれもメールの中身は久保田の久の字も無くて、他愛ない学校のことだつたりする。でも無かつたらこそそなうなんだつてどこかで知つていた。

あんな会話の後で、あんな出掛け方をされたら、嫌でも頭は悪い方向へ思考が行つてしまつじゃないか。

(なにかへマしたのか…?)

きつと浅霧家を探りに行つた。それからの足取りが掴めないんだ。(こんなとき…どうすればいいんだろう)

俺はカツターシャツの予備用のボタンをいじりながら、勉強机に座つて考えていた。

母親は珍しく今夜もまだいる。自分の家だからこんな言い方は適切じゃないはずだけど、本当に珍しかつた。いつもやることやつたらまたどこかへ繰り出すのに。

お父さんを呼ぶからね。

そう言つたのに父親は相変わらず帰つてきてない。それがさらこ

母親の苛々を募らせてるみたいだつた。

別れればいいのに。両親の間には、とっくに愛なんて存在してない。

子供にバレてるつてどうなんだよ、と思つていた時期すら超えてしまつた。それでも別れないのは。

(世間体、か)

そんなにたいして近所付き合いもしていないのに、なにを気にして
るんだろう。理解に苦しむ。

でももう母親に脅威的なものは感じなかつた。一度存在の小ささ
に気づいたらそれまでだつた。

兄貴も、まだ帰つてきてない。どこにいるんだろう‥。

まさか世羅と? 警察に見張られたなかで、それはあり得ないか
なつてちょつと思つた。

(俺は、俺にできることをしないと)

机に突つ伏して、ボタンに集中する。

池田がまえに行つていた課題だ。 どうじとうつ伏せに倒れ
ていた梶さんの眼を見たのか。

きつと梶さんに意識があつたんだ。それで現れた俺を見てきた。
それしか考えられない。他の可能性はどれもいまいちピンとこな
かつた。

(そこからどうなつた?)

モヤがかかつたように、あの眼以外が霞んでる。
記憶のなかの視界を広げる。すべての感覚に聞く。

触覚:あのとき触れた、ボタンを触る。

臭覚は血と雨の臭い。

俺は少しでもあの瞬間に近づけたくて、窓のドアを少し開けてい
る。今夜も雨が降つてゐるから。

そして目をふさぐ。感覚を研ぎ澄ませて思い出すとする。

視覚:あの目に釘付けだつた。

そしてあれから頻発に息苦しさに陥つたからそれを思い出すのは
容易い。間違つてもいま過呼吸にならないうつに気をつけながら、
すべての感覚を過去に返す。

それから…聴覚は?

「怒ー! 何やつてたのよ今まで!」

聴覚を意識した直後に、ヒステリックな母親の声が耳に突き刺し

た。あまりに凄いタイミングでビクリと全身が震えた。

兄貴が帰ってきたんだってしばらくして気づく。

(あつ…)

それはいきなりきた。必要なフラグが全部揃つたみたいに、突然思い出した。

梶さんは、意識が失くなるまえに俺を見て言つたんだ。途切れ途切れの消え入りそうな声で。

『あ…兄に、惣一に…氣をつける…』

最後の力を使って右腕を俺に向かつて伸ばしながら、そう言い残して息絶えた。

(なんで今まで忘れていたんだ…)

すべての言葉が声になつてなかつたけど確かに梶さんはそう言つた。

兄貴のことを知つていただけでなく俺がその弟だと認識していた。(気をつけるって…どういう意味だ?)

思い出したはずなのにまつたくスッキリしなくて、むしろ絶望的な気持ちになる。まつたく関係ないと思つた殺人事件に兄貴が、俺が関わっている。

(まさか…)

兄貴が犯人だとでも言つのか?ならばなぜ世羅は一緒にいたんだろう。いつたい兄貴と梶さんはどうこう関係なんだ。

いてもたつてもいられなくなつて俺は部屋を飛び出した。まだ下で話し声がしている。

母親と顔を合わせないといけないのに、そのときの俺は構つてられなかつた。

「勉強してたつて、一泊も空けて?」

「そうだよ。東大医学部に行つた先輩がいるから泊まり込みで勉強を教わつてたんだ」

リビングから事情を話す兄貴の声は冷静で、みつともなく狼狽えた俺とは正反対の対応をしていた。

母親もすでに落ち着いていて信頼を取り戻しているみたいだつた。相手が東大医学部つていうところがポイントになつたみたいで母親は誇りしげに笑つた。

「そう。それは素晴らしいわ」

「ごめん、連絡しなくて。先輩も忙しい最中時間作つてまで教えてくれるつて言つてくれたから塾より優先してたんだ」

「いいのよ。母さんも家にあまりいれなくてごめんね。心配だつたの。あなたが彼女とか作つて遊んでるんじゃないかと思つて」

そのときふと、兄貴が方向を変えて階段の下三段くらいを残して立ち尽くしてゐる俺を見た。

ふん、とせせら笑う。

「まさか。こいつと一緒にしないでくれ」

比較されるのを俺が嫌がつていることを知つたうえでの発言だとわかつた。

心の底から冷えてくる。凍りつくみたいに。

俺の存在に気づいて母親から笑みが消えた。それなのに俺を無視して兄貴に話しかける。

「ほんとにねえ。この子だけはもう、どうしようもないわね」

「おまえも余計なことはせずに勉強だけしていろ」

兄貴は吐き捨てるみつに言つて、俺の横を通りすぎ階段を上がつていつた。

よく、言ひ。嘘をついて、母親を誤魔化して、なにもかも隠して素知らぬ顔でよく言つて・

「兄貴！」

「悠汰！ 惣一の邪魔したら駄目よ！」

怒りのボルテージが高まつて振り向く。でも水を差すように母親が怒鳴つて遮つた。

母親がいるうちは事件のことは話せない。そつ語つた。

* * *

結局兄貴とは話す機会もなく謹慎期間が終わった。

昼は兄貴が学校でいないうえに夜は母親が俺を見張っていた。そして金曜日である今朝、それに合わせてまたどこかへ出かけて行つたようだ。

久保田が帰つてきた連絡もない。

「神崎くん！ 久しぶり！」

思いつきりテンションが高いことがわかる声で後ろから走つくる音がした。もう振り向かなくても誰だかわかる。

「おう、拓真」

一週間だけなのにして長い間会つてなかつた気分になる。拓真是しげしげと俺を眺めた。

「傷はあんまり残つてないねえ。でもちょっと瘦せた？」

「気のせいだろ？」

「そうかな…でも元気そつで良かつた！」

「拓真のサワヤカさが懐かしい」

「ははっ。なにそれ？」

思つたことをそのまま言つたら笑われた。でも拓真らしい悪くない笑いだった。

そのまま他愛ない話をしながらいつも通り一緒に教室まで向かう。戻ってきたんだという寒感がある。いつの間にか、ただの逃げ場所だつた学校が悪くないものに見えてきていた。

「悠汰！」

教室に入るとすかさず玲華が寄つてきた。まわりの生徒が一旦静まり返つたときに呼ばれたからよく響いた。

それから教室内ではヒソヒソと密談が聞こえる。じつじつといろ含め変わつてない。ちょっと呆れた。

でも玲華が、拓真がいつも通りだから俺も周囲の反応なんか気にしないでいられる。

よお、と玲華に返そつとしたら玲華の顔つきが変化した。下から

睨み付けられる。えーと…。

「ちょっとあんた、なんでメール返さないのよー!」

なるほどな、それか。怒りの正体がわかつて苦笑いした。

「ああ…悪い」

「もー今度返さなかつたら電話するわよ」

「それはヤメ口」

「えー、一人メル友なの?ボクにも教えてよアドレス」
拓真がズルいと言つてきた。いや、俺はそんなんになつた覚えはない。

記憶が確かなら全部一方的に送られてきたもので、そのあとも続々と続いていただけだ。

「あたしが教えるわ。でも気をつけて、メールの返信は三回に一回がいいとこよ」

「勝手に教えんな。つーか充分だろそれで。送りすぎなんだよおまえは」

「ええっ、意味わかんない。対話式コミュニケーションだよ」

「そーゆそーゆ。もつと言つてやつて萩原くん」

玲華が本性を出したことで、またこの一人は気が合ひ出したようだ。

「はいはい。送るようすれぱいいんだり」

敵わないと判断してさつさと席につく。

「よつしやあ!今の言葉忘れないでね。あ、萩原くんのも教えてくれる?」

なんか楽しそうに一人は後ろの方でアドレスの交換をしていた。
いつのまにか教室内は普段通りに談笑に満ちている。その隙間に陰口を言つてるやつらもいるのかもしれないが、もう嫌な空氣ではなかつた。このクラスは基本明るいやつが多いのかもしれない。

ずっと見渡していると、前の方で櫻井と澄川が話しているのが目に入った。櫻井は自分の席に座つてから顔は見えなかつたけど、澄川の表情は決して友好的なものではなかつた。

しばらく見てたら何事もなく離れたからちょっとホッとする。考えすぎなのかもしれない。だけどあのパーティーの日のことを考えると、俺が関わっている内容だったりどうじょつと思つたのだ。

そのとき世羅が教室に入ってきた。

いつものように感情の読めない顔で廊下側の一場端の自分の席についていた。

兄貴とのことが気になつてつい田で追つてしまつ。

「ゆーたあ…」

また分かりやすい態度だつたみたいで、玲華が田の据わつた顔で釘を刺しにきた。

交換は無事に終了したようで拓真はすでに他の友人達と喋つている。

「わかつてるよ…。あ?でももつ結託してんのはバレてるし、なんにも問題ないんじゃねえ?」

「……そういうことじやないわよ」

なぜか玲華の勢いがなくなつた。辛そつて世羅の方を見つめている。様子がおかしい。

またなにかひとつ、重いものでも抱えたようなそんな顔だつた。俺がいなかつた間なにかあつたんだろうか。

そういうことをメールで教えてくれればいいのに。もどかしい気持ちになる。

「じゃあ…どうこうことだ?」

聞くのにすぐ体力がいった。だけど流れでもあつたし、気になつたから恐る恐る訊く。

そしたら玲華はそのまま口元に笑みを作つただけだつた。誤魔化すような、とりつくろつのような、そういう笑い方は玲華にはしてほしくなかつた。

* * *

昼休み。

することもなくてぶらぶら廊下を歩いていたら杉村に呼び止められた。

「神崎、ちょっと」

ちょうど近くにあつた人気のない実験室に手招きされる。「なんですか?」「

適当な位置に座った杉村から少し離れて俺も丸椅子に座った。なんとなく話の内容はわかつていた。この日このタイミングで考えられることはひとつだ。

「いやな、噂を聞いてな。謹慎中に外出してまた警察に行つたっていう……」

やはりか。

事件を目撃したときに噂が流れたときや、それまでの異端ふりには腫れ物に触るかのようになにも言つてこなかつたのに……。問題が続いて放つておけなくなつたんだが。

「どんな噂か知りませんが、謹慎中に外出したのも警察署に行つたのも事実です」

「神崎、あまり自由な行動ばかりすると謹慎だけでは済まなくなるぞ」

素つ氣なく答えた俺に杉村がグッと眼に力を入れた。

つい疎ましく思う。なんの事情も知らないでいきなりの説教は納得いかない。

「校長先生の判断がすべて正しいとは思わないけどな。だからこそ、人に誤解を与えるような真似を自ら起しそとはどうかと思うんだ」「先生はそうやって権力に屈してきたんですね。だけど俺はごめんです」

「神崎!」

「長いものに巻かれたいやつはそうすればいい。俺はダメだ。駄目なんです、今のままじゃ」

怒鳴りたい気持ちを堪えて言葉を続けた。かつて池田に言われた

「ついに、まずは杉村から話してみようと思つた。

「それを否定するんじゃないんです。そういうのは、自分をしつかり持つてゐやつが出来ることだと想つから……今の俺はただ足搔くことしかできないん、です」

「なにか悩みもあるのか？」

「先生にだつて悩みぐらいはあるでしょ？」

「先生のことはいい。神崎の言つことも一理あるが協調性も必要だぞ。歎みがあるならいつでも聞くし、とにかく問題を起こすな」

「先生は……ケンカしたことどう思つてます？ やつぱり校長先生みたいに、俺に問題があつたと思しますか」

「納得いかないのも解るがいつまでも引きずつっていたら前には進めない。その処分はもう終わつたことだ」「違つ氣がする。

話し合いつていつていつじやない氣がする。話が噛み合わなくてすれ違つ。

でも当たり前だつた。杉村はただ俺に警告をしたいんであつて、話し合いと思つてゐるのは俺だけだつたから。

「なんで俺の質問には答えないんだよ」

「神崎……」

「もう終わつたことぐらこわかつてるよ。いまやら時間は戻せない。戻りたくない。もう一度この一週間を体感なんてしたくない」

「神崎？」

「じゃなくて、先生がどう思つてゐるか聞きたいのに、なんでかわすの？ 逸らすの？」

心配そうな顔で杉村が覗き込んできた。

そんな顔すんな。ぶつかつてくる覚悟もないくせに、わかつたようなこと言つたな。

「なあ、先生だつたらどうした？ いきなり先輩に絡まれたらと、おとなしくやられた？ 協調性つてそういうときどうすんの？」

違う。ハつ当たりしたいわけじゃない。なのに苛々して止まらない

い。

教科書に載つてゐるみたいなことしか言わないから、入つてこない。俺には。

杉村は困つたよつたため息を吐いた。それからちよつと前屈みになつて、低いトーンで言葉を発する。

「ここだけの話だぞ。先生なら恐くて逃げた

「は？」

「神崎みたいに勇氣ないからな」

突然態度を変えてイタズラっぽく笑つから、俺はポカンと口を開けた。

勇氣あるつて、だれが？

「校長先生はどうかと思ったよ。殴つた回数なんか聞いてなかつたし、よく空々しく言うなあつてな。内緒だからな」

念を押して杉村が言つ。

「ああいつ場合どうすればいいか、一番正しい方法なんて先生も模索中だけど、逃げるやり方ならたくさんあつたと言つことだ」「なんか無責任

答えに納得いかない。じゃあこれから絡まれたらたとえみつともなくとも逃げ出せ、ということか？

「そう言つな。とにかくやるなら上手くやれつてことだ。なんでもかんでもキバ向いていつたらいくつ命があつても足りんだろ？」

そう言つて杉村は立ち上がり、俺の頭にポンと一回手を置いた。突飛な行動についていけなくて一瞬あとに勢いよく頭を横に振る。

「やめろよ！」

「いやあ誤解してたかもしけんな、神崎のこと。あ、今後はくれぐれも頼むぞ、あまり危険なことはしないよつにな」

軽快に笑つて杉村は出ていった。

なんなんだ一体。誤解を解いたよつたことを言つた記憶がないし、そもそもなんに誤解してたかもわからない。

相手の意見がわかるまで話し合えといつ、池田の助言には失敗し

たといふことが。

(なんかシンディ…)

自分の気持ちを言葉にするのも、相手の言葉の真意を読むのも俺にはすぐレベルの高いことに感じた。

長い息をひとつ吐き出しこの場から離れようとしたときだつた。隣の準備室に誰かが入ってきた気配がした。話し声も聴こえてくる。小さくてもあまり内容まで聞こえないけど、俺には関係ないし構わず出ようとした。

「…………やめてください…………」

だけど聴こえてきた弱々しい声には聞き覚えがあった。櫻井の声だ。

朝に目撃した澄川との姿が思い出される。嫌な空気を読み取つてそつと隣に続くドアに近づいた。

「いい気にならないことですわ。あなたみたいな地味で目立たない子神崎さまには相応しくありません」

やはり相手は澄川だ。あの女、なにを勘違いして関係ない方向に突っ走つてんだ。

俺は音を立てないよう引き戸タイプのドアを数センチ開ける。あのときの三人組が揃つていて櫻井を囲んでいるみたいだ。棚が邪魔をしてるが、その隙間から手前の一人の背中だけが見えた。

「今日こそ約束してもらいます。もうあの方に近づかないでもらえるかしら?」

「だいたいどうやってお近づきになりましたの?」

「西龍院さまを先に手なずけたんですね。鶴田さま」

澄川の言葉には嫌な笑い方が含まれている。鶴田と呼ばれた女生徒が、まあ、姑息なと呟いた。

止めないと、と思つてドアに力を込めたとき櫻井が言い返していた。

「違います!変な言いがかりつけないでください!」

「あらあ、口答えなさるの?どこまでも調子にお乗りなのね」

初めて聞いた声。消去法で「コイツが澤登か。あのときの緊張してなにも言えなかつた印象はまったく皆無だ。女の裏側を見た気がした。

「西龍院さまにはなにも言えないとせに弱いわたしにだけ当たらないでくださいって言つてるんですね」

櫻井も負けじなかつた。おどおどしながらもしつかり自分の意見を言つてる。

(俺、どうしよう…)

どう出るのが一番ベストなのか、判断を間違えたらどうせやしないことになる。生半可に関わるとさらにこじれる。

「なんですつて！あなた誰に口聞いてるかお分かり？澤登といえばね、あの代々続く代議士の『令嬢なのよ』

やっぱり澄川の方が誇らしそうに澤登を自慢してる。代議士ねえ…。どうりで何度も主張するわけだ。俺にほゞれだけ権威があるのか知らないけど。

「やうよ。わたくしのパパにお願いすれば、あなたの家の会社なんてどうにでもなるわ

「なんて卑怯なことを！そう言つて神崎さまにも脅したの？」

「するわけないじゃないの。庶民は貧相な考え方を持ちね

なんか醜い。相手を陥れるボキャブラリーを豊富に持つてゐるあたりは、呆れを通り越して尊敬する。

(じゃなくて…)

あんまり本人のいないところ、いつも話題にのぼるのは気持ちの良いものじゃない。

「神崎さまはそういうこと気にされません。…西龍院さまやわたしがいなくとも、そんなあなたには振り向いてもらえません…」

「いい加減になさい！」

マズい。櫻井が完全にキレて二人も怒りが頂点にきたみたいだ。ガチヤンとかバタンとか聴こえてきて、俺は思いつきり音を立てるようになりドアを引いた。ピタリと音が止む。

ゆっくりと棚に近づいてもたれかかり、俺はなるべく冷ややかな目をして言った。

「なにしてんの？」

全員一斉にこちらを見た。三人のその手にはモップやホウキが持たれている。そして床にはひとつ割れたビーカー。

その近くで櫻井が座り込んだ状態で目を瞠っていた。

「か、神崎さまっ」

澤登が真つ赤な顔してモップをその場に落とし、素早く出ていった。一人もやや遅れて同じような反応で逃げ出す。

カタせよ、モップ。

呆れながら櫻井に近づき手を差しのげる。

「大丈夫か？」

「はい。え？……あの……いつから？」

櫻井も徐々に赤面しながら口々と手を引かれ立ち上がった。大丈夫そうなのを確認したら、転がってる三本の掃除用具のなかからホウキだけ拾つた。

「最初から」

ホウキでビーカーの破片を集めて、用具入れからちり取りを取つた。

するとやつぱり櫻井はゆでダコのように真つ赤な顔をしていた。言い合いの内容を聞かれたのが恥ずかしいようだ。

「ちゃんと戦つてたからどうしようかと思つたけど、手が出てたから」

「『めんなさい』

「なんでおまえが謝るんだよ？」

「…………」

櫻井は俯いてしまつた。それからみつともない、と呴いた。

「見られたくないからです。こんなはしたない姿…」

「どこが？言わせて言い返すのは当たり前だと思つけど？」

「それは…神崎さまはそうでしょうけど」

「言つじやねえか」

櫻井もただ大人しいだけではないようだ。少し安心する。自分のパーティーでの態度が悪かつたから責任の三割ぐらいは感じていた。櫻井はわたしがやりますと言つて、俺からホウキとちり取りを取り上げた。

「今回が初めてじゃねえだろ?」

櫻井の手が止まる。その間にモップを一本拾い用具入れにぶち込んだ。

「……まだ、二回目です」

「まだつてな……これからもエスカレートするような俺から言うか?」

「大丈夫です……あまり優しくしないでください。期待、してしまつじゃないですか」

期待?

俺は俺の責任部分を果たそうとしただけなのに。そんものは優しさじゃないのに。

櫻井の言いたいことがわからなかつた。

「そもそもあんなのただの逆恨みだろ?どこかで手を打たないと」「いえ、ホントに大丈夫ですから。ありがとうございました」「大きなお辞儀をして櫻井は用具入れにホウキなどを直すとそそくさと出て行つた。

俺はこのとき遠慮してゐるのか、ぐらいにしか思わなかつた。

最後のホームルームが終わり、一人また一人と教室から出ていく。いつもみたいに俺はそれを自分の席でぼんやり眺めていた。玲華はなにやら杉村に呼ばれてすでにいない。

世羅はまだいた。

どうしよう…。話しかけるなら今だ。数人、まだいるけれど呼び出しへ別の場所に行ければ…。

でも聞いたところで答えてくれるとは思えない。その点で迷いが生まれる。どう聞いたら答えてくれるんだろう。迷つてゐるうちに世羅は出て行ってしまった。

「あ…」

でも学生鞄は置いたまま。帰つてくる。

(そのときがチャンスだ!)

俺は動悸が高鳴つっていた。

正攻法じゃダメだ、と玲華は俺に言つた。奥の手を使えと。今までの聞き方じゃダメなんだ。

(考えるんだ)

有効な方法を。

この数日で学んだことは、話しかけて弱味を握つて脅すこと…。

(違う…世羅を脅してどうする)

なんかもう、テンパつてくる。だいたい世羅の弱味だつてわからぬ。いや、弱点なら知つてる。

(オトコ、か…)

だけどそんなもの持ち出したくない。世羅がビリヒーリヒーとよつ、俺がイヤだった。

他には?

(梶さん…玲華…兄貴…義父親、母親)

世羅に関する人物がぐるぐる頭を廻る。ダメだ。俺は断念した。いくつか頭には浮かぶが、どれも却下したくなる内容だったのだ。気づくと教室には誰もいなくなっていた。あとは世羅を待つだけだ。

聞きたいことを頭で整理していたら、ガラッとドアが開いた。

「世羅だ。想定内の狙つたことだつたのに、いざ田の前にすると動けないくらい緊張している。

世羅はこちらに見向きもせず、自分の学生鞄に持つていた本を入れた。図書室に行つてたんだと分かる。そのまま鞄を掴んで教室を出……。

「な、なあ！」

出たらダメじゃんか。

慌てて俺は立ち上がり呼び止めた。慌てすぎて声が裏返る。……みつともない。

世羅は仕方なさそうに、元通り向いた。これ見よがしにため息を吐く。

「なんだ」

とりあえず第一段階はクリアだ。ホッとしながら世羅に近づく。

「あのさあ……ちょっと話があるんだけど

いろいろ考えすぎて何から尋ねていいかわからない。だけば世羅は一度持つた鞄を机に置いて、堂々とした出で立ちで俺と対峙した。「私になにを聞きたい？兄のことか？事件のことか？それとも、玲華のことか？」

全部、読まれていた。なにもかもお見通しだったようだ。俺は回り道をするのを諦めた。

「全部だけど……。とりあえず兄貴のこと。兄貴とはどういう関係？」

「ふん！相変わらず直球だな。ただのオトモダチだ」

世羅は腕を組み、馬鹿にしたようにクイツと顎を上げた。

「なわけないだろ？だいたいどこで知り合つたんだよ？」

「おまえに関係ない」

「じゃあ…兄貴と梶さんはどういう関係?」

「それこそおまえには関係ないことだな」

「関係ないわけないだろ! 梶さんは兄貴を知っていたんだ!」

感情に任せてまた怒鳴つてしまつたけど、反省してる暇はなかつた。世羅が明らかに目を見張つて動搖していたから。こんな感情を表すのを見たのは初めてだつた。

「そうか。おまえにか思い出したんだな。なんだ? なにを思い出した?」

「訊いてるのは俺だ。答えるよ」

低く俺は唸つた。意外なところに奥の手があつたようだ。

世羅はそっぽを向いて吐き捨てるように言つた。

「私は知らない」

「知らない? 訊いてないのか、兄貴から」

「おまえが直接訊けばいいだろ? 兄弟なのだから」

「身内だからって、なんでも話せるわけないっておまえなら分かるだろ!」

叫んでしまつて、しまつたと悔やんだ。先ほどとは違つ種類の後悔。

「いつの話を世羅にするつもりはなかつたのに…」

世羅の顔から悲しみが満ちていくのを目の前で見せつけられた。

それから笑つた。口元が歪んで自嘲氣味な笑みだった。

「玲華からなにを聞いたか知らないが、私のことを馬鹿にしてるのか?」

「違う…こまのは…」

「兄弟と言つても全然違つんだな。惣一さんはもっと紳士だったよ」

「…」

なにもこんなかたちで比較しなくてもいいのに。

世羅も聞いてるんだ、兄貴から。俺の、弱味……。

「なんだよ…なんなんだよおまえら。なに企んでんだよ」

「企む? 勘違いしてないか。言つただろうただのオトモダチだと。

頭の良さも違うな

「やめる…なに…」

「惣一さんは大人で優しい人だな。うらやましいよ、おまえが優しいだと？」

家族以外の他人に、どういうふうに接するか俺は知らない。知らないけど、少なくとも俺には…。

「だけどおまえは自分勝手に閉じこもり、周りを見ようとしない。惣一さんは子どもすぎる弟を持つて苦労してるんだよ。邪魔なんだ、おまえが」

「好き…なの、か?」

兄貴のこと。

「好き?」

カツと田を開き、世羅が体を揺らして笑いだした。

ちょっと泣いてるみたいにも見える笑い方。本音がわからない。

「おまえの頭は単純でいいね。…ああ、好きだよ。少なくともおまえよりはね」

まだ世羅はクスクス笑ってる。

「その笑い方、やめろよ」

気づいたときには完全に世羅が上位にいた。支配者みたいに上にして、俺は弱く機嫌を窺うような主張しかできない。

世羅が俺を嫌つてることはわかつていたけど、こんなふうにはつきり態度で示されると悲しくなる。哀しくて寂しい。

人に拒絶されることは何度経験しても慣れてはくれない。

目を細めたまま世羅はにじり寄ってきた。

「やめさせたいなら……私から何かを聞きたいのなら、力ずくで押さえつけられればいいじゃないか。この前みたいに」

「世羅…」

罪悪感と自己嫌悪が蘇る。

違う、あんなのは本意じゃないのに。だけどしてしまったことは変えられない事実で、今さらなにも言えない。

世羅はなにを想つたのか俺の頬に右手で触れてきた。情けないけどびっくりして俺の方が逃げ腰になる。

「ねえ、おまえは玲華から聞いてるんだろう? 本当に読みやすい奴だ。だけど私は男嫌いでも男性恐怖症でもないよ」

「え?」

いきなりなにを言い出すんだ、と思った。あの日あんなに震えていたのに。まるで先回りしないと自分自身がもたないとでも思つてゐみたいだった。

ばかやろう。

世羅はバカだ。知能指数とかそういう話じゃなくて、こういうときに自分の気持ちに嘘つくから、不器用で意地つ張りだった。

(指が、震える)

俺にだつてバレる強がり。

だけどなぜこんなことをするのか、しなくてはならないのかが解らなくてどう対処していいか迷う。

「玲華だつて誤解してるんだよ。私が未だに過去の恥辱を引きずつていると…。私のこと聞いておまえはどう想つたんだ? 自分が嫌がつている割りには、無意識に他人には同情しててるな、おまえ」

「違う…」

「ほんとうに? 私の目を見て誓えるか?」

世羅の左手も俺の体に触れてくる。俺は頭が真つ白になつた。為すべきことを見失つて、ただ口だけが小さく動いた。

「離せよ」

「振り払えばいいだろ? おまえの方が力があるんだ」

「なんだよ、なに考えて…」

そのとき、だつた。

誰も来ないと思つた教室に向かつて歩いてくる足音が聴こえてきた。

(あつ)

恐らく世羅も同じように気づいた。その軽快な足音の主に。

こんな時間に教室に来るような可能性がある人はひとりで…。でも気づくのが遅かった。

その足音が止まるや否や、勢いよく廊下と教室を隔てる前の方のドアが引かれた。

「悠汰ー。ちょっとこれ…」

玲華の姿を確認するより一瞬速く、世羅は左手で俺のネクタイを引っ張った。

なんの力も入れてなかつたから、グンと抵抗なく世羅に近づく。（だめだ！）

状況をつかめたときには、すでに逃げる術がなかつた。

世羅の右手が顔から首の後ろ側にまわされて 軽く、触れるか触れないかのストレスレだつたけど…確かに、キスされた。一瞬で感触も残らないほどだつたけど関係なかつた。

この位置からは玲華には世羅の背中しか見えない。

バサバサつと、たぶん玲華が持つてた紙の束が落ちる音がした。玲華に見せつけたかつたんだ、世羅は。わざと。玲華の気持ちはきっと世羅も知つていてわざとやつたんだ。こんな傷つけ方もあるんだ。

「どういうつもりだ！」

やつと俺は振り払う。だけどなにもかも遅い。時間は戻せない。世羅は愉快そうに笑いながら俺から離れて自分の鞄を取つた。「怒るなよ、減るものじゃない。すでにしてることなんだろ？玲華と」

そのまま玲華のことを見もせず、颯爽と身をひるがえし後ろの出口に向かつた。

侮辱された気分だ。俺だけじゃない。玲華も含めて侮辱したんだ。許せない、こんなやり方。

「てめえ！」

「待つて悠汰ー！」

世羅を追おうとしたとき、玲華が全身を使って俺を止めてくる。

「「めん！待つて…」めんなさい」

なんで玲華が謝るのかがわからない。だけど腰辺りにまわされた腕が震えていて、それを退けることはできなかつた。

世羅は振り返りもせずに出ていきドアの閉まる音が空しく響く。

それでも、どちらも動けなかつた。

玲華は下を向いて今まで、肩が小刻みに揺れていて泣いてるのかと思つた。

「わかった、世羅の気持ち…」

独り言のように呟いた声は、だけど思いの外しつかりしていた。

それから玲華は僅かに顔を上げる。

違つた、泣いてなかつた。ただ泣きそうだつたけれど。

俺はむしろ世羅のことがわからなくなつていた。敵意むき出しどでも想うところとは違うことをした。それぐらいしか…。

やつぱりそつだつたんだ、と最後に玲華は呟いた。

* * *

「どうしたんですか？なんですか、この暗いオーラは…どうかで怨念背負つてきたみたいですよ、おふたりとも」
並んでソファに座つている俺たちに向かつて、秀和がホチキスを振り回しながら慌てていた。……危ない。

あれから玲華があまりにも動こうとしなくて、なんとか部室にまでは連れてきたけど、まだ見て分かるほど引きずつていた。今はぼんやりと斜め下辺りを見つめている。

落としたプリントを俺が変わりに持つてきた。今はテーブルにある。

内容まで確認する気力も興味もなかつたけど、ホチキス止めをする作業を杉村から頼まれたようだ。学級委員なんてただの雑用かよ、と思つてしまつ。

そしておそらく、あの現れ方は俺に手伝わせようと思つて來たん

だろ？。

いまは田の前でガチャンガチャンとなぜか秀和がやつていた。
怨念背負つてきたつて、ある意味正しいかもしない。

世羅についてはなにも聞けてない。落ち込みようが半端なくて聞
けずについた。

こんな玲華は初めてだ。対応に困つてしまつ。

「そついえばさー、杉村先生に危ないことするなつて言われちやつ
た」

おもむろに、わざと関係ない話を振つてくるし。

「あー…俺も言われた。やるなら上手くやれつて」

「えつ？あの真面目しか取り柄がなさそつな先生が？」

「あんなー…でもそうだな、本心を話してくれつて頼んだら言つ
てくれたんだつた」

「はあ…。悠汰はどんどん周りを引き込んでいくね

「どういつ意味だ」

「一応誓めてるんだけど？」

「ふうん…」

「うん…」

会話が続くかと思つたのにまた止まつた。さつきからこいつなる。
どちらからともなく話しだし、どちらからともなく切れるんだ。
本当はしなければならない話があるところを避けてしているせいかも
しれない。

その都度、秀和がキヤンキヤンわめきながら、フォローになつて
ない賑やかしみたいなフォローを入れている。

「ああ、またつ！落ちてますよーダメです、陰は陰を呼ぶんです。
会話、続けてくださいー！」

「ヒテが喋ればいいじゃねえか」

「ええと、そうですね」

気のせいだろうか。無意味にプレッシャーを感じたようで、秀和
は大量の汗をかきだした。

「ぼく」の前自販機のまえお掃除してたら五百円玉を拾つたんですね

陽気にホチキスを鳴らしながら、秀和が語りだした。だけどそれから続く気配がない。バチンバチンバチン、と音だけが響き出す。

「……で？」

「えつと、お釣が出てくるところじゃなくて、下のスキマにホウキを…ってあのTの形したホウキをですね、こつ突つ込みまして出したんですね。そうしたらついてきたんですよ！ キラキラ光る五百円玉が！」

「…………だから？」

「ええっつー五百円玉ですよ？ 五円や十円じゃないんですよー。もちろんそれらも大切ですけど、ぼくはこんなことあるんだなあって感激をつ…」

「もういいわ、ヒト」

ずっと黙つて聞いていた玲華が容赦なく止めた。はあ…。ガーンと効果音がつきやうな青い顔をして、秀和はショックを受けていた。

「ぼ、ぼくは元気を出して頂きたくて、それで、最近あつたイチバン嬉しかったおはなしをつ」

「そうだな、ヒト。で、その五百円でなにを買つたんだ？」
「やめてくださいー届けましたよ、職員室に」

「…………」

なんか秀和はどうまでもつても秀和だつた。これがコイツの良いところなんだね！ はあ…。

俺の顔を見て、秀和はほえ？ つてよくわからない音を発した。

「おまえがなんとかしたいって思つてくれたのはわかつたから

「うつ…神崎さま…」

俺たちの 秀和が言つには 隠の空気が秀和までもを侵食していつたようだ。

悪いことをした。

律儀に秀和が手作業だけは止めなかつたから、しばらくホチキスの音だけが鳴つていた。

その沈黙を破つたのは玲華だつた。前に偏つてていた体重を背もたれに預けると左腕で顔を覆つ。

「あたし…どうしたらいいかわからない」

本当に参つてるんだ。

いままでは世羅の気持ちがわからなくて、わからないからこそ不安でも突つ走つて行くことができたんだ。俺にはわからないままけど、玲華には解つて、そしてそれが立ち止まらせるものだつたんだ。

なんかそれつて辛い。

これまで真っ直ぐ進む彼女しか見てなかつたから、余計に…。

いつまでこんなことしてゐるんだろう。

ふと、なんと呼べば良いかすらわからない、新しい感情が高まつていく。それが止まらなくて、座つていられなくなる。

「玲華は迷つてろよ」

「神崎さま？」

向かいにいる秀和の方が先にギョシとした表情で反応した。だから、また言い方を間違えたんだつて気づいた。

「いや、玲華はずつと走つてきたんだからたまには迷つていいんだ。今はたぶん迷う時なんだ」

だけど俺は…。

いつまでも負けっぱなしじゃダメだろ。

贅沢は言わない。ひとつくらいでいいから誇れるものがほしい。

これからも生きていくために。

「俺はずつと迷つていたからもういいんだ。もう迷わない。……久保田が帰らないなら迎えにいく

「どう、するの？」

掠れた声で玲華が訊いてきた。

「兄貴にあたる。絶対に兄貴はなにかを知つてゐるから

まだ不安そうな玲華に俺は言つ。前に進むため。」

「兄貴が犯人だって言つんなら見逃せない。見逃さない。弟だから、俺が真実を暴くんだ」

* * *

その日から俺は兄貴を見張ることに決めた。

まず、いつもはわざとズラしていた生活時間を作わせることから始めようと思った。たいてい時間を潰していくても俺が先に帰つてる。普通に考えればその間兄貴は塾に行つてるんだろう。

いまはまだ兄貴の塾も知らない。

いつでも兄貴に合わせられるように真っ直ぐ家に帰つた。咲田さんが入れ違いで帰つて行く。

それからただひたすら部屋で兄貴の帰りを待つていた。もともと今夜は話を聞きたいと思っていたものの、見張るとなるとまた違った感情になる。

初めから敵わないと分かってる者への挑戦はかなりの無謀を感じた。

(だけどこのままにしておけないから…)
(なんとかしたい。)

震えながらあんなことをした世羅も、落ち込んで先が見えなくなつてる玲華も、もう見たくないから。

ただ兄貴の帰りだけを待つ時間はすぐ長く感じる。

いつもは音楽を聴いていて、聞かないようにしている音を聞き逃さないようにただひたすら待つ。

それからガチャッと玄関の扉の音がしたときに、何気なく時間を確認したら22：48と数字が並んでいた。

帰つてきたんだ。

だけど兄貴はすぐには部屋に戻らない。音がしないから。ということがそのままキッチンに向かつたんだね。

俺はそう予測を立てるとやつと部屋から出た。

下に降りると、その通りで兄貴がレンジで温めた夕食を食べていた。隣にはウチでは兄貴しか読まなくなつた新聞が広げられている。

……俺が現れても、なにも言わない。

冷蔵庫から自分の分を温めて「ラップ」にお茶を注ぎ兄貴の向かいに置いても、完璧に俺を無視していた。

自分で発生させた状態だ。気まずいと言つていい場合じやない。そう思つて口を開きかけたときレンジが終了した合図を鳴らした。

(…………！タイミング！)

ひとまず咲田さんが作ったおかずど「飯を並べる。今日は酢豚がメインだった。

「いただきます」

とりあえず座つて挨拶してみる。思つたより小さくて低い声が出た。俺つて小心者……。

ちらりと兄貴を伺うと、時々新聞に手をやつながらせせらべぱり無視。オッサンくさこな、もつ。

「ウマいよなー」

なるべく明るく言つてみる。相手からはなにも返つてこない。とことん無視する姿勢のつもりのようだ。

「」の前で、友達とメシを食つてると同時に御つたんだけど。やっぱメシは一人で食つより誰かと食つた方が楽しいんだって発見したんだ

だ

とりあえずベラベラと思いつくことを喋つた。

ながばヤケになりながら。なんでもいいから食いついてくれと願う。

「あー、兄貴はそう思つたことない？俺らひつて一家団欒だんじゆんとかないし

」

「たとえば友達とか、彼女とかと/or」

」

「兄貴はやつぱり東大行くんだ？先輩がいるつて言つてたけど

」

「…………」

(…………)

ダメだ。完璧なシカトだ。

話すネタにも限りがある。兄貴のことで知っていることが少ないし、共通の話題がまずない。

いや、本当はひとつあるが……無視されたら困る。世羅のことは。だからまず、こちらに興味を向かせたい。

「ええと……友達にしげえ犬に似てるやつがいてや……。なんか反応が。そんで……そいつと話してると犬が欲しくなるんだ。ウチでも飼えないかなーとか思って……」

兄貴は俺が喋ってる間にもモグモグ食べ進めてついには……終わっていた。

バフッという音をさせて新聞をたたむ。

「あ、あのや……」

なんとか繋ぎ止めたくて慌てる。

兄貴は気にもならないみたいで自分の食器を洗浄機に入れに行つた。

(なんかもう…限界かも)

聞いてない相手に話しかけるのはこんなに心が折れるとば。こうなつたら一か八か体当たりしてやろうか。

追い込まれてちょっと不穏なことを考へてると兄貴が振り向いた。

対面式のキツチンディングだから上半身しか見えない。

「そんな井戸端会議的なことをしたくてわざわざ夕食を待つていたのか？」

相変わらず冷たい、蔑んだ声だった。でも俺は反応があつたことだけで、それが気にならなくなつていた。

箸を置いて立ち上がる。少しでも同じ目線で話したいから。

「えと、そうじゃなくて……なんであの会場にいたのか、聞きたい」「おまえが行つてるものに俺が行ついたらおかしいか？」

兄貴は腕を組み流しにもたれかかっていた。

なんでそんな言い方しかしてくれないんだろう。突き放すような、揚げ足を取るような。

「おかしいとか、そういう話じゃなくて……。……世羅と同じで知り合ったんだ? どうやって世羅と……」

「俺の交遊関係にまで口だすな。言わないといけない義理はない」「事件に関わってんだよな。だったら言ってくれよー疑いたくないんだ兄貴を」

「直球で質問しても無駄だと彼女に悟わなかつたか?」「会つてたんだ。

この言葉で今日も会つてたんだって氣づかされた。そして俺との話を聞いたんだ、世羅から。

「彼女が駄目なら俺か。たとえばおまえが想像する通りにか企んでいたとして、それでなぜ俺が教えると思える?」

兄貴と世羅は似ている。話していくも届かない感じの喋り方とか、俺を拒絶するあたりが同じだった。

だけど決定的に違うものがある。

「だったら梶さんとのことも話してくれないんだ?」「ぐどいな」

世羅から聞いているためか梶さんの名前を出しても兄貴の反応が変わらない。

決定的な違い。

それは兄貴には余裕があることだ。世羅みたいに取り乱したりしない。

「梶さんは俺のことも知つてたみたいだつたんだよ、兄貴」

「…………」

「兄貴に気をつけろって言つて力尽きた。なあ、これつてどうにう意味だよ?」

みつともなく狼狽える俺をただ兄貴はじつと見つめていた。

だから! わからんんだつて、そんな反応じやあつ!

「浅霧家となにがあるんだよ! なんで梶さんつ……」

「疑いたいなら疑えばいい。俺が殺した。やう言えば満足か？」

(俺が、殺した?)

「だが? 俺つてだれ?

問い詰めていたのは俺なのに、実際に口に出されて耳に入つてきたらざわりと胸が騒いだ。

条件反射で、近くにあつたコップを掴んで投げつけた。感情の赴くままに。

聞きたくない言葉を聞いた。なんかそれでもう駄目だつた。

兄貴はスレスレのところにでかわした。ガチャーンという激しい音がしてコップが壁に衝突してから流しに落ちる。

兄貴は眉ひとつ動かさないで冷めた眼でいた。それがさらに悔しさを増長させる。

「疑いたくないって言つてんだろ! 犯人だと思いたくないから聞いてんだよ!」

「……おまえは、そういうところお袋に似ているな」

ため息をつきながら、ちょっと後ろを向いて割れた状態を確認すると兄貴はまた俺を見た。

似てる…? あんな女に?

否定したかつたけど確かにそつだつた。ちゃんと考えたらわかつた。

物にあたるところとか、感情的なところ。

言われて初めて気づいた。ショックだった。母親のそういうところが嫌いだったのに、まさか自分も同類だったなんて…。泣きたい気持ちになるくらいの衝撃。

イヤだ! イヤだ! イヤだ!

DNA 血筋なんて言葉で簡単に片付けたくない。片付けられない。

それじゃあまるで、一生治らないみたいじゃないか。

俺は投げつけてしまつた右手の掌を見つめた。わずかに震えてる。

「やはりおまえは駄目だな」

そう言いながらも、新聞を掴むと兄貴は冷蔵庫の横のラック戻し

た。読み終わった新聞を置く定位置になつてゐる。

冷静な態度。最後通告をされたみたいな。

だけどなにが駄目なのかまでは教えてくれない。自分で考えると
いうことだ。

そのままダイニングを出て、いつとある。聞くかどうか迷つてい
たことが、つい口に出た。

「世羅は元気だつた？」

声にしてみると間抜けな質問。なにについてか言つてない。

あんなことをしたことまで、兄貴に伝えていくかどうかすら……
わからないのに。

「ああ。心配ない」

だけど、意外なほどさうりと兄貴は答えた。

その夜は玲華からメールがこなかつた。それがまだ立ち直れてないんだ、と思えて逆に気になつてしまふがない。

変わりに拓真から「メールしちやつた」つていう題名のものが届く。内容も含め女の子が書くような文章だった。

それには適当に返しつつ、玲華に送ろうかどうしようか數十分迷う。結論は送らなかつた。ゆつくり1人で考えたいだらう、なんて言い聞かせてみたけど、要は送るべき言葉が浮かばなかつたのだ。玲華はこんな状態だし、久保田はいなし、そう考へると俺しか残つてない気分になる。

事件のことは俺がなんとかしないと。

俺は次の日もくじけることなく兄貴を追う。問いただしてもかわされるなら自分で確かめるしかない。

つまり尾行だ。朝から自分の部屋で聞き耳を立てながら様子を窺つていた。

すると脇前ぐらいに出て行く音が聴こえた。

尾行開始する。

思つたより尾行つて難しかつた。テレビドラマみたいに都合の良い隠れ場所がない。あと人が邪魔。

それでもなんとか追いかけていると、兄貴はまず図書館に入った。
(ここは……)

わざわざ休日に、いつこうといひに行いつていう概念が俺にはない。

どうしようか。入るべきか外で待つべきか迷う。

とりあえず外は暑いという理由だけで入ることに決めた。中は冷房が効いていた。効きすぎてちょっと寒い。

適当に本を選び、兄貴の後ろ姿が見える位置に座つた。

あー…ダメだ。活字を見ると眠くなる。

手にとつた本が、哲学の本だつたりしたもんだからなおさらだ。

(見るからいけないんだ)

兄貴を見ていればそれでいい。そつと本は閉じておいた。
それから腕時計で確認しながら眠気と戦つていると、結局約三時間兄貴は勉強していた。一冊借りてから出て行つたけど、俺からはどんな本かまでは見えなかつた。

* * *

そのあと、兄貴は図書館に行つただけで家に帰つてしまつた。
ちょっと家の前で茫然とする。

いきなり収穫なんかがない、つていうことは当たり前でわかつて
いたはずなのに、やつぱりビックで俺の今までの時間を返せつて
いう気持ちに陥つた。

地道でうだつの上がらないこと…つて言つたのは、玲華だつけ、
それとも久保田？

ちょっとと思い出せないけど、まさにその通りだつてことを早々と
体感することになつてしまつた。

せつかく出たのに帰る気になれない。

どうしようかまた迷つたあと、久保田の事務所に行くことにした。
だけど毎回車で連れてつてくれていたからたどり着く自信があ
まりない。

最寄り駅はわかっていたから、とりあえず俺は電車に乗つた。車
だつたら一十分くらいで行けるところが倍近くかかつた。
住所とビル名をヒントに通りがかりの人へ聞いたりして、あとは
勘でなんとかたどり着く。

連絡もなにもなしで来たからこれでもし事務所が閉まつてたらシ
ヤレにならない。ちょっと嫌な可能性を考えつつ、戦々恐々しなが
ら向かつたら普通に開いていた。

扉を開けたら祥子さんがすこく期待を込めた顔でこちらを見た。それでも久保田が帰つてきてないことがわかる。

同時に申し訳ないって思う。期待を裏切らせたから。来たのが俺でごめん、って。

だけど祥子さんはそんな表情を見せたりはしなかった。祥子さんのオトナの笑顔がちょっと切ない。

俺や母親とは違う人種。感情剥き出しでは動かない側のヒト。

「あ、ごめんなさい。まだ先生帰つてないの」

挨拶よりもまえに、むしろ挨拶の変わりのよつに言われた第一声がこれだった。

謝らなくていいのに。謝ることじやないのに。

「連絡もないんだ?」

「そうなの。でもその内ひょっこり帰つてきますから大丈夫ですよほんとうか? そう思つてゐるなら、なんであまり寝てないみたいな顔してゐるんだ? 扇形に細められた目が赤い。

「あ、いまお茶を…」

「いいよ、今日はちょっと様子見に來ただけだから」

俺は事務所内を見渡した。この間となにも変わらない状態。でも責任者がいない。

なにしてんだ、アイツは。祥子さんを放つといて。

仕方ない。俺は電車の中でまだ久保田が帰つていなかつたら、してやろうと思つていてることがあつた。一応祥子さんに声をかける。

「あのや、ちょっとあのパソコン見ていい?」

「え? いえ、それはちょっと……わたしも許されてないので」

そう、最後に久保田が見たのがパソコンだつたから見ておきたいと思つたのだ。玲華だつて見ていたんだからなにかあれば玲華の方が見抜いてる。だけど自分で確認したかつた。

祥子さんは戸惑いながら丁重に断りを入れてきたけど、ズカズカとパソコンに近づいた。

「なんかヒントあるかもしんねえじゃん」

「ですが、勝手に見ると怒られますので……あ、あの？神崎くん？」「そんなこと祥子さんに言つてんだ、アイツ。えつらそー…」

「いえ、ですからね。あの…」

構わずパソコンのまえの椅子に座りながら言つ俺に、なんか祥子さんがオタオタしていた。

よほど厳しく言われてるのだろうか。偉そうに。

「大丈夫、大丈夫。俺が勝手に見たことだから」

自分に言われてないもんだから俺は強気だった。ホントに少しでもヒントになるものがあればって、そう思つたから。必死にもなる。パソコンがたちあがると壁紙はメタリックなデザインだった。あまりショートカットは利用してないようだ。俺は適当にクリックして片つ端から確認していく。

「神崎くーん…あの、あのー…」

どこか遙か高いところから遠慮がちな制止の声が聞こえる。だけど俺はすでにパソコン画面にのめり込んでいた。

そしたら……。

変なものを見つけた。

自然と画面に近づく。そうしてもそれは幻みたいに消えなかつた。むしろ、はつきりした。

(なんだよ、これ…)

数字でナンバーがふつてあるフォルダがいくつもあって、その一番下にあつた「N.O.・1035」をクリックしたら、中には「神崎 悠一」と「神崎悠汰」というファイルがあつた。

俺だけならまだいい。まだ仕事の資料だと思える。なんで兄貴の分まであるんだろう。

開いてみると、内容はここ数ヶ月の行動パターンが整理されていた。それは兄貴のも俺のも、遡ると四月からあつた。

「あの事件があつた前から？」

「そんな、なんで…。」

俺の護衛が依頼内容つて言つていたのに。その前から俺のことを

知つていたつて「こと」と？

（それも兄貴まで…）

考えられることは、ひとつだけだった。

「あの女、兄貴まで見張らせていたのかよ？」

信用されてなかつたんだ、兄貴も。両親に。

知らなかつた。確実に俺のときと態度が違つから兄貴は別だと思つていた。

ということは護衛のおまけの見張りではなく、本来の依頼は見張りが先にきてたんだ。

「あ、あの…、先生は最初断つたんですよ。そんな非道徳なことできないくつて」

俺は一瞬祥子さんの存在を忘れていた。

すぐ申し訳なさそうに言われてやつと画面から田を離して祥子さんを見る。

そうだよな。助手なんだから、知つてんだよな、全部。だからパソコンを見られることを拒みたかつたんだ。

「別にいいよ、言い訳しなくて」

「ごめんなさい…」

「そうじゃなくて、責めてるんじゃなくて…。六月が四月になつただけで別にそれはどうでもいいんだ、もう…」

もう、俺のことばいいんだ。いまさら、だらう？

「だけど兄貴は違うから。こんな扱い受けるような人じやないから

…驚いた

「神崎くん…」

驚いた。本当に。だつて兄貴にまで発信器つけてたんだ。

別のソフトを起動すると、この街の地図にひとつ光る点滅。ちよ

うどここの事務所を示していた。これは俺のだとわかる。

それからもうひとつ。俺の家にも点滅の光り。……兄貴のだらう。

「でもどこで？いつ？」

発信器を着けているだらうとは思つていた。あいつにも言つたし。

だけど…。詳しく述べてくれなかつた。

たとえば俺は？ 自分がいま持つてゐるものの中にあるはずだ。
いま持つてゐるもの。財布とiPhoneをポケットにそのまま入れて
いる。鞄は休日には持たないから。 こいつたゞいじ？

「あの、たぶん腕時計です」

腕時計？

確かに今日もしているけど、でもなんで？」これは母親を介せずに
父親から直接もらつたのに。

「神崎くんのお母さんがいらしたとき、すでに着けさせているから
利用していくださいつて…」

「ふうん。共犯か」

いまさら驚かない。

だけど気分は悪い。知つたうえで着けていられるほど凶太くはな
かつた。外してとりあえずポケットにしまつ。

だつたら携帯をくれてGPSで見張ればいいのに。親の考へて
ることは理解不能だ。

いざれにせよ、俺の持ち物なんて両親ならいくらでも操ること
ができる。それはきっと兄貴もそつなんだ、つていまなら思えた。

よく読むといろいろ判つてきた。

母親から聞いたのだろう。整理された俺のデータの中にはメール
アドレスがあつた。

「なるほどな。玲華はここに入り込んだわけだ」

あながちハッキングして手に入れたつていうのは、単なる妄想で
はなかつたということだ。

それから事件があつたことで、母親から“より近づいて俺が余計
なことをするようなら止めや”という依頼内容が追加されていたこ
とが記してあつた。

そもそも護衛といつ名田ばどいにも無かつたようだ。

(そりやあ… そうだよな)

おかしいと思つていたんだ。でもこれなら納得がいく。

盗聴器の類いは見つけられなかつた。発信器が示す場所に移動して、会話を盗み聞きしているだけみたいだつた。

なんだ、そんなことか。蓋を開けば大したことない、単純な話だ。だから現れたんだ。あいつは。

だから断つていたんだ。調査することを。だけど玲華に脅されて仕方なく？

「もしかして玲華は本来の依頼内容を……もしくは、兄貴のことも張つていたつてこと、バラされたくなれば協力しようとでも言つたのか？……それとも発信器のことですか？」

そんなことで？

二人が俺になにかを隠そうとしたことがあった。それがこれ？

「バカだな……」

こんなことまでする両親も、そんなんで揺さぶられる久保田もバカで、呆れる。

「あのつ、わたしが言える」とじやないですけど、どうか先生を許してあげてください」

ずっと遠いところから祥子さんの声を聞いていたけど、このとき急に近くなつた。といつぱりちやんと正しい距離にきた。

いつも穏やかでニコニコしてゐる祥子さんと違つたから、ちやんと聞こえうと思つた。

すごい焦つていて必死な声に、いまにも泣き出しそうな神妙な面持ちになつてゐる。

「わたしがまえに言つたこと間違つじゃありません。先生はちゃんと言つてないけど、本当に神崎くんのこと心配してゐるんです

「だから責めてないって」

どこか冷めている。彼女に正しく気持ちを伝えないといつて思いながらも、頭のどこかで俺は冷静だつた。

「久保田さんがいなくなつてゐるこの状態はマジなんだよな？」「涙ぐみながら彼女は頷く。

「だったら仕方ない。これが嘘でしたって言われたらムカツクビ」

ろの騒^{さわ}がじやなくなるけど」

本当に仕留めるか。

「祥子さんが責任を感じなくともいいよ。俺は決めたから。やることは決まってんだ。それが変わることはない」

決めたから。兄貴の隠してることは全部暴く。^{あば}暴いて、それが悪いことなら…後ろめたいと感じるようなことなら止めなくちゃいけない。

それから久保田も見つけないと。見つけて直接言つてやりたいことがある。祥子さんに謝らせるんじゃなくて、ちやんと久保田本人から聞きたい。

俺はまた画面に意識を戻す。

神崎惣一のフォルダの中に無題のフォルダがあった。一目見てから気になつたところ。

クリックしたらパスワードを聞かれた。他のは全部簡単に入れたのに。これが玲華も入れなかつたところなのだろうか。

「パスワード知ってる?」

「いえ、本当にわたしは見てなくて…」

「じゃあ久保田さんの…誕生日は?」

「十月二十八日です」

様々なパターンで入力してみたが全てはじかれた。んな単純じやねえか。

「あいつの趣味は?」

「えつと…なにかな?機械いじり、かな…」

「入れにく이나。……たぶん違う。他には?好きな食べ物でもなんでも、思い入れのあるやつ」

「えつ?ええ?」

祥子さんが混乱し出したみたいだ。あいつー…、祥子さんくらいにはヒント言つとけよ!…

激しくそう思つてたら…。

ふと降りてきた。

ホントにアーティストとかがよく並んで、神のお導きのことみたいに。

「それだ！」

俺がつい祥子さんを見ながら叫んだもんだから、祥子さんはビクリとビビりてしまつた。だけど「めんとか言つてる余裕もなくて手を動かすのを優先する。

「ちつ。違つか……。だつたら……。あ、ひらいた……」

「え？ なんだつたんですか？」

興味津々という感じで祥子さんが覗きにきた。

俺が打つたキーワード。“SYOUUKO”

(あの野郎：クサイことを)

こいつちが恥ずかしくなる。ちなみに“SYOUUKO”では駄目だつた。このちょっととした遠回し加減がなんだか腹立たしい。

「神崎くんっ、なんだつたんですか？」

もう一度、祥子さんが聞いてきた。なんかさつきとは全然別の焦りが見える。

(えーと…)

どうしようかな、と躊躇う。迷つた結果、まえに池田に教わったかわしかたをしてみた。別に教えてやると言われたわけでもないけど、つまり。

「……内緒」

ええつ……って、たぶんそのとき俺がしたような不満そうな表情を、祥子さんもしていた。

あんまり使えるかわし方じゃないなって思つ。

開いたら先ほどと同じ行動内容をまとめたものだった。

でもその中身が全然違つた。俺の知らない、想像もつかない兄貴の行動範囲。

毎日塾に行つてると思つていたけど、塾の日は週三回でそれも九時頃には終わり、友達などと居酒屋とかバーに行つてゐるみたいだ。中には一度帰宅してから外出し夜遊びしてる日も少なくない。あの

兄貴が、つて感じだ。悪く言つならばガリ勉とまで思つていたのに。

(え?)

そのなかで、信じられない文を見つけた。兄貴のフォルダを見たときより驚いている。

5月10日23時10分、カフェRiver

50代前後の男と逢つ。会話内容不明。

.....。

5月19日01時32分、カフェRiver
10日に会つた男と対面。

近くの席に陣取ること成功。会話内容、別紙。
男の名前は梶剛志であることが判明。

梶剛志であることが判明.....。

梶剛志。

であることが.....。

(兄貴が対面していたのは、梶剛志....)

知り合いかもしれない、つていうことは思つていたのに。
実際に、こうやって、目にすると....かなりショックだった。
思考が止まるくらい。

久保田メモによると、それからも二人はコンスタンツに会つてい
た。そして.....極めつけ。

最後に。

6月9日00時45分、カフェRiver

梶剛志と7度目の再会。会話内容、別紙。

最後の密談となる。

(六月九日つて…)

梶剛志が命を奪われた日。

会つてた、最期に、兄貴が。

ガツンと打ちのめされた気分だつた。

「兄貴が…」

うまく口がまわらない。声を出したら思つたより衝撃を受けてた。

「アールって店の頭文字だつたんですね」

隣で祥子さんが同じように驚いていた。驚きながら言つたその言葉に、俺はギクリとなつた。

そうか。そういうことになるのか。

(兄貴、だつたんだ)

あのときさんざん怪しいと言つていた、手帳にあつた頻発に逢つよつになつた人物。

久保田は知つていたのに、話を合わせていた。

なんかそれももう…わけがわからない。頭が、混乱する。祥子さんも知らなかつたみたいで言葉を失くしていた。

(あいつつは…ほんとに!)

ムカムカと怒りが込み上げてくる。いろんな要因が重なつて胸くそが悪い。一発殴らないと收まりがつかない。

「祥子さん。絶対アイツ見つけるから。で、ぶん殴るから」

俺がそう言つたら。祥子さんはキリつとした顔で、でも頬をわづかに緩めながらハイ!と言つた。

* * *

しばらくパソコンの前から離れられないでいたんだ。虚無感が後を引く。

だけど事態はまるで追い打ちをかけるみたいに、動いていた。

というか、動いていたのは兄貴だった。

「ヤバい!出掛けたみたいだ」

自宅にあつた光りが点滅を繰り返しながら移動していく。ビードルに行くんだろう。また図書館のようないわばハズレである可能性もある。

だけどなぜ今世羅と会っているのか理由が知りたい。もしかするとこれから逢うかもしれない。

そう思つと立ち止まつてゐるわけにはいかなかつた。

「点滅止まんの待つてたら遅いよな……」

「わたし見ています！それから神崎くんに連絡いれます。神崎くんはわたしの携帯持つていつてください」

俺の独り言に答えるように、祥子さんが携帯電話を差しだしながら言つた。

祥子さんは罪悪感を感じてるみたいだ。なんかそれを利用してみるとたいで申し訳ないけど、いまは有り難く申し入れを受けることにした。

そういうわけでいまは電車の中にいる。祥子さんの携帯を握りしめて。メールで来る指示に従いながら。

兄貴の目的がわからない。犯人かどうかもわからなくなつっていた。会話内容の別紙つていうのは、いくら探しても見つからなかつた。

(考えたくない)

梶さんの次に世羅と接触した理由。

もし梶さんを殺したのが兄貴だとしたら、次は世羅？

阿呆らしい、これまでなら思つていたけど実際に梶さんと接点があるなら……。

(信じられない)

久保田はなにやつてんだろう。兄貴のこと知つてたんなら、別に浅霧邦春の弱味なんていらないのではないだろうか。

(こま、なに、やつてんだ？)

兄貴のことを言えなかつたつてんなら、いなくなる必要もないはず。

玲華に報告しないといけない。

そもそも玲華はどこまで知ってるんだ？。なんだか自分が取り残されてる。

兄貴と浅霧家の間になにがあるんだろう。……それとも、神崎家と浅霧家？

空想だけが止まることなく突き進んで行く。目眩を起しそうになる。

叱りつけるかのよ、手の中で携帯が震えた。バイブだ。
はつと我にかかる。ダメだ。こんなにじゃダメだ。想像で胸が苦しくなるなんてバカすぎる。

(ちゃんと、置いていかれないように)

現実を見るんだ。たとえそれがどんなに過酷なものだとしても。メールを確認すると、サッとポケットにおさめた。
内容にいまさら驚いたりしない。やっぱりそうかつていう想いだつた。

神崎くん。次の駅で降りてください。

お兄さんはその近くで止まりました。

Riverです。

カフェ River。

レンガ造りで小綺麗なカフェだった。入り口付近には花が咲いた鉢植えが並んでる。

俺は一車線の道路を挟んで反対側の歩道から窓側に座っている兄貴を見ていた。

これ以上近づけない、理由があった。あのとき尾行していた刑事が今日もいたのだ。店側の歩道にある街路樹にその身を潜ませている。俺からはもう見えただけど。

俺はなんとなく自分も兄貴をつけ回していることを、刑事に知られたくなかつた。見つかれば事情を聞かれるだろう。

相手はやっぱり世羅だつた。

いまは死角があり兄貴の右側しか見えないが、それはここに来て最初に確認済みだ。

(あんな顔して笑うんだ)

どんな会話をしてるかなんてわからない。だけど兄貴の顔からは、追われている人がするような切羽詰まつた表情なんて微塵みじんもなく、穏やかで時折笑みを見せていた。

俺には決して見せない顔。

外面が良いのか、それとも俺だから見せないのか…、それすら判然しない。

世羅の反応も見たかつたが、ここから少しでも世羅の対角線上、つまり入り口側へ移動すると刑事の視界に入つてしまつ。気づかる可能性はあるべくゼロにしないといけない。

こうやって見張つて十五分が経過した。

兄貴が立ち上がりつた。トイレか、会計か注目する。しかし数分経つても戻つてくる気配がない。

刑事の様子を伺つと、わずかに身を乗り出しだがそのままだつた。

ポケットからまたバイブが震えた。馴れない感触にビクリとなる。

事情があつたらごめんなさい。

でもお知らせした方がいいと思って。

お兄さん、お店から離れましたよ。

まだ祥子さんは事務所で確認していくれたようで、俺が動かないで知らせてくれたみたいだ。

このカフェには裏口があつたんだ。狭いよつに感じたが、奥行きはあるんだろう。

(ナイスだ、祥子さん)

俺は走り出した。刑事の後ろ側の、信号も横断歩道もないところを車が来ないことを確認して走り抜けた。

一本向こうの通りに行くために遠回りをする。ここで見失つては意味がない。

細い路地を抜けるまえに兄貴が目の前の道を横切つて行つた。慌てて大きな薄汚れたゴミ箱に身を隠す。

ひとりだった。店を出て別れたんだ、世羅と。

そう思いながらすぐ後を追あうとした。路地から、その道に出たらすぐ兄貴の背中があつた。

だけど出られない。

兄貴の向かいから、兄貴に近づく男が一人現れたから。池田だつた。

ちゃんと裏口も張つていたんだと気づく。

「神崎惣一君だね。俺はこういう者だが…………ちょっと話を聞かせてもらえるかな」

池田は兄貴に近づくと声を掛けた。ちらりと警察手帳を出したようを見える。

「お断りします。こちらには話すことなんてありませんので」

「人が1人死んでいるんだ。捜査に協力しろ」

「何度も言わせないでください。話を聞きたかったら今状でも持つてきてもらえますか」

兄貴の顔は見えないけど声が冷たいから想像はつく。

池田も、兄貴の身体で見え隠れして表情まではわからないが厳しい声だつた。

だけど、失礼と断つて兄貴が通りすぎても、池田はその背中を見つめるだけでもう食いさがらなかつた。

変わりに……。

「出てこい、隠れてるのはわかってるんだ」

バレた。

視線は一度も合わなかつたはずなのに、視界に入つてしまつたんだろう。

（兄貴が行つてしまつ……）

早くしないと、見失う。しかし追うには、どうしても池田は避けられない。

俺は舌打ちをして池田のまえに出た。

「こんなところでなにしてる?」

池田が仕事絡みのせいであよつと怖い。怒つてるんだろうな。あー、やだやだ。

「いやー偶然つて恐ろしひなー」

「いつからつけてた?」

「いやーだからさ、偶然つて……」

「はぐらかすな、探偵じつの続きか?」

なんとか誤魔化そうと明るく言つてんのに、池田は真剣マジだった。

ちくしょう…やっぱムリかー。

「しようがねえだろ、あんたは教えてくんないし。話しあつても兄貴にはシカトされるし……」

なんか言つてて自分でへこんだ。なにやつてんだろう、俺。

「話し合ひ、したのか?」

池田にちょっと面白らつた顔をされた。なんか不本意だ。

だけじゃのおかげかなんなのか、池田の雰囲気が和らいだみたいだ。

「悪いか。話し合えつついたの誰だよ」

「悪くない。よく頑張ったな」

池田はぽんつて軽く俺の頭に右手を置いた。ムカツときてそれを振り払う。

「やめろよーガキ扱いすんな！」

かなり本気でキレたのに池田は怯まない。

「それで? なにを聞いたんだ?」

「失敗に終わつたつて言つただろ? 聞けてねえよ、なにも」

「何か分かつたからつけていたんだろ?」

「…………」

気づけばもう、池田は仕事の顔に戻っていた。

もしかするとあまり余裕がないのかもしれない。なぜかはわからないけど……。

「もう一度訊く。なぜつけていた?」

「それは……こっちが訊きたいんだよ。なんでいま世羅じゃなくて、兄貴に声を掛けた?」

「訊いているのはこっちだ。質問に質問を被せるな」

「言わねえよ。あんただつて教えてくれないだろ」

「ここにいたくない。」

俺は隙をついて池田の脇を抜けた。だけどすぐ腕を掴まれて阻まれる。

「これは遊びじゃない! 流れによつてはおまえにも不利になる可能性だつてある! 嘸りたくないなら、大怪我するまえに大人しくして

る」

池田の言いたいことはすでによくわかった。ちゃんとわかるように話してくれている。

でも。

そんなこと言われたつてもう遅い。今さら引けないんだ。

「悪いけど……だからっていまさにやめらんねえんだよ」

「なんだ、自分も関係者のつもりか？自分が動かないと事件が解決しないとでも思っているのか？そんなのはただの傲りだ。中途半端な好奇心で事件をかきまわすな」

好奇心って……ひどい言われ方だ。

だけど、言えないから。いまの状況で、なんで俺が兄貴をつけ回さないといけないかなんて。言えないなら突っぱねることもできない。

俺の思い違いかもしれないし、そんなんで警察に言つたら冤罪になりかねない。

（馬鹿な考えだ）

思い違いでもなんでも、梶さんの言い残された言葉は戻らない。

聞き間違えなんかじやない。

関係は、あつた。

「どうした？今日はむづむづ返さないのか？」

まだ腕を掴んだまま、池田がなんとも言えない顔になっていた。

* * *

池田と別れたあと俺はまた祥子さんに助けられて兄貴の居場所がわかつた。

兄貴はもう自宅に戻っていた。世羅と逢うためだけに外出したんだ。刑事に尾行されるという、ある意味危険なことを冒してまでなんでわざわざ……。

もしかして気づいてなかつたのだろうか。兄貴が？

……あり得ない。

（なにを企んでる…？）

何度も目になるかわからない猜疑^{さいぎ}と不安が渦巻く。

なんであからさまにするんだろう？バレてるのに。怪しくないよう隠せばいいのに。令状持つてこないと話さない。なんて、なん

でそれで言つてんだるわ。言えるんだるわ。

(考えてもなにも出でこない…)

あのとき玲華と久保田は、アールの対面相手が分かればその先が見えてくると言つた。だけど現状、なにも犯人に繋がつていってない。怪しいで止まつてゐる。

俺はもう少しなにかがしたくて、自宅に帰る氣もやつぱり起きなくて、それで。

(単純な思考回路)

最低だ。こんなうまいく説明できない、変な感情に陥つたままで世羅の家に来るなんて。

世羅が駄目なら俺か?つて兄貴に言われたばかりなのに、俺はいまた同じようなことを繰り返してゐる。

(ここに来たつて入れるわけでもないのに)

しかも世羅が帰つてるかどうかすらわからないのに。だけど、もしかしたら久保田つてここにいる可能性もあるんだよな。

頭の整理がつかないまま大きすぎる家の周りを歩いていた。

門から直接入つてみよつかとも思つたけど、入れてくれるわけがないいつて頭の端で気づいていたのだ。それに訪問の理由も思いつかないし…。

ずつと塀にそつて歩いてるとあの日パーティーで使用された建物の前に着いた。いまは閉まつてゐようぢつそつと佇んでゐる。あの日はあんなにきらびやかだったのに。

ひと通り見て帰ろうつて思つたときだつた。

ちょうど模様で穴があいていて、外から中を見ることができる一帯があつた。それは逆に言つと中からも外側が見えるといひことで、その中から声をかけられた。

「不躾に失礼、束の間ワシに時間をくれんかの?少年」

そう言つてシワシワの顔にさらにシワを作つて笑つて言つたのが…。

(えええええ…)

丸首のシャツにステテコで麦わら帽子に軍手まで着用していて、誰の目にも庭いじりをしてますっていう姿の…浅霧功男だった。無論その格好に裏切らず、花壇の隣にある鉢植えのまえで座り込んでる。

和服のイメージが払拭した。あのときの近寄りがたい威儀は皆無だ。その辺にいるお爺さんと化している。

なんでこんな……ひとりで庭いじりしてるんだ? つていうかなんで俺に用事が…?

「驚いたるようだの、少年。おまえさんは会いに行かねばならんと思つていたところだつたんだよ」

「なんで…」

こんな偉い人 たぶん、いまは全くそう見えないけど、きっと偉い人 がなんで俺のことを知ってる?

「梶の最期を聞きたくてな。……おまえさんが最期に会つた人間なんだろう? あの日宴会にも来とつたようだが、話せなんだな」

「あつ…」

そうだよな。この人に情報がいつてないわけがないんだ。パーティのときも気づいていたとは驚きだ。挨拶すればよかつた。「すまんの。本来ならワシから出向かねばならんところを。あやつらが五月蠅いもんではな」

ヨイショ、と声に出して浅霧功男氏 久保田の呼び方がうつつてる: が腰をあげた。

「いま門を開けさせてやるからな。柳田に言つて…。いや、いかんな、それはいかん」

独り言かどうかわからぬことをぶつぶつ呟きながら、功男氏は塀にそつて門のある方まで歩き出した。

えーと…。まだ時間をあげるとは言つてないんだけど…。とはいえること言える雰囲気ではない。

(なにか聞けるかもしないし、まーいつか)
どうせ暇な身だ。

「だつたら俺、この塙乗り越えます。ここからなら行けるから」「手がなんとか届く高さだつた。懸垂して、この模様の穴に足を入れることが出来ればあとは簡単。

「やつてみるかの？センサーが反応して警備員とドーベルマンが大勢出迎えてくれるぞい」

実際に愉^{たの}しそうに功男氏が教えてくれた。……やらなくて良かつた。そうやって忍び込もうといつ考えが、実は頭にあつたから余計にビビつた。

結局功男氏が門をあけてくれた。使用人を呼ぶのがなんでいかんなのかはわからないけど、庭いじりの格好してるせいか恐縮感とかが生まれない。

功男氏はそのまま庭に連れていいき、そこにある白いベンチに座つた。俺にも座れと促す。こんなに簡単に、経済界のトップクラスの人（恐らく）の近くに居ていいのだろうか？

「せつかく入れてもらつてなんなんんですけど、俺は梶さんのことはなにも…」

今頃この人が言つたことを思い出して、申し訳なくなつて。先になにも知らないって言つべきだつた。

「構わんよ。見たことそのまま伝えてくれるだけで良い」「そのまま…」

知つてるだろうに…。この人ぐらいになればこれぐらいの情報なら簡単に手に入るだろう。

俺の考へてることがわかつたのか、功男氏は遠くを見ながら続けた。

「ただの情報ではなく生の声が聞きたい。おまえさんはいわば生き証人。人の最期を看取つた者は、遺された者に伝えていかねばならん。どんな僅かな事柄でもな」

大切に想つてたんだ。梶さんのこと。ただの使用人とどうでもいい扱いをするんじやなくて、ちゃんとひとりの人間として。

本当にあんまり言えることは少なかつたけど俺は梶さんのこと

話した。

最後に、あの言葉を伝えるべきか迷う。

「何を迷つておる?」

「……」

俺、そんなに分かりやすいんだろうか。最近とくにすぐ見抜かれてる気がする。

「思つところがあるんだろうが心配無用だ。ワシは警察ではないからの」

「誰が犯人か気にならないんですか?」

「懸念ならある。下の者がなにやら不穏な動きをしておるようだ」「この流れは……。チャンスかもしれない。この人の持つてる情報がほしい。」

「世羅はどうしますか?」

功男氏は帽子を取つて膝に置き、首にかけているタオルでちょっと額の汗を拭つた。よく見るとタオルは有名なブランドものだ。この辺がそりにいるお爺さんと違つ。

「世羅が、あの子は不憫な子だ。あえて自ら内紛に身を投じてある少し寂しそうな目で功男氏は空を睨み付けた。

その言い方はつまり、世羅はその当事者ではないといふことか。

「梶さんを慕つてたんですね。だからあえて?」

「そうだな。世羅は梶のことを父親のように敬慕^{けいぱ}していたよ。それも憐れでならん。唯一の理解者を失つてしまつたからの」

唯一無二の存在だったって世羅は言った。そういうことだつたんだ。

(親代わり)

憐れつて簡単に言つてくれる。

(そう思うなら、なぜあなたが味方にならないんですか)

(なんで世羅だけ一人離れに住むような、そんなこと許してくるんですか)

出かけた言葉を呑み込む。そんなこと言つたつてどうにもならない。それこそ好奇心で中途半端に首を突っ込むことになりかない。

池田に言われなくたつてわかってる。俺には「びりすむ」ともできない。世羅のことについては。

「世羅が憐れかどうかは、世羅が決めることだ」

「確かにその通りかもしだんな。ワシが言えた義理ではなかつた。ワシは傍観者に成り下がつていたんだよ。同罪だ」

同罪？なんの？

「知つてたんですか？世羅が…」

虐待を受けていたこと。知つていて、見て見ぬふりをしていた？「今はもうワシはほぼ引退しているに等しいが、当時は……いや、自己弁護だな」

功男氏は途中で話を打ち切つた。

肩が落ちていて、なんか見ていて痛々しい。計り知れない想いがあるんだろう。

きつと普段とは違う。この人。

引退してなのか、梶さんの話を聞いて感傷的になつてゐるのかはわからないけど。あの日見たような威厳がある感じが本来の姿で、いまはきつと弱気になつてるんだと思った。

「内紛つてなんですか？なにがあるんですか？この家に」

「この家だけの話ではないよ。どこの家でも起こりうることだ。権力争いなんてことはな」

確かに、玲華も言つていた。相続争いとかそういう話。

「前からあつたが、いよいよワシが引退するとなつて激化したようだ。梶はそれに巻き込まれたと言つても過言ではない」「え？」

まさか犯人のことも知つているのだろうか。

「巻き込まれたって、じゃあ兄貴、神崎惣一という人物を知つてしますか？」

だつてそれじゃあ、兄貴はなんに関わつてゐるんだ？金田当て？いや、あまりにかけ離れてる。それなら一介の運転手ではなく、もつと適切な人がいるはずだ。

「さあな。ワシはただ一理あると申つとるだけだ。全ての因果がそこにあるとは言つておらん」

俺の考えを先回りして功男氏は言ひ。原因はいくつもあつたとうことか？

「おまえさんは犯人を探してあるんだな？それでこの家の周りを彷徨^{さまよ}いていたわけだ」

ヤバい。いまさらそこ指摘するか？

確かに否定できないけど。警められた行為じやないことは知つてるけど！

すみませんと言おうとしたけど、しどりもどりになつていのつちに功男氏は続けた。

「たとえどのような結果が待ち受けても受け止める覚悟があるようだな。そういう目をしておる」

あつこの人責めてない。べつに咎^{とが}めようと思つて言つてたんぢやないんだ、つて気づいた。

そんな大げさな目をしてるかどうかは不明だけど。

「そういう意味では…神崎惣一君は宴会で挨拶したが一人はよう似とるな」

しまつた。兄貴はちゃんと挨拶したのか。

「顔かたちの話ではない、彼にも同じ目を見た。……しかし彼はいかん。似とるがあれば別だ。何やら腹に一物抱えとる」

え？

ハラーハモツつて、それつてどういう意味だろ？いや、言葉の意味は解るけど…なんとなくだが。

「おまえさんが抑止力にならねばならんよ。よう意識して彼を注視していなさい。それが良い」

うんうん、と一人で納得して、それからはもう功男氏はそれにつ

いてなにも言わなかつた。

俺なんかが抑止力になれるんだろうか。兄貴の企みがなにかもまだ分かつてないのに。

だけど。

止めなくてはいけないことがあるなら俺が止める。そう決めたから。　はい、と俺は答えた。

功男氏と別れて、祥子さんに携帯を返しに行つてから帰宅したら、もうすっかり夜だった。

とても長い一日だつた気がする。

玄関からノロノロと歩いて行つたら、ちょいびだいニングで兄貴が夕食を食べていた。

条件反射でギクリとする。咄嗟につぶやきしてしまう。あまりに不甲斐なくて。

功男氏はああ言つてくれたけど。覚悟が足りない。まだ。

俺が近寄つて行つても、やっぱり兄貴は知らん顔で黙々と食べていた。顔すら上げない。兄貴、つて呼び掛けても見向きもしない。

(またか)

またここからのスタートか。嫌気がさす。いい加減ウザい。でも投げ出すわけにはいかないんだ。

今日はカレーライスみたいだ。玄関を開けた時点で香つていたから、予測を立てたら当たつた。まったく難易度の低い問題。

俺は冷蔵庫を開けて半分くらい入つての牛乳を取ると、棚からグラス制のコップを反対側の手で持ちテーブルについた。カレーには牛乳つてのが俺の暗黙のルールだ。まだカレーを食べる気はないけど……。

とふとぶとコップのハ割りくらいを白く染める。それをグイッと一気に飲み干して、よし、と気合を入れた。

「さつき、や。世羅のお祖父さんと話をしてたんだ」

兄貴はカレーをすくうスプーンをピタリと止めた。イキナリ反応アリ。

「兄貴のこと腹に一物抱えてるつて。……バレてんぞ」

自分の言葉が届かないからって、他人を引き合いに出すなんて本当に卑怯だ。だけでもう後がない。そんな気がしていた。

「浅霧家に行つたのか。なぜ行つた？」

「兄貴は秘密で、俺だけ言うのつて不公平だよな」

「対等のつもりか」

はつと息を吐き出しながら兄貴が笑つた。

「対等つていうか一応心配してんだけど」

「なるほど。下に見られているわけか」

なんでこの人はそういう言い方しかできないんだろう。

「兄貴つて友達いんの？」

「おまえ以外にはこんなこと言わない」

あつそう。

そういうえば久保田メモによると、よく友達と高校生が行っちゃいけないような店に出入りしてるんだつた。頬杖をついて、俺はふてくされてみた。

「とにかくさあ、なに企んでるか知んないけど、刑事が見張つてんのに世羅と会うのは自殺行為じやねえの？」

「なに？」

本気でギロツと睨まれた。ちょっと怖じ氣づく。だけど止められなかつた。

いい加減終わらせたいんだ、俺は。

なるべく兄貴の目は見ないようにして続ける。

「梶さんと会つてた店で世羅と会つてたら誰でも不信に思つよな」
ガチャーンつてスプーンが皿に落ちる音と、ガタつて兄貴の椅子が鳴つたのが同時だつた。

えつ、て俺が顔を向ける前に回り込まれて。

肩だか胸ぐらだかを掴まれて、そのまま床に投げ出された。咄嗟に受け身をとつて頭を打つことはなんとか免れたけど、上に乗られ動きを封じられた。

兄貴の顔に余裕がない。初めてこんな切羽詰まつた兄貴を見た。
怖い顔。

「おまえ、どこまで知つてる？」

低く唸るような声。

「や、やめろよ。だけよ」

なんとか身を起こうとしたら、がつちり首を締め付けるみたいに右手で捕まれた。

左手は、俺の右腕をギリって握り潰されるんじやないかと毎つへらい、強く押している。嫌な汗が背中を伝った。

「言つんだ。おまえは… 刑事はいつから見張つてた?」

「つけられてるの、気づかなかつたのかよ…」

なんとか絞り出した声は驚愕に震えた。

信じられない。兄貴ならとっくに見抜いていて、わかつたうえで世羅と会つてるんだと思つてた。

「つけていただと。おまえもか?」

「俺は……」

尾行していたことはしていたが、実際には一度離れて、親が取り付けていた発信器でまた来ました。なんて言えない雰囲気だ。

「俺は…ずっと気になつていて…」

「だからつけたのが最低だな」

「兄貴がなにも言わないから……そのくせ、俺が殺したとか言つし! 真実が知りたいんだよ、俺は!」

身体に力を込めて、叫びながらなんとか体勢を整えようとしたけど。さらに兄貴も力を込め、両手で首を締めてきた。

ヤバい。息が、できない。

「この期に及んで俺のせいが? ……おまえ、知り合ひの刑事がいるんだつてな。言え、警察はどこまで言ついてる?」

本気だ。

兄貴の手は脅しどとポーズではなかつた。本氣で絞めていた。息を吸い込むとしたが能够なかつた。

戦慄を覚える。

自由に動くはずの手はなんとか喉にくい込んでいる兄貴の手に触れたものの、引き剥がすことはできない。下腹部に乗られているか

ら、脚はばたつくだけで兄貴には届かない。

「言わないならここで死ぬか？」

「ぐつ……」

怖い……殺される……。

これ以上絞め続けられたら……マジで死ぬ。

息苦しさから思考が止まる。

だけど血がせき止められているのは感じた。うつ血する。視界が赤みを帯びてなにも見えない。耳鳴りがしてなにも聞こえない。いつもの苦しさとちょっと違った。いつもより苦しい。僅かな酸素さえない。

明らかに敵意を持つた人間に、それもたつたひとりの兄貴におとしめられている状況は、苦しくて悲しかった。なにがそこまで追い詰めたんだよ。

言えよ。そんなんになるまえに、吐き出せよ！バカ！

気力だけで左手を動かしたけど、兄貴の力に勝てるはずなかつた。むなしく空を切つて、パタリと床に落ちた。

それがきつかけになつた。

諦めの念が俺に渦巻く。

ああ、死ぬのか……俺は。くだらない人生だったけど、何度も過呼吸に陥るたび命の危機を感じたけど、それもとうとう終わるんだ。

苦しみから解放されるなら、それもいいのかもしね。死んでしまえば、馬鹿にされることも、殴られることも……、何かに氣を病むことが、ないんだ。

（もう、だめだ　　）

意識が限界にきて、完全に途切れそうになつたとき。

突然。

兄貴の手が、離れた。

大量の空気が一気になだれ込んで、喉が耐えられないとでもいうように俺は激しく咳込んだ。肺が、全身が酸素を欲している。いつの間にか兄貴の重みもなくなつていて、身を横に向けてもし

ばらく咳が止まらなかつた。

それでも兄貴が氣がかりで顔をあげる。兄貴はこちりに背を向けて、あぐらをかけて座り込んでいた。頭が頃垂れている。

「あ…」

喉がつぶれて咄嗟に声がでない。兄貴、つて呼び掛けたいのに。真意を確認したいのに、出るのは咳ばかりだ。

「違うんだ」

体は動かさず、ぽつりと兄貴が言つた。抑揚のない声で。

「俺が殺したいのはおまえじゃない」

殺したい。つて言つたか、いま。

俺じやなくともなんでも、殺したい人間がいるつてことか……？それが腹に抱える一物なのか？

「俺もお袋の血を引いていたというわけか」

自分の拳を見詰めながら兄貴は笑つた。笑つたように聞こえた。

（馬鹿野郎！）

そんな兄貴は見たくないんだよ。

いまなら…いまならなんとか、思い止まらせることができるんじやないか？そう思つて腹に力を入れて上半身を起こした。

「兄貴…池田さんは、刑事はパーティより前から張つてたって」

声を出すことには成功したけど、まだ掠れていた。

「もともと世羅がアリバイなかつたから注目されたみたいだけど、その中で兄貴が世羅と接触したから…。刑事がどこまでつかんでるかなんて、俺も知らない」

「…………」

「それにこの事件のこと調べてんの警察だけじゃねえよ。……兄貴、気づいてた？両親が俺たちのこと探偵に見張らせていたの…」

「なに？」

兄貴の体がややこすらに向いた。

「気づかないよな。俺だって今日知つて驚いた。俺と違つて兄貴はデキが良いし好かれてる」

だから。

「その探偵もこの事件調べてるんだ」

だから、思ひとどめてほしい。そういうことが伝わればいいと思つた。

「いつから?」

「わからない。少なくとも探偵は四月からだけど、俺の場合は中学のときに気づいた」

「どういう、意味だ?」

完全に兄貴は俺を見ていた。俺も見据える。

俺は中学のときの教師の話をした。やるせない想いがよぎる。

「そうだったのか、やけに事情通だと思つたら……」

「だからさ、もうやめろよ! 何やつたって結局全部バレるんだよ」
まだ立ち上がりなでいると、少し蛍光灯の光が遮られて一瞬暗くなつた。兄貴が近づいてきていて、俺と同じ目線になつてたんだ。怖い顔のまま。馬鹿にしたり蔑んだりつていうのはもうなかつたけど、目がつり上がつていた。

逸らさないで、無視しないでまっすぐ俺を見る。

「もう遅いんだよ。おまえは止めたいのかもしねないが、話していいわかった。おまえに俺は止められない。……俺は明日決行する」
決行つて……なにを? わかつたつてなにが?

考えないといけないのに、頭がうまく回らない。

「いいか、絶対についてくるなよ。大人しく家にいろ。次に邪魔するときには、本当におまえを殺す」

なんだよそれ。殺す殺すつて簡単に言つてんじゃねえよ。

……つて言つたかつたけど、言えなかつた。きっと簡単には言つてない。

(本気だ)

これも。本気の言葉だつた。

兄貴は食べ残したカレーを片付けて、そのまま部屋に戻つた。

その間、俺はやっぱりなにも言えなくて、みつともないけど座り

込んだままだつたんだ。

* * *

あんなこと言われたからつて引き下がれるはずなかつた。
違う。あんなふうに言われたからこそ、なんとかしないといけないんだ。

出掛けさせないようにリビングにその夜はいた。廊下に続くドアをすべて全開にして、いつ出掛けても気づくようとした。

……だけど、やらかした。

いつの間にか眠つていたみたいで、起きたときは兄貴はいなかつた。

(まだ六時…)

きつとつけられなによつとするためだ。深夜のうちに出てたのが早朝なのかはわからない。

三時こじりまでは記憶があるが、やっぱり疲れが溜まつていたみたいだ。

でも奥の手がある。

(たぶん…)

何につけられてるか知らないが、発信器のことはまだ言つてない。(たんに言い忘れてただけなんだけど)

俺は一呼吸おいてから、急いで身支度をした。

それから祥子さんに、というか探偵事務所に家から電話してみたけど、日曜日の早朝のせいいか誰もとる人はいなかつた。探偵に日曜とか祝日の概念はないと思うが…、やっぱり朝が早いせいかもしない。

俺はじつとしてられなくて家を飛び出した。

睡眠不足と、クーラーをつけたままだつたせいか体がダルい。そんな体に初夏の朝の陽射しは疲労感を加速させた。

駅に行こうと方向を決めたときだつた。どこから現れたのか見て

なかつたけど、田の前に池田がいて走り寄ってきた。昨日より厳しい顔をしている。

「神崎惣一はどこに行つた?」

「は? 尾行はどうしたんだよ?」

警察は尾行のプロだろ?俺と違つて。

「撒かれた。昨日までと彼の動きが違つ。明らかに尾行に気づいていた」

「俺のせいだ。俺が言つたから…」

「なぜ言つた?」

「それはこいつちの話だけど。悪い、そこまで深く考えてなかつた」警察のことまで頭がまわらなかつた。ただ、思い止まつてくれたらつて、それしか…。

「いい加減にしろ。君がしてゐることは捜査攪乱だぞかくらん」

いやだなあ。また叱られてる。

キレられたり、責められたり、怒られたりつてのはガキの頃からあつたけど、本気で叱られるつてのは最近になつてから、よくある。違いが判りはじめてきている。少なくとも親のは違つたんだって。

(つらい)

叱られるのも、怒られるのも。

(痛い)

「どうした?」

黙つてしまつたせいで、池田が近づいてきていた。顔をあげる。

あ、違う。

池田と視線が合わなかつた。田線が俺の顔より下にある。池田の手が俺の首元付近にきた。

「どうした? この^{あか}癌」

昨日の息苦しさが蘇る。

いまにも触られそうな池田の手にゾクリとする。直射日光で暑いはずなのに、全身が急に冷えた。

「なんでもねえ。悪い。用事、あるから

なんとか言えたのがそれだけで。俺は池田とは反対側に走り出していた。

池田はちゃんと相手をしてくれてる、俺に。
ひとりの人間として。ガキだとせんざいに扱わないで、誠意をみ
せてくれてる。それはわかる。だけど、兄貴のことは言えない。

いい加減にしろ。

しない。まだいい加減にできないから。もう少し足搔かせてくれ。
(お願いだから…)

スニーカーの靴底がアスファルトを蹴り続けている。自分の意志
とはかけはなれてるかのように、慣性の法則みたいに、脚はただ走
り続けていた。

遠回りをして駅につく。親がくれた磁気タイプの乗車カードを通して電車に乗つても、しばらく頭がまわらなくてぼうつとしていた。電車内は朝早いのに割りと混んでいた。座りたかったけど出入口附近を確保して外を眺める。

iP〇〇を取り出すこと忘れ忘れてる。三駅ほど過ぎて気づいた
けど、そのままにしていた。

(お願いだから、間に合つてくれ)

兄貴が誰を殺そうとしているのかは分からぬけど、相手が誰か
なんて関係ない。

やめさせないと。抑止力にならないといけない。

俺は目的の駅を降りて、また走り出した。止まつていられない。
気持ちだけが焦る。

だけど、やつぱり探偵事務所には誰もいなくて、ドアもかたく閉
ざされていた。何かの役に立つかもしれないと思って、つけずに持
つてきた腕時計で時間を確認する。それでもまだ八時。

何時から祥子さんは来るんだろう。そもそも来るかどうかもわ
からない。家か連絡先を聞いておけばよかつた。昨日あんなに携帯電
話持つてたのに、番号を確認するのも忘れた。
なんて失態。

「」の失敗が命運を別けることになつた。「」。

(玲華…)

「」。玲華がいる。玲華なら祥子さん家も連絡先も知つてゐる。でも「」。玲華に言へば必ず聞いてくるし、必ずついてくる。危険だから来るなんて言葉は匪かない。

(余計に来る)

まだ落ち込んでるんだろうか。

(いま、なにしてんだろう)

メールはあれから、まだきてない。

「つ…」

不安が息苦しさを呼び起した。

胸が張り裂けそうになる。息が吸えない。

そしてそのまま崩れ落ちても、飛んで来てくれるやつは誰もいなかつた。

* * *

どれくらい、そうしていただろうか。

扉のまえで、今まで走っていたのが嘘みたいに俺はうずくまつていた。動くと呼吸が乱れるとでもいうかのよひ、微動だにしなかつた。

脚を折り曲げ膝を抱えて、いわゆる体育座りの格好で顔を埋めていると上から声がかけられる。

「神崎くん? いつからそこにいたんですか」

わずかに驚いた声の主はやっぱり祥子さんで、バッグを腕にかけて立つていた。

「あー、良かつた。田曜日だから今日は来ないっていう最悪なパターンじゃなくて。

「頼む、はやく開けて…」

「あ、はい。そうでしたね。すみません、もしかしたらって思つて

たのに…もつと早く来るべきでした

言いながらバッグから「そこ取り出して鍵を開ける。

「それってつまり、予想してた？」

「今日もお兄さんを尾行するのかもつて。そしたら必要ですよね、パソコン」

「ごめん、本当は休みだつた？ 今日」

ノロノロと立ち上がって中に入れさせてもらいながら俺は聞いた。本当は休みなのに、わざわざそれで来てくれてんなら申し訳ない。祥子さんは自分の机にバッグを置くと、さっそくパソコンを立ち上げてくれた。

「いいえ。それがなくとも来るつもりにしてました。いつ先生が帰つてくるかわかりませんから」

「あ、そつか」

あいつがまだ帰つてないことはわかつてた。待つてる間に気づかされた。呼吸を正してくれりいつもの声がない。

「神崎くん。その首どうされました？」

パソコンの前の椅子に座ると、祥子さんが目をとく見つけた。ヤバい。もしかすると電車の中でも見られたかもしれない。

「そんなに目立つ？」

「まあ、前から見れば…。とくにいまはTシャツですからね…。制服なら大丈夫だと思いますけど」

しどろもどろになりながらぎこちなく気遣つてくれた。つまりいまは目立つんだろう。兄貴の爪が食い込んだ部分とかは、とくに。「それよりそのアトつてもしかして…」

「大丈夫だから。気にしなくていい」

あまり触れてほしくなくて即座に俺は打ちきつた。祥子さんは空氣を呼んだくれたみたいで、もう突っ込んで聞いてこない。

悪い、って思う。自分のことしか考えてなくてごめん。祥子さんは優しいのに、恩を仇で返してるみたいな気分になる。

こつになつたら優しくなれるんだろう。自分のことを後回しにし

て気遣える人が、実際にいるのに俺はできない。

「お兄さんかなり早く移動されますね。車、でじょうか」
パソコンを覗きながら祥子さんが言つ。
はたつと我に返つた。

(集中しろ)

いまはただ、兄貴を追うことだけを考えるんだ。
パソコンを見直すと、兄貴のものと思われる光りの点滅がすゞーー
速さで移動していた。

「どこ行くんだろう？」

「高速に乗られてるようですね。まあいですよ、このままだと発信
器が受信できるエリアを超えます」

なんてことだ。これさえあればとりあえず行き先だけはわかると
思っていたのに。点滅が止まるのを待つて余裕はないみたいだ。

「推理をしてみましょー」

「推理？」

「神崎くんのお兄さんがどこに行くのかではなく、誰に会って行つ
てるか、もしくは何をしに行つてるか考へるんです
何をしに…。

(殺しに)

人を殺しに行つてゐる。誰になんて、俺が聞きたい。兄貴には兄貴
の世界があつて、そのほとんどを俺は知らないから。
でももしかしたら。ここまできたら。

「浅霧家の人の誰か？」

「わたしもそう思います。昨日世羅さんと会われてたんですね?
今日のことの打ち合わせとは考えられないでしょーか」

昨日のことは、携帯電話を返しに行つたときに話してあつた。で
も兄貴が誰かを殺そーとしているかは祥子さんに言つてない。

だけどそんなことを言つもんだからギクリとした。それだと、兄
貴が人殺しをすることを世羅も知つてゐるところになる。

(世羅も共犯…)

バカバカしい考え方だと思いながらも完全に否定してない自分がいた。

もしかして…梶さんを殺した犯人は兄貴ではなくて、別にいるんじゃないか。兄貴と世羅の共通の人物といえば梶さんだ。

(兄貴が殺したいのは、梶さんを殺した犯人?)

それなら納得がいく。梶さんの最後の言葉の意味が、それだとまた雲にのまれてみえなくなるけど。

「あ、消えてしまいました」

「え?」

祥子さんの眩きに慌てて画面を見る。確かに、光りはどうにもない。

「くそっ…まだなんにもわかつてねえのに」
無念さからテーブルを叩く。安定して置かれてなかつたキーボードがガタッと鳴った。

すると、祥子さんが自分のバッグからなにかの鍵を取り出して、満面の笑みで言った。

「とりあえずわたしの車で近くまで行きましょうか。その間に推測を続けましょう」

「続けましょーって…」

「ここでじつとしているよりはいいと思いませんか?」

確かにそうだけど。有り難いけど。

「なんでそんなに良くしてくれるんですか?久保田さんは?」

不思議で仕方がない。ここにいなくて久保田はいいのだろうか。

「んー…。そうですね。この件に関わっていればいずれ先生には会えると思ってます。……あとは、神崎くんと先生つて似てるからほつとけないのかも」

「はあ?誰と誰が似てるってえ?」

心外すぎる。

思いも寄らない内容に俺が思いつきり嫌な顔をしたら、祥子さんはほくそ笑んでた。ああつ?

* * *

真っ白い、丸みのある小柄な車体で、祥子さんはイメージ通り丁寧な運転をしていた。

たまにつひやつ、とかあらつ、とか独り言が多いのが気になるけど…。

俺としては、車内でいくら考えたところで、念の場合は浅霧家の誰かで、梶さんを殺した犯人”つていうところから突き進んだりしかつた。

当たり前だ。要はスタートラインに戻つたってことだから。犯人がわかつていれば、最初から苦労しない。

「もうすぐで光りが消えた位置になります」

「とりあえず近く走つてみて」

はい、つて祥子さんが言つたけど…「これからどうじよひ。だいたい会う相手がわかつたところで行く場所が特定できるとは限らない。」このあたりは倉庫街ですね

「ああ…。じゃあ、この辺は違つか…」

「そうとも限りませんよ」

「どういうこと?」

「このなかに浅霧家所有の倉庫がいくつあるはずです」

「マジ?」

ええ、マジですと大真面目に祥子さんは答えた。

それなら可能性があるのかもしれない。だいたい倉庫街なんていかにも怪しいじゃないか。勝手なイメージだけど。

車は速度を落として倉庫街を徐行した。数分走つていると一台の車が不自然に止まっているのを見つけた。

なにが不自然つて……停まり方は普通に、いや少し建物に隠れるように停まっていたが、つまりこのいつい場所に不似合いな高級車だったのだ。怪しい…。

「ちょっと離れたところで止めて」

祥子さんに頼む。その通りに、別の倉庫に用事があるみたいにそこへ寄せて祥子さんは停めてくれた。

「ここで待つてください。ちょっと様子見てきます」「あ、でしたらわたしも…」

「ダメ。危ないから」

「危ないのは神崎くんも同じではないですか？」「そうだけど！祥子さんになにがあつたら俺が久保田さんに怒られるから！」

まだ不本意そうな顔をしていたけど、なんとか納得してもらつて俺はひとりで怪しい倉庫へ向かつた。

あんなこと言つたけど、嘘じやないけど、理由は他にもあつた。だからちょっと胸が痛んだ。

いまの兄貴を誰にもみせたくないんだ。見せられない。

兄貴の間違いはちゃんと俺が止めるから。そしたら無かつたことになる。形だけでも、間違いは起こらなかつたつてことになる。そういうする。

（まだ間に合つよな？）

「ここまで決意して、すでに幕が引かれていたらシャレにならない。祈るような気持ちで近寄つた。

そこは倉庫と呼ぶには、綺麗な建物だつた。出来てまだ新しいことがわかる。コンクリート剥き出しの色で高さは三階建てくらい。屋根は角度が浅い。いかにも倉庫といつ感じだが、ひとつひとつが新しかつた。

一番近くの窓に近づき中を覗いてみる。大小さまざまな大きさの木箱が置かれていた。その隙間から、棚がありそこにも小さめの木箱が並んでるのが見える。人影はない。

なんとか入れないか？と思つたが窓は鍵がかかつてゐる。（やつぱりな…）

開いてたらバカだろ。あーくそつ。

俺は頭を搔きむし^{フツ}た。焦燥感が増す。なかばヤケになつて全部の窓を確認して行つた。

もうダメかと諦めかけながら、最後の窓に手をかける。

「あ、開いちまつた……」

こここのセキユリティ、だめじやん。

俺には有り難いけど。ここがアウトなら、真正面から行かなればならなかつた。つていうか右回りで試せば良かつた。

とりあえずその窓から中に入つた。新しいと思つていたが、わりと充分ホコリっぽい。倉庫独特の臭いがする。

建物の中は、一階まで突き抜けで高さが確保してあつた。確かに一階分では収まらないほど高い何かがある。布で覆つてあって中身はわからないけど、布にロープがグルグルに巻いてあつて開けることは不可能だ。

それを見上げながら、棚と棚の間をすり抜けてどんどん奥に入つていいく。途中で開きそうな小さい箱があつて、手にとつて開けてみたら鏡だつた。隣のそれより大きい箱の中身は掛け時計。

(輸入家具、か)

株式会社シユウリスの品物だと、ピンときた。これはもしかすると…アタリかもしれない。

知らず知らずのうちに頬が緩むのを感じる。でもすぐに引き締めて、足早にだけど静かに歩いた。視線は注意深く辺りを見渡す。

このフロアには一番肝心な、人影がどこにもないようだ。それでも進んで行くと、奥に鉄色をした階段があつた。地下に続いている。迷わず俺は足を踏み入れた。一二三段降りたところで、ガンガンと甲高い音が響いたから、ヤバいと立ち止まる。それから、恐る恐る爪先立ちで降りた。

降りきつて少し進んだところに深緑色の鉄の扉があつて、重々しく行く手を阻んでいた。

それでも近づいていくと、何かが何かに激しくぶつかる大きな音がした。

人がいる？

「恩を忘れて勝手なことしゃがつて！」

それから激しい怒号。一の声には聞き覚えがある。

浅霧邦春のものだ。

それからなるべく聞きたくないと思つバキッといつ重い音。これも馴染みのある音だ。人が人を殴る音。しかも平手ではなく拳で。開けたくない想いが浮上する。

イヤだ。怖い。

入つて行つたら自分も殴られるような、そんな気迫さが扉を通してわかつた。

「なにが脅迫だ！自分がどうこう立場かわかつてんのか！てめえは！」

またガンガン聞こえる。恐らくこれは近くにあるなにかを、蹴つ飛ばしているんだろう。

物に当たる人はこんなにも周りの者を不快にさせしていくんだ。

(相手は誰だ？)

脅迫つて言つていた。兄貴か？

俺はハンドルレバーに手をかけた。だけどまだ引けない自分がいる。

「おれが一言いえば、てめえなんかウチにいられなくなるんだよ！」

「！」

この一言ですべてを悟つた。さつきまでの躊躇ちうしゆが嘘のよつに勢いづいて扉を開く。

中を見ると蹴飛ばされて無惨にへしゃげている箱たちがまず田に付く。そしていきなり現れた招かれざる客、つまり俺の方を振り向く浅霧邦春。

その先には地べたに倒れている

世羅が、いた。

地下室は石膏ボードの壁で吹き抜けになっていた。
一階にあつた高い家具よりも高い何かがある。それも梱包されているが家具のひとつだらう。こんな大きいものを置ける家つてどんなんだよ。

他にはナイロンで包まれたソファーベッドや、箱に入っているがおりたためられているテーブルがある。

浅霧邦春が蹴つ飛ばしてた木箱は、ひとつだけ中身が飛び出していた。それは収納ラックで、ガラス部分が割れ悲惨なことになつている。売り物だらうに。あまり物を大事にしないタイプみたいだ。そして。

世羅は俺が現れても顔を上げない。それが一番気になる。

兄貴だと思っていた相手が世羅だつた。それはかなりの衝撃と混乱を俺に招いた。

(なんで世羅がここにいる?)

(じゃあ、兄貴はどこに行つたんだ?)

兄貴を追つてるはずだつた。ここにはいない。

でもそうわかつても、こんな状態を見せられて、じゃあサヨナラつてわけにはいかなかつた。

「おまえはあいつの弟か！あのときいたな！」

やつの怒りがそのままこちらにスライドされた。こいつは最悪な男つていう先入観が、疑問もなくストンと胸におりる。

「なにやつてんだよ！こんなところで！」

「それはこちらの台詞だ。誰の所有地だと思つてる…」

「殴る音が聞こえたんだよ！あんたまさか世羅を殴つたのか！」

答えを聞かなくても明白だつた。倒れている世羅の近くには赤い飛沫。七分丈の袖の部分からちらりと見える痣。殴られたのは一発じゃない。

激しい憤りが俺を襲つた。

べつに良い格好をしたいわけじゃないし、紳士になるつもりもない。

(だけど、ダメだろ)

「ほんなん許されないだろ。女を、義理とはいえ子どもをほんな扱い」。

自分と世羅が重複する。

ムカつくつていう言葉だけでは収まりがつかない。何を当てはめても充分ではなく、感情がその上をいくんだ。

悔しい。こんなことがまかり通つてることが悔しいし許せない。だけどヤツはなんでもないことのように鼻で笑つた。

「こいつはおれの所有物だ。関係ないやつは出でいけ」

「なんだとーてめえ、どのシリヤカゲでーつ」

「いやまたよ。さうか、おまえは餌になるな」

俺の激高を無視して浅霧邦春はひとりしゃいた。

餌つてなんの?って考えた一瞬の隙をついて、邦春が出でいく。追うように振り向くとすでにやつは外について、一タリと不気味な笑みをみせる。

それからガチャンと扉を閉めた。

(あつ!)

瞬時にドアレバーに飛びついたけど遅かつた。開かない。

「てめえ!出せよ」

「しばらくおとなしくしていろんだな。仲間を連れてきてやる」
ぐぐもつた笑い声を最後に、邦春が去つていく足音が聞こえた。仲間を連れてくるつて…だれのことだ?

(やっぱり兄貴か?)

どうこうことだらけ。これから会つ約束でもしていろのだらうか。

(んなことよつ)

「ほんまは。世羅だ。

まったく起き上がりつとする気配がない。まさか。

「世羅！大丈夫か？」

「世羅のもとへ駆けつけようとする。

「寄るな」

世羅から弱い声で、でもはつきりとしたはねつける言葉が出てきた。拒絶の意思が伝わってくる。

戸惑いながらも目が離せないでいると、少しづつ起き上がり、手だけで壁をつたいたながら俺から離れていった。震えながら。やがて一番大きい家具に行く手を阻まれて、それにもたれかかった。顔が見えると、かなり怯えた表情でいるのがわかる。目の下に殴られたあとがあつて、痛々しい。

「寄るな。おまえ何しにきた」

「なんか…あまり大丈夫そうじゃないな……なんとかここから出ないと」

病院つれて行かないと。あいつ捕まえないと。兄貴に知らせないと。

なんかやるべきことが多すぎて慌てる。

それなのに何回がちゃがちゃとレバーを引いても、抵抗されているように下がりきらない。

他には出口はないようだ。唯一、一階部分の位置に窓がある。俺が開かないことを確かめた窓のうちのひとつだ。ここにある家具を使つても届くはずがなかった。

「やばいな…マジで出れそうにない」

ということはこの空間に世羅と二人きり…。かなり気まずい。彼女には嫌われてるし。

「おまえ…私のこと嫌いだの？」

逆なことを、ある意味すこいタイミングで世羅がそんなことを呟いた。

「は？逆だろ」

「いろいろと反抗されて……あんなことをされて、嫌いにならない筈がない」

世羅はこちらも見ずに、斜め下の方を焦点の定まらない虚ろな目で見つめていた。声に力がない。

そして恐がっている。最初からずっと。

あんなこと……。そういうえばあの教室での出来事からは初めて会うんだ。気づいたら益々気まずい。

「あのや、わざと嫌われるように仕向けてなかつたか？」

訊きながら俺も壁を背に腰をおろした。ちゃんと世羅と距離を保つていたのに、彼女はビクリと身震いした。俺が動いたことに怯えたんだ。

(俺が恐いんだ)

少なくともいまは、俺と密室の中にいるのが、不安がらせてる。やつぱり教室では強がりを見せていたんだ。

いまはあのときの気迫も強気も剥がれ落ちていて、弱いままの世羅だつた。そういう虚勢すら張れないほど、余裕がなくなってるんだ。

原因がわかつたところで、どうすれば安心してもらえるのか、信頼を得られるのかがわからない。

でもいまの世羅の方がいい。あんな見え見えなやり方されても、切なくなるだけだから。

「私はおまえが嫌いだ」

「うん」

わかってる。

「でも俺はなにもしない」

「嘘だ」

「ウソじゃない。なるべくなら傷つけたくないって思つてる」

「嘘だ！おまえはすぐ怒鳴る！暴力だつて奮つ。あいつと同種だ！」
ああ……そうか。世羅の中では、浅霧邦春も俺も同じなんだ。最低な野蛮人なんだ。粗暴で好戦的な……。

心外だと言うには、あまりにも心当たりがありすぎる。

きっと世羅は、自分自身に対しての態度だけを見ているんじゃない

いんだ。校内で喧嘩するところとか、他のクラスメートに対する態度も視野に入ってしまつてゐる。

知らなかつた。いつも俺は発言するときもその行動も、田の前にいる相手のことしか考えてなかつた。知らず知らずのうちに、第三者まで傷つけることがあるんだ。

(すごくキツい)

きつくて厳しい。人間関係の奥深さを知つた。

常に万人に好かれようと意識するのは不可能だ。好かれようと思つて好意を持たれるかどうかさえ保証はない。

(だけど嫌われて嬉しいやつはない)

俺は嬉しくない。怯えられて平氣でもいられない。

「悪い。…………ごめん。もうしない……よつに、氣をつけるから」

「守れない約束などするな」

「…………そうだな」

「そうだよな。いくら言葉で言つても、行動が伴わなかつたら意味がない。」

「優しくするな」

「おまえね……どうしようと云つんだ」

憮然とする世羅に、膝を曲げてそのつえに肘を置き考えながら受け答える。相変わらず世羅の気持ちが遠くてわからない。恐がつていること以外はなにも……。

彼女は縮こまりながら両腕で顔を覆つてゐる。

「私を、見るな」

「…………」

「私に女を感じるな」

「女、イヤか?」

「嫌だ。…………嫌だ!自分が男だつたらと、どれだけ考えたかわからぬ!」

いきなりガバッと顔をあげると、世羅はいまにも泣いてしまうんじゃないかつていう表情をしていた。ぐぢゅぐぢゅに歪んで、あ

の教室で玲華がみせた顔とダブる。

なにか言わないと…。気の利いたことを言わないと。だけど言つべき言葉がなにも出てこない。

「ううう」ときなんて言えばいいかわからない。慣れてなかつた。慰めることとかが下手くそで、できない。かえつてへタなことを言いつつで。

やつと出たのが。

「うん」

（うんじやねえだろ、バカ）

自分の不甲斐なさに呆れる。

「おまえはいいよな、男で」

また世羅は顔を隠して、自分自身を守るようにうずくまる。その姿はまるで、自分じやないと自分を守れないと思つてるかのようだ。今日の世羅は饒舌だ。喋つてないと不安が増すのかもしれない。

「男で、力があつて。殴られれば、殴り返せて」

そんなことねえよ、俺にだつて殴り返せない人がいるんだよ。そう思つたけど黙つていた。いまは俺の話なんか関係なかつた。

事件の話しも兄貴のことも、いまは聞ける雰囲気じやない。

「それから、私の大事なものまで奪つていくんだ」

「え？ それつて…」

「私が男なら、手放さなかつた」

すごく重大な話に向かつた気がした。どうこうとか聞きたかつたけど、阻まれた。

足音が耳に届いたからだ。

近づいてくる。

世羅がさらにきつく自分自身を抱き締めるのと、俺が立ち上がつて扉を見るのとが同時になつた。

（足音がひとつじゃない！）

二人…いや三人？

数を確かめる間もなく扉が開いた。先頭に浅霧邦春がいて、満足

そうに俺たちを見た。

「ほら、お仲間だ」

脂ぎつた顔に薄く笑い顔を作り、そう言つと太つた体を移動させて後ろに回る。

邦春の体ですっぽり隠れていたけど、頭ひとつ飛び出していたから、そのお仲間の正体はすぐにわかつていた。

ああ…。やっぱり。

「兄貴」

兄貴は後ろで手を縛られているみたいだった。満面に苦渋を滲ませて、よろめきながら入ってくる。

押されたんだ、つて氣づいたとき、その押した人物が三人目として顔を覗かせた。

その人物はまったく俺が想像してない人だった。

(なんで…)

ナイフをちらつかせながら、そいつは最初に見たときと変わらない、控え目な笑顔で佇んでいる。世羅が憎悪を含んだ罵声を浴びせた。

「柳田！ 貴様お祖父様を裏切る気か！」

(え?)

浅霧家の執事、柳田は余裕綽々にさらりと言ひ。

「お嬢様。もうすぐでお別れです。大人しくなさつておいででしたら長生きできたものを。非常に残念なことです」

「三人揃つて死ねるんだ。寂しくはあるまい。一人で死んだ梶とは違つてな」

「あつ……」

このやりとりは……。

そうだ。つまり梶さんを殺したのは、
「てめえらが殺したのか？…いや」

俺が見たのは一人だけだ。

あの日の場面が浮かぶ。もう何十回も何百回もよぎつた場面。犯

人の体格からいって。

「おまえが、あの日、雨の中…梶さんを」

俺は柳田を見て言った。柳田の表情はピクリとも変化がない。

「まさかあの時間に人に見られているとは思いませんでしたよ。しかもこの男の弟とは……。世間は狭いですな。ですが何の弊害もありませんでしたが」

最後の方の笑い方が、不気味だつた。眼光が鋭くなつたのに対し、口角はさらに上がりニカッと歯をみせた。

これが人殺しの顔。

人の最大の禁忌を犯した人間の顔か。

ゾクリと背筋が冷える。

「わざわざ明かしてやることはない。柳田すぐ始末をするんだ」

「時間が押しますので今では駄目です。一度浅霧家に戻らないと、功男様に不信感を持たれます」

「ちつ。使えねえな」

「完全犯罪ではないと…。捕まつては意味がないのですで」

「それはそうだな。おまえら、少し生かしておいてやる。その間にたっぷりお別れをしておくんだな」

ふざけた会話を続けて、二人揃つてこの部屋を出た。

再び鍵を掛けられる。ナイフの存在が、大人しくそれを見守ることしかさせてくれなかつた。

(くそつ！やつと犯人がわかつたのに…)

「惣一さん」

ゆつくりと世羅が立ち上がる。

そこで俺もようやく兄貴に駆け寄つて縄をほどきにかかつた。

昨日の続きみたいな辛そうな顔をして、兄貴は大人しくほどかれている。かなりキツく縛られていた。その手首にはアトが残つてしまつた。

「すまない。失敗した」

縄がほどけるとまず世羅にそう言つ。

失敗したのか。こんな状況なのに俺はほつとしていた。恐りく兄貴の狙いは柳田だったのだ。

「いや、私が勝手な行動をとったから……。来るなと言っていたのに」

「来ずにはいられないだろ？！」とはわかつていた。完全に俺が油断ただけだ

「あの帳簿は？」

「奪われた。邦春が来ていろとは思わなくて、後ろをとられたんだ」「もういいです。柳田は認めたのでしょうか？だったら、あとはどうにでも出来る」

しおらしい世羅にも、温和な兄貴にも俺はすくびくびくつした。どちらも俺には初めて見る一面だ。そういえば、一人の会話つて初めて聞くんだ。

「証拠がまだ弱い。警察相手なら言ひ逃れができるしまつ。やはり俺が直接制裁を加える」

「惣一さん」

「辛いなら君はやめてもいいんだよ」

「俺だけ話が見えないんだけど……」

頼むから説明してほしい。

なんとなくの話しさは見えるけど、そもそもの根本的なことがわからぬ。なんでこんな状態に陥っているのかが。

兄貴はようやく俺を見たけど、世羅に向けた表情から一変して陥しくなった。まったくコイツらは。俺と相性が合わないんだろうか。

「おまえ、またつけてきたのか？寝ている間に出てきたのに……どうやつた？」

「質問に質問を被せないでくれる？」

池田に昨日言われた通りに言つてみる。俺にはちよつとグサリときた言葉だったのに、兄貴は簡単に受け流した。

「見張られるのに慣れすぎて、自分も見張るのが上手くなつたのか

？」

「なんだよ、それ。んなもん慣れるかつ」

そう吐き出したものの。久保田のは慣れたのかもしれない、つて思つた。いつからか、いても気にならなくなつていた。それが親に情報がいくつてところは、まだ納得がいかないけど。

「それより、帳簿つて裏帳簿のこと？」

久保田と玲華が目をつけた脅しの材料。確か邦春とか、他の浅霧の兄弟たちを相手にするものだつたはず。

「それでなんで柳田がノコノコ出てくるんだ？」

「なぜ神崎が知つてる？」

「なんか妙なこと知つてるんだ、こいつ。俺たちがRiverで会つてたことも、刑事が俺たちをターゲットにしてることも

「こそこそ嗅ぎまわつていたのか。あんなに消極的だつたのに

「それだけじゃない。昨日、功男さんとも話したそうだ

「お祖父様と？貴様いつのまに…」

「ちょっと待て。ダブルで責めんな。マジきつい」

俺は片手を胸にあてて、もう一方で手のひらを一人に向けた。降

参したい気分だ。一人でも厄介なのに。

玲華と拓真がタッグを組むのとは明らかに意味が違う。嫌悪感力ケル2だからな。

「まずおまえから話せ。信用できない」

「話せつて…、俺はおまえらの秘密を知りたかつただけで…」

「刑事と探偵が裏にいるんだ」

世羅の疑問に兄貴が答えた。俺だけじゃここまでつかめなかつたのは事実だ。刑事の方は別に直接教えてはくれなかつたけど。

「探偵？なんだそのいかがわしい奴は

「世羅が訝しがつた。

(まー、確かに胡散臭いけど)

それより世羅がもういつも通りに戻つてゐる。もう怖がつてない。

兄貴がいるからだろう。

そのとき、疎外感を感じて上方を見た。

やるせない想いを誤魔化すためだけの、何気ない動作だったのだが。

(ええっ！)

それを直視した瞬間、度肝を抜かれた。

(なんでー…)

上の窓から、石を持って窓ガラスを叩き割ろうとする人影が見えたのだ。

「玲華！」

真っ先にその名を叫ぶ。えって感じで、世羅が反応して上を見たのが目の端に映った。

玲華がゴツゴツって何度も石を振りおろしてゐる。なんでここがわかつたんだろう。いや、それよりなにする氣だ。

いろいろなことが驚きの要因となつたけど、なにより一番気になつたのは、

「あいつ…めちゃくちゃ怒つてねえ？」

気のせいだろうか。頑張つて力を込めているだけだと思いたい。だけどなんか、放つオーラがかなり怒気に満ちてるような……。

やがて玲華は、やつてられるか！つとでも言つよつこ、両手で石を振りかぶつて　投げた。

ガラスは耐えきれなくなり、ガチャーンと派手な音がして石とともに落下した。

「うわっ危ない！」

咄嗟に窓の下から俺は避ける。反対側に兄貴が世羅を庇いながら逃げたのが見えた。

先程まで俺が立つてた位置に、ちょうど石がある。そのままわりにガラスの破片が飛び散つていた。

(狙われた？…………わけじやねえよな)

嫌な予感はなんとか打ち消したい。こめかみ辺りから流れたこの汗も、ただ蒸し暑いからだと誰か言つてくれ。

三人が茫然と見守るなか

俺だけ呆然だったかも…

玲華は

下の棧部分だけ丁寧にガラスを取り、一旦隠れた。

次に現れたのは一本のロープだった。なにがしたいのか徐々にわかつてくる。だけどロープは途中で止まつた。短すぎて届かないのだ。

「おい！危ないぞ！」

顔を再び覗かせた玲華に、俺は声を張り上げた。

だけど玲華は無視して何かを落とす。カツンカツンって音がして、見るとサンダルだつた。ふたつで一足分。それからニーキツと窓から脚が出た。

（つておい、なんつーカツンしてんだよ）

玲華はドレスアップしていた。水色で膝丈のドレス。

「見んじやないわよ！」

一言、玲華が注意を促す。つて…、やつぱり怒ってるな、あの声は。

スルスルとロープを伝つて降りてくるものの、危なつかしくて見てられない。だけどもうすぐロープが終わる。

玲華は一瞬わずかに顔を引き締めた、と思つたらひらりと飛び降りた。ちよつと予測していたけど、まさか本当に飛ぶとは思わなくて焦つて走り寄り玲華の体を受け止める。

「ありがとう」

につこり微笑む顔を間近で見て、確信した。玲華は俺に怒つてる。地に立つと先に降りていたパンプスを履いてから、玲華が強い眼差しを向けてきた。

「それで？あたしをのけ者にしてなにを遊んでいるの？」

やはり……。言わないで来たことに立腹のようだ。

「遊んでいるように見えるのかよ、これで？」

「なんでなにも言わないで一人で行つちゃつたのか聞いてんのよ！鍵かかつて入れないし！この部屋！」

「つか、どうしたんだよこのカツン。どうやってここにが？」

「訊いてんのはあたしよ？まあいいわ。あとで答えてもらひうとして。一回に訊く質問はひとつにしてね。でも素晴らしいまとめ方で答えてあげる」

横目で睨みながら玲華が早口でまくしたてる。

「今日は親戚の結婚式だったの。式場についたところで久保田さんが現れてね、携帯用受信機を貸してもらつて、飛び出してきちゃつたわ」

飛び出しがいいのか？じゃなくて。

「久保田さん？あいつ無事だつたのか」

「もーピンピンしてた」

「あ…、祥子さんに…」

「そこで会つたからもう教えたわ。居場所教えたらそれこそぶつ飛ばして行つたから、今ごろは叱り飛ばされてるんじゃない。久保田さん」

どうでも良いといつぱり玲華は言い放つ。

「うーん…叱り飛ばして祥子さんのイメージはないけど…。つていうか、いまの今まで祥子さんを待たせていることを忘れていた。

(やば…)

「んなことより…世羅！」

突然、玲華は俺から離れて、世羅に飛びかかる勢いで抱きついた。唖然としていた世羅はよろめく。そのまま受け止め切れなかつたようだ、一人は倒れるように座り込んだ。

「バカ世羅！心配したんだからね！」

「玲華…。私より、神崎に会いに来たんだろう。もつと話さなくていいのか？」

世羅が戸惑つた声を出して、玲華の身をざつするか迷うみたいに、手の所在が揺れていた。

「いまは世羅が優先なの！あの辺はついでよ、ついで！」

玲華は世羅の左側に顔をうずくませたままで、どこか投げやりに、人差し指で俺と兄貴を交互に振つてゐる。なんか酷くないか？

「私のこと、怒ってるんじゃないのか」

「怒ってるわよー。氣づかなかつた自分に腹が立つのよー。」

「なにを、言つてる…」

「だからつー世羅がつー」

玲華が声を詰まらせた。

(泣いてるのか…)

そう思わせる後ろ姿だった。

俺が見ても解るくらい、じわじわと世羅の顔から血の気が引く。それから彼女はしばらく思慮しているような顔をして、やがて目を細めた。

「玲華…………私は玲華の重荷になりたくないかった」

「ならないわよ。なに言つてんのよ、いまさらつ。何年一緒にいたと思つてんの」

ふつと世羅が笑う。

「十年以上だな」

「十三年よ」

「そりだな。…………もう充分だと、前に言つたな」

「本心じゃないんでしきう」

「なぜそう思う?」

玲華が少しだけ顔をあげる。

俺も兄貴も一人の間に入り込めなかつた。邪魔できない、そんな空氣があつた。

「じめんなさい。全然氣づかなくて。世羅があたしを…」

「そうだ。好きだつた…もうずっと」

世羅の目から一筋の涙がこぼれた。

俺は息を呑む。

涙にまず驚いたけど、それよりもその言葉の内容が、すぐには理

解できなかつた。

「一生……言つてしまつなかつた。それこそ墓場まで持つていぐものだ」と…

「世羅

「だけど神崎悠汰が現れて、君が惹かれていつてるのに気がいたとき、私は自我をコントロールできなくなつていったんだ」

世羅が玲華をきつく抱き締めた。どちらからかの嗚咽が漏れてい る。

私の大事なものを奪つていく。先ほどの彼女の言葉が蘇つ た。

(そういう、ことか…)

やつと理解した。最初から世羅にとつて俺は邪魔な存在だつたんだ。突然現れた部外者に、長年続いてた関係を壊された。壊した無 礼者が俺。

「神崎がどうしても許せなくて…。どうしようもない嫉妬と、先の 見えない不安とか、ドロドロした感情ばかりが増えてきて、怖かつ た」

世羅が両の手のひらで自分の顔を覆つ。

「こんな私では玲華にいづれ嫌われる。いや、たとえこの気持ちを 隠し通せても、玲華は離れていく。……気づいたんだ。いつまでも 子供の頃のままではいられない。どうせ、いつか離れなくてはなら ない日がくるのなら……知られるつ…まえに、ばれる前に私から …離れようつて」

世羅が泣きじゃくつてゐる。せつとずつと抑えていた想いだつた んだ。

耐えて耐えて耐えて……、そしてとうとう爆発したみたいな、そ んな泣き方だつた。

玲華は世羅の手に触れながら、なんとか押し出したような声を出 す。

「そんなこと言わないで。あたしだつて離れたくない。世羅が傍に いるのがあたりまえだつたんだから」

「それは知らなかつたからだろつ！こんな穢きたない私を。幼馴染みとし てじゃない！君が神崎を好きなように私は玲華が好きだと言つてる

んだ！女なのに…」

白くなるほど拳を握りしめて床に打ち付けた。

「女なんかに、産まれなれば……。男ならばどんなに良かつたか。間違つて産まれたんだ私は

世羅の想いは深い。

女は嫌だと、先ほども言つていた。あの中には様々に絡み合つた、複雑な想いがあつたんだ。

両手で世羅の両頬を押さえると、玲華は自分の方に向けさせた。まだ怒つてる、玲華は。

（もうじやない。いまが迷つた果ての答えなんだ）

きつと、自分が気づいたことを世羅に言うか否かで迷つてたんだ。言つとしたら、どのよつて言つか。どう言つたら正確に気持ちが届くのか。

それには腹を据えて、気合いを入れて話さなければならない。適当に話したら適当にしか伝わらない。状況によつては最悪、もう一度と取り返しのつかない、修復不可能な関係になりかねない。

そんなことになつたら……世羅が今以上に離れていつたら玲華にもまた辛く耐え難いことなんだろう。

「人を好きになるのが、なんで穢いのよ！男でも女でも世羅は世羅だから良いのよ！」

「玲華」

「あたしがなに言つたって、世羅には酷いものに聞こえると思うわ。応えられないもの。でもどんな理由でもいい。なんでも良いから一緒にいたいの！」

「一緒にいいのか？」

「だからそういう言つてるじゃない

「……気持ち悪くないのか？」

「ないわ！」

何度も言わせないでつて、玲華が言つた。

世羅は一度目を見開き、それからまた泣いた。心なしか少しだけ

違う涙に見える。安心したような、開放されたような。

ありがとう、って言つて世羅はまた玲華をきつく抱き締めていた。

それから俺は見てしまった。

何気なく、横を向いてしまった。

ずっと黙つて見守つていると思っていた兄貴が、なにかに耐える
ように唇を噛みしめているのを。それは先ほどまでの世羅のものと
酷似していた。

そうか、と俺は気づいてしまった。

(兄貴は世羅を…)

この世の中、なかなか上手くいかない。感情は理屈じゃないのに、
届かない想いがいくつもある。

(理屈じゃないから)

だから。

人は泣くんだ。

一人が落ち着くまで、俺も兄貴もなにも言わなかつた。

兄貴はもう抑制したのか、いつもの冷静を取り戻していた。
「で、君はどうやってここが？受信機とは何のことだ」

玲華に向けて、兄貴から話が戻された。まだ世羅にべったり抱きついたまま、玲華はちらりと俺に一瞥をくれる。言つてもいいかを決めかねているんだ。

俺はそれに頷いてから、自分から話した。

「オヤガサ…発信器つけてたんだ。俺はこの腕時計らしい。で、探偵がそれを利用してたんだと。父親がくれたもんだから、兄貴のも多分そのうちのどれかじゃない？」

自分でも意外なほど投げやりに聞こえた。兄貴は面食らつたような、怒りたいような複雑な顔をしていた。

「知つてよくつけていられるな、おまえ」

「いや、今日はなんかの役に立つかと思つてだけど…」

これが終われば腕時計はどうなるんだろ？。どうするだろうか、俺は。

知ったときはすぐにでも捨ててしまつたけれど、時計の存在に慣れてしまつてゐるいま、外すのは心なしか寂しくもある。

新しいのが欲しいなー、……カネないけど。

「ならば俺の腕時計だろ？。だが俺は我慢ならない」

兄貴は思い切り嫌悪感を表情に出しながら、ポケットからナイフを取り出した。

バタフライナイフ。

兄貴の殺意を思い出した。間違ひなく柳田を殺すつもりで来ていたんだ。嘘や冗談だとは昨日の態度では思えなかつたけど、実際に凶器が目の前になると、背筋が凍る。

それをどうするつもりだろ？。

刹那、バカな考えがよぎった。不意に自分の首元に手がいく。

次に邪魔したら殺す。

いまがその次になるんだ。

固唾を呑んで見守つていると、兄貴は右手のナイフをすっと上げて、自分の左手首についてる時計の文字盤部分に振りおろした。ガキッといつて突き刺さる。そのままナイフごと腕時計を引きちぎって、床に投げ捨てた。

壮絶なものを見せられた感じがした。力加減を誤ると、自分の身まで傷つくだろうに。

兄貴は躊躇いなく、そんな壊し方を選んだ。

(それだけ許せないんだ)

兄貴は仕上げといつぱに、腕時計を踏みにじる。

(もしかしたら兄貴も…)

俺と同じように。

(嫌気がさしていたんだ)

家族のこと、憤りを感じていたんだ。

兄貴はなんでも出来て、自分の意思で勉強を頑張つていて。満足しているんだと思つていたんだ。

だから池田は兄貴と話し合えと言つたのか。確かに、兄貴の存在を遠ざけていたときからは考えられなかつた一面を、ここ数日でいくつも見ている。

知らなかつたんじゃなくて、見ようとしてなかつたんだ、俺が。まだ知らない部分がありそうだ。

「兄貴はなんでこの事件に関わつてんだ? もう教えてくれてもいいだろ!」

きつとそれがそこに含まれてる。

一度知つてしまえば知らなかつた頃には戻せない。だけど、知らなくちやいけない気がした。無ではないから。事実としてそこそこ、すでに有的るから。

「昨日言つたこと忘れたのか」

兄貴はその一言のみで拒否した。

「イヤだ。教えてくれないと、イヤだ」

「子供か」

「ガキだから……、じつせん手い交渉術とかわかんねえけど。兄貴がそんな、殺意とか持つてんのはイヤなんだ！」

兄貴がジリジリと俺に寄ってきた。手にはまだナイフを持っている。「知ったところでおまえに俺は止められない

「わからんねえだろ、やってみないと」

口からは立派なものが出てたが、気圧されてしまつて、俺は兄貴が寄る分だけ後退した。狭い地下室ではすぐに壁に阻まれる。

「ちょっと何してんのよ！」

「動くな！」

玲華が立ち上がり止めようとするのを兄貴が制した。

「ねえ……、ずっと氣になつてたんだけど、悠汰の首……」

だけど玲華は黙つてない。兄貴は俺から目を離さず不敵な笑みを見せる。

「うるさいから俺が絞めた

「なつ……」

「息の根を止めた方が良かつたか？」

最後のは俺に聞かれた。

死にたかったか？

なぜかそう訊かれた気になつた。

おかしい。変だ。確かに恐いけど昨夜ほどじゃない。

(殺気がない?)

これは威嚇だ。

殺したいのは俺じゃない。きっとそれは真実。

なのに、息苦しさを、殺されかけた恐怖を、身体が覚えてるみたいに震える。

「絞められるのと刺されるの、どちらが良い?」

(つ――)

兄貴はナイフを持つてない方の腕を持ち上げ、再度俺の首に手をかけようとした。反射的に首をすくめる。

「惣一さん」

女性にしては低い声が届く。落ち着いたものだつた。兄貴がピタリと手を止める。

「もう、やめよう。私はもういいです。柳田を殺さなくともいい。すみません、半端なことを言つて。迷惑かけて」

数秒なにかを考え込んでから、兄貴は俺から離れた。

それからやつと俺は呼吸をした。気づかぬうちに、息をすることを忘れていた。手を胸元にやる。心臓がバクバクと激しく脈打つていた。

「先ほども言つたが、証拠がまだ弱い。それでも？」

「ああ。復讐に人殺しなんてやつちゃいけない。それがわかつたんです。だから惣一さん…」

「わかつた。謝ることはない。なんとなくそつ言つと思つていたよ」兄貴は世羅と玲華の横を通りすぎ、一番大きい家具の梱包を、ナイフでザックリと切り裂いた。

何を始めたのかと俺たちが見守つていると、一番大きい家具の全体が現れた。

縦二メートル横四メートルあるかと思う、黄褐色の棚だ。四つの細長い棚がくつついてる。まん中はガラス制の扉で中が見えるようになつっていた。高級そうだ。

その棚の一番下の引き出しを、兄貴は引き抜いた。一番下から二つ分は、一列連なつてるからかなりの幅がある。

それをまだ窓ガラスが散乱したままの場所に、裏返しにして置いた。窓から伸びているロープより少し手前。

(あ……)

意図がわかつた。

その上に、次に大きい引き出しを乗せていき階段に見立てていく。

それでも最初のひとつ以外は、すべて同じ大きさだったから、ロー

「今までまだ届かない。」

兄貴は階段として使えるように合計五段分を置くと、世羅の方を向いた。

「契約は破棄だ。いずれにせよ、もうこんな状態だから最初の計画も使えなくなつてしまつたしな。君は自由だ。だが俺は本来の目的を果たすよ」

そう言つと兄貴は世羅に微笑んでから、ロープを見あげた。それから、ふと思いついたように俺の方を一度見る。

それから兄貴は助走をつけて階段に飛び乗り、ロープに向かつて跳んだ。

「足りない！」

焦りの声がかる。

でも兄貴は慌てず、勢いを足したすべての力で、バタフライナイフを壁に突き刺した。それを支えに左手を伸ばし、ロープにたどり着く。

すごい。こんな手があるんだ。思い付かなかつた。

あとは腕力だけでロープを登つていき、窓から外に出る。壁にはナイフが取り残され、やがて落ちた。

「邪魔されたくないからロープは預かっておく。心配しなくても助けは呼んでおくよ」

兄貴はロープを回収すると、本当に消えていった。置いていかれた。本来の目的をやり遂げるために、行つてしまつ。本来の目的つて？

回転が遅くなつてゐる頭でなんとか考えられることは、唯一つだった。

（誰かを殺しに？）
誰かつて？

柳田じゃない。柳田はもう殺さなくても良いと世羅が言つた。
じゃあ誰だ。振り出しに戻つた氣分に陥つた。

「神崎！ 惣一さんを止める！」

俺の思考を打ち破つて世羅が言つ。彼女はまた泣きそうな顔になつていた。

「え?」

「あんな優しい人に人殺しなんてさせたらいけない…さつと一生後悔する!良心の呵責にさいなまれる」

「え?」

もう一度俺は聞き返した。こんなことを世羅が言つとは思わなかつた。驚いたところもあるが、やつぱりまだ頭がちゃんと働いてない。

変わりに玲華が訊く。

「どうしたことなの?世羅、ちゃんと最初から説明してくれる?」

「ああ。すべて説明しよ。私が聞いたことも含めて……私が知つてゐことは全部話す」

世羅は少し目を伏せて語り出した。

「もともとの始まりは、私があの男に再び目をつけられそうになつたことだつた」

「なんですか?」

玲華が眉をひそめて不快感をあらわにする。

「私の部屋にあいつが夜中に押し掛けてきたんだ。高校入学して一ヶ月くらい経つたときだ。成長したな、とかなんとか言って、おぞましい笑い方をしてたよ」

世羅が思い出したように青くなつて震えた。本当にあの浅霧邦春はろくな男じゃない。

「それをたまたま梶さんが通りかかつて、助けてくれたんだ。梶さんは本当に優しくて、いつもこんな私の味方をしててくれていた。…そのとき、梶さんは言つたんだ」

一回、世羅は言葉をきつて空を見つめた。まるでそのときの」とを思い出しつゝいるようだった。

「私はいつでも護れるわけじゃない。すべての原因を排除しなければ駄目だと…。そう、今から思えばそのときから梶さんは計画して

いたんだ。あの男の殺害計画を

「ええつ？」

狙われていたのは柳田ではなく邦春？

「梶さんは返り討ちにあつたんだ」

「でも実際に殺したのは柳田だろ？」

「そうだつたの？」

混乱して口を挟む俺の言葉に玲華が驚いた。そう言えば玲華には、ここに閉じ込まれている経緯をまだ話していない。それどころではなかつたから。

「私も今日知つたよ。あの男を揺さぶるつもりが柳田が現れたんだ。最も呼び出して揺さぶる役は惣一さんで、私は大人しくしていなければならなかつたんだが……。じつとていられなくて来てしまつたところを、あの男に見つかつた。それで、もうひとつ所有してることの倉庫に連れ込まれたんだ」

「そうだつたんだ。すぐに兄貴を連れて来ることが可能だつたのは、この倉庫街のひとつで対面してたからなんだ」

「それで兄貴はどこから関わりを？」

「ああ、そうだつたな。飛ばしてしまつた。梶さんの話しに戻そう」

世羅は長い長いため息を吐き出した。疲労の色が見える。

「殺意を覚えた梶さんは、インターネットでいろいろな殺し方を検索していたようだ。完璧な殺し方を……。無論足がつかないようになつトカフェに行つたんだろう。そこである殺人サイトにたどり着いた。……そこで知り合つたのが惣一さんだ」

「えつ……」

俺は言葉を失つた。思いもよらなかつたところで兄貴の名が出た。

「梶さんと惣一さんは、時々会つて殺人方法を相談するようになつたらしい。そこでお互いの情報を交換した。そのとき、神崎のことも聞いたんだろうな。……そんなとき起つていたのが通り魔事件だ。背後からタガーナイフで一突きで殺す方法。それなら出来ると惣一さんは梶さんに教えた。そう、一人が計画していたのは、交換殺人

だつたんだよ。この騒ぎに紛れでお互いの殺したい相手を殺そうとう。そうすればアリバイは完璧だし怪しまれることもない」

混乱する。

一気に入つてくる、卒倒しそうな情報が多すぎて、くらべりする。立つていられなくなつて、壁に沿つてずり落ちた。

だけどまだ終わりじやない。ちゃんと聞かないと。誰を殺したいのか聞かないと、いけない。

「その話を、梶さんは私にだけは話してくれた。だからもう心配いらないと。惣一さんから聞いた殺害するのに必要な知識も私に教えてくれたよ。恐らくだが、そのとき柳田は聞いていたんだな。その帰り、梶さんは殺された。通り魔の犯人と同じやり方で！」

「どうして柳田さんは梶さんを？」

玲華がそつと世羅を気遣うように訊いた。

「そこは私も最近知つたが、お母様や叔父様たちは脱税をしていたんだ。柳田はそれを傍にいて知つた。そのなかであの男に目をつけ、脅迫して金を受け取つていたらしい。あの男が死ぬとせっかくの金づるがいなくなつてしまつ。それでだろ？」「それがあの裏帳簿つてわけね」

「知つていたのか。あれは私が嗅ぎ付けて盗んだ」

「あら？ そうなの？」

じゃあ久保田さんは何してたのかしら、と玲華はひとりごちた。

「あの男が犯人だと思つたんだ。だけどヤツにはアリバイがある。他の人を使ったんだと考へた。でもどうしても梶さんを殺した証拠が掴めなかつたから、脅しをかけようとした」

「それつていつ？」

「あのパーティの一日前だ。柳田含めた使用人たちが、いきなり決まつたこともあつて準備に忙しそうにしていたからな。その隙に「あたしたちも同じことを考へたわ。ちょっと遅すぎたみたいね」「パーティに兄貴が来たのは？」

久し振り声を出したら、ちょっとかすれた。世羅のトーンが少し

落ちる。

「梶さんが亡くなつてから、私はずっと空虚だつた。何かをしないといけない気はあつたんだが、なにをすれば良いのかわからない。それで思い出した。惣一さんの存在を」

そんな素振りは感じなかつた。俺は気づくことが少なすぎる。

「梶さんに学校を聞いていたから、会いに行くのは容易かつたよ」

「高校まで行つたの？」

玲華が目を丸くした。

ああ、そうか。兄貴の高校は男子校だ。世羅はふつと笑つて俺を見た。

「ああ。行つたさ。私も必死だつたんだろうな。顔を見てすぐにわかつた。似てるな、神崎」

似てるなんて、考へてもみなかつた。母親似だと父親似だとかいう会話が、中学のころあつたような氣もするが、あまり覚えてないといふことは、適当に受け流していただろう。

「それで惣一さんに会つた。惣一さんもニースで見ていて、梶さんこのことは気にしていたと言つてきた。そこで私は言つた。梶さんの変わりに私と交換殺人をしよう」と

「世羅…」

「惣一さんは最初は反対していたけど、私のことも聞いていたんだろうね。私はあの男ではなくて、梶さんを殺した犯人を殺したいと言つたら…頷いてくれたよ」

悲しそうな、切なそうな顔で玲華は世羅の手を握つてゐる。俺は遠目でぼんやりそれを見ていた。

「ならばまずその犯人を見つけないといけない。それで惣一さんはパーテイについて行きたいと言つたんだ。まさか神崎も来てるとは本当に思わなくて焦つた。しかもおまえ、あんな大声で呼ぶし」

「しょうがないな、というように息だけで世羅は笑つた。

驚いたのはこっちだつて同じだ。

でもそうなるとひとつ解らないことがでてくる。

「梶さんは……俺に、兄貴に気をつければいいって言って亡くなつた……」

「なに？」

世羅と玲華が聞き捨てならないというような顔をした。そういうえ
ば、玲華にもまだ言つてなかつた。なんとなく言うタイミングを逃
していただんだ。

「最近、思い出した。梶さんは即死じやなかつたんだ。俺の目をし
っかり見てそう言つた。……なんだつたんだろうな」「わざわざ最後に言つた言葉だ。意味がないとは思えない。

「それは恐らく。惣一さんに伝えて欲しかつたんじやないか」

世羅が告げる。優しい口調だった。

「惣一さんに聞いておまえを知つていたから、伝えてほしかつたんだ……。交換殺人の計画が漏れていることを。だから……」「だから氣をつけろと？」

あ……兄に、惣一に……氣をつける………“と伝えてくれ”
すべて言いきる前に息絶えたということか？

「私が裏切つたことで、先ほど交換殺人の件は完全に破棄された。
確かにこんなに一緒にいるところを目撃されたんじや、もう交換殺
人の意味はないな」

世羅も警察にマークされているの、そのときは知らなかつたんだ
ろうな、と思つ。

だから神崎、と世羅が続けた。

「惣一さんは自分の手で殺しに行つたんだ。彼は本当に優しい。こ
の私が気を許したんだ。だから頼む！止めてくれ！」

そんなこと、なんで俺に言うんだ。今さら。

「世羅には優しいやつだったかもしれないけど、俺には一度も……
一度もつてのは言つすぎかもしない、と思つて途中で言葉をと
ぎれらせた。子どもの頃はそう言えば……」

「なにを言つてる！これがおまえのための殺人でもか？」

「なに？」

聞き捨てならない話だった。人のための殺人なんてあるはずがな

い。

玲華が神妙な面持ちになつた。

「それってどういう意味？」

「惣一さんは言つていた。俺も弟も両親に縛られている。俺は氣の抜き方を知つてゐるが、弟は真つ直ぐでばか正直だからいつも上手く逃げられないのだと」

そんな…。

だつてそんなこと、思つてる素振りなんて、まったく見せなかつたじやないか。

「常に気遣つっていたよ、彼はおまえのことを。一緒にいるとき、彼は殆どおまえの話をしている。昨日だつて……」

昨日は俺が見たあのときか。

あの柔軟な笑顔を見せてゐるときに俺の話を？ 信じられない。

「まさか…お兄さまが狙つてる相手って…」

きくな！

頼むから聞かないで、玲華。

俺は聞きたくないんだ。

「彼らの『両親だ』

(ああ…)

やつぱり、つて想ひが俺にはすでにあつた。世羅の話を聞いていふうちに氣づいてしまつた。梶さんと知り合はずつと前から、兄貴にはそういう想ひがあつたんだ。

いつから殺意になつたのかはわからない。だけど一時の激情じゃない。だからきっと根深い。

だつたらなおさらだ。

「いまの見ただろ。俺には止められないんだ。止めたなら世羅が止めるよ」

そうだ。兄貴はおそらく世羅のこと……。一緒に協定を結んで、密接に関わつてゐ間に好意を持つたんだ。だつたら俺より世羅の方が適任だと思つた。

「あれは威しだ！おまえにもわかつただろう。…………昨日だって、弟は楽しむ食事すら知らなかつたことが初めてわかつて、哀しかつたつて。俺がひとり逃げ道を作つてる間にも弟は苦しんでたから…」
世羅の眼がまた潤み出した。何のための、誰に向けた涙だらうつて、ほんやり思つた。

「どこか他人事に聞こえてしまつ。

「弟が犬を飼いたいと言つていたが、でもうちでは飼つてやれない。両親ともそういう者を汚いと言つて嫌がつてゐからつて…。だから余計に決心したと…排除しなければ弟の望みはひとつも叶わないからつて言つたんだ」

ちゃんと、聞いてたんだ。あんなに無視してたのに、本当は俺の話を聞いてくれていたんだ。

「それでもおまえ止めない氣か？それとも、好都合だ。では兄に殺してもらおうとでも思つてゐのかつ！」

「んなこと…！」

思うはずがない。両親に縛られる感覚は絶えずあつた。

いなくなれと念じたことさえある。だからと言つて、死んでしまえばいいとまでは思わなかつた。たとえ考へないよつこしていただけだとしても。

止めたい気持ちはまだあるんだ。だけど慄然とする記憶が、身体への記録が、あと一步を欲しがつてゐる。起動をさせたためのワンクリックが、足りない。

「ねえねえ。悠汰、悠汰」

低い姿勢のまま玲華が近づいてくる。俺の前でしゃがみこんで田線を同じにした。ちょっとその顔が微笑んでいる。

そしてたゞたゞしく俺の方へ手を伸ばした。

両手で頬に触れて、それから首元にゆっくり下がる。そのまま見えなかつたけど癌の痕をなぞる感触を感じた。

「ほら、怖くない」

嬉しそうに玲華が言つ。

「だから大丈夫よ」

「ああ、もう…。どうして玲華はそういう見逃さないんだろう。う。

「こんな好感を持つてくれる表情で言われても、説得力がない。(見当違いなんだよ)

実際問題、胸が高鳴つてしまつて、怖いとか苦しいとか、それどころじゃなかつた。でもいまは、その言葉に頼りたい氣もしていた。

玲華が言うから。

(玲華だから)

(ああ… そうか)

(うなんだ。

ああ、もう… しょうがねえな。自然に頬が緩む。

俺は玲華の手をとつて離した。これ以上近づいたら耐えきれない。理性が、抑えられない。こんなときなのに。

「ひつひつてさ、状況によるんじやねえの? だいたい玲華じや無理だ」

「もつと絞めれば良かつたかしら…」

「そういうことじやねえ」

俺はがっくりと肩を落とした。

「玲華には敵意がないだろ」

「ああ、じゃあ世羅に絞めてもらひ?..」

「嫌だ。触りたくない」

物騒なことを淡白に玲華が言つと、断固として世羅は首を横に振

つた。ちょっと傷つく言われ方だ。

「ちょっと世羅、あんなこと今までよく言つわね

「れ、玲華」

「あれは玲華が何を言つても大人しくしてないから……一時的にでも意氣消沈して止まつてもらおうかと…」

本気か冗談かわからないふうに世羅がぼそぼそ答えた。いや、たぶん本気だ。目が座つてる。

「あつそつ。あれで悠汰がやる気になつて今があるのに、皮肉な話ね」

「なにつ、それは本当かつ」

すゞしく失態つて顔で世羅が睨んでくる。いや、俺に睨まれても困るんだけど。

「でも結果良かつたのよ。世羅も悠汰もお兄様を止めたいんじょう? まだ間に合つわ」

玲華が持ち前のポジティブを發揮した。元の、いやそれ以上の耀きに満ちていく。

「そうだな」

玲華が勝手に設定したプレイリストのことを、趣味悪いと笑つたときと同じように俺は笑つた。

笑つてみると、そのレベルのことだったんだつて思う。深刻に考えすぎなのかもしれない、俺が感じる両親のことなんて。それよりも兄貴の陰謀の方がはるかに非常事態だつた。明らかに死活問題だ。（止めるよ、兄貴を）

最初からやることは決まつてゐんだ。でもそれにはいいを出なきやなんない。

「おまえら携帯持つてるか？」

と、俺。

「私はあの男に最初に奪われた。玲華、眞鍋さんと来たんじゃないのか？」

と、世羅が言つ。

俺たち二人に見つめられた玲華は、反射的にへつと笑つた。

「いやあ、フロントにバツグ預けたあとに久保田さんに会つたの。慌てたあたしは大騒ぎで飛び出そうとしたんだけど、眞鍋さんはお父様に言われて反対勢力に加わったもんだから、しょうがなく…ってゆーのも失礼か…。とにかくヒデのパパにお願いしてぶつ飛ばしてきてもらつたわけよ」

ひと呼吸玲華があいて。

「でえー、ヒテのパパだつて他に仕事あるし、他にもアシがあるだろつと思つてー、ロープだけ借りて帰つてもうけちやつた」

てへつと締めにもう一度玲華は笑つた。

ええつと、それつてつまり…。

「誰もこの状況を解つてるヤツがいないつこどか?」

「てへつ」

「てへじやねえよ!」

「あ、でも久保田さん解つてるから来てくれるんじゃない?…きつと…たぶん」

「あー…もう…じや、久保田か兄貴が助けを呼んでくれんの待つだけか」

「その久保田つてやつはよく知らないが、惣一さんの助けはあてにしないほうがいいと思うが」

「なんで?」

「ぼそぼそ言つ世羅に撫然として俺は訊く。

「助けが来る頃にはすべてが終わつた後だと思つが」

「…………」

一瞬、この空間に静寂が包まれた。

だけどそのおかげで気づいた。俺の耳に飛び込んできたエンジン音。もしかしなくとも、これって…。

(近づいてきてる)

そしておぞらぐこの倉庫付近で、停まつた。俺たちは顔を見合わせる。

「柳田がもう帰つてきたのか」

「ヤバいじやない、それ」

「実際ヤバいんだよ。久保田さんつてなんで一緒に来なかつたんだ?」

「知らないわよ!でも自分は動けないつて…。あの入ずつと浅霧家にいたらしいのよ」

「はあ?何してんだよ。世羅知つてたのか?」

「知らん。本宅には最近まつたく行ってないからな」
面白くもなさそうに世羅が答える。行つてないって自分の家のな
に。確かに邦春とかいるし、行けないんだろう。
でも。

(だつたらあの人)

功男氏が気遣つていたこと、世羅は知つてゐるんだろうか。後悔
してると、教えた方がいいんだろうか…。

「勝手に悲壮感漂わせるな。なにを勘違いしてゐるかしらないが、離
れに住むことを決めたのは私だ。本宅に寄らないのも私の意志だ」
ひしゃりと戒められた。別に悲壮感なんて持つてはなかつたが、
誤解されたようだ。

世羅から離れたのか。

強いな、つて思う。俺は出でいくことを考えず、不満だけ一人前
でいたんだ。

こんなやり取りをしてゐる間に、カツーンという足音が遠くで止
まつた。気配を消して近づいてくるんだろう。

「悠汰

「しつ

玲華の喋りを止めると俺は兄貴が残していったナイフを拾つた。
殺すために買われたナイフだけど、いまは護るために使われる。
(そうだ。俺は誰も殺さない)

(護るんだ)

まるで呪文を念じるように自分で繰り返しながら、扉の端に
寄る。

相手が入ってきたときに、死角になるように。
ナイフを握る手が汗ばむ。
迷うな。チャンスは一度きりだ。

壁越しに相手の気配をつかがいながら位置を計る。でもそのまえ
にレバーが動いた。

(しまつ…)

人影が入つてきたより一拍遅れてナイフを突きだす。と。

「あつぶねつ！」

人影がさつと横によけた。ナイフの先は目標位置より低い部位にあつた。俺より背が高い。

「あれ？」

「あれ？ ジヤねえよ、殺す氣か

ひょうひょう

あつさりかわしたクセに、飄々と責めてきたのは。

「久保田！」

勝手に出て行つて、みんなに心配をかけた久保田修次が、開襟シャツに膝丈までのベージュの半ズボン姿でそこにいた。ラフなバージョンだけど眼鏡はかけていないくて、でも髪の毛は適当な感じだ。「なんだなんだ？ 呼び捨てするほど寂しかったか？」

意味がわからない。

「おつまえー！ 気配を消すな！ 紛らわしい！ なにやつてたんだよ！ つーかなんで来て…」

「待つた。おまえも後ろの『ご令嬢たちも何か言いたそうだが、せつかくだから車で話そう。時間がもつたない』

勢いが奪われた気がする。だけど…仕方なく俺はとりあえずは合わせることにした。

(久保田を殴るんなら世羅がいないとこりじやないとな)

緊張する。

それは従来感じていた重圧を含むよつたものとは、やや一線を画していた。

これまでの期待に押し潰されそうになつていた感覚は、重くてじわじわ広がつていくものだつた。今はどちらかといえば心臓が飛び出そつな、キリキリ痛むような、そんな感じ。

急激な極度の緊張。俺が止めなきゃいけないといつ。

(失敗したら…)

止められなかつたら…どうなるんだろう…。

久保田の車に乗り込み移動しながら、その緊張をなんとか紛らわそうと口を動かしていた。なるべく意識しないよう。

俺にはおなじみのコンパクトカーは、四人で座るといつぱいいっぱいな感じになつた。

どうしても世羅が後ろがいいと言い張り、そうなると自然と玲華が隣に乗り込んだから、やつぱり俺は助手席に座つた。

車を走らせてすぐ祥子さんのことを見つめ、事務所に返したと答えた。

少しぶつが悪そうな表情をしたように見えたのは、氣のせいだろうか。

「で? 言い訳あんなら聞くけど?」

俺の後ろで玲華が対角線上に冷ややかな声を送つた。玲華もなんだかんだ言いつつ心配していたんだろう。

「言い訳つて…いろいろ事情があつてな、いまはそれどころじゃないだろ。怒一の位置が分からなくなつてゐる」

あ、逃げた。

そう思つたけど確かにいまは兄貴のことが最優先だ。

こいつがどこまで知つてゐるのかはわからないが、おそらく事態は

把握してゐるんだろう。そして兄貴の発信器もやつぱり腕時計だったのだ。

「おまえさ。本当は兄貴がどこに向かったのかわからなくても、見当へりこつこてんじやねえの？」

「さあな。おまえはどこだと思う」

「親のところだろ。どっちは知らねえけど……」
だけど両親は揃つては一緒にない。母親の所在地も、少なくとも俺にはわからない。

となると。

「父親の病院？」

「そうだな。オレもそう思つて向かつてゐる」

俺の予想に久保田は頷いた。

「母親の居場所は知らない？おまえの依頼人だろ」

久保田は一警俺に向けてすぐに前を見る。その状態で、すぐ言ひにくそうに口を開いた。

「もう連絡した」

「……ふうん」

「それだけか？」

今さら驚かない。それが久保田の仕事なんだろう。

それが……、母親に知らせることが、これから吉とするか凶とするかはまだわからない。

(吉つて…)

どうせあの女は一大騒ぎするだけだ。役にも立たずい……。いや、むしろ兄貴の殺意を深いものにするかもしれない。

(それとも逃げ出して来ないか)

そこまで思い立つて嫌になつた。考へがあまりに陰氣だ。

「なあ、おい。なんとか言えよ」

考へ込んで何も答へなかつたら、久保田に急かされた。

また俺がまいつてるとでも思つてゐのかも知れない。前みたいに。
だけど今はそれどころじゃない。

「別に……いいんじゃねえの」

「どうした？ おまえ。なんか悟ったか？」

そんなんじやない。今さら「ちやこちやこ」ところで状況は変わらない。そんな状態が続いたから慣れもする。

「うつせえ。全部終わつたら一発殴らせてもらひつからそれでチャラにしてやる」

一瞬はあ？ って顔を久保田はした。だけど俺が冗談で言つてないつて気づくと、ふつと笑う。

「やれるもんならやつてみろよ」

なんでもここで笑うんだ。マジなのに。ギビツもしないで余裕かまして。

最初から「イツには舐められまくつてるから仕方ないか。

「なあ、後ろの二人先に送つてやつて」

運転中の久保田に近づきつつそり耳打ちする。

「ちよつとなに寝ぼけたこと言つてんの！」

それからヒールのままで、ゲシゲシ後ろから蹴られた。シート越しだから痛くはないけど、不快な感触はくるんだよ。その音で状況を察知した久保田が不満を漏らした。

「あつ、コラ蹴るな。汚れるだろ」

「清潔感を気にしてるとほ思わなかつたわ、コレで」

「悪かつたな！ だからつてさらにおさなくてもいいだろ」

確かにこの車内は汚い。シートも座る部分だけなんとか綺麗になつてるが、他はシミとかあるし、下には小さいコミが落ちてたりする。

「とにかく悠汰。あたしたちを先に帰すですつて？」この期に及んでなんなのよ

俺の家族はずつとぎつぎのところで保つてきた。それが兄貴という起爆剤でこれから爆発する。きっと壮絶な展開になるだろ。そんなところ見せたくない。

「危険だろ」

「あんたまさかそれで今朝も呼ばなかつたんじゃないでしょうね」

「だつて危険だろ」

「なによ！あたしのこと護つてくれるって言つたじゃない！あれは嘘だつたの？」

確かに言つた。あのときは本心で想つたことだ。だけど……。

「おまえの方はもう解決したんだろ。あとはウチの問題だ」世羅のこと。仲直りしたんだから良いだろう。犯人だつて分かつわけだし、もづわざわざ危険な場所に自ら身を投じなくとも良いんだ。

「ふざけたこと言つんじゃないわよ。もしかして護る自信がないの？それともそんなにあたしが邪魔？」

玲華がさつき来たとき同様の怒りのオーラを放ち出した。そういうことじやない。

「万が一のことがあるだろ。心配してんだよ」

「だつたら無用よ。今さら乗り掛かつた舟、降りれるわけないじやない」

「そんなこと言つて、さつきだつて実際来たのがコイツじやなかつたら、今じりどくなつてたと思う？」

「おまえ……絶対オレのこと歳上だと思つてないだろ」

唐突に久保田が口を挟んできた。コイツつてところで人差し指を差したせいかもしれない。

「思つてるよ」

思つてるに決まつてる。こんなムカつくやつだけど、実際尊敬できるところあるし。絶対言つてやんねえけど。

「そうだな。神崎は言葉遣いを知らない」

ずっと黙つていた世羅が攻撃に応戦してきた。それに久保田が頷く。

「だら、オマエとかコイツとかきてさつきは呼び捨てだもんな」

「だつたら玲華だつてタメ口だしアンタだろ」

「あらあ、だつてあたしは久保田さんのこと歳上だと思つてないもの」

玲華の一言で久保田が凍りついた。……ようこ見えただけだけど、たぶん絶対そうだ。

「玲華は良い。ちゃんと敬語も使える」

「でしょう? やっぱり世羅が一番解つてくれるわ」

「俺だつて使えるよ」

「使わないだけで、たぶん」

俺が否定したら久保田がどこか遠い目をした。ちゃんと前見ろよ。

「そうだよなー。ちゃんと功男さんには敬語だつたそつだからな……」

「は?」

なぜそこで功男氏の名前が出る? つーかなんで知つてる?

「てめえ、功男さんつて…………」

そういうえば玲華の情報によると、コイツ浅霧家にいたんだつた。久保田がヤバいつて顔をしたけどもつ遲かつた。俺の言葉を押し退けてすかさず突っ込んだ人がいた。もちろん玲華だ。

「もしかして久保田さんつて浅霧家に潜り込んだところで功男様に見つかって閉じ込められたの?」

「ちつがう! あれは不可抗力だ」

「じゃあ当たりか。さすがは玲華だ。敵にまわすと恐ろしいが、こちら側なら的確に突いてくれる。」

「どういうことなんだ。潜り込んだって」

「世羅が持つてつた裏帳簿よ。あたしたちも狙つてたの。すつゞく張り切つて俺が行くつて言つたまま行方をくらましたの」

「つるさいな、しうがねえだろ。調べて行つたけど、あるべきところになくて。功男氏には見つかつたんじやなくて会いに行つたの! 取り引きするために」

「そうね、世羅が一足先だつたから」

「取り引き?」

世羅がぴくりと反応する。

「そう。功男氏はすべてわかつていた。息子達と使用人の行動を、だれが裏帳簿を持って行つたかもな」

だから“柳田はいかん”と言つたのか。

(にしてもあの人…)

「だから玲華嬢はともかく世羅嬢は返さない方が良い。今ごろあつちでも一悶着あるからな」

ここでまたたく話が見えなくなつた。

「一悶着?」

「まああちらは功男氏に任せよう。こちらの問題だけ考えていればいい」

「待てよ。じゃあ警察は?兄貴を追つてたはずだけど」

「気になるか?あの刑事の動向が」

意味深な物言いを久保田はした。

刑事つて池田のことだ。確かに俺は警察全体より池田のことを気にしていた。叱つてくれたし、助言もくれたのに、俺は何も言えないで逃げたままだ。

「ちょっと待つて。そっちだけで話を進めないで」

「そうだ。取り引きとはなんのことだ?なぜお祖父様は私のことをご存知だったのだ」

後ろから一人の声が飛ぶ。そういうえば、また久保田に誤魔化されるところだった。

「ああ。それは功男さんに聞いてくれ」

なんかその言い方に、前に作戦会議と称して探偵事務所で名前を出したときよりも、功男氏に対する気安さを感じた。

「もしかして俺が世羅の家に行つたとき、あんた功男さんになんか言つた?」

「ああ、それ。悠汰が近づいてきているつて受信機で分かつたんだ。オレがそれを功男さんに教えたらさあ、功男さんから会いたいって言つたんだぜ」

久保田が思い出したようににやけている。

「なんで？」

「どんなヤツか見てみたかったけど。世羅嬢の過ちをひやんと止めてくれるかどうか」

かなり深い話を久保田と功男氏はしていたよつだ。ところどころは、功男氏はすべてわかつている状態で俺と会話していくことになる。

(やつぱりあの人…)

なにがさあな、だ。なにが一理だ。

「あんのタヌキ爺いー！」

言えよな。知つてんなら！腹に一物の理由も含めてぞーー！

「おまえ！お祖父様に無礼は許さんぞ！」

俺の憤りたっぷりのぼやきに、世羅が鋭いキレのある声で切り裂いてきた。

(だけど)

功男氏が世羅のことを憐れんでいたのは本音だった気がする。本気で想つていた。あの後悔も。

「何を見ている。こっちを向くな！」

世羅の方を見ながら考えていたら、ものすじい拒絕をされた。まつたく…。

「だいたいお祖父様もヤキがまわったようだな。こんな男に託すとは。実際に私を止めてくれたのは結局玲華だ」

それから腕を組んで窓の外を向いてしまった。世羅の方が無礼なこと言つてる…。

隣で玲華が呆れたような、力ない笑いを含めていた。

「世羅…。でもほら悠汰が来なかつたらもつと危なかつたわけだし、悠汰とお兄様の反応が同じ場所で止まつていたから、久保田さんもヤバいつて思つて、あたしも来たわけなんだしさ…」

玲華のフォローにも、納得できないといつた態度でこちらを向こうとしない。いや玲華がフォローするから余計に気にくわないのかもしれないが。

長くため息を吐きながらようやく俺は前を向いた。

功男氏がなぜ好評価をしてくれたかなんて、俺にも解らない。こんなやりとりをしている間にも、兄貴は着々と両親に近づいている。

(間に合うだろうか)

もし俺たちの予想が見当はずれで、すでに前もってどこかへ呼び出すなりなんなりしていたら、今さら……。

勝手なイメージが様々なシチュエーションで浮かぶ。

そのすべてが、駆けつけたときにはすでに遅く息絶えた両親の顔。自分の想像力が嫌になる。妄想の様な画に神経が蝕まれていく。やめなければ、無心にならないとやられる。

「大丈夫だ。絶対間に合わせる」

俺の様子を見ることがなく前を向いたまま、久保田は言い切った。久保田のこいつどころ……ちゃんと気づいてこういうことを言い切れるところが、時にムカつくけどそれは嫉妬心からきていて。だから内心では尊敬している部分なんだなと、ふと思つた。

* * *

病院の獨特のにおい。

俺はそれが苦手だつたりする。嫌なことを思い出すから。

父親の病院には一度だけ来たことがあるんだ。まだここじゃない、別の、もう少し小さい病院にいたときだ。

呼吸器科でも内科でももしくは精神科でもなく、外科に。

小学校高学年のときに自転車で転んだんだ。そのケガがわりとひどくて、膝がぱっくり割れていて……それで來た。

そうだ、近所の人気が救急車を呼んでくれたんだつた。

俺が來ると聞いて父親は慌てていた。

その時は心配してくれてるんだと思って嬉しかつた。普段見せない顔だつたから。

だけどそれから少しだけ大きくなつて、解つてしまつた。あれは

父親や母親が俺にシツケだと黙つた痕を、周りに見せたくないかつたんだ。

今なら解る。それが社会的に問題視されることも、隠したいと思つほどには、ヤバいと認識していたことも…。

結局、俺よりも周りの目を気にしていたんだ。いつもどおりだった。

おまえにはがっかりだ。

その時に言われた。周りにバレたのを俺のせいにしたんだ。

それからだと思う。

両親がさらに家に寄りつかなくなつて、金によつて手懐けた家政婦を雇うよつになつたのは。

病院に来ると、薬品のにおいに満ちた場所にいると、あの時の落胆した気持ちを思い出す。だから苦手。

それ以来一度きりで病院という名のつくところには来てない。

だけど今は逃げるという選択肢はないんだ。

病院まではやっぱり玲華と、それから世羅まで一緒についてきた。世羅が「私だつて惣一さんを心配する権利と義務がある」と言い張つたからだ。

玲華は今さら帰る気も無さそつだし、言つても無駄だと思つてもう何も言わなかつた。また怒られるだけだからと、ビビつたわけではない。断じて違う…………と言いたい。

でかい総合病院だからまず受付で父親の所在地を確認した。

神崎の息子だと名乗つたら、ちょっと年輩な受付嬢に少しひくりした顔でこつちを見られた。

なんなんだ一体。

胸にわだかまりを感じていると、それを読み取つたのか目の前の女性は焦りながら取つて付けたような笑顔になつた。

「あ、内科医長の神崎先生ですね。ええと今の時間でしたら新館二階の医師室か、仮眠室か…ですねえ」

内科医長なんて肩書きだったのか。それにしても受付の人の歯切

れが悪い。所在がわからないのだらうか。

そう思つていたら後ろの方から三人、同じ制服…薄いピンク色の白衣を来た若い女性が話に加わつた。

「きやー 神崎先生の息子さんだつて」

「あ一面影あるー、似てるわね、やつぱりー」

「なんかカワワーー」

なんだなんだ一体。やや俺はたじろいだ。明らかに先輩の女性がそれを諫める。

「こら、静かにしなさい」

「あーでもー、さっきもうひとり神崎先生の息子さんつて人が来ましたよー」

「あーあたしも見たー」

「えーズルいー」

「だから静かにしなさいと言つてるでしょー！」

「どこに行きました？那人！」

俺より先に久保田が、受付の薬とか受けとるための台に手をついて身を乗り出した。

兄貴もやつぱりここに来てたんだ。

「ええと…神崎先生に連絡したら院内のどこかに連れて行つちゃいましたけど」

なぜか久保田に赤面顔で、女性の一人が体をくねらせながら答える。

俺はそれを聞き終わらないうちに走り出していく。

「悠汰？」

「病院内は走らないでくださいー！」

玲華と誰かの声が後ろから聞こえたけれど止まれなかつた。

この中のどこかにいる、そう思つたらいてもたつてもいられなくなつた。

自分の理性と切り離されて、歯止めなく脚が動く感じはあるのと似ていた。事件を目撃するまえの。既視感。

(どこにいる)

だけどあのときより望んでいる。前に行くことを。臨む。

早く見つけないといけない。

「待て悠汰！落ち着け！」

それが拒まれて、ガクンつて俺の体が止まった。

新館だか本館だかわからないけど、階段で一階に登ったあたりで久保田に腕を掴まれたのだ。前に、行けない。

「闇雲に走つてどうする！ちゃんと考えろ！体力無駄に使うな！」

正論だ。まったく間違つてない。

「でもっ！早く探さないとっ！」

「わかつてゐる！わかつてゐるから、一人で突つ走んな！」

「悠汰！あつち、あつちに行つたつて」

玲華が通りすがりの看護師に聞いたよつて、階段の方を指さしている。

そつか、人に聞くつていう手段があつたんだ。全然頭になかった。これはホントに落ち着かないと。

「どこ！？」

聞きながらもすぐにまた階段を駆け上がる。

落ち着こうとする意識は車の中では確かに持つていた。だから逆にいま余裕のない自分自身が信じられないほどだった。

「ああ…もう！」

久保田の舌打ちが後ろから微かに聞こえた。でもついてくるのが気配でわかつたからそれで良かつた。久保田の心配は身に染みてわかる。

(もう前しか見ない)

だけど今はもう、前しか見れない。いま行かなくていつ行くんだ。

(そうだろ)

もう他のことに気がまわらない。不安だと恐怖とか、そんな余計なことに今は構つてられないんだ。

(兄貴！)

だから兄貴、間に合ってくれ。

「悠汰！こつちよ！」

玲華がまた後方から誘導の声を上げる。彼女はいつのまに確認してくれてるんだろう。

俺はどこをどう走っているのか認識できなまま、何人かの病院関係者に、すれ違うたびに叱られたり驚かれたりした。

その表情の印象だけ残像のように残って、そして消えていった。たぶん別の館に渡つた。その三階の奥の方。トリトリー。病室とかもなくなつてきて、関係者しか歩いてないような領域。

脚を止めざるをえなかつた。行き止まりだ。

後ろから数秒遅れて追い付いてきた玲華と世羅が、僅かに肩で息をしていた。

「この辺に来るのを見たつて、さつきすれ違つたお医者さまがつ」さつきつていつ？どの人？ふと思つたがその疑問もすぐに消える。熱くなつている頭のどこか片隅で、芯が冷えるみたいに冷めてる自分がいた。

目の前にある扉。

上方に会議室つて室名札が掲げてある。

(会議室…)

そういうの、病院にもあつたんだ。どういう会議をするんだろう。そんなことを考える間もなく、俺の腕が動いていた。会議室のドアノブをまわす。

(ー)

だけどそこには鍵がかかっていた。予感がした。勘とかそういう本能的な部分で思つた。中にいる。

「兄貴！いるんだろ！」

恥も外聞もなくドアを拳で叩く。

必死だつた。

ここで失敗したら、間違えたら一度と修復できない。崖っぷちの

瀬戸際。そんな危機感を感じていた。

「おい、悠汰」

久保田が戸惑っていた。

なんで？

理由がわからない。

(だつて中にいるのに)

「ここ開けて！早く！」

開けてくれさえすれば、あとはなんとかするから。俺がちゃんと兄貴を止めるから。

また軽く舌打ちをして、久保田は方向を変えた。同時にしつかりと俺の目を見ながら言つ。

「鍵借りてくる」

久保田の走り行く背中を最後まで見ずに、俺はまたドアに向かつて叫んだ。

「兄貴！兄貴！兄貴！」

「悠汰」

玲華が俺の右腕を掴む。それから拳を包むように触つてきた。気づかなかつたけど、酔っぱらいの類のように、手が真っ赤になつていた。

(熱い)

空調の効いてる病院内で俺の拳が一番熱かつたんじやないかと、そんな気がする。

「だけどっ！兄貴が…」

整理のつかない頭のまま玲華に泣きつくように口を開いたとき、

ドアの鍵の部分からガチャガチャと音がした。

反射神経が猛スピードで反応して、俺の意識がドアに戻る。視線がノブに集中してると、そこはゆっくり開いた。

まず目に入つたのが中から開けた人物の手元。

地下室に置いていった、今は俺が持っているナイフより大きい、タガーナイフが握られている。

血が滴り落ちていた。

俺は視線を上げる。

「どうぞ」

たつた一言。

そう言って、中から兄貴が微笑を浮かべながら俺たちを招き入れた。

そこはそんなに広くない会議室だった。十五人くらいで定員いっぱいになる。

長机を四つ真ん中に置いて向かい合わせになるようになってるみたいだ。普段は。

今は散在していた。机のひとつが横になり、その周辺の椅子や机は端の方に無造作に押しやられている。

その奥で、壁にもたれながらうずくまる男性。白衣の裾あたりから血に染まっている。

いやよく見ると脚が…右の太ももあたりが一番酷い。
父親だ。

脚を抱えて痛みをこらえている。

入った瞬間には机が邪魔して見えなかつたが、その隣、少し離れたところに母親が血だらけで倒れていた。こちらは父親よりたくさん血を流しピクリとも動かない。遅かった？

「死んで、るのか？」

ねどりと絡みつく恐怖で喉が渴く。無理やり口を開いたら掠れた声が出た。

「まだだよ。邪魔するから動けないようにしただけ。だつて先に親父を殺りたいからね」

兄貴は俺とは相対的に落ち着いていた。玲華と世羅を入れてから、また鍵をかけたみたいだつたけど、俺は両親から目が離せなかつた。父親が……いる。ずっと脅威な存在だつた父親が、今は苦しそうな顔でうつむいている。

本当ならば駆けよつて、無事か確かめたり人を呼ぶなりするべきだと思う。

だけど動けなかつた。

血の臭いが充满していて、あの日事件を目撃したときより、何倍

も怖い。知ってる人だからだろうか。

玲華と世羅がどんな顔でこの場にいるのか、窺う余裕さえなかつた。だけど一人とも黙つてゐる。俺も、すぐには何も言えなかつた。その中で兄貴が一人悠然と構えていた。

わからぬ。こんな大変なことを仕出かしている張本人なのに、なぜ堂々とできるのか、わからなかつた。

「悠汰。思ったより速かつたね」

ずっと笑みが消えない。嘲笑でも冷笑でもなく、本物の笑顔。（なまえ…）

悠汰つて…。名前で呼ばれたのは子どものとき以来だ。この笑顔も世羅に向けていたのと少し違う。解放された、なにも隠すことがなくなつたゆとりある笑顔。余裕の破顔。子どもの頃に戻つてゐんだろうか。精神が？

名前で呼ばれたのに、嬉しいはずなのに…いまはただ哀しいだけだつた。

「あ、兄貴…」

兄貴が思いとどまるよつなことを、言わないといけない。ちゃんと抑止力にならないと。

なのになにも言えないでいると父親がこちらを見据えてきた。目が合つた。深い憎悪がそこに含まれている。俺に向けて。あ…。

一瞬でわかつた。

父親のなかで俺のせいになつてゐる。理解するのと同時に、父親が荒い息を隠さず怒鳴りちらした。

「どこまでもおまえはお荷物だな！ 惣一になにを吹き込んだ！」

「俺は…なにも……」

「嘘をつくな！ 足手まといなヤツめ。デキが悪いなら悪いなりに邪魔だけはするなと前から言つてるだろー！」

「あ……」

父親の罵声は、俺に耳を塞ぎたくなる衝動にからせた。

聞きたくない。みたくない現実。

「まだそういう…」

兄貴からの発せられた本気の声で、何かの前触れを感じた。

背筋が冷えた。動く。

兄貴の足下が動くのと同時に、俺は全部の力を込めて兄貴の体を押さえた。

「もうやめろよーもういいだろー！」

兄貴の動く意志が止まつて俺を見る。一瞬消えた笑みが戻つていった。

変わらないそれを浮かべながら、つとナイフを持つ手を上げた。

「悠汰もやる？」

誘つてきた。殺すかと聞いているんだ。

見たくないくて、顔を伏せながらも頭を振つた。

「俺はしない！」

そんなことしたつて報われるわけじゃない。本当の望みは叶わない。

（望み…）

……ずつと認めたくなかった。俺が両親の愛情を渴望しているなんて……。

（そうだ。俺は期待していたんだ）

いつか両親が理解わかってくれることを。

考えないようにしてたけど、いつも家族の後を追いながらいたあの日……背中しか見れなかつたあの頃からずっと、振り向いて欲しかつたんだ。

最初は両親にだけだつたけど、それは大きくなるにつれて兄貴も含まれるようになつた。

（俺も期待していたんじやないか）

結局、みんながみんな、自分勝手に自分の欲望ばかり押し付けていたつてことか。

「世羅に聞いたよ。なあ、俺のためってなんならやめてよ。俺は嫌だ

よ、こんなやり方。全然嬉しくない！」

世羅の名前を出したせいかもしれない。兄貴が少しよろめいた。それからナイフを持つてない方の手で自分の顔を覆う。

「世羅、か……。世羅ね」

僅かに肩を揺らして息だけで笑う。

そして次に見せた顔には残虐な相貌になっていた。どのタイミングで切り替わったのかはわからない。

ゾクリとした。

柳田に感じたものと似ている。だけどあちらは不釣り合いな、読めない笑顔。兄貴のはすごい重たいものを、かなりの量抱えたようなそんな辛さが兼ね備えられていた。

「まったく失敗だつたよ。梶剛志とは事務的なやり取りで済んだものを……」

「惣一さん」

世羅が慈しむように呼ぶ。

だけど兄貴は俺の方を見たままだった。

「違う。彼女の前では格好つけていただけだ。本当は俺が我慢できなくなつたんだ」

「なんで？」

知りたい。兄貴のことをもっと。なにがそうさせたのか、ちゃんと聞きたい。

「あと二年我慢したら成人だる。そしたら自由になる。兄貴ならあいつら説得することだつて出来るだろう。出来なくたつて、力才広いみたいだし自立ぐらい……」

「それで？おまえはどうする？」

「え……。俺？」

不意討ちなことを切り返されて、頭が真っ白になる。

兄貴は俺から離れた。力が入らなくてすんなり離してしまった。だけどすぐには父親のところに行つたりはしなかつた。

「俺だつて完璧じやないんだ。ミスだつてする。覚えてないか？俺

が今までで一番最低点をとつたときだ。親父もお袋もおまえを責めた

「え？」

あまりまわらない頭で、それでも探したけどそんな記憶はない。
「すべておまえに暴力という形で鬱憤うっぴんが吐き出されたんだよ。見て
いるだけで俺まで痛かった」

「あ……」

思い出した。

小学生のときはいつもビクビクしながら家に帰っていた。
その中で一度だけ帰つてすぐ、理由もわからずうづくに折檻を受けたこ
とがあった。たぶんそれだ。

前に夢で見た。過呼吸のときの会話。最後の声は兄貴の声だった?
(やつぱり…)

重荷。

(俺のせいなんぢゃないか)

俺がいるから、兄貴は家から離れられなかつたんだ。また同じよ
うなことが起きないよう、言いなりになつてた?

考えたこともなかつた、そんなこと。お荷物。否定できない。

「そうだ。俺は大事に育てたんだぞ、惣一。そのお返しがこれか?」
父親がまた声を挿んできた。

なんにもわかつてない! 浅はかな内容。

俺は苛立ちを覚えて叫んだ。

「うるさい黙れ!」

これまでなら言えなかつたことだ。

(だつてあいつは俺には言つてない)

いつもそう。俺は無視だ。だけどいまは黙らせなければならなか
つた。

これ以上兄貴の殺意を刺激してはいけない。それだけだつた。

俺も父親は無視してた。兄貴のことだけ。

「だつたらなおさらつ! -」こんなことすんなよー今ならまだ間に合つ

よ。なあ、出ようぜ、こんなところ」

「わかつてないな、もう遅いんだと前に言つただらう？」「いままできてやめるわけにはいかないんだよ」

兄貴がまた笑つた。壊れた笑顔。

「俺はおまえを殺してでも実行する」

兄貴の標的が俺に向いてきた。母親と同じだ。

邪魔するやつから黙らせる。

ああなるのか俺も。

「すべてが壊れることは覚悟の上だ。俺はこれで解放されるんだ」兄貴の腕が上がり、ナイフが俺に向かってくる。

(馬鹿野郎！)

もう何も兄貴の耳には聞こえない。届かない。抑止できない。俺が後ずさろうとしたとき、ドンって右腕に当たるものがあった。ずっと後ろで黙っていた玲華の頭が、気づいたら前にあつた。

「させないわ！」

「玲華……」

「冗談じゃない！ 悠汰は立ち向かおうとしてんの、あんたはなに？ 解放されたいですって？」

「やめろ！ 玲華！」

兄貴は本気だ。本氣で邪魔者を消そうとしている。
そんなときに出てくるな。

だけど玲華は止まらなかつた。

「そんなことしても解放なんてされるわけないじゃない！ 余計に重いもの背負い込むだけよ！ なんでそれがわからないの」

「ばか！ 有無を言わさず玲華の腕を引く。

こんな庇われ方は嬉しくない！ 辛いだけだ。

「君みたいな幸せな家庭の子にはわからないだらうな。いつも親の機嫌ばかりを窺いながら生活する子供の気持ち」

俺と同じ。同じことを兄貴も思つていたんだ。もづくと長い間。もつと早く知つていれば良かつた。

「悠汰。おまえ昨日死にかけたとき、どんな顔をしたかわかつて
るか？」

ふと思いついたように兄貴は言ひ。

「安らかな顔で笑つたんだ。これから死ぬつてときには……。おまえ
は死にたかったんだつて気づいたよ」

あのとき……自分がどんな顔をしたかなんてわかる余裕も手段もない。

だけど確かに諦めた。生きることを。俺も解放されるつて思った。
「だから最後まで止めをさせなかつた。あのときは辛かつた。こんなに追いつめられるとは思わなかつたんだ。いや、考えなによつ
にしていただけだな……。自分の自由のために」

兄貴の後悔が伝わつてくる。

(それは違うよ……)

俺はまだ追いつめられてない。何もしていない。できない。

「惣一さん」

世羅が兄貴に近寄つた。

そうだ、彼女になら止められる。俺の言葉が届かなくとも、同じ
ところを手指し過ちに気づいた彼女なら、俺より近い。

どこか悔しいけれど仕方がないんだ。

それに俺の勘が正しければ、兄貴は世羅が好きだ。梶さんみたい
に事務的に計画が遂行できなくなるくらいには……。

(俺だつたら玲華の言葉で止まる)

「そんなつくるうようなものではなかつたでしよう? 本心から神崎
のことを想つっていた。私にはそう見えました。だからもうやめにしま
ましょ!」「う」

「君は、理解してくれてると思つていたよ」

「いいえ。私は貴方と会つ度に感情移入をしていました。貴方とな
ら行くところまで行つてもいいと……。だけど私は間違つていた」
きつぱりと世羅は断言する。

「もつと早くこうつ言いべきだつた。私は貴方を兄のように慕つよう

になっていたから。……でも、言えなかつた。心のどこかで警告がなつたのに「

「警告?」

「玲華の言つ通りだよ。」（んことしても余計に辛くなるだけだ。）
貴方が辛くなる

「俺が?」

兄貴の顔に迷いが見えてきた。

あと一步!

あと一言足せば止まるんじやないのか。

そう思つた矢先だつた。俺たちは皆油断していた。兄貴も動搖していたんだと思う。

俺たちの左側。窓の下から動く者がいた。

父親が……最後の力を振り絞り移動したんだ、と俺の目がとらえたときには、遅かつた。父親はすでに兄貴に突進していた。

そして兄貴からいとも容易くナイフを奪い取ると、そのまま俺にそのナイフを……。

（え……？）

思考が止まつた。あまりに思いがけない行動で、対応が出遅れた。兄貴の方が接触した分反応が速い。

俺は激しく引き寄せられ、何かが衝突した。兄貴越しに。音はなかつた。無音。

「あつ……あ……」

あまりの驚愕に言葉にならない。

息をしているかどうかわからない。苦しいかどうかもわからない。やがて、兄貴は俺の足下にずり落ちた。背中が見えるようになると、そこにナイフの柄から先だけが見えた。そこから中心に液体が広がつていく。

その場所は知つていた。梶剛志が刺された部位と同じだ。

「ははつ……は……」

父親が力なく息だけで笑つて座り込んだみたいだつた。

瞬間的に感情が爆発する。怒りなのか憤りなのか哀しみなのか、わからない感情。

あまりに複雑でまず何から行動に移すべきか揺れる。

父親を殴りたい。兄貴の血を止めたい。誰かに泣きつきたい。よくわからないなかで衝動だけが突き上げる。

「なにをしている！」

鍵がかかっているはずの会議室が開かれた。同時に聞こえる久保田の声。

それから何人の大人が続いて入ってきたのが足音でわかつた。それが合図になった。

「うああああああああああああああああ！」

濁つた雄叫びを吐き出す。

そうしないと胸が押し潰されそうだった。少しでも感情が弱まればいい。田の前の映像が消え去ればいい。そう思つて声を張り上げた。

なのに、いくら叫んでも田の前の状況は変わらなかつた。

「悠汰！」

久保田の声がもつと近くから聞こえる。

押さえつけられる。

そう直感したら弾かれたように素早く俺の体が動いた。どこにそんな力があつたのかは知らない。俺は兄貴の体を抱き上げていた。そしてすべての人間から遠ざかるように、一番ドアから離れた奥の壁にぶつかるように背もたれた。

「誰も来んな！寄るな！近づくな！」

「ミシタ」
制限が外れて本能のまま叫ぶ。制御の仕方なんてしらない。

ただ兄貴を渡したくなかった。

もう「うんざりだ。上っ面しかみない大人には渡さない。どうせまた子供のせいにされるんだ。

孤島のなかで兄弟ふたりだけ。そんな感覚に陥つた。

俺が護るんだ。

護ろうとしたんだ。

護られたかったんだ。俺が。

「誰も近づくな！渡さない！渡さない！」

信じない。兄貴がいなくなるなんて。許さない。

兄貴を大人に渡したら離される。そんなことになつたら一度と会えない。あの親ならきっとそうする。

ひどい。こんなのはつてない。

やつと兄貴の本音が聞けたのに。もつとちゃんと話したかった。

「俺がつ馬鹿だつたからつ」

声がうまく出ない。苦しい。

田の前が震んできた。いくら焦点ビントを合わせようとしても、よく見えない。

「悠汰！落ち着け！」

久保田がなにかを言つてる。だけど見えない。それでいい。もう何も見たくない。

「俺だけ…置いていくよ、兄貴……」

当の本人は辛そうに顔を歪めたまま何も言つてくれない。

兄貴の体を支える腕にナイフが僅かに触れた。ふと気づく。そつか俺も同じになればいいんだ。同じことをすれば兄貴に置いていかれることはない。

「やめろ！抜くな悠汰！」

俺の意識はナイフにしかなかつた。同じところを刺せば、息苦しさも消えるし兄貴と同じ……一石二鳥じゃないか。

俺はナイフに手をかけた。

「やめて！悠汰！」

別の声。久保田じゃない。

もつと高い女性の悲鳴のような制止。

(れい……か……)

玲華……。

ああ、そうだ。玲華がいたんだ。ここには。

他にも護らないといけないひどがいた。護ると約束したひどが。

「つ……！」

俺はナイフから手を離し、変わりにもつと兄貴を抱き締めた。喉が焼けるように熱い。上手く声帯を扱えずに息だけが漏れる。兄貴の肩あたりに額を押し付けて、ただ耐えるしかなかつた。水分が染みていく感触が伝わる。そこで、俺は泣いているんだと気づいた。泣いていたからよく周りが見えなかつたんだ。
気づいたところで、堪^{こら}えられなかつた。皆が見てるのに止められない。

「ゆ……た……」

耳元に微かに兄貴の声が届いた。

生きてる。

兄貴の顔を覗くと、すらすら目を開けていた。

（生きてる……）

「あ、あに……」

まだ声がうまく出ないで、唇だけがむなしく動く。

「悠汰……」

変わりに兄貴は弱々しくもじつかり俺を呼んだ。両の双眸に俺が

[写る。]

「なにを泣いてる？」

言いながら兄貴は右手をゆっくり上げた。

血に染まつた手で俺の頬に触る。だけどまったく不快じゃない。むしろ嬉しかつた。兄貴が生きてる。俺の涙を拭ってくれた。まるで子供のときに戻つたみたいだつた。

そうじやない。もともと優しかつたんだ、兄貴は。変わらないで。俺が気づかなかつただけだ。

兄貴の手のひらがそのまま俺の首元に移動した。昨日と同じ。でもまったく違う、優しく触れる感覚。

「もう、怖くないか？」

ちゃんと気づいてた。地下室で反応した俺の恐怖に。それで気遣

つてくれている。

怖くないよ。

即答したかつたけど、やつぱり声が出なくて、ただ首を縦に振る。あのとき玲華が癒してくれたんだ。

「良かつた。トライウマをもうひとつ増やすといひだつた」

「あ……ひつ……ひつ……」

やつと出た声は泣き声だつた。ひやんと話さないといけないこのこと

嗚咽しか出ない。

（違うよ……違うんだ……）

「トライウマなんつ、てない…………。やつなるまえに、逃げたから……」

何とか息を繰り返し、睡を飲み込み喉を整える。

「俺だつて同罪だよ、兄貴。逃げることだけ一生懸命で……俺も、兄貴のこと拒絶してたから。見なによつて……避けてつ……」

ダメだ。最後まで言えない。

ちゃんと兄貴は話してくれたのに。俺も云えないと……。畠葉にして云わらない。

「ごめん、兄貴。……ごめん」

ガキで、苦労かけて、不甲斐ない弟でごめん。強くなるから。一人立ちできるくらいしつかりするから。

そのとき兄貴が笑つた。痛みを堪えるようにしてたから、いびつだつたけど一番清廉な笑顔だつた。

それを見て安心したんだと思つ。

俺もそこから意識がなくなつた。

悔しいけど、気づかなかつたけれど、興奮状態が続いてあまり呼吸が出来てなかつたんだつて、後から知つた。

それから。

すごくバタバタしたようだ。

あんな凄惨な状況だったのに、場所が病院だったことが幸いした
ようでとりあえず死人は出なかつた。すぐ治療を受けられたから。
俺が次に目覚めたときには、父親の処置は終わつていた。普通に
歩けるようになるにはリハビリが必要だが、命に別状ないと玲華
が教えてくれた。

兄貴はナイフを抜かなかつたのが良かつたみたいだ。出血が抑え
られたから助かつたんだつて聞いたときは。

ゾツとした。抜かなくて、本当に良かった。

母親は……。一番危険な状態だつたらしい。手術は成功したけど、
今もまだ眠つたままだ。

複雑な感情でそれを聞いた。

ざまあみろ、と思うにはあまりにも…やりきれない部分が残存す
る。一番うるさい人が一番眠つてるなんて変だと思う。

そして警察はすぐに来ていたが、池田さんは兄貴が助かつたと一
報が入つたころによく現れた。

池田さんにはすぐ叱られた。

こつちでじちやじちやしている間に、浅霧家に行つていたそうだ。
功男さんからの通報で柳田たちは逮捕されたらしい。

それは久保田さんから聞いた。

事態が取り敢えず落ち着いて、家に帰りたくなくて、久保田探偵
事務所に行つたときだ。

もう帰れとは言わなくて、すんなり居させてくれた。

「功男さんとオレは情報交換をしたわけなんだが、浅霧家の誰が犯
人かまではわからなかつたんだ。だからそれで泳がせてみた。こん
なに早く惣一が動くと思わなかつたから、焦つちゃつて」

「焦っちゃつてじゃねえよ！」

まったくこいつだけは何も変わらないな。いい加減なところが。

「そういうしてる内にお前も向かうしさあ。だから功男さんがここはもういいから行けってさ。あの人は自分の持てる権力全部使ってあいつらを逮捕させたんだ。証拠なんか後から出るつて」

息子たち……世羅の叔父たちもその時一緒に連れていかれると、久保田さんは言つた。

「で？ あんたは結局どこまで知つてたわけ？」

「梶氏と惣一が交換殺人を企てていたことだけだ」

ホントかよ、って疑う。

散々嘘をつかれたから、なかなか信じられない。本当はどこまで知つてたんだろう。そう思つてたら重々しく久保田さんが口を開いた。

「おまえがこのことを知つたら耐えられないと思つていた。他人の死にでも敏感に反応してしまおまえには、どうしても隠しておきたかったんだ。だから田指す方向を、梶氏の手帳から浅霧家に向けるように言った」

今さらそんなことを言われても、返せなくなるだけだから卑怯だと思つ。殴りにくくなるじゃないか。

「惣一を見張ることはついでだったんだ。依頼人はあいた時間に惣一を見てくれば良いと……。だが陰謀を知つて事情が変わった。梶氏が亡くなるまではほとんど惣一を追つていたんだ。そのことは報告出来なかつた。しておけば良かつたと今なら思うよ」

（……変わつた、かな）

両親が知つていたら、この事は起きなかつたのだろうか。兄貴の殺意は止められていたんだろうか。

もし、の話はいくら考えてもキリがない。

「じゃあ、姿を隠したのは？」

「功男さんだよ。あの人、オレの話を全部聞いたあと説教してきた」

「こいつが説教されてるところ見たかつたな。一生からかつてやれ

たのに。

「オレがいるとおまえの為にならんつーだつてぞ」
「はあ？」

ウケケとやつは笑う。そんなことで雲隠れしたのか。

「そのあと功男さんから裏帳簿を盗んだのは世羅嬢だと聞いたんだ。
それから功男さんの名推理もね。犯人が柳田だろうって分かつてい
たのは結局功男さんだけだつたんだなー」

暢気な口調がなんか腹立たしい。

「わからないから泳がせたつていま言わなかつたか？」
「まあ単なる推理だからな。証拠がなにもない。権力を振りかざし
てまで逮捕してもらうには、もうひとつ功男さんにとつての決め手
が欲しかつたんだと。……そしたら一人揃つていないだろ？それで
決心したみたいだな」

ホント、久保田を上回るタヌキつぶりだな功男さん。

(大人つて……)

うんざりしてると、久保田さんがニヤニヤ笑いながら寄つてきた。

「なあ、おまえ、オレがいなくて寂しかつたか？」

「ぜんつぜんつ！」

「うそつけ。ほんとは頼りたかったんだろ」

「言つとくけどな、おまえがいてもいなくとも俺には屁でもねえん
だよ」

嘘ついた。

「ごめん。強がり。

玲華には正直でいたいとか言いながら、俺は素直になれない。変
わりたつて決意したつてそんなにうまくいかないんだ。
いくわけないだろ。人間そんなに簡単には変わらない。

こんなやり取りをしていると、ずっと控えて聞いていた祥子さん
がクスクス笑いつた。そしてやはりお二人似でますねと言つた。
前にも聞いたなそれ。

「……祥子君……。それはオレにくたばれと言つているのか？」

久保田さんが心外そうに呟いた。また何を言つてゐるんだこの人は。「ふふふ。先にそう仰つたのは玲華さんですよ。以前そういう話をしてくださいます」

以前といつのは恐らく泊まりに行つたときだね。それしかない。

女同士でなに話してんだ、まったく。

「先生は依頼人やターゲットに舐められないように、わざと上に見られるような振る舞いや出で立ちをしてる、と。だけど実際のところすごく精神年齢低くて、真っ直ぐで頭脳より感情で動くタイプですって。玲華さん見抜いてますねー。そういうところとか考え方も似てるって。私もそれを聞いてからもうこうふうにしか見えなくつて」

舐められないように、わざとこんなだらしない格好してんのか。呆れながら久保田さんの下から上までを見てみた。

いつかと立場が逆だなとか思つていると、上に目線がいったとき、スゴい怒りのこもつた顔をしていてビビった。

「あのアマー…余計なことをー」

拳が震えてる。てか、ちょっと待て。

「おい、玲華にハツ当たりすんなよ」

「おまえはこんなこと言われて平氣なかつ？」

「俺べつに、自分の部分は普通だもん」

「はつ！尻に敷かれるタイプだな、おまえ」

「俺にもハツ当たりすんなよ！」

先に先制しておく。

(どつちが尻に敷かれてるんだか)

祥子さんは、“私もそう思つ”的なことを言つてゐるのに、怒りの矛先を祥子さんに向けようとしてない。

まったく。どじが似てんだか。不本意なことに変わりはない。

でも似てんなら、コイツの尊敬できる部分もいつか習得できるだろうか。

そんなことを考えていたら、久保田さんは怒りを吐き出すようになつた。

ため息をついていた。

それから思い出したように話を続ける。

「まあ、オレはもうお払い箱みたいだしな」

お払い箱？

「おまえの親父さんが、もう見張らなくて良いってさ
それはまた勝手な話だ、と思った。」

* * *

すべてやるべきことが終わつたと思ったら、学校では期末試験が待ち受けていた。

というか、他の生徒は球技大会が終わつてすぐそつといつモードになつていたらしい。

なんとか全てやり終えた。結果は…………Iのセビウドモードに

…ということにした。意外と学生って忙しい。

玲華や世羅はきっと大丈夫だろう。普段から違うから。
そう思つて聞いたら、玲華に失笑された。

「一応毎日予習復習してるからね。テスト前にだけ勉強するなんて一番無意味なことだと思つわよ」

「…………悪かったな」

どうせ無意味タイプだよ。普段のこいつそんなことをやればいいのだ？

いや、暇な時間は多少は…わりとたくさんあるが…。

試験が終わつたら、夏休みがきた。

これまでその時間を潰すことで必死だった時期。去年は純平が相手にしてくれたんだっけ。

懐かしい。たった一年なのに、遙か昔に感じる。

(内容が濃かつたから)

高校生活が。いろんな人と出合つていろんな事があつた。これからいろいろんな事があるんだろうな、って漠然と思う。

夏休みが入つてからは玲華がよく訪ねてくるようになった。いくら止めてもいつもの強引な押しで、なし崩しに気づいたら毎日のようと一緒にいる。

そこから眞鍋さんの運転で、久保田さんの事務所に行つたり、玲華の家に遊びに行つたり、たまに秀和の家に訪問したりして過ごすのが日課になつてしまつた。

(気を遣つているのかもしない)

母親も兄貴も入院中で誰もいない家。

玲華にとつては放つておけないだけかもしない。なんだかんだ言つて、学級委員なみの責任感で一緒にいるだけかもしない。

父親が咲田さん今まで“見張らなくていい”と言つたと知つたときには驚いた。

咲田さんはもう来ない。

いきなり自分のことは全て自分でしないといけなくなつた。

相変わらず父親は帰つてこないから真意がわからない。

(とうとう見放されたのかもしない)

俺が兄貴も母親にもお見舞いに行くことを、父親は拒んだからそう思わずにはいられない。

考えると相変わらず胸が苦しくなる。

「きつとお父様もお辛いのよ」

夏休みが三分の一ぐらい過ぎた午前。

いつの間にかうちに居る時間が増えてきて、慣れ出した玲華がリビングの絨毯に寝転びながら言つた。

というか俺がソファに飽きて地べたに寝ていたら、それにならつて近くに座つた。そこからやがて上半身も倒してきたのだ。
なんというか…居心地が悪いというか……。

(無防備すぎ)

パンツスタイルではあるけど、夏だから薄着だし田のやり場に困つてしまつ。俺は主に天井を見上げていた。

なぜリビングかつていうと、家政婦が来なくなつて部屋が汚くな

つたんだ。

久保田さんのことだらしがないと言っていたけど、やつぱり俺もそっち側の人間だつた。つまりキレイ好きではないという……。この歳になつてそういうのがわかるのも、どうかと思うが。

「きっと、今さらどう悠汰と接していいのかわからなくて、悩んでいると思つわ」

そうだろうか。それならば兄貴とぐらぐら会わせてくれてもいいんじゃないか。まだ俺が元凶だと、疎ましく思つてるからこそ病院に近づけたくないんだろう。

（なにも変わつてない）

兄貴に会えない分、もつと状況が悪くなつてゐる気がする。

「でも良かつたことだつてあるじゃない？」

「良かつたこと……」

「お兄様の気持ちを知れたじゃない。一人では難題でも子供も一人でタッグを組んで変えて行けばいいわ」

またあつたりと、いとも簡単なことのように言うんだから。

「未成年のうちはいくらでも親に迷惑かけていいのよ。まー、あたしみたいに聞き分けの良いところも大事だけね」

「泣くぞ。理事長が。いろんな意味で」

「なんですよ」

ムスッと玲華がふくれる。どこが聞き分けいいんだよ。

何回か玲華の家に行かせてもらつてゐるけど、あんまり理事長には会つてない。学生と違つて大人には夏休みはないようだ。

（会つたところで叱られそうだけど）

理由はどあれ、ウチのことで結婚式を欠席してしまつたからな。玲華も小百合さんも「大丈夫よ」とて言つていたけど、そのときの様子があんまりすつきつとするものじゃなかつたから、とてもじやないが信じきれない。

「んでー今日はなにする?」

今日も遊ぶのが当たり前みたいに、すでに最近では間違ひなくキ

「ワードランキングの一位に輝いてる言葉を玲華が言へ。
それから俺は、まるで口言葉のように「なんでもいい」と答える
のだ。

実際こんなことしていい良いのかなって思つ。一人だけ暢氣に。
玲華について行けば、それはそれなりに楽しいのだけれど、心の
どこかに罪悪感が消えない。

「ねえねえ、悠汰ー」

「ゴロゴロと玲華に背中を向けるように寝返りを打つていたら、後ろ
からその背中をつつかれた。

「じゃれんなよ

「暇だよーどつか行ーうよー」

「あんな、ガキが親にねだつてんじゃねえんだから…」

「なにその喻え。たとそだ、もうすぐお昼御飯だよ。なんか食べよーよ

「さつき食つたんだよ、俺は

「もう……」

玲華の声が途切れた。

冷たくしすぎたかな、つてちょっと迷惑する。つこ反応して顔を
向けたら、ブーツと頬を人差し指で差された。

「やめるよな、そういうことすんの！」

はた迷惑なやつだ。

玲華の手を封じながら怒つたのに、当の彼女は楽しそうにひつか
かつたね、と子どもみたいに笑つた。

(いや、怒つてない)

本気で怒れるはずがない。玲華には。

迷惑なんて思わない。それなりに…じゃない。本当はずごく嬉し
いんだ。こうやって気にかけてくれることが。

気づいたら玲華の反応に一喜一憂してゐる俺がいる。気づいたとき
は、今より少し前で…。

玲華から目が離せないでいると、ふつと玲華から笑みが消えた。
目が合つたまま。

マイクをしなくても睫毛が長い。吸い込まれそなぐらに大きな瞳。

見つめたまま、それに俺は近づいていく。

玲華はそれでも逃げなかつた。

それどころか、瞼がゆっくりと閉じられていく。

このところ様々な場面で動悸が速くなつたけど、それらとは明らかに違う種類の高ぶり。高揚していく。

(あ…)

サツと心が引いた。
ダメだと気づいた。

(こなんじやダメだ)

あと数センチというところで俺は勢いよく体を起こした。

「ちょっとなんのよソレは」

玲華が怪訝そうな声で責める。そつされても仕方ないことを、俺はした。

わかつてゐる。だけどいけなかつた。

(それが答えだろ)

最近とくに頭にめぐること。それが押し止めたのだ。

膝を曲げてそこに肘をのせ、全体重を傾けるように長いため息を吐き出す。憂いを含んだ面持ちで玲華も起き上がつたのが視界に入る。

そんな心配そうな顔をすんな。俺が悪いんだ。玲華はなにも悪くない。

「まだ言つてなかつたよな、俺の気持ち…」

「それは…」

「聞いて！」

口を挟ませないように俺は遮る。

「悪い…けど、聞いてくれ…」

不服そうな顔をしてたけど玲華は黙つた。「ごめん。いつもこんなんで。

だけど最後にするから。

ふう、ともう一度長い息を吐き出しから俺は口を開いた。

「高校行つていろんなことがあったけど、気づいたら玲華がいつも隣にいて。最初はなんだこにつつて…正直鬱陶しかったんだけど…

……」

「なーんですって?」

「いいから聞けよ、最初はつづつたろ!」

まったく…。言葉はちゃんと選ばないといけないみたいだ。

「でもだんだん知つていくうちに、強さとか優しさとか目の当たりにして…、そういうところスゴく尊敬できるって思つてたし…俺は優しくないから」

優しくできない。余裕がなくて…。

「すぐ暗くなつてネガティブになるけど、玲華が隣にいると、変わつていくんだ。変われたんだ。…玲華がいなかつたら今の神崎家はないよ。俺はいまだ両親が脅威な存在で、兄貴は目的を達成していたと思つ」

真剣に玲華は聞いてくれていた。何も口を挟まないで、ただそこにいる。

「俺が動けたのは、毎回、何度も諦めないで背中を押してくれた玲華のおかげだ。感謝してもらしたりない」

落ちる度に隣にいてくれたから。学校でもここでも、数えたらキリがないくらいだ。

「だから玲華が殺されるかと思ったとき本当に怖かった。怖いんだ、お前といふと。いろんなところで」

俺は両の手のひらを見つめた。

「玲華が母親と口論になつたときもそつだ。おまえが強く立ち向かつていつてんのに、俺は何もできなかつた。玲華が俺んちのことでも傷つくのは見たくない。嫌な思いをこれ以上させたくない」

玲華が身を乗り出してきた。そして遠慮がちに口を開く。

「あれは反省したの。あたし余計なことしたかなつて…」

そんなこと思う必要ない。俺は頭^{かぶり}を振った。

「違う。あのときも救われた気持ちになつた。俺は嬉しかつたんだ。玲華が言つてくれた言葉は全部、俺が言いたいことだつたから」でも代弁者になつてもうなんて、そんな甘えた考えは通用しない。本当は自分で言わなきゃいけないことだつたんだ。

「だけどあの母親はそのまま俺なんだ。玲華との距離がこれ以上近くになると、ああなるんだつてわかつた」意味がわからないといつぶつに、玲華が首を横に振る。俺はその目を直視した。

「血が、繋がつてるんだよ。両親の血が。特に母親の攻撃性などこ

ろを俺は受け継いだみたいなんだ」

手のひらが震えだした。あのときと同じ。あの、兄貴に気づかされたときと…。

「こきなりキレること」が、よくあるんだ。それが酷くなると物にも当たる。そういうのつて人を不快にさせるつてのはわかるんだ。でも冷静に抑えられる自信がない

世羅が俺を怖がる理由。邦春と同じ人種。

「兄貴が自分にもその一面があつたつて言つてたけど、普段は冷静でいるんだ。兄貴はいれるんだ。でも俺はあんなふつにはできない。秀和みたいに気遣いができない。拓真みたいに穏やかではいられない」

言つてゐるうちに涙が溢れてきた。何回玲華のまえでこんなに情けない姿を見せれば良いんだろう。

でも最後だから。最後にするから、これで。

せめて、きちんと正しく言いたいことが伝わるよつに、俺は喋るだけだ。

「距離を保つて、節度ある間柄ならそんな一面も出ないと思つんだ。でもこのままいくと、俺はいつか玲華を傷つけてしまう。あのときの母親みたいに手をあげてしまつ

俺は深呼吸を一度した。腹式呼吸で息を整える。

「もういいんだ。おまえみたいな存在がいたって知れただけで。幸せだから。救われたから」

だから…。

グッと気合いを入れる。最後の一言を言つたために。

「だから玲華。おまえもうここには来るな。俺もむかへ、おまえの家とかあの部室とかには行かない」

玲華の眼が見開かれた。すごく驚いていた。それはそうだらう。

(ごめん…)

だけどこれでもう傷つけたりしないから。

つかの間…沈黙が流れた。すごく氣まずい空氣のなかで、それは永遠に続くんじゃないかと思つた。実際には数秒だったと思つけど、俺にはそれくらい長く感じたのだ。

俺の責任だから必死に耐える。それから玲華がポツリと呟いた。

「冗談じや、ないわよ」

「玲華？」

窺うよつて玲華を覗き込むと、鋭い眼光を向けられた。本氣で怒つてる。

「冗談じやないわ！なんのよそれ！バッカじやないの！」

「なつ…ずつと真剣に考えて出した決断をバカだとつ！」

「馬鹿よ！人が黙つて聞いてりやー調子に乗りやがつて！あげく最後がそれつ？信じらんない！！」

怒るだろうという予想はしていた。だけどそれは今まで見たなかで、一番激しい怒りだった。予想を遥かに超えてる。

「それだったら、おまえなんか嫌いだからつー迷惑だからつー顔も見たくないから一度と来んなつてーしつ言われた方がよっぽど清々するわよつ！」

ぱろぼろと、玲華の瞳から涙が溢れてきた。それを見て心が痛くなる。そんなこと言えるはずがないじゃないか。

「玲華……」

「何よー！あなたの気持ちを教えてくれるんじゃなかつたの？」

「だから言つただろう。こままでしたのが、俺の……」

「違うわよ！」

なんとか説明しようとしたが、ピシャッと遮られた。

「尊敬とか感謝とかこの際どうでもいいわ！あんたはあたしの「」と
どう思つてるか答えなさいよ！……って、好きか嫌いかつてことよ……
「そんなの好きにきまつてんだろっ！」

「そんなの好きにきまつてんだろっ！」

勢いに押され俺も怒鳴る。抑えられない。

「なんでわかんねえんだよ！今の流れでわかんだろー！」

「わかるかーー！あたしはずつとそこが知りたかった
のよーずつと……ずつと不安で……」

テーブルに置いてあつたティッシュボックスに手を伸ばし数枚引き抜くと、チーンと玲華は鼻をかんだ。少し呆気にとられる。
(不安つて言った)

玲華がずつと不安だつたつて……。

気づかなかつたわけじゃない。ただ見ないよつとしていただけだ。
心のどこかで、玲華なら鋭いから、言わなくともすでにわかつて
いるとも思つていた。俺が不安にさせていたんだ。

「好きならないじゃない。あたしがさ、そんなことやられるタマ
に見える？」

すんつて鼻を吸うと、玲華が押された声で訊く。やはり簡単には
納得しそうにない。でも俺は説得しなければならないんだ。

「玲華は強いと思う。俺なんかより何倍も。だけど力は俺の方があ
るんだ。何をしでかすかわからない」

俺でもわからないんだ。ちゃんと人と関わってきてないから。感
情の行き先が見えない。

「あたしは悠汰の助けになりたいの。迷惑じゃないなら、嫌いじゃ
ないなら傍にいさせてよ……」

なんでわかんないんだよ。だから駄目だつて言つてるだろっ。辛
いんだ、一緒にいると。いろんな想いが湧き起じつて押し潰されそ
うになるんだ。

覚悟を決めて俺は言つ。最大の禁句を口にするよつた氣分だった。

「本当はお前が嫌いなんだ！迷惑だから離れよつ。」

「なによそれ！馬鹿にしてんの！」

だけど玲華はすぐに見抜いた。

この方法だつて納得しないんじやないか。さらに状況は悪化しただけだ。

彼女は両手を上げて俺の胸元を叩いてくる。何度も何度も繰り返し……。だけど全然痛くない。

(…ひ…)

俺は阻止しようとしたその両手首を掴んだ。

(ほり、だから言つただろう)

少し意識を持つしていくだけで、やつてみると簡単だつた。

(軽々と封じ込められる)

それから、そのまま玲華を押し倒した。手の動きを押さえ込んだままで上から睨み付ける。

「いつこいつことされたらどうする…」

玲華は驚いていた。そして悲しそうに顔が歪む。だけどそれでいい。

本意とは外れた行為。

これで嫌われても仕方がない。それで解つてくれるのなら安い対価だらう？

「どうやつたつて力では女は男に勝てないんだよー。こんなふうに自分の意思を無視されてー。こんなことになつてからじやもう遅いだろ！」

泣いて帰ればいい。そしたら一度と来れなくなるから。悔しいけど、申し訳ないけれどこんなやり方しか見つからないんだ。

「あたしは……いいよ」

「！」

だけど玲華は澄んだ瞳でそんなことを言つ。俺の方が意表をつかれた。もう空んだ顔じやなかつた。

「あたしは悠汰のこと好きだもの」

「なんでそんなこと言えるんだ。」

強がりじゃない本気の言葉。それが突き刺さり、雷に打たれたよう震憾する。

でも、と玲華は続けた。

「こんなことして、後から絶対悠汰は悔やむ。責任を感じて苦しむ」

「…………」

「だったらあたしは、あらゆる手を使って抵抗するわ」
全然怯えてない。だからといって怒ってもいなくて、力んでもない。真っ直ぐで曇りない目。

(バカ!)

だから無理なんだよ。その抵抗が出来ないんだ。

玲華は悔ってる。ただの脅しだと思ってるからこんなに余裕があるんだ。

(本気でやつてやろうか)

これ以上修復できないくらい、ぐちゅぐちゅに傷つけてしまつ

か。

どす黒い感情が渦巻く。

「ねえ。悠汰の方がつらそうだよ。……いま、悠汰の方が辛そう

な顔してる」

「つ！」

思わず、手が離れた。

心が折れて玲華の腕を自由にする。俺は、負けたんだ。

確かに辛かつた。玲華の目を見てられない。

それでも玲華を受け入れられなくて、背中を向けた。あのときの

兄貴もこんな気持ちだったのかもしれない、ふと思つた。

「おまえ……。兄貴が俺にしたこと覚えてるか? ああいうことまで、俺はおまえにするかもしれないんだ」

卑怯な言い方をしてる自覚はあった。だけどもう、どうすれば玲

華に伝わるのかがわからないんだ。

真つ直ぐ伝えても跳ね返される。どうしても負けてしまう。

「ねえ悠汰。あたしは本当に悠汰があたしを迷惑に思つてんなら諦めるわ…。悲しいけれど、辛いけど頑張つて諦める」

後ろから聞こえる声は静かで穏やかだった。すぐ時間の流れが遅くなる。そんな感覚に陥るくらい静かな間が空く。

「だけど……。今の話聞いてたら、悠汰はこれからもそうやって他人と距離を置いて接するつて、ことよね。遠慮してつー引け目を感じながらっ！ そんな生き方するんだつたらあたし、許さないわっ」
(また泣いてる)

声だけで判然した。

さつきはあんなに堂々としてたのに…。

なんでここなんだ。人のことだらう。関係ないだらう。

(玲華はいつも他人の為に泣いてる)

すべて忘れて放つておいてくれたらいいのに。いつもそうだ。

(だから優しい)

だから優しくない俺には相応しくない。

「いくら、なにを悠汰が言つたって、もう黙りなんだから。止まらないのよあたしだって」

もう一度玲華はティッシュを取つたみたいだつた。気配でわかる。
「兄貴が言つたよな」

口を開いたら思つたより落ち着いている声が出た。一度落ち着いたら、もう先ほどのようなテンションには持つていけなかつた。
「幸せな家庭に育つた玲華にはわからないうて…。あれ、すごく失礼な言い方だと思うけど、一理はあると思うんだ。暴力や虐待は連鎖を生む。それしか感情の表し方を知らないから

そういうことなんだ。

両親から受け継いだものが眞実としてここにある。善だらうと悪だらうと関係なく。連鎖は止めなければならない。俺は兄貴を止められなかつたけど、これだけは絶対に譲れないんだ。

ドンつて言葉を切つた一拍くらい後に、いきなり軽い衝撃がきた。

(え…)

玲華が後ろから抱きついてきたって少し経つてから分かった。

「バカねえ。だったら、なおさらあたしといた方がいいわよ」

いつもの自信たっぷりな台詞を優しい口調で言う。

「あたしが教えてあげる。あたしが幸せな家庭に育つたってんなら、そななあたしにしか出来ないことじゃない? それって」

心が僅かに動いた。暖かい心が接触している背中から伝わってくるようだつた。

体温は熱く感じる。

(知ってる)

記憶にはないけれど、おそらく俺は知っていた。その暖かさ。母親に抱かれたことを体が覚醒する。

玲華の言葉をもつとちゃんと聞きたくなつた。だから彼女の方へ体を横に向かせた。そしたら。

射るような視線でガンを飛ばしてきた。

今までとは違うところでたじろぐ。

「だいたいあんた深く考えすぎなのよ、しかも暗く…」

「玲華?」

「自分を大事にしない奴つてほんつとムカつくのよねー! しかも自分が知らなすぎるわ」

ずっと俺に抱きついたままなのに、その言葉はキツい。先ほどまでの柔軟さが皆無だ。

(なに……?)

頼むから誰かこの状況を説明してくれ。彼女はどうなつたんだ?

「あんた今、自分は優しくないって言ったわよね。あたしからすれば優しいと思うわ。あやなちゃんだつてそう言つてたじゃない」

「勘違いしてんだよ、櫻井は……」

「失礼なこと言つんじゃないの! あんたが言つ優しさってなに? ヒデみたいによく気がつく感じ? 萩原くんみたいに柔らかな空気を相

手にも与えてくれること?」

「関係ないだろ、いまは」

「大有りよ! 今までの悠汰は暴力だけじゃなかつたって言つてんの!」

(あ…)

繫がつてたんだ、ちゃんと。

「でも俺は…」

「悠汰、あたしがさ綾小路に押し倒れそうになつたとき助けてくれたじやん」

玲華の勢いが弱まつた。少し恥ずかしそうに、下を向いている。

「あんなの、誰だつて通りかかつたら…」

「助けない人だつているわ。もつと最低な男なら参戦してきたり、それをネタに脅すかもしれない」

「それは……」

「それにあたしが気づかないとでも思つた? 悠汰、あの田をきつかけに、しおつちゅう部室に来てくれるようになつたじやない? 心配してくれてたんでしょ」

「あつ!」

つい大声が飛び出し慌てて片手で口を覆う。だけど玲華はしたり顔で微笑んできた。

バレてた。恥ずかしい。

確かに…、気になつていた。

いくら本人があつけらかんとしていたつて、本音では怖かつたかもしれない。そう思つたから。

「なんで……」

「なんでわかつたかつて? バレバレよ。だつてあんた毎日じやなかつたけど、基本的に綾小路が帰つたらすぐに自分も出て行くんだもの」

完全な敗北感。俺はがつくりと頃垂れた。

(敵わないなーもう…)

ほんとに。敵わない。玲華には。

もう、言つべき言葉が見つからない。何を言つても無駄だった。
俯いていると玲華の手が動いた。後ろから、もう痕も残つてない
首元にいく。

「ねえ。 come with tomorrow の歌詞覚えてる?」
囁くよつと言つてきた内容は、また話が飛んでいた。きっと玲華
のことだから何かに繋がるんだと思つて、俺は頷いた。

あれだけ聴かされたんだ。嫌でも覚えていた。勝手に聴き続けた
のは俺だけ。

「ああ」

「あれね、あたしの気持ちにピッタリだつたから好きになつたの。
あたしが感じる悠汰への気持ちに」

「俺は……あまり好きになれなかつた」

素直に俺は言つ。

「どうして?」

「明日がくる」との何が大丈夫か、どうしてもわからなくて。今日
も明日もずっと同じような日々が続くと思つていたから……

「これからは変わるわ。この歌詞はね、一緒に明日を迎える人がい
るつてことが幸せに繋がるつて、そう唱つているの。だから一緒に
歩んで行こうつて誘つてるのよ」

ああ、そうかもしれない。

玲華がいるから変わる、のか。

これは認めざるをえない。

だつてこんなに胸がスッキリとしていて軽い。

だからね、と言つて玲華は俺の頬に触れて、顔を少し持ち上げら
れた。目線が合つ。

そして彼女から近づいてくる。先ほどと同じじここまで。

彼女の紅潮した顔をすごく近くで見た。

「いい?」

短く訊いてくる。吸い込まれそうで、即座に頷きそうになる。

だけどふと心が変動した。

泣きそうになるのを必死で堪える。

「ダメ」

そう呟いてから。俺は。

力なく降ろしていた手を玲華の耳の下辺りに触れて、自分からキスをした。

「んふふふふふ

「気持ち悪い笑い方すんな」

「だつて嬉しいんだもーん。世界中の人に報告したい気分

「ヤメとけ。別に聞きたくないだらう、世界中の人大つて
何回かこんなやり取りをした。

兄貴がいつも座っていたダイニングキッチンのところへ、いまは玲華が座っている。

俺は昼食を作るべくキッチンに立っていた。

咲田さんがいなくなつて、少しずつだけど料理を始めてみた。レシピを見ながら作ると、意外だつたけど俺でも出来た。ウマイかマズイかは別として……。

今日は別に作る予定はなかつたのだが……。

あのあとから玲華からのボディタッチがすごい……。

前の会話はそのときにあつたのだ。暑いのにべたべた触れてくる。もともとよく触れてくるなとは思つていた。そういうスキンシップをするタイプかなつて。

(他の男にもこうだつたらどうしよう)

余計な心配が増えた。

(綾小路には鳥肌立たせてたから大丈夫か…)
なんとか納得する。

つまりそれと料理がどう繋がるかというと……。

そのまま「口」口口していたら、真っ昼間だといつのに抑えきれなくて一線超えてしまいそうになつたのだ。

受け入れた直後そうなつてしまつのは、あきらかに理性のきかない野獸がすることじやないか。

だから誤魔化すようにキッチンに立つた。

(まったく…)

自分も嫌じやないから文句が言えない。

「あたしもなんか手伝おうかー」

横から恐ろしい言葉が降つてくれる。

「いいから座つてろ」

「えー」

彼女としては何か手伝いたいらしい。やる気だけは充分だ。
でもさつき卵を割らせてみたら…………余計な仕事が増えたのだ。
つまり殻を取り除くという行為が！

「もうすぐできるから！」

俺は炒飯を作っていた。火の音に負けないように怒鳴る。

ちょっと前までは自分でも想像できない姿だと思う。

こんな状態でも腐らずにすんでるのは、そのすべてが玲華のおかげだった。

「オラ！出来たぞ。味は保証しない」

照れ隠しでわざと怒ったような口調になってしまった。自分の料理を人に食べてもらうなんて初めてだ。しかも相手は、いつもお抱えシェフの料理を食べて舌が肥えている玲華だ。

どうでるか構えるように見てしまう。

「美味しい！すごいよ、悠汰天才！」

少しホッとする。俺も向かいに腰を落ち着かせ口に運んだ。

「…………」

「どう？」

「普通以下。メシがべちゃべちゃしてる。あと何かが足りない」

「評価厳しいー」

「つーかおまえのはお世辞だろーあきらかに」

ふくれされながら玲華を見ると、彼女はそれでもバクバク食つていた。

「いーじゃん。愛情込もつてるんだから。実際食べれるんだし」

「…………」

そんなものだろうか。

「どうか愛情を込めたとは一度も言ってない。
でも明らかにコレは失敗だつた。」

(チャーハンなめてた…)

「ちょっと落ち込む。

「ヒテに料理習おうかな」

「どうしたの？珍しくやる気」

「うつせえ。どうせやるならウマイ方がいいだろ」

「じゃ、じゃ、あたしも一緒に習つよ」

身を乗り出して玲華が楽しそうに言つた。意外だ。

「やりたいの？料理…」

「うん！」

シェフがいるんだから必要ないのこと思つ。なんでも挑戦する姿勢はスバラしいけど。

「おまえに欠点がなくなつたら面白くねえな」

「なにそれ？僻み？でもそうねー本格的にやつたらあたしの方が上達しそう」

どこから来るんだ、この自信は。見習いたい部分だ。

(挑戦心だけ)

なんか本当にそなりそうで「ワイ。

女の尻に敷かれるタイプ。

今さら久保田さんが言つてたことがよぎる。

でも確かに俺は玲華に勝てるところがない気がしていた。

「俺、来年の球技大会本氣で頑張るわ」

新たな目標を掲げる。リベンジを誓つ。

そうしないと、どんどん腐つていきそうな恐怖に似た不安があつた。

「あ、そう？でも大丈夫よ」

不敵に玲華が笑う。この笑顔はよく知つてゐる。嫌な予感がした。

「その前に秋に体育祭があるから」

「…………」

「まさか知らなかつたの？あんたつてホント学校行事に興味ない人よね」

「なんでだよ！あんだけ派手にやつといて、体育祭の変わりじやないのか？」

「誰がそんなこと言つたのよ」

（誰がつて……）

誰も言つてない。自分でそう思い込んだだけ……。

俺はスプーンを握りしめ、がっくりと肩を落とした。

「期待してゐるわよ」

なんの躊躇いもなく玲華はこんなこと言つし。

「また冷蔵庫でも賭ける気か」

目線だけ上げたから、ちょっと恨めしそうに見えたかもしれない。でも玲華はなにも気にしてないといつぶつに返した。

「ううん。あれはなんとかなつたわ。お父様と仲直りの印しに戴けることになつたの。今度はそうねえ、電子レンジにしようかな」

「おまえあの部屋に住もうとしてないか」

「お風呂と洗濯機がないわ」

さらりと玲華が食事を続けたまま言つ。

その二つが揃つたら、じゃあ住んでもいいのかよ。

「じゃあ体育祭でいつか目標」

「目標が欲しかつたの？」

「今回なにひとつ満足いかなかつたからな」

「そつなの？球技大会は不可抗力だと思つけど……ほかには？」

玲華の手が止まつた。真面目に聞いてくる。

「兄貴……止められなかつたし。結局犯人も俺が捕まえたわけじゃねえし」

何度も頭では巡つていたことだつたけど、言葉にしたらさうに情けなく思えてきた。

そんな俺を見つめたまま玲華が真面目な口調を変えずに言つた。

「もうひとつまだ結果出でないのがあるわよ」

「なんだよ……」

「あたしを護つてくれるってやつ

「…………」

「なにその沈黙」

「もうその危険はないと思つたけど……」

玲華が隠そうともせずに、おもいつきり嫌な顔をした。

「そういうことじゃなくない？」

「…………。じゃあおまえ大人しく護られてる？」

「…………」

「…………」

俺の切り返しで玲華が絶句した。

やれやれ、だ。

俺は次に玲華がなにか言つまでなにも言わねえぞつて、変な意地を持ちながら炒飯を食べた。玲華がそれを見ていたのがわかる。そして動かないまま口を開いた。

「とりあえずや、一緒に体育祭頑張ろっか

「おう」

短く答えると玲華も食事を再開した。

体育祭つてそんなに力むものだつただろうか。よく考えたらリレーグらいしか、見せ場もなかつたような気がする。

でもまあ、玲華の優勝したいつて希望を助けるのも悪くない。注目されたくてやるわけではないのだから。

「午後からなんだけど、病院行かない？」

また突然そんなことを玲華が切り出すもんだから、俺を口の中のものを全部吹き出しそうになつた。無理矢理呑み込んでから、少し咳き込んで喉の調子を整える。

「知つてんだろ」

父親の拒絕を知つたつえで言つてるつて、本当は分かつていたけど、なんでそんなことを言うのか理由が解らない。

「先週末世羅がお兄様のお見舞いに行つたんだつて。もうすこく元

「氣だつたつて

「そうか。

俺には様子がわかる手段がなにもなかつたから、こんな伝わり方でもホツとする。

ちゃんと世羅が行つてくれてたんだ。

なんかそれも嬉しかつた。別に俺が行かなくとも、ちゃんと見てくれてる人がいるんだ。

「じゃあわざわざ行かなくても…」

「余計に行かなきやだめよ！」

玲華が力説する。

「だつて元氣があるときの病院が一番暇なのよ
妙に納得してしまう言い方だつた。俺は入院なんかはしたこと
ないけど、時間を持て余しそうなことは理解していた。

だからといって、父親がまつさりと無視できるわけではない。

「そんなにお父様が気になる？」

「そりゃあ…」

「大丈夫よ。あんなに広い総合病院なのよ。四六時中ついてるわけ
でもないし、姿さえ見せなければバレっこないわ」

「あ、そっか…」

自信満々な玲華の物言いは、いつ聞いても説得力があつた。

それより、なんでそんなことでも言われないと俺は分からんんだ
ろ？。

「おまえって優等生つてまわりから言られてたけど、そういうわけ
じゃないんだな」

「ただのいい子つて意味ならそつね。当たり前でしょ。別に自分に
非がない時まで遠慮してたらバカみたいじゃない？そもそも理不尽
な言いつけなんだから」

堂々と言い放つ。まったく頭が上がらない。

（どうせバカだよ）

つけ入る隙がなくて、出来ることと言つたら拗ねる」とぐらいた。

拗ねるならば開き直つた方がまだいい。開き直るとさすがに好転することがあるから。

「それにどうせ今後もお兄様が帰つてくるのはこの家なのよ。お父様だってお母様だってそつ。いずれそういう局面はくるわ。だつたら自分から行つてやりましょうよ」

「そういう局面つて？」

「あれから家族でちゃんとした話し合についてしてないでしょ」

話し合いか。

まだ少し怖さがある。両親から否定されるという行為を、直接的に『えられる』と解つてしまつて『いる』から、立ち向かうには勇気が要る。

あの人は俺から見捨ててしまえばいい、と頭でいくら思つても…遠い昔にみた焦がれる気持ちはなくならない。

「どう、したらいいんだろうな」

『どう言えば上手くいくんだろう。今まで一度も噛み合つてないわけだから、やり方が解らない。』

「悠汰が心を開けばいいのよ」

まるで子供に教えるように玲華が微笑みながら言つた。

「悠汰はまだちゃんと自分の気持ちを伝えてないから。まずはそこからだと思つわ」

確かにそういう意味では、俺はまだなにもしていない。上手く話しが出来るのか、伝えられるのかまだ自信はない。

けれど、言わなければならぬんだ。今後のためにも。いくら否定されても。

「大丈夫よ。学園内でも誤解してた人がだんだん悠汰のことわかつてきてたりするの。だからご両親も絶対解つてくれるわ。絶対大丈夫」

力付けるように玲華は繰り返した。

(そもそもしれない…)

すべて玲華の言つ通りかもしれない、と思えるようになつてきた。

俺は考えすぎていて、気を張っている。

それを取り除いて、拙くてもしっかり伝えよう。どうせ上手い言

い方なんて知らないんだ。

なりふり構わずぶつかつていけば、意外となんとかなるような気がする。

(それに玲華がいるから)

否定的じゃない人が隣にいる。それだけで、何倍にも何十倍にも前に進む力が湧いてくるようだつた。

「じゃあ行くか、一緒に」

俺がそう言つたら、なぜだか玲華はすぐ嬉しそうな顔で笑つた。きつと玲華には一生敵わないんだと思う。

だけど、それがまったく嫌じやない自分がそこにはいた。

苦しくても明日はくるから

大丈夫だから 悲しまないで

顔をあげて 一緒にいこう

W i l l y o u g o t o g e t h e r i n t o m o

r r o w ?

永^{とわ}久に 隣りで笑うから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2078n/>

come with tomorrow ~新しい場所へ~

2010年10月8日11時43分発行